(財)広島市文化財団発掘調査報告書 第1集

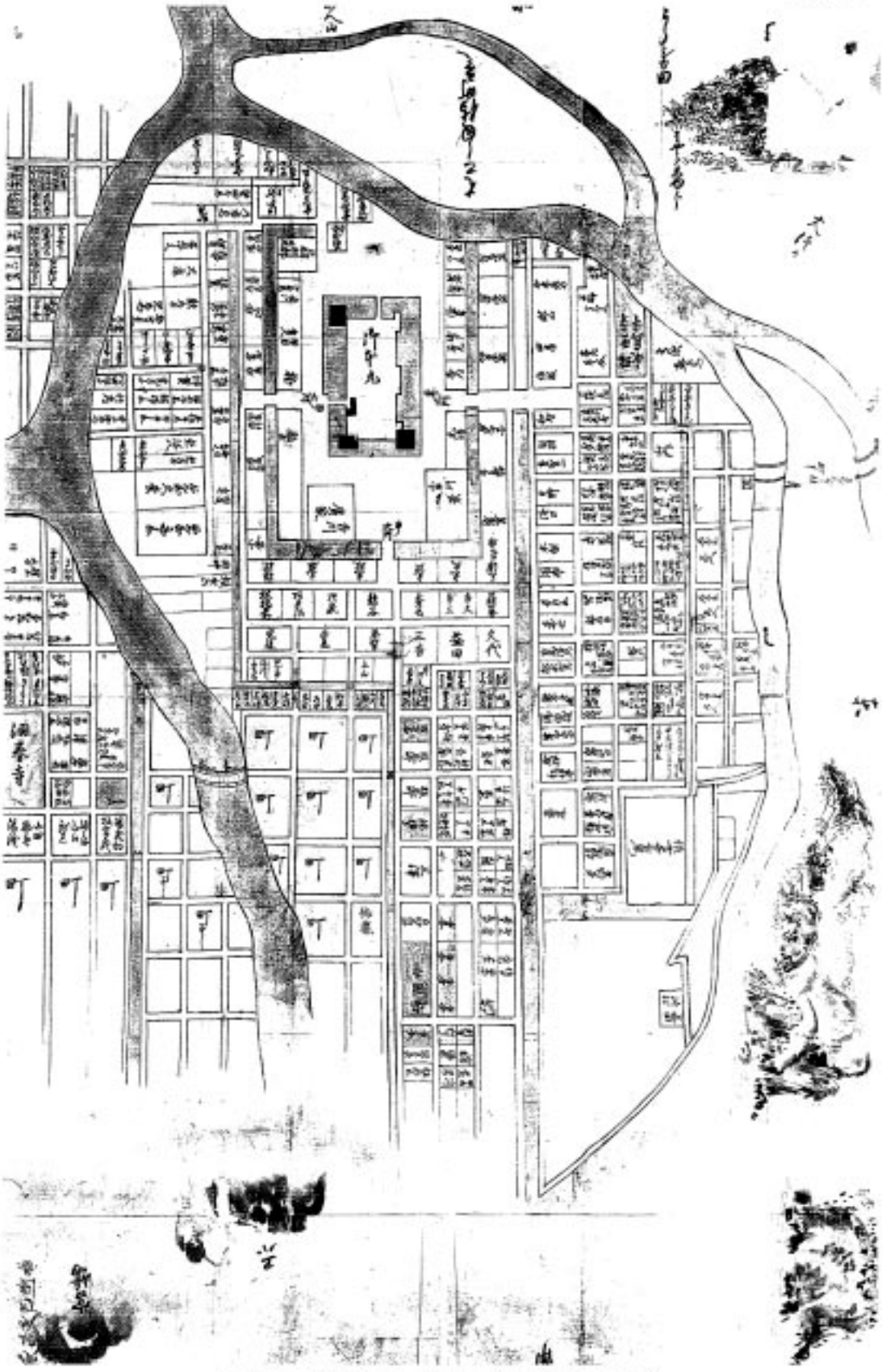
広島城外堀跡

紙屋町・大手町地点

— 広島市中区紙屋町・大手町所在 —

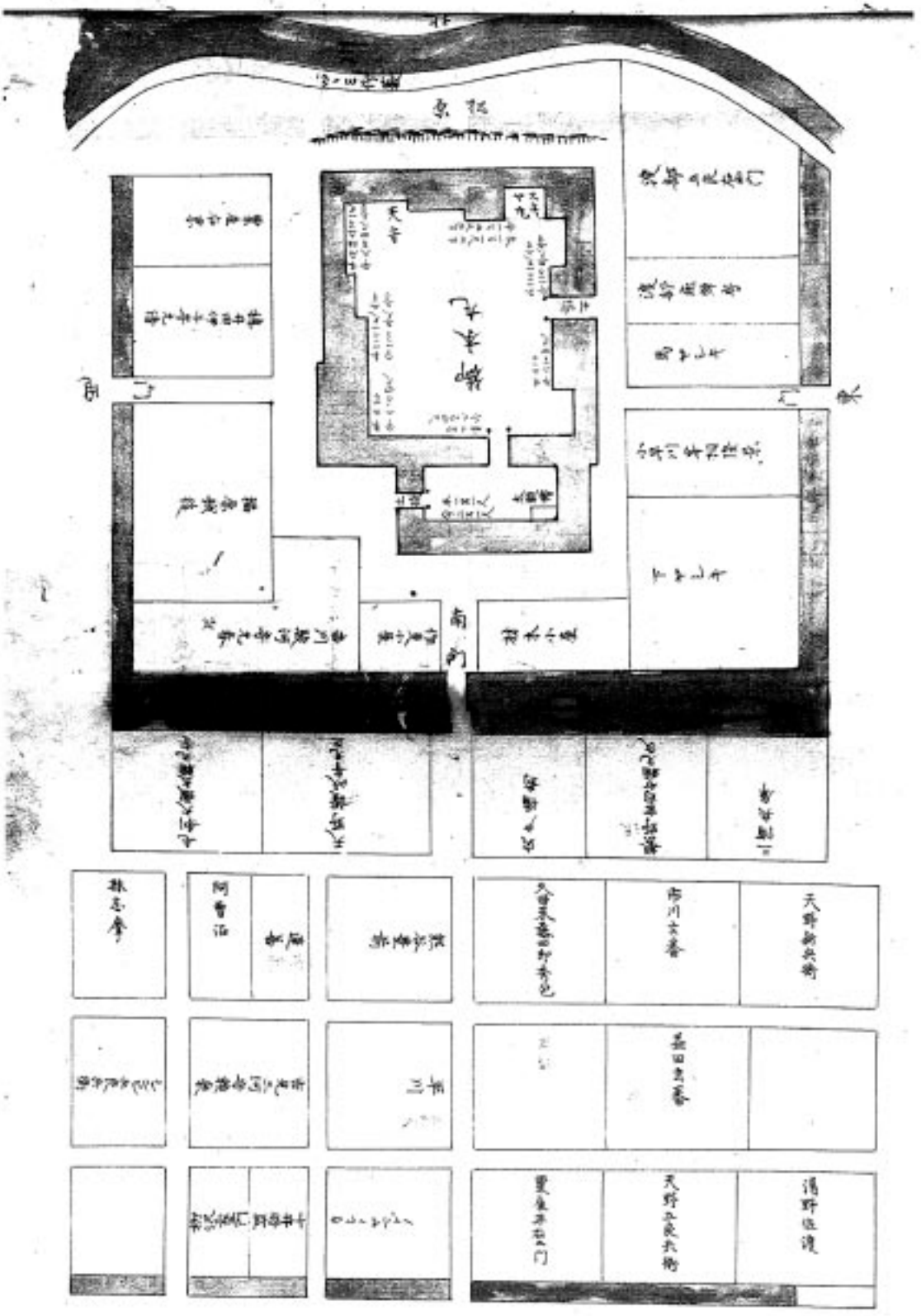
1999

財団法人広島市文化財団

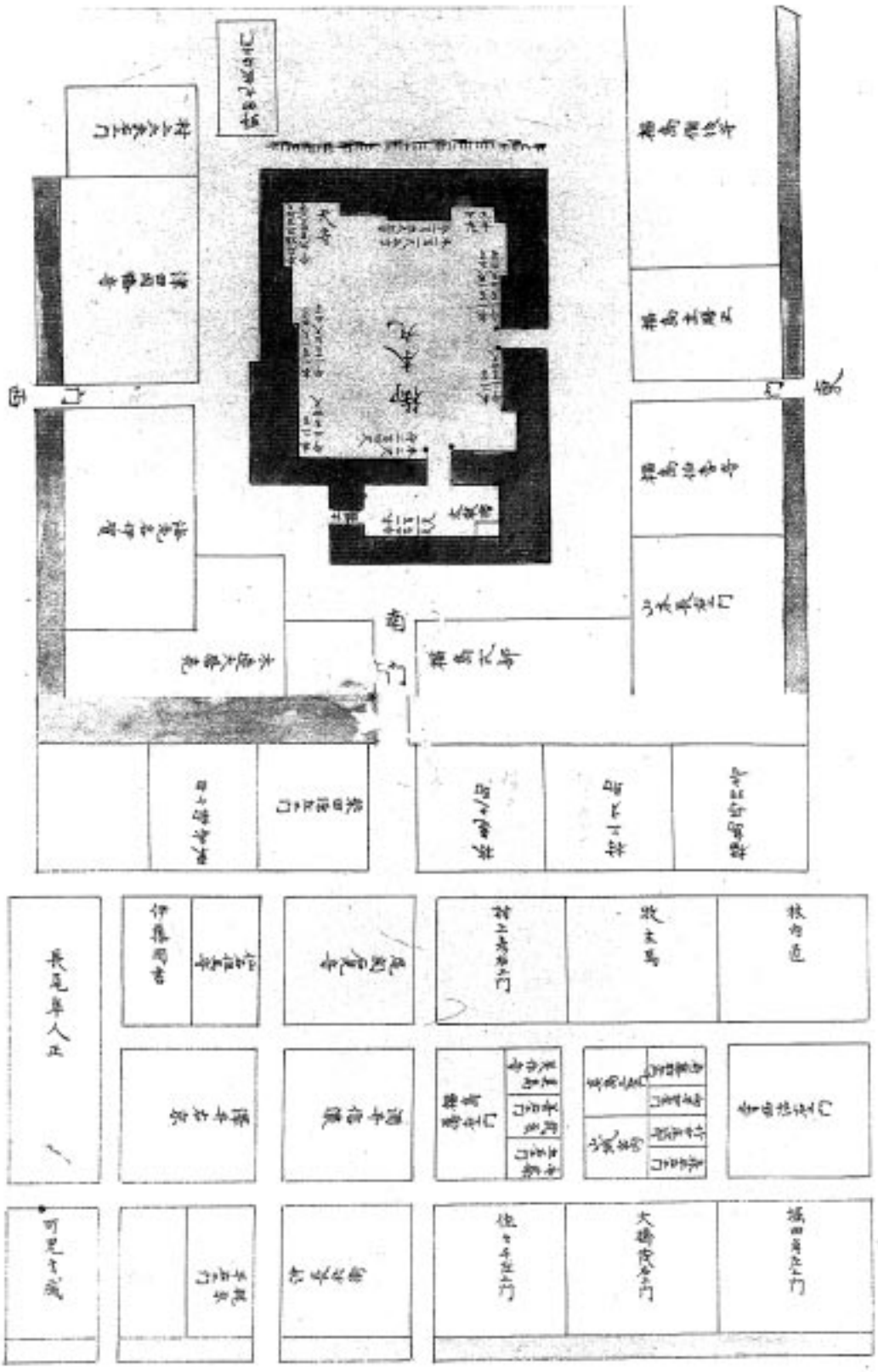


「芸州広島城町割之図」（山口県文書館毛利家文庫蔵）

巻頭図版2



「毛利時代城郭の図」（「知新集」所収。広島大学中央図書館蔵）



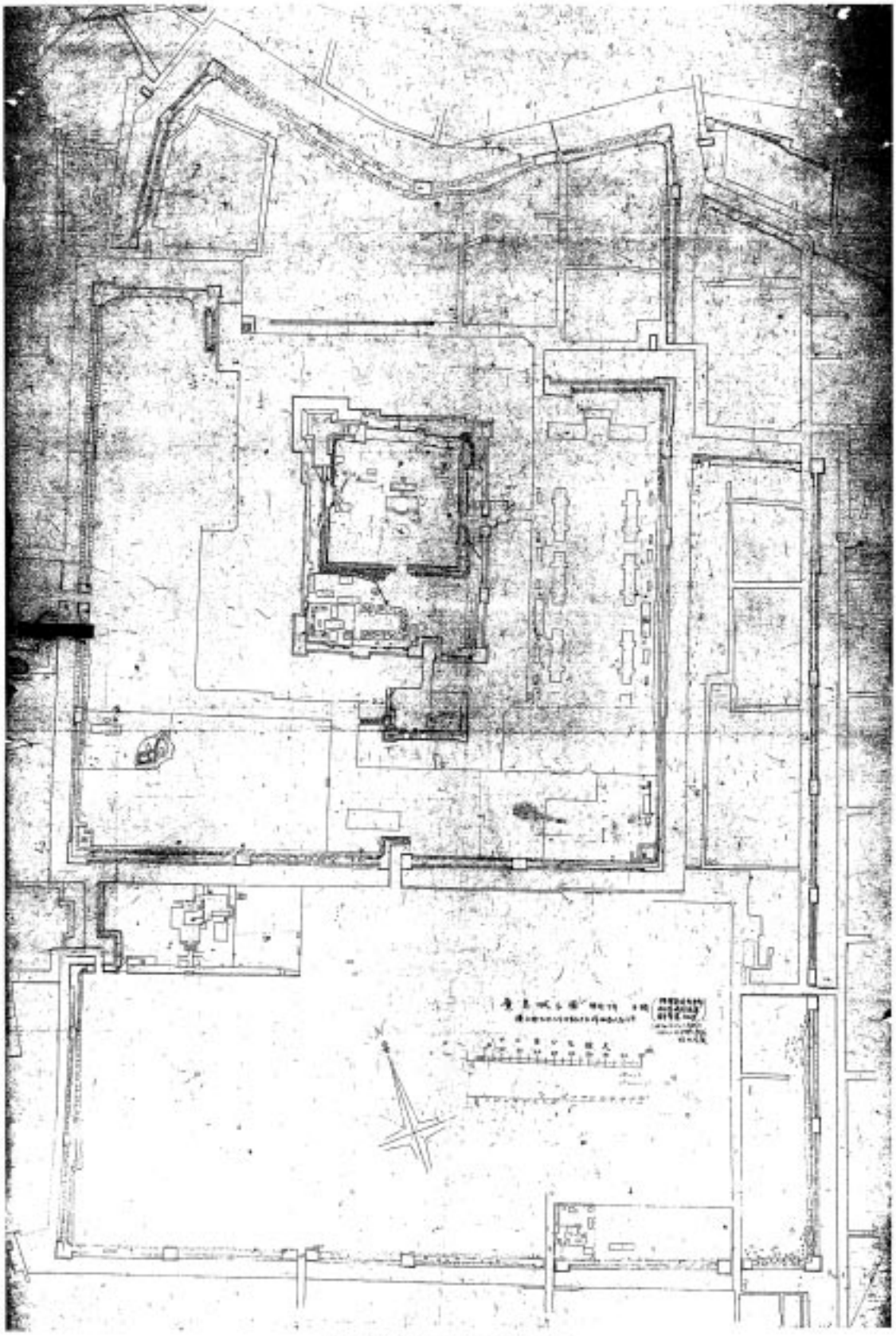
「福島時代城郭の図」（「知新集」所収。広島大学中央図書館蔵）

巻頭図版4

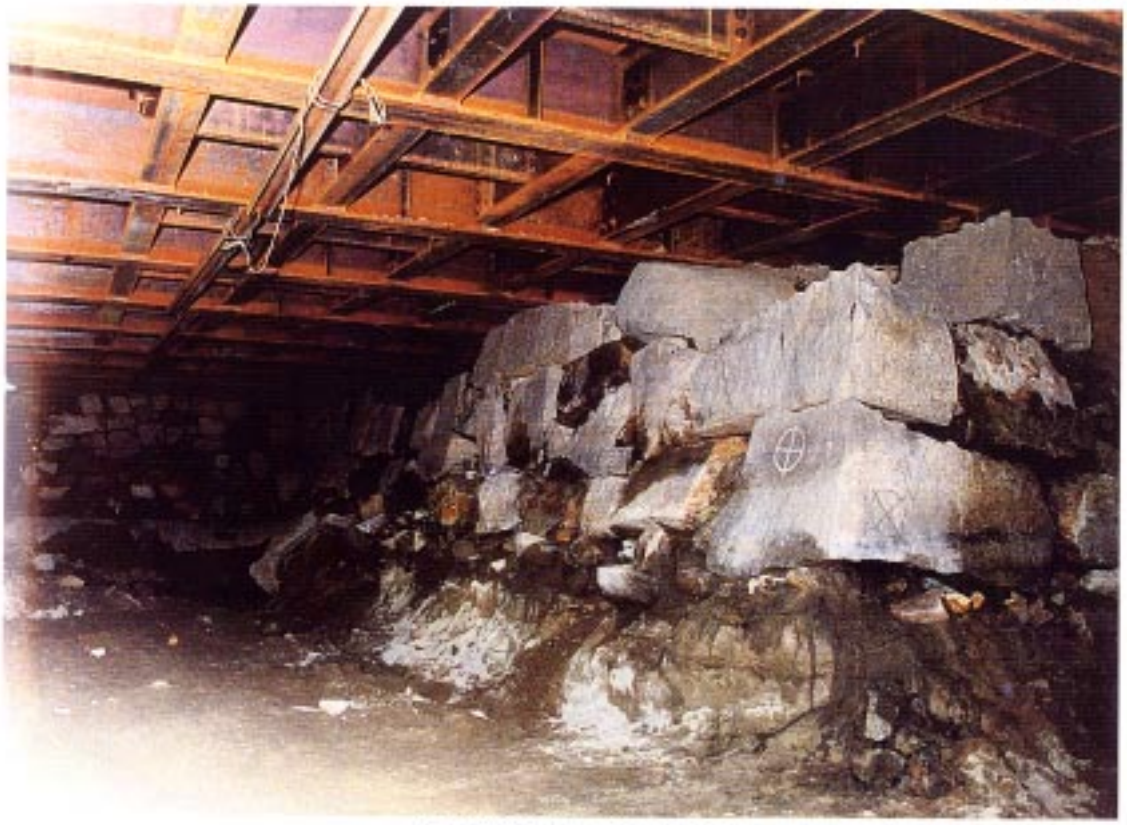
「寛永年間広島城之図」（三谷耕治氏蔵）

「安芸国広島城所絵図」（国立公文書館内閣文庫蔵）

巻頭図版6



「広島城之図」（坪井欣也氏蔵）



a ＳＢ３検出状況（南東から）

b ＳＸ５出土金箔押し鯱瓦

史跡広島城跡及び調査区遠景（航空写真）

はしがき

広島市では、都市機能の充実のため、大きなプロジェクトが推進されています。その一つとして、広島で初めての地下街として生まれる紙屋町地下街の開発工事が,平成13年完成を目指して現在進行中です。

財団法人広島市文化財団(旧財団法人広島市歴史科学教育事業団)では、これまで史跡広島城跡整備のための調査や新交通システム（アストラムライン）の建設関連工事等にかかわる広島城関連遺跡の発掘調査を平成２年以来実施してきました。これらの都市基盤整備に係る調査を通して、広島城にかかわる数多くの貴重な情報を得てきました。

本書で報告する広島城外堀跡（紙屋町・大手町地点）は，紙屋町地下街の開発事業に伴い、平成８・９年度に行ったものです。この発掘調査は，紙屋町交差点を挟んで総延長480ｍの広い調査範囲を２か所に分けて、交通を遮断したうえでの深夜の発掘調査を主に、昼間にも頭上を自動車が行き交うなかでの地下での調査など、２年間に及ぶ過酷な調査でした。

この調査によって、広島城外堀跡・櫓台を初めとする様々な遺構も確認し，多くの遺物を検出しました。また、広島城の発掘調査において長年の懸案事項でありました外堀南辺（南側外堀）の位置が明らかになるなど，様々な成果を挙げました。

この報告書が一人でも多くの人々に活用され、広島城、さらには広島の歴史についての認識を深めるうえで少しでもお役に立ちますとともに、さらには埋蔵文化財をより深く理解する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を進めるにあたり、御助言・御指導をいただきました諸先生方、ならびに御協力いただきました関係機関・御関係者の方々に心から御礼申し上げます。

平成11年３月

財団法人広島市文化財団文化科学部支化財課

例　言

1　本書は，広島紙屋町地下街・地下駐車場建設工事に伴い，平成９・10年度に実施した広島城外堀跡紙屋町地点・人手町地点の・発掘調査報告書である。

2　発掘調査は広島地下街開発株式会社及び建設省中国地方建設局広島国道工事事務所から委託を受け，財団法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。整理作業及び報告書作成は広島地下街開発株式会社及び建設省中国地方建設局広島国道工事事務所から委託を受け，財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課（平成10年４月１目付で財団法人広島市歴史科学教育事業団と財団法人広島市文化振興事業団の統合により，財団法人広島市文化財団が発足）が実施した。

3　本書の執筆は，Ⅰ・Ⅲを玉置和弘が，Ⅱを大室謙二が，Ⅳ・Ⅴを篠原達也が，それぞれ分担して行った。編集は篠原が行った。

4　遺構の実測及び写真撮影は，篠原，玉置，大室，宮田浩二，福原茂樹，村田亜紀夫，高下洋一，田村規充が行った。

5　遺構の写真測量・図面作成は株式会社パスコに委託した。なお，遺構の座標系は，昭和43年建設省告示第3,059号の規定による第Ⅲ座標系であり，標高はＰＴ＋・－ｍで表示した。

6　遺物の実測は篠原，玉置が分担して行い，トレースは篠原，岡野孝子が分担して行った。また，遺物の写真撮影は篠原，桾木敬太が行った。

7　巻頭図版８に掲載した航空写真は，広島市市民局振興課から提供を受けた。

8　第１・２図に使用した地図は，広島市都市整備局都市計画課発行の2,500分の１の地形図を複製した。

9　本書で用いた遺構の略称は以下のとおりである。

ＳＢ：建物跡　ＳＤ：堀・溝・暗渠　ＳＥ：井戸　ＳＫ１土坑　ＳＶ：石垣・石積み
ＳＸ：その他の遺構

10　堀などの名称について

本稿で使用する堀・郭・城門・土橋などの名称は，便宜的あるいは慣用的に使用されてもので，かならずしも近世の１次史料によるものではない。また、本稿では，外郭南辺に築かれた３つの城門の名称は，西側のものを「一丁目□御門」，中央部のものを「真鍋御門」及び「研屋町口御門」，東側のものを「立町口御門」と称する。

11　発掘調査で得られた資料は，広島市教育委員会から委託を受けて，財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目次

Ⅰはじめに…… 1
Ⅱ位置と歴史的環境…… 4
Ⅲ西調査区……10
Ⅳ東調査区……50
Ⅴまとめ……100

挿図目次

第１図　広島城関連遺跡分布地図…… 8
第２図　調査区位置図…… 9
第３図　西調査区遺構配置……折込み
第４図　ＳＶ１断面実測図 …… 11
第５図　ＳＶ１実測図(1)……11
第６図　ＳＶ１出土遺物実測図……12
第７図　ＳＶ２実測図(2)……折込み
第８図　ＳＶ３実測図(1) ……折込み
第９図　ＳＶ３実測図(2)……折込み
第10図　ＳＶ３断面実測図 ……折込み
第11図　ＳＶ２実測図(1)……13
第12図　ＳＶ２，ＳＶ10間断面実測図(1) …13
第13図　ＳＶ３出土遺物実測図 ……13
第14図　ＳＶ４実測図(1)……折込み
第15図　ＳＶ４実測図(2)……折込み
第16図　ＳＶ４実測図(3)……折込み
第17図　ＳＶ４断面実測図 ……折込み
第18図　ＳＶ４実測図(4)……折込み
第19図　ＳＶ４胴木平面図 ……17
第20図　ＳＶ４出土遺物実測図 ……18
第21図　ＳＶ５実測図 ……折込み
第22図　ＳＶ６実測図 ……折込み
第23図　ＳＶ７実測図 ……折込み
第24図　ＳＶ６，ＳＢ２接合部実測図……折込み
第25図　ＳＶ７，ＳＢ３接合部実測図……折込み
第26図　ＳＶ７出土遺物実測図 ……24
第27図　ＳＶ８実測図 ……折込み
第28図　ＳＶ８断面実測図 ……折込み
第29図　ＳＶ10実測図 ……折込み
第30図　ＳＶ８及びＳＢ２・ＳＢ３
　との接合部実測図 ……25
第31図　ＳＶ８出土遺物実測図(1)……27
第32図　ＳＶ８出土遺物実測図(2)……28
第33図　ＳＶ９実測図 ……30
第34図　ＳＶ９，ＳＢ１間断面実測図……30
第35図　ＳＶ10出土遺物実測図 ……31
第36図　ＳＢ１東面実測図 ……33
第37図　ＳＢ１西面断面実測図(1) ……33
第38図　ＳＢ１西面実測図 ……34
第39図　ＳＢ１西面断面実測図(2) ……34
第40図　ＳＢ２平面実測図 ……折込み
第41図　ＳＢ２立面図,断面実測図 ……折込み
第42図　ＳＢ３平面実測図 ……折込み
第43図　ＳＢ３立面図,断面実測図 ……折込み
第44図　ＳＢ３出土遺物実測図 ……38
第45図　ＳＤ１出土遺物実測図 ……38
第46図　ＳＤ１断面実測図 ……折込み
第47図　ＳＤ２断面実測図 ……折込み
第48図　ＳＤ３実測図 ……40
第49図　ＳＤ３出土遺物実測図 ……40
第50図　ＳＤ４出土遺物実測図 ……41
第51図　ＳＤ４実測図 ……41
第52図　ＳＥ１断面実測図 ……42
第53図　ＳＥ１出土遺物実測図 ……42
第54図　ＳＸ１実測図 ……折込み
第55図　ＳＸ１断面実測図 ……折込み
第56図　東調査区遺構配置図 ……折込み
第57図　ＳＶ11実測図……折込み
第58図　ＳＶ11,ＳＤ２断面図 ……折込み
第59図　ＳＶ11出土遺物実測図……51
第60図　ＳＶ12,ＳＤ５断面図……54
第61図　ＳＶ12実測図 ……折込み
第62図　ＳＶ12出土遺物実測図……55
第63図　ＳＶ13,ＳＶ14実測図……57
第64図　ＳＶ15実測図……折込み
第65図　ＳＶ15出土遺物実測図……59
第66図　ＳＶ16出土遺物実測図……60
第67図　ＳＶ16,ＳＶ17,ＳＤ11,ＳＸ２
　実測図……折込み
第68図　ＳＢ４実測図(1) ……折込み
第69図　ＳＢ４実測図(2) ……折込み
第70図　ＳＢ４，ＳＢ５，ＳＤ６，ＳＤ
　断面図……折込み
第71図　ＳＢ４出土遺物実測図 ……折込み

第72図　ＳＢ５実測図(1) ……折込み
第73図　ＳＢ５実測図(2) ……折込み
箱74図　ＳＢ５出土遺物実測図……65
第75図　ＳＤ２，ＳＤ５実測図……折込み
第76図　ＳＤ２出土遺物実測図……68
第77図　ＳＤ５出土遺物実測図……69
第78図　ＳＤ６，ＳＤ７，ＳＤ10，ＳＫ２～４
実測図……折込み
第79図　ＳＤ６出土遺物実測図(1) ……72
第80図　ＳＤ６出土遺物実測図(2) ……74
第81図　ＳＤ６平坦面下出土遺物……75
第82図　ＳＤ７出土遺物実測図(1) ……79
第83図　ＳＤ７出土遺物実測図(2) ……80
第84図　ＳＤ８実測図……80
第85図　ＳＢ５実測図(1) ……折込み
第86図　ＳＢ５実測図(2) ……折込み
箱87図　ＳＢ５出土遺物実測図……65
第88図　ＳＤ２，ＳＤ５実測図……折込み
第89図　ＳＤ２出土遺物実測図……68
第90図　ＳＤ５出土遺物実測図……69
第91図　ＳＤ６……折込み
第92図　ＳＤ６出土遺物実測図(1) ……72
第93図　ＳＤ６出土遺物実測図(2) ……74
第94図　ＳＤ６平坦面下出土遺物……75
第95図　ＳＤ７出土遺物実測図(1) ……79
第96図　ＳＤ７出土遺物実測図(2) ……80
第97図　ＳＤ８実測図……80

付表目次

第１表　西調査区胴木比較表……15
第２表　西調査区木杭計測表……44
第３表　西調査区出土遺物観察表　陶磁器…45
第４表　西調査区出土遺物観察表　土師質
土器……47
第５表　西調査区出土遺物観察表　木製品
－椀－……48
第６表　西調査区出土遺物観察表　木製品
－下駄－……48
第７表　西調査区出土遺物観察表　木製品
－蓋－……48
第８表　西調査区出土遺物観察表　木製品
－箸－……48
第９表　西調査区出土遺物観察表　木製品
－独楽－……49
第10表　東調査区出土遺物観察表　陶磁器…94
第11表　東調査区出土遺物観察表　土師質
土器・瓦質土器……97
第12表　東調査区出土遺物観察表　軒丸瓦…98
第13表　東調査区出土遺物観察表　軒平瓦…98
第14表　東調査区出土遺物観察表　丸瓦……98
第15表　東調査区出土遺物観察表　漆器……99

図版目次

巻頭図版１　「芸州広島城町割之図」
巻頭図版２　「毛利時代城郭の図」
巻頭図版３　「福島時代城郭の図」
巻頭図版４　「寛永年間広島城之図」
巻頭図版５　「安芸国広島城所絵図」
巻頭図版６　「広島城之図」
巻頭図版７ａ　ＳＢ３検出状況（南東から）
ｂ　ＳＸ５出土金箔押し鮫瓦
巻頭図版８　史跡広島城及び調査区遠景
（航空写真）
図版１　ａ　ＳＶ１Ｘ-３～-２間検出状況（南から）
ｂ　ＳＶ１Ｘ－３～－２間断面（東から）
ｃ　ＳＶ２Ｘ２～３間検出状況（南から）
図版２　ａ　ＳＶ２Ｘ12～13間検出状況（南から）
ｂ　ＳＶ３Ｘ19～20間検出状況（南から）
ｃ　ＳＶ３Ｘ22～21間検出状況（南から）
図版３　ａ　ＳＶ３Ｘ18～19間検出状況
（ＳＢ３南東角から）
ｂ　ＳＶ３Ｘ24～25間断面（西から）
図版４　ａ　ＳＶ４Ｘ-４～-３間検出状況（北から）
ｂ　ＳＶ４Ｘ-４～-３間胴木平面検出状況
（北から）
ｃ　ＳＶ４Ｘ-１～０間胴木平面検出状況
（北から）
図版５　ａ　ＳＶ４Ｘ-２～-１間遺物検出状況１
ｂ　ＳＶ４Ｘ-２～-１間遺物検出状況２
ｃ　ＳＶ４Ｘ-１～０間断面（東から）
図版６　ａ　ＳＶ４Ｘ-１～０間検出状況（北から）
ｂ　ＳＶ４Ｘ１～２間検出状況（北から）
ｃ　ＳＶ４Ｘ２～３間検出状況（北から）
図版７　ａ　ＳＶ４Ｘ２～３間検出状況（北から）
ｂ　ＳＶ４Ｘ６～７間胴木平面検出状況

（西から）
図版８　a　ＳＶ４Ｘ６～７間検出状況（北から）
b　ＳＶ４Ｘ６～７間検出状況（北から）
c　ＳＶ４Ｘ７～８間検出状況（北から）
図版９　a　ＳＶ４Ｘ11～12間検出状況（北から）
b　ＳＶ４Ｘ12～13間検出状況（北から）
c　ＳＶ５Ｘ18～19間検出状況（北から）
図版10　a　ＳＶ６北部検出状況（西から）
b　ＳＶ６南部検出状況（西から）
図版11　a　ＳＶ７北部検出状況（東から）
b　ＳＶ７南部検出状況（東から）
図版12　a　ＳＶ８中央部・ＳＢ２東面検出状況（南から）
b　ＳＶ８中央部・ＳＢ２東面検出状況（南東から）
図版13　a　ＳＶ８西部検出状況（南から）
b　ＳＶ８東部検出状況（南から）
c　ＳＶ８断面（東から）
図版14　a　ＳＶ９東部・ＳＶ10西部検山状況（北から）
b　ＳＶ10中央部検出状況（北から）
c　ＳＶ２・ＳＶ10間断面Ｄ（東から）
図版15　a　ＳＢ１東面検出状況（東から）
b　ＳＢ１西面検出状況（西から）
図版16　a　ＳＶ９・ＳＢ１間断面Ｃ（西から）
b　ＳＢ１西面断面（北から）
c　ＳＢ１西面土層断面Ｂ（北から）
図版17　a　ＳＢ２南面・ＳＶ６北端検出状況（南から）
b　ＳＢ２東面南端検出状況（東から）
図版18　a　ＳＢ２東面中央部検出状況（東から）
b　ＳＢ２北面中央部検出状況（北から）
図版19　a　ＳＢ２南面中央部検出状況（南から）
b　ＳＢ２西面検出状況（西から）
c　ＳＢ２東面中央部検出状況（東から）
d　ＳＢ２東面北部検出状況（東から）
図版20　a　ＳＢ２南面墨書１（南から）
b　ＳＢ２南面墨書２（南から）
c　ＳＢ２南面墨書３（南から）
d　ＳＢ２南面断面（西から）
図版21　a　ＳＢ２北面断面（西から）
b　ＳＢ２西面断面（北から）
c　ＳＢ２西面土層断面（南から）
図版22　a　ＳＢ３南面・ＳＶ３西端検出状況（南から）
b　ＳＢ３内面南端検開出況（西から）
図版23　a　ＳＢ３南面・ＳＶ７北端検出状況（南から）
b　ＳＢ３西面中央部検出状況（西から）
c　ＳＢ３北面中央部検出状況（北から）
図版24　a　ＳＢ３東面南端検出状況（東から）
b　ＳＢ３東面墨書１（東から）
c　ＳＢ３東面墨書２（東から）
図版25　a　ＳＢ３南面断面（東から）
b　ＳＢ３北面断面（東から）
図版26　a　ＳＢ３北面土層断面（東から）
b　ＳＢ３西面土層断面（南から）
c　ＳＢ３西面断面（北から）
図版27　a　ＳＤｌＸ－５～－４間土層断面Ａ（東から）
b　ＳＤｌＸ－５～－４間土層断面Ａ（東から）
c　ＳＤｌＸ１～２間土層断面Ｅ（東から）
図版28 a　ＳＤ１Ｘ９～10間土層断面Ｇ（西から）
b　ＳＤ１Ｘ９～10間土層断面Ｇ（東から）
c　ＳＤ１Ｘ14～15間土層断面Ｈ（西から）
図版29 a　ＳＤ２Ｘ17～18間土層断面Ｉ（東から）
b　ＳＤ３検出状況（北から）
図版30　a　ＳＤ４西部検出状況（西から）
b　ＳＤ４西部蓋石撤去後（西から）
図版31　a　ＳＸ１東西断面（南から）
b　ＳＸ１南北断面（西から）
図版32　西調査区出土遺物（１）
図版33　西調査区出土遺物（２）
図版34　西調査区出土遺物（３）
図版35　西調査区出土遺物（４）
図版36　西調査区出土遺物（５）
図版37　西調査区出土遺物（６）
図版38　西調査区出土遺物（７）
図版39　a　ＳＶ11基底部（南から）
b　ＳＶ11基底部土嚢痕（南から）
c　ＳＶ11築石（南から）
図版40　a　ＳＶ11築石刻印「○」「ｏ」（南から）
b　ＳＶ11・ＳＢ４接合部（南から）
c　ＳＶ11築石刻印「○」（南から）
図版41　a　ＳＶ11断面Ｋ（東から）
b　ＳＶ11断面Ｌ（西から）
図版42　a　ＳＶ11断面Ｍ（西から）
b　ＳＶ11断面Ｎ（西から）
図版43　a　ＳＶ12検出状況（南東から）
b　ＳＶ12石材撤去後（南東から）
c　ＳＶ12掘り方（南東から）

図版44　a　ＳＶ12石材Ａ刻印
b　ＳＶ12石材Ｂ刻印
c　ＳＶ12断面Ｐ（西から）
図版45　a　ＳＶ13検出状況（北西から）
b　ＳＶ14検出状況（北から）
図版46　a　ＳＶ15西部検出状況（北東から）
b　ＳＶ16東部検出状況（北東から）
図版47　a　ＳＶ16北部検出状況（西から）
b　ＳＶ16中央部検出状況（西から）
c　ＳＶ16南部部検出状況（西から）
図版48　a　ＳＶ17北部検出状況（東から）
b　ＳＶ18南部検出状況（東から）
図版49　a　ＳＢ４南西角都
b　ＳＢ４・ＳＤ６掘り方検出状況（南東から）
図版50　a　ＳＢ４北東．角部検出状況（北から）
b　ＳＢ４東面南半部検出状況（東から）
図版51　a　ＳＢ４東面北半部検出状況（東から）
b　ＳＢ４東面築石墨書「」（東から）
c　ＳＢ４北西角築石検山状況（西から）
d　ＳＢ４西面検出状況（西から）
図版52　a　ＳＢ４南面西部検出状況（南から）
b　ＳＢ４南面中央部検出状況（南から）
c　ＳＢ４南面東部検出状況（南から）
図版53　a　ＳＢ４東面・ＳＤ６断面Ｓ（北から）
b　ＳＢ４断面（西より）
図版54　a　ＳＢ４西側掘り方（北西から）
b　ＳＢ４南側掘り方（一幸ｉから）
図版55　a　ＳＢ５南面検出状況（南東から）
b　ＳＢ５北面検出状況（北西から）
図版56　a　ＳＢ５西面検出状況（西から）
b　ＳＢ５東面検出状況（東から）
c　ＳＢ５東面検出状況（東から）
図版57　a　ＳＢ５断面（西から）
b　ＳＢ５東面・ＳＤ７断面Ｔ（北から）
図版58　a ＳＢ５基底部粗朶層検出状況（北東から）
b　ＳＢ５東側掘り方検出状況
図版59　a　ＳＤ２断面Ｑ（西から）
b　ＳＤ５断面Ｒ（西から）
図版60　a　ＳＤ６北部検出状況（南から）
b　ＳＤ６中央部検出状況（南から）
c　ＳＤ８検出状況（西から）
d　ＳＤ７北半部検出状況（南から）
図版61　a　ＳＤ６掘り方検出状況（南から）
b　ＳＤ７・ＳＤ10検出状況（北東から）
図版62　a　ＳＤ９北半部検出状況（北東から）
b　ＳＤ９北版部蓋石撤去後（北から）
図版63　a　ＳＤ９開口部（南から）
b　ＳＤ９断面（北から）
図版64　a　ＳＤ11検出状況（南東から）
b　ＳＤ12検出状況（南から）
図版65　a　ＳＫ１完掘後（南から）
b　ＳＫ２礫集積状況（北から）
c　ＳＫ２断面（西から）
図版66　a　ＳＫ３・ＳＫ４完掘後（北西から）
b　ＳＫ５検出状況
図版67　a　ＳＥ２検出状況（東から）
b　ＳＸ３検出状況（南東から）
図版68　a　ＳＸ４検出状況（西から）
b　ＳＸ５検出状況（北から）
図版69　東調査区出土遺物（１）
図版70　東調査区出土遺物（２）
図版71　東調査区出土遺物（３）
図版72　東調査区出土遺物（４）
図版73　東調査区出土遺物（５）
図版74　東調査区出土遺物（６）
図版75　東調査区出土遺物（７）
図版76　東調査区出土遺物（８）
図版77　東調査区出土遺物（９）
図版78　東調査区出土遺物（10）

Ⅰ　は　じ　め　に

平成７年４月18日，紙屋町地下街建設工事に伴い，広島地下街開発株式会社（以下，地下街開発と略す）から広鳥市教育委員会文化課（以下，市教委と略す）に対して建設予定地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受けて，市教委は建設予定地内には広島城外堀が存在している可能性があること，工事実施には市教委職員の立会が必要であることなどの旨を回答した。これに伴い，地下街開発は市教委に石垣の位置確認を目的とした立会を求めたところ，市教委は試掘調査を実施し，数ケ所で広島城外堀跡の石垣等の埋蔵文化財の存在を確認した。再三の協議の結果，計画変更は困難であり，記録保存も止むなしとの結論に達した。

その結果，平成８年８月８日に地下街建設予定地の東工区を管轄する地下街開発から，同年10月８日に同予定地の西工区を管轄する建設省中国地方建設局広島国道工事事務所（以下，建設省と略す）から，財団法人広島市歴史科学教育事業団（以下，事業団と略す）にそれぞれ発掘調査の依頼があった（以下，東工区は東調査区，西工区は西調査区とする）。

東調査区は，平成８年度に２回，平成９年度に２回，合わせて４次の発掘調査を行った。第１次調査は平成８年８月19日から同年９月17日まで，第２次調査は平成８年11月11日から平成９年１月13日まで，第３次調査は平成９年５月28日から同年６月30日まで，第４次調査は平成９年９月22日から同年12月15日まで実施した。

西調査区は，平成８年度に１回，平成９年度に１回、合わせて２次の発掘調査を行った。第１次調査は平成８年11月11日から平成９年１月29日まで，第２次調査は平成９年５月15日から同年12月18日まで実施した。

報告書執筆は，事業団から業務を移行した財団法人広島市文化財団が，平成10年４月から平成11年３月にかけて実施した。

調査関係者は次のとおりである。

調査委託者	［東調査区］広島地下街開発株式会社
	［西調査区］建設省中国地方建設局広島国道工事事務所
調査主体	財団法人広島市歴史科学教育事業団（平成８・９年度）
	財団法人広鳥市文化財団（平成10年度）
調査担当課	財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課（平成８・９年度）
	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課（平成10年度）

調査関係者　平成８・９年度

中原照雄　常務理事（現広島市佐伯区長）

佐川清　　文化財課長

宮田浩二　文化財課事業係長

平成10年度

竹本輝男　常務理事

堂官正昭　文化科学部長

佐川清　　文化科学部文化財課長

宮田浩二　文化科学部文化財課主任

調査者　〔東調査区〕

第１次調査

福原茂樹指導主事，村田亜紀夫指導主事，高下洋一学芸員（調査担当者），篠原也学芸員（調査担当者）

第２次調査

福原茂樹指導主事，村田亜紀夫指導主事，高下洋一学芸員（調査担当者），篠原達也学芸員（調査担当者）

大室謙二学芸員，玉置和弘学芸員

第３次調査

福原茂樹指導主事，村田亜紀夫指導主事，高下洋一学芸員，篠原達也学芸員（調査担当者），大室謙二学芸員，、玉置和弘学芸員

第４次調査

宮田浩二事業係長，福原茂樹指導主事，荒川正己学芸員，篠原達也学芸員（調査担当者），玉置和弘学芸員，田村規充学芸員

〔西調査区〕

第１次調査

宮田浩二事業係長，村田亜紀夫指導主事（調査担当者），篠原達也学芸員，大室謙二学芸員（調査担当者）

第２次調査

宮田浩二事業係長，福原茂樹指導主事，村田亜紀夫指導主事，樽谷秀幸指導主事，荒川正己学芸員，

篠原達也学芸員，大室謙二学芸員（調査担当者），玉置和弘学芸員（調査担当者），田村現充学芸員

整理作業員　河合淳子，酒本由理郁，菅原彰子，住川香代子，橋本礼子（５０音順）

なお，発掘調査にあたっては，地下街開発，建設省，清水・フジタ・伏光共同企業体，大林・大成・鴻池共同企業体、市教委，株式会社パスコほかの多くの方々に御配慮と御協力をいただいた。さらに調査にあたっては埋蔵文化財発掘調査指導委員会の広島大学名誉教授潮見浩氏，同教授川越哲志氏，同教授河瀬正利氏，同助教授古瀬清秀氏から貴重な御指導・御助言をいただいた。また，出土遺物の整理，報告書の執筆にあたっては，以下の諸氏から広範な御教示をいただき，なおかつ，貴重な資料の提供を受けた。ここに記して謝意を表したい。

佐賀県教青庁　大橋康二氏，広島県立歴史博物館　佐藤昭嗣氏，下津間康夫氏，鈴木康之氏，広島県教育委員会中世遺跡調査班　沢本保夫氏，岩本芳幸氏，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター山田繁樹氏，大島裕氏，財団法人東広島市教育支化振興事業団文化財センター　古野健志氏，立川敏之氏，新市町立歴史民俗資料館　尾多賀晴悟氏，国立歴史民俗博物館　小野正敏氏，吉岡康暢氏，財団法人大阪市文化財協会　松尾信裕氏，森毅氏，黒田慶一氏，財団法人大阪府文化財調査研究センター　鋤柄俊夫氏，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　森島康雄氏，山口市教育委員会　吉賀信幸氏，東京都豊島区遺跡調査会　中井さやか氏，東京都立大学　山田昌久氏，明治大学記念館前遺跡調査団　追川吉生氏，広島市植物公園　世羅徹哉氏，官本和弥氏（順不同）

Ⅱ 位 置 と 環 境

本遺跡は，広島市中区紙屋町一・二丁目，同大手町一丁目に所在する広島城外堀跡である。調査区は，史跡広島城跡から南へとのびるいわゆる鯉城通りと東西方向にのびるいわゆる相生通りとの交差点（紙屋町交差点）の中心から東へ約200ｍ，西へ約300ｍの相生通りの道路幅一杯に設定した。なお，同交差点内部については，すでに攪乱をうけていることから調査範囲から除外した。

現在，史跡広島城跡として本丸，二の丸，内堀およびその周縁のみを残す広島城は，周知のとおり近世期においては内堀，中堀，外堀の三重の堀を巡らす環郭式平城であった。史料に限りがあるため，近世広島城の平面構成を現地形へ正確に比定することは困難であるが，近世の城郭絵図面，明治期の測量図，さらには近年周辺各所で行われた発掘調査の成果[1]上をもとに，広島城の南辺外堀跡が相生通り内にあると判断し，かつ，東西方向については，交差点以南の一般国道５４号の１本東，西の南北道がそれぞれ近世期における「真鍋筋」，「一丁目筋」に該当すると一般にいわれていることから，東は「真鍋御門」付近から，西は「一丁目口御門」をへて一つ西側の櫓（「方角指図」[2]にみえる「れ」の平櫓，以下平櫓とする）付近までに調査区が該当すると判断した。

さて，広島城の築城の経緯，経過，築城後の変遷については，これまでも多くの文献等によってとりあげられており[3]，ここであえて再説することは避けたい。ここではごく概略を述べるにとどめ，かつ南辺外堀跡に直接関係する史料をもとに当該箇所について概略を述べてみたい。

広島城は天正17（1589）年に毛利輝元によって築城に着手されたといわれている[4]。以降，「継夜於日」の工事が指示されるなか[5]，天正19（1591）年には「御堀の廻り掘漸出来」[6]，文禄２（1593）年には「石垣御普請」[7]が完成したことが記されている。そして，その後も工事は進められたようで，「知新集」では慶長４（1599）年に「普請作事成就」と伝えている[8]。しかし，この毛利氏の築城によって，

例えば「安芸国広島城所絵図」から窺い知ることができるような姿に広鳥城が整備されたのかどうかについては文献史料から判断することは困難である。南辺外堀そのものの築造についても，「知新集」に「すへて御城櫓門大手石垣等輝元卿幕下の面々手伝これあり」とみえ，外堀の築造，護岸石垣の構築を窺わせるが，具体像は明らかにすることはできない。慶長５(1600)年の関が原の合戦後，毛利氏が防長に移封されたあと広島城に入城したのが福島正則である。福島氏は入城早々広島城の普請にとりかかったようで，「家老中老諸侍何も自身にてもつこうてこをも持ち候程昼夜情出し」，「太夫殿右之普請之時，根石垣すへ様悪敷とて中々坂本より御やとい候あのふ共御しかり」などという記事から[9]，石垣の普請を含め，相当の難工事がされたことを読み取ることができる。また，元和３（1617）年の洪水により，広島城は三の丸まで浸水[10]し，「ひろしま本丸・二の丸・三の丸、同備後やしきの内その外そうがまへのやくらへいそこね候」[11]という状況であったようで，元和５（1619）年には石垣のつきなおしも含めた修理がされたと伝えられる[12]。そして同年，無断修築を理由に福島氏が改易，国替えされたことはよく知られていることである。このように，福島期については，広島城に相当の改変がなされた可能性を窺わせる史料はあるものの，やはり，南辺外堀そのも

のに直接関連すると考えられるものはない。ただ「知新集」は,「惣構の櫓大手ハ正則建られしとなり」13) と記し，本調査区における「真鍋御門」や「一丁目口御門」さらには平櫓の構築が福島期であったことを想像させる記述をしている。

福島氏に替わって元和５（1619）年，広島城に入城したのが浅野氏である。以降，明治維新を迎えるまで，城郭の様相を変える程の改変はなされなかったようで，洪氷や地震による損壊，あるいは石垣の孕み，
「堀埋」等を「如レ元」く復旧したことを窺わせる史料が散見するのみである14)。

以上のように，広島城の歴史は，毛利氏の築城，福島氏の改修，浅野藩政期の修補というように大きくはとらえることができる。しかし，本遺跡にかかわって，南辺外堀跡に焦点を絞れば，文献史料のみでは判然としない点が多々あることは否めない。

次に，絵図面をもとに，近世広島城の姿を最も正確に描くとされる「安芸国広鳥城所絵図」と比較しつつ当該箇所の様子を探ってみたい。

その成立期，内容等に問題を抱えてはいるものの，広島城の最も古い，すなわち毛利期の様相を描いている可能性を持つものとされているのが,「芸州広島城町割之図」15) である。この絵図においては南辺外堀は西半分のみが築造されているように描かれており，のちの「西塔川」にあたると思われる水路よりも東側は屋敷地あるいは道となっている。
「西塔川」は現在の紙屋町交差点以南の一般国道54号のおおむね東半分に比定されている16)ので，交差点以東，すなわち本調査区における「真鍋御門」を含めた外堀はこの時期は築造されていないことになる。ちなみに「知新集」が紹介する「毛利氏時代城郭の図」17) においては若干東側に外堀が延びているようにされているが，東端付近は彩色されていない。
また，本調査区の「一丁目口御門」にあたると考えられる箇所から外堀を経て城外へと出る橋は木橋のように描かれている。さらには平櫓にあたると思われる箇所の前にも木橋状の橋および城外へと続く橋が描かれており,「西塔川」東側の道も城内から城外へとまっすぐに廷びているように描いている。目を転じると，両橋から城内を北へ向かう道も描かれている。なお，この絵図では櫓等構築物を示す描写は本丸を除き，一切描かれていない。

福島期の様相を描く可能性がある絵図については「福島氏時代城郭の図」18) があげられる。同図では「毛利氏時代城郭の図」とくらべ，外堀西半分の様相はほとんど変わらないが，東側では前者で彩色されていなかった南辺外堀東部分が彩色されている。
しかし，やはり「真鍋御門」等，南辺外堀東半分については城内外をむすぶ経路は描かれていない。

藩攻期以降について，寛永２～９（1625～32）年頃の内容を描いているとされる「寛永年問広島城下図」19) の描写は，全体的には「安芸国広島城所絵図」とほぼ同様のものとなっている。南辺外堀に目を向けても,「一丁目口御門」はもちろんのこと,「真鍋御門」や「立町口御門」など，手法の差はあれ描写されているかどうかという点では「安芸国広島城所絵図」とほとんどかわらない。ただ，平櫓の記載がされていない。また,「安芸国広島城所絵図」で描く平櫓より北へ廷びる道もなく，屋敷地となっている。
ただの書き落としと考えられなくもないが，浅野氏入国時の様和を示す可能性のある「広島絵図」20) についても同様に平櫓，および北へ延びる道を描いておらず，問題を残す21)。

平櫓，および北へ向かう道の有無について，その後の成立とされる給図をみると，享保14

(1729) 年頃の内容とされる「広島城下図」[22] 1では「安芸国広島城所絵図」同様櫓の記載はあるものの，北へ向かう道は記載されず，屋敷地となっている。明和 6 (1769) 年の記載がある「方角指図」でもほぼ同様である。さらに，寛攻年間 (1789 ～ 1800) 頃の内容を記すとされる「芸州広島之図」[23] では平櫓・道ともに描かれていない。

そして，「万延元年広島城下絵図」[24] (1860 年頃の内容か) では，道はないものの平櫓が記載される。元治元 (1864) 年頃の作成とされる「御家中屋敷絵図重宝記」[25]，明治元 (1868) 年頃成立とされる「家中屋敷割図」[26] も同様である。

明治 10 (1877) 年作成とされる「広島城之図」[27] でも平櫓ははっきりとみてとれる。

このように，絵図面からは，広鳥城南辺外堀は，毛利期には特に東側部分について，「安芸国広島城所絵図」が示す様相に整備されているかどうかという点では，「不完全」な様相を呈しており，文献史料の解釈と考え合わせれば，大筋で「安芸国広島城所絵図」のような姿に整備されたのは福島期にまでしか溯りえず，毛利期から福島期にかけて相当の改変が加えられたものと解釈できる。また，平櫓および北へ向かう道については，藩攻期においても築造・消滅の可能性を示唆しているものとうけとめることができよう。

さて，視点を変えて，南辺外堀の構造について可能な限り絵図からよみとってみると，「寛永年間広島城下図」では，「一丁目口御門」よりも西側の南辺外堀北岸については，塀とも解釈できるような描写がみてとれる。「広島絵図」では甫辺外堀北岸全面に同様の描写がされている。「安芸国広島城所絵図」ではさらに詳しく描かれ，北岸は石垣の上に土塁・塀が構築されているように描かれており，構造を推測しうる絵図からは北岸と市岸とで差異が認められる。

注

1．紙屋町交差点北部において，財団法人広島市歴史科学教育事業団が 1990 年から 95 年まで調査を実施した。成果については．(財) 広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 6 集『広島城外堀跡紙屋町交差点地点』1992 年，同第 12 集『広島城県庁前地点発掘調査報告』1994 年，同第 15 集『広島城関連遺跡発掘調査報告』1995 年，参照。

2．個人蔵。なお，日本建築協会『建築と社会』1992 年 9 月号で，橋本秀夫氏によって紹介されている。

3．広島城の歴史についての論考は多くあるが，秋山伸隆他「広島城の四〇〇年」(広島市『図説広島市史』1989，所収) が近年の研究成果をよくまとめている。

4．「山県源右衛門覚書」(広島市『新修広島市史』第 7 巻資料編その 2，1960 年，所収) 等において「御鍬初」を同年 4 月 15 日に行ったとされる。

5．「古川広家書状」(広島県『広島県史』古代中世資料編Ⅴ，1980 年，所収)。

6．注 4) に同じ。

7．注 4) に同じ。

8．『知新集』巻 25「御城郭之部」(『新修広島市史』第 7 巻，注 4) 参照)。

9．「福島太夫殿御事」(『改定史籍集覧』第 15 冊，臨川書店，1990 年，所収)。

10．注 9) に同じ。

11．「福島正則書状」(広島市教育委貴会『史跡広島城跡資料集成』第 1 巻，1989 年，所収)。

12．注 9) に同じ。

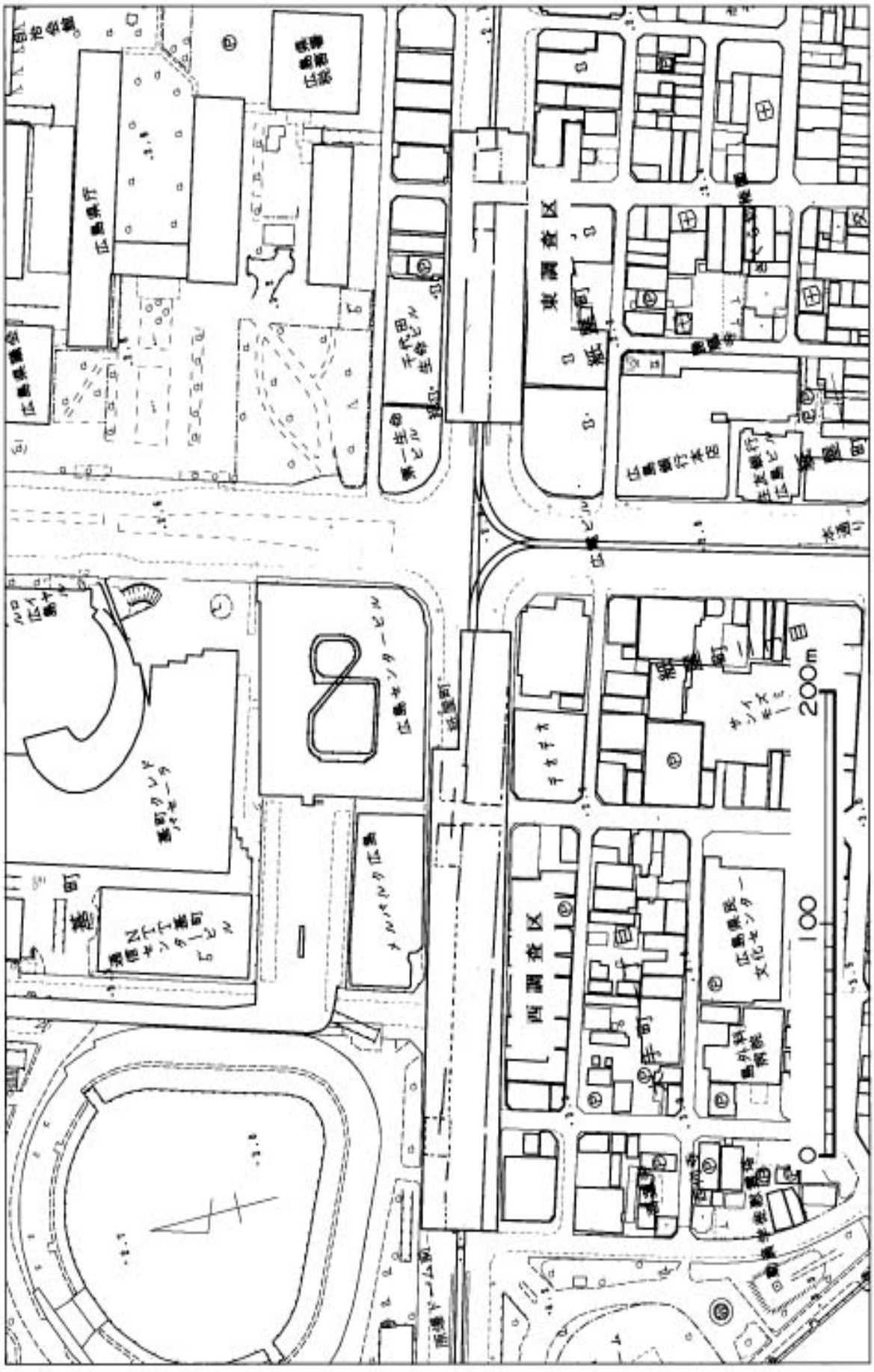
13．注 8) に同じ。

14．「済美録」(初代浅野長政から 14 代長勲までの事跡を収めた編年書。『史跡広島城跡資料集成』第 1 巻 (注 11) 参照) に広島城に関係する史料を収めている)。

15．山口県文書館毛利家文庫蔵。なお，広島市立中央図書館編『広島城下町絵図葉成』1990年，に収められている。
16.『広島城県庁前地点発掘調査報告』（注１）参照)。
17．注８）に伺じ。
18．注８）に同じ。
19．個人蔵。なお,『広島城下町絵図集成』（注15）参照）に収められている。
20.『広島城下町絵図集成』（注１５）参照）所収。
21．この点にかかわって,「安芸国広島城所絵図」と比べ，例えぱ「寛永年間広島城下図」では三の丸東面の櫓が一つ多く，西側外郭西辺の櫓数は３つ少ない。以下であげた絵図についても，草保14（1729）年頃の「広島城下図」,「万延元年広島城下絵図」,「芸州広島之図」でも西側外郭西辺の櫓数に噛齬が認められる。
22．個人蔵。なお,『図説広島市史』（注３）参照）に掲載されている。
23．山口県文書館蔵。なお,『図説広鳥市史』（注３）参照）に掲載されている。
24．個人蔵。なお,『図説広島市史』（注３）参照）に掲載されている。
25．注20）に同じ。
26．広島市公文書館蔵。なお,『広島城下町絵図集成』（注15）参照）に収められていろ。
27．個人蔵。なお,『広島城関連遺跡発掘調査報告』（注１）参照）に巻頭図版として掲載。

第 1 図　広島城関連遺跡分布図（S＝1：10，000）

1. 西調査区（本遺跡）　2. 東調査区（本遺跡）　3. 県庁前地点遺跡　4. 外郭櫓台跡　5. 三の丸南東部中堀跡　6. 史跡広島城跡二の丸　7. 史跡広島城跡本丸　8. 基町高校前交差点地点中堀跡　9. 北西隅櫓台跡　10. 城北駅北（旧西白島）交差点地点外堀跡



第 2 図　調査区位置図（S＝1：2，500）

Ⅲ　西　調　査　区

（１）概要

西調査区は広島市中区大手町一丁目及び紙屋町二丁目地先に位置する。調査地点の現状は，中央に二本の路面電車軌道，その両脇に三車線の車道の通る幹線道路（一般国道54号）であり，調査区は，軌道部，車道部さらに歩道部まで及ぶ。調査前の舗装面の平均標高は＋2.5ｍで，遺構の上部は削平されてザることが予想された。また，地下には，下水道，電話，電気など埋設物が多数存在し，遺構に影響を及ぼしていることが予想された。

調査は工事の工程に合わせ，２段階で実施した。第一次調査では，先行して掘削される杭の打設範囲を調査した。第二次調査では，道路面の舗装撤去・覆工板敷設に伴い掘削される箇所の確認調査の後，本調査を実施した。なお，第一次調査はすべて夜間に，第二次調査は夜間ならびに昼間に実施した。

調査方法は，第一次調査及び第二次調査中，夜間調査分については路上から重機で遺構面上端面を確認するまで掘削し，確認後は下掘りで行った。第二次調査中，昼間調査に係る部分は，覆工板下においてバズセンター前交差点から東ならびに西へ向かって堀内の堆積土を機械で掘削し，石垣の積み面を確認した後，手掘りで掘削した。遺構の測量は写真測量に拠ったが，一部手計りで行った。

調査区は，第一次調査では任意に区画し設定した。第二次調査では，工事用の座標軸を基準として設定した。

調査の結果，遺構は外堀石垣，櫓台，暗渠状遺構，井戸などを検出した。遺物は，輸入陶磁器，国産陶磁器，土師質土器，木製品などが出土した。

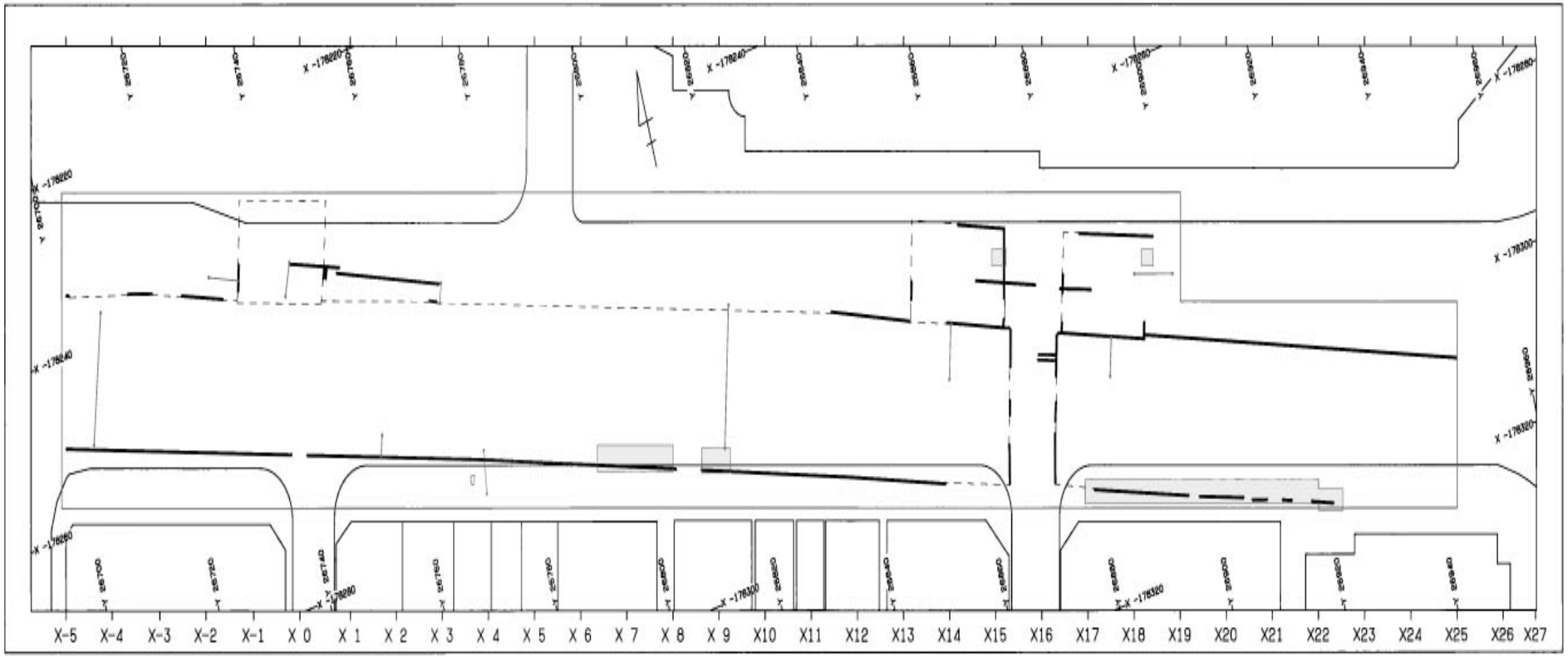
（２）遺構と遺物

外堀石垣

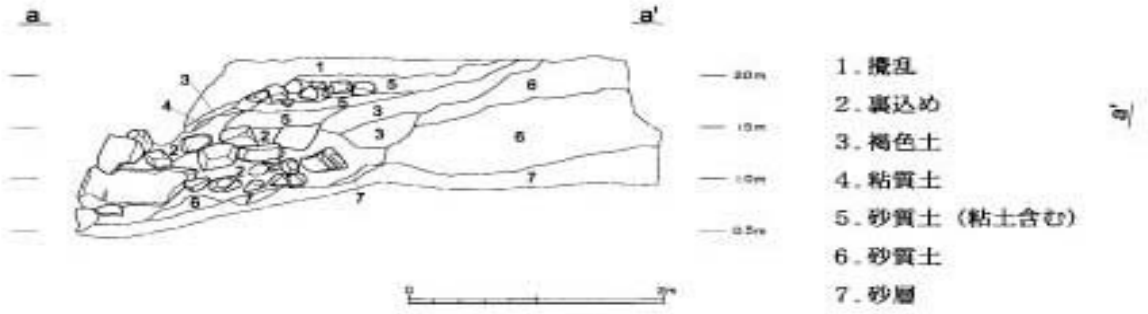
ＳＶ１[第４・５図，図版１]

Ｘ－５～１－１間に位置する。外郭南辺を区画し，外堀ＳＤ１の北岸護岸となる石垣で，ＳＢ１とその西側に位置する平櫓との間に築かれたものである。面を南に向け概ね東西方向に延びる。

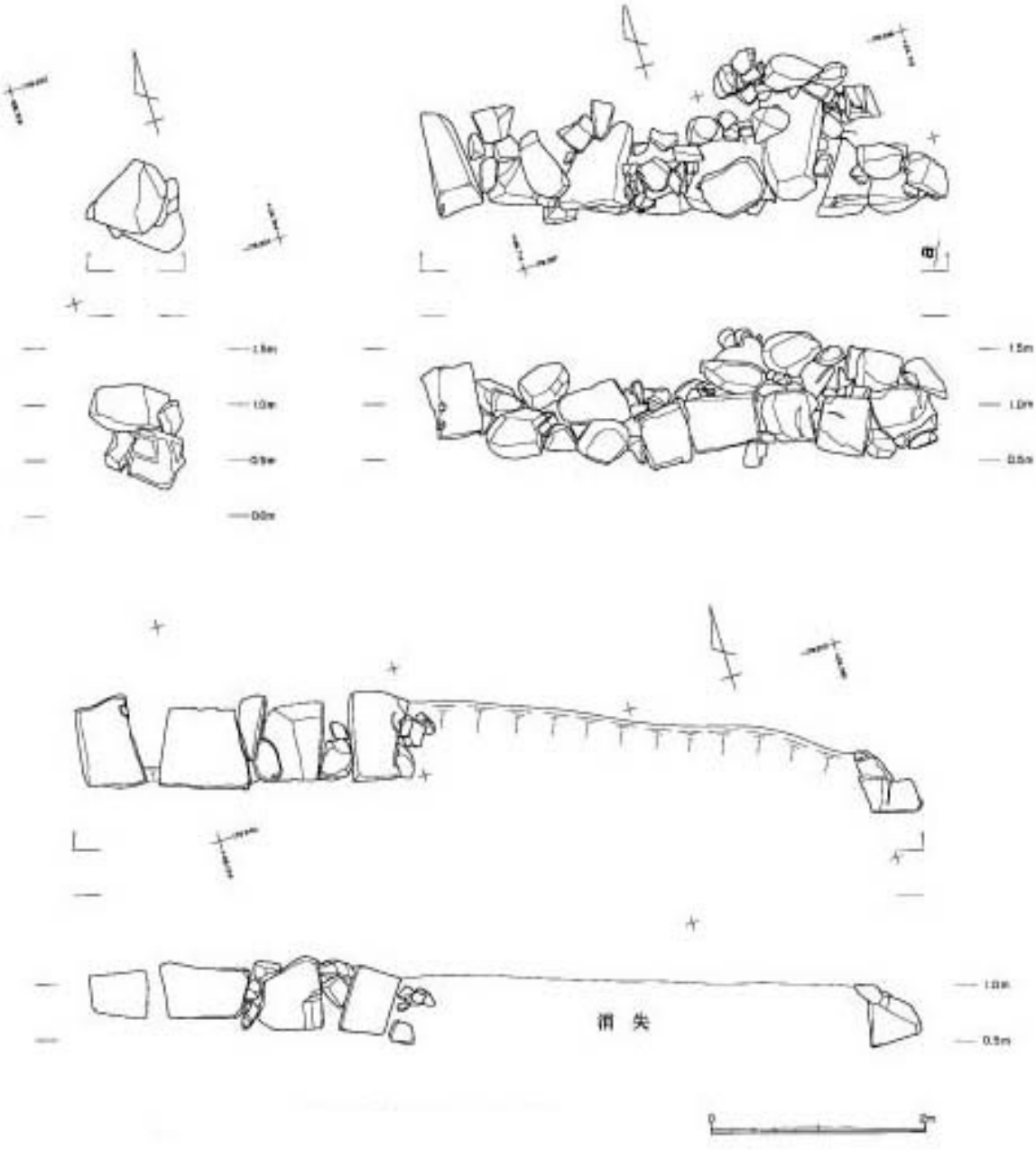
遺存状況が悪く，遺構は分断された状態で確認した。上部は攪乱により消失しており，築石は最大で３段遺存する。西端は一石のみ遺存していた。Ｘ－５付近で調査区西端まで達し，調査区外へさらに連続していると考えられる。東端はＳＢ１西面に直交すると考えられるが，攪乱により消失しており接合部は確認できなかった。



第３図　西調査区遺構配置図（Ｓ＝1:600）　　は第１次調査範囲



第 4 図　ＳＶ１断面実測図（Ｓ＝１：60）

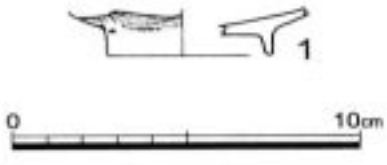


第 5 図　ＳＶ１実測図（1）（Ｓ＝１：60）

消失部分を含めた長さは推定で約32ｍ，高さは1.3ｍである岨軸方向は北西一南東である。築石上端の標高は+1.7ｍ，下端の標高は+0.40ｍである。石垣の最大傾斜角度は約75゜である。断ち割り断面において確認した裏込めの幅は，1.6ｍである。

根石は，自然堆積した砂層の上に直接据えている。築石は主に自然石が使用される。裏込め石の規模は10～30cm大で，密に詰められている。築石には墨書及ぴ刻印は確認できなかった。

遺物は，築石間から肥前系磁器（１）が出土



出土遺物[第６図，図版32]

肥前系磁器

染付碗（１）

外面に稲束が描かれた広東碗の底部で，

生産年代は1780年から19世紀前半である。1)　**第６図**　ＳＶ１出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

ＳＶ２[第７・11・12図，図版１・２・14]

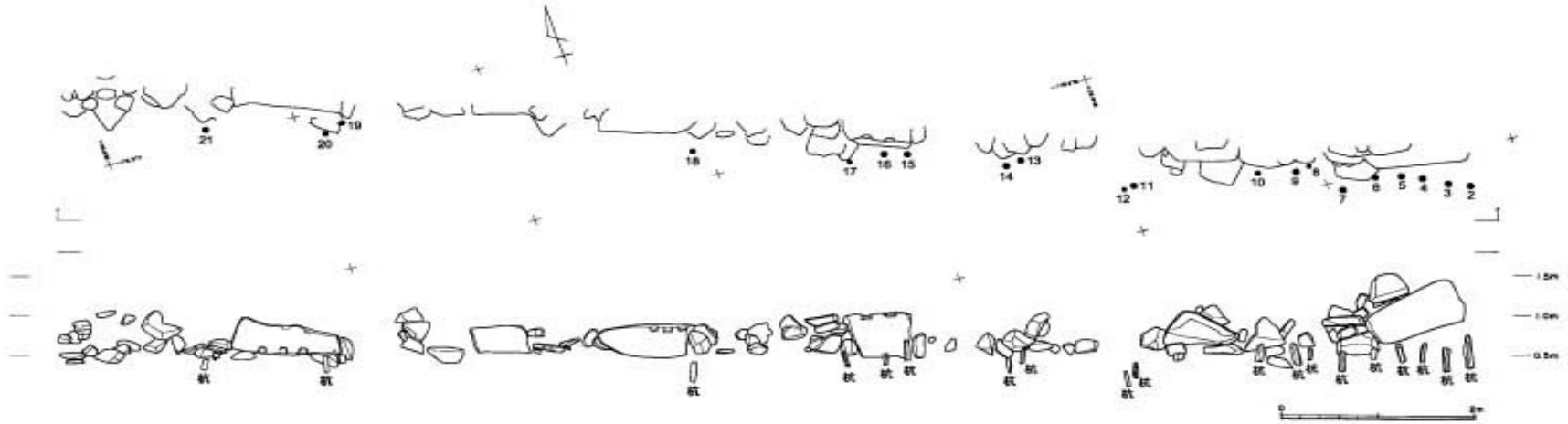
Ｘ０～14間に位置する。外郭南辺を区画し，外堀ＳＤ１の北岸護岸となる石垣で，ＳＢ１とＳＢ２の間に築かれたものである。面を南に向け，概ね東西方向に延びる。

遺構の大部分は攪乱により消失しており，東端部一帯が良好に遺存していたが，その他の部分は，ＳＶ９・ＳＶ10の南においてのみわずかに遺存する。遺存部も上部が攪乱により消失しており，築石は最大で３段遺存する。東端はＳＢ２に接合すると考えられるが，接合部は確認できなかった。しかし，本遺構の遺存部とＳＢ２との位置関係から，ＳＢ２南西角付近に接合すると考えられる。また,西端も攪乱により消失しており，ＳＢ１の遺存状況も悪いことから,西端部とＳＢ１の接合状況は確認できなかった。

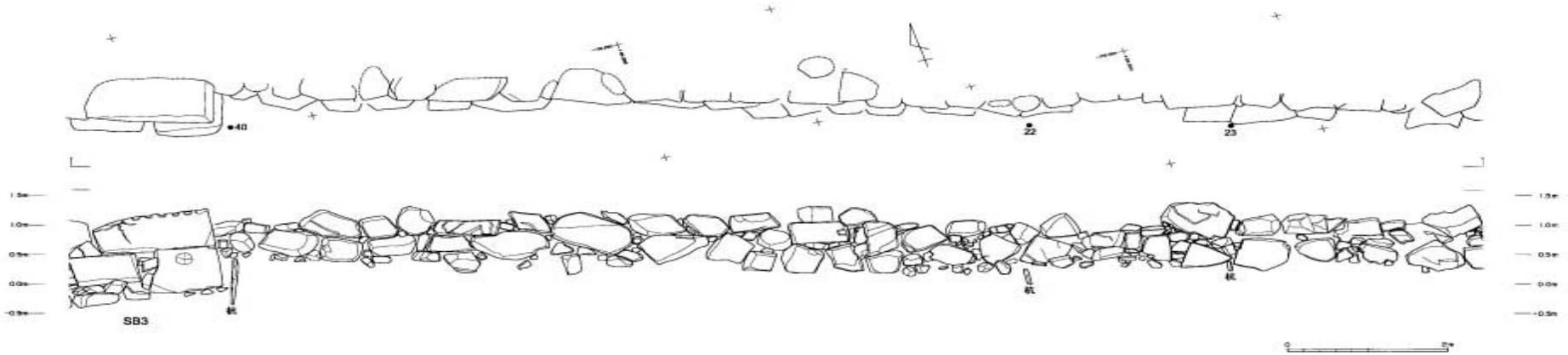
東側遺存部の長さは14..8ｍ，高さは約2.0ｍである。築石上端の標高は+1.58ｍ，下端の標高は+0.4ｍである。軸方向は北西一南東である。石垣の最大傾斜角度は74゜である。西側遺存部の長さは約1.8ｍ，高さは1.1ｍである。築石上端の標高は+1.5ｍ，下端の標高は+0.52ｍである。軸方向は北西一南東である。西側遺存部の断ち割り断面における裏込めの幅は1.4ｍである。なお，推定される本遺構の全長は約10ｍである。

根石は，自然堆積した砂層に直接据えている。築石は主に自然石であるが，東側遺存部であるＸ11～13では部分的に矢穴を伴う割石も使用されている。裏込め石の規模は10～30cm角大で，密に詰められている。築石に，墨書及び刻印は確認できなかった。

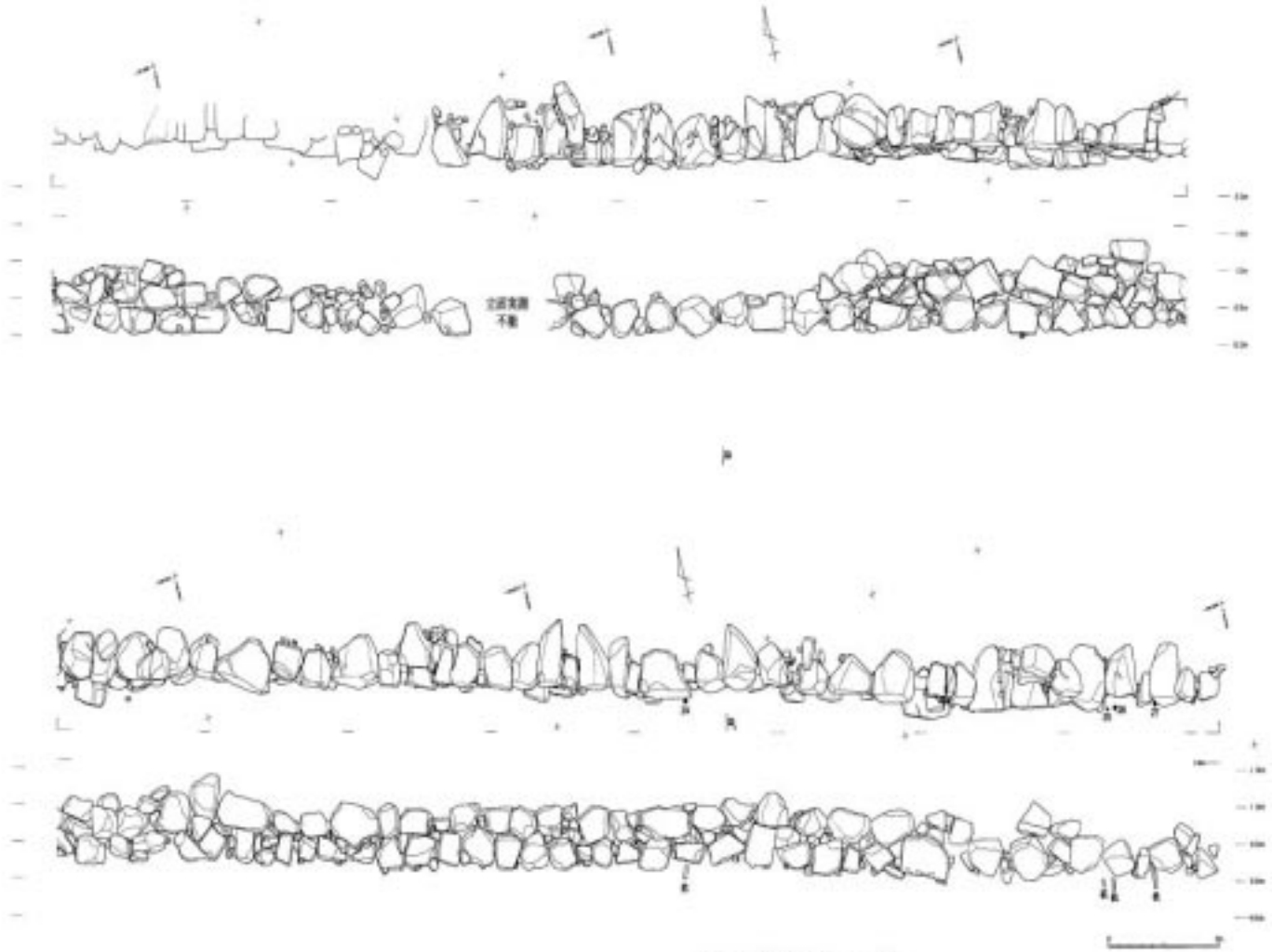
東側遺存部の石垣前方，すなわち岸際には木杭が打設されており，合計21点を確認した。



第７図　SV２実測図(2)（S＝1:60）

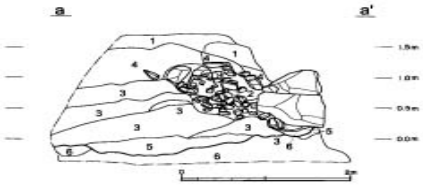


第８図　SV３実測図(1)（S＝1:60）

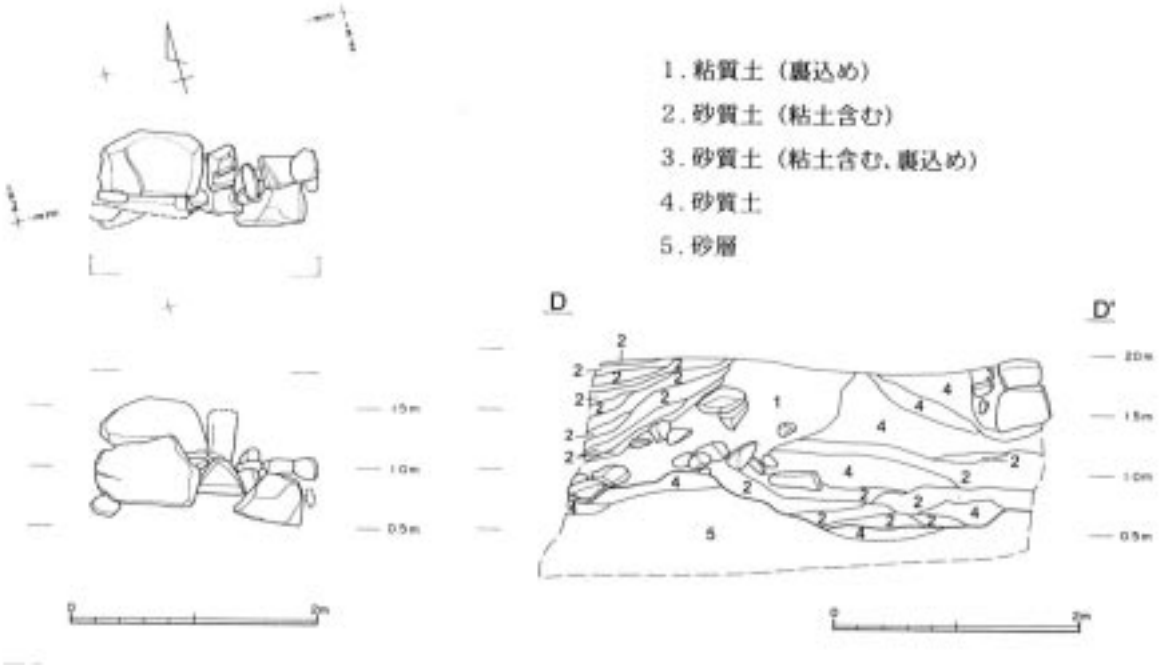


第9図　SV３実測図（S＝1:60）

1．攪乱
2．裏込め
3．粘質土
4．砂質土（粘土含む）
5．砂質土
6．砂層



第10図　SV３断面実測図（S＝1:60）



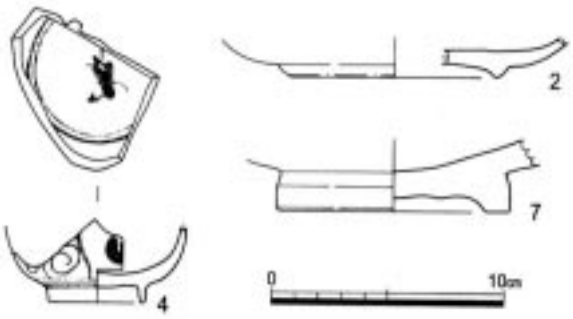
第11図　ＳＶ２実測図（1）（S＝1：60）　**第12図**　ＳＶ2.ＳＶ10間断面実測図（S＝1：60）

一部の杭は石垣に接するが，概ね肩垣から0.5ｍ離れた箇所に打設されている。木杭の多くは削られている。その規模の詳細は，第２表の西調査区木杭計測表の通りである。遺物は確認できなかったため，本遺構の構築時期は不明である。

ＳＶ３[第８～10図，図版２・３]

Ｘ18～25間に位置する。外郭南辺を区画し，外堀ＳＤ２の北岸護岸となる石垣で，ＳＢ３とその東側の平櫓との間に築かれたものである。面を南に向け概ね東西方向に延びる。

上部は攪乱により消失しており，築石は最大で４段遺存する。Ｘ２５付近で調査区東端まで達し，東へは調査区外へさらに連続していると考えられる。西端はＳＢ３南東角から北側約0.5ｍの位置でほぼ直角に接合する。



第13図　ＳＶ３出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

遺存する長さは約６２ｍ，高さは約1.2ｍである。築石上端の標高は+1.50ｍ，下端の標高は+0.30ｍである。軸方向は北西一南東である。石垣の最大傾斜角度は84°である。断ち割り断面において確認した裏込めの幅は，約2.0ｍである。

根石は，自然堆積した砂層上に直接据えている。築石は自然石で，部分的に矢穴を伴う割石も使用されている。裏込め石の規模は10～30ｃｍ大で，いずれも密に詰められている。墨書及び刻印は，確認できなかった。

Ｘ19～20間及び，Ｘ23～25間では，石垣の前方，岸際において木杭を確認した。

遺物は，Ｘ18～19間の築石間から肥前産磁器（２・３），瀬戸・美濃産磁器（４），関西系陶器（５），産地不明陶器（６）が，Ｘ19～20間の築石間から肥前産陶器（７）が出土した。

出土遺物[第13図，図版32]

ａ．肥前産陶器

皿（７）

厚く幅の広い高台を持つ。見込は兜巾状にくぼむ。内面は灰釉がかけられ，鉄絵が残る。生産年代は1590～1610年代である。

ｂ．肥前産磁器

染付皿（２・３）

２　見込は蛇の目釉剥ぎされる。また，中央には呉須が残り，五弁花が描かれていたと考えられる。波佐見産で，生産年代は18世紀中葉である。

３　口縁部の破片で，内面は墨弾き装飾されている。生産年代は19世紀初頭から幕末である。

ｃ．瀬戸・美濃産磁器

染付碗（４）

見込に虫文様が描かれた染付碗で，生産年代は幕末である。

ｄ．関西系陶器

瓶（５）

外面に鉄絵が描かれているが，文様は不明である。生産年代は19世紀である。

ｅ．産地不明陶器

甕（６）

中国地方窯産で，生産年代は19世紀と思われる。

ＳＶ４[第14～19図，図版４～９]

Ｘ－５～15間に位置する。外堀ＳＤ１の南岸護岸となる石垣で，ＳＸ１(「一丁目口御門」土橋）から「平御櫓冠木御門」の間に築かれたものである。

一部を除いて上部は攪乱により消失しており，築石は平均４～５段，最大で６段遺存する。遺存状況のよいＸ６～７間は，上端が概ね水平であり，築石も整っていることから，天端石まで遺存していると考えられる。Ｘ－５付近で調査区西端まで達し，西へは調査区外へさらに連続していると考えられる。東ＳＸ１まで達し，ＳＶ６に接合すると考えられるが，東端部は埋設管によって消失しており，確認しえなかった。本遺構では，３か所において基底部に胴木を確認した。2)

なお，遺構の一部は立面しか図化できなかった。そのため，当該範囲は立面図における築石上端部の外形線を平面に展開し，位置関係を示した。

	X-４～３間	X-１～０間	Ｘ６～７間
胴木の長さ	石垣前総延長：7.5m 前面：1.8m　2.4m　0.9m 後面：1.7m　3.1m　3.7m	石垣前総延長：7.1m 前面：3.8m　3.4m 後面：1.6m　1.6m	石垣前総延長：74.4m 前面：4.4m 後面：5.8m
胴木の太さ	10～14cm 20～30cm	約14cm，裏は約10cm	16～20cm
石材の 積み方	40～60cmの自然石を野面積みで乗せ，間に角礫を詰める。	30～50cmの自然石を野面積みで乗せ、間を角礫を詰める。	30～50cmの自然石を野面積みを乗せ、間を角礫を詰める。
胴木の標高	+0.60m～+0.74m	+0.49m～+0.68m	+0.50m～+0.70m
石の段数	２～３段	４～５段	５～６段
杭の有無	無	有。３点	有。３点
胴木 平面 形状	丸太２本の間に，10～15cm大の石を挟む。ただし丸太は１本しか残存していないところもあり。	丸太２本の間に、15～20cm大の石を挟む。ただし丸太は１本しか残存していないところもあり。	丸太２本の間に、15～20cm大の石を挟む。

第１表　西調査区胴木比較表

平面規模は，長さが約170ｍで，高さは1.6ｍである。築石上端の標高は+2.22ｍ，下端の

標高は+0.50ｍである。軸方向は南東一北西である。断ち割り断面において確認した裏込めの幅は，a断面が0.8ｍ，b断面が0.6ｍ，Ｆ断面(ＳＥ１断面部分)が0.7ｍである。裏込め石の規模は10～30ｃｍ大で，いずれも密に詰められている。

根石は概ね自然堆積した砂層の上に直接据えられているが，Ｘ－４～－３間，Ｘ－１～０間，Ｘ６～７間では根石下に胴木が据えられている。3) Ｘ６～７間において確認した胴木の構造は，太さ15ｃｍ程度の赤松の丸太を20～30ｃｍの間隔をあけて平行に設置し，その間には15～20ｃｍ程度の角張った石材が敷きつめられていた。Ｘ－１～０付近，Ｘ６～７付近においては胴木の北側つまり岸際で木杭を合計９点確認した。木杭は胴木を支えるものと考えられるが，胴木に伴い打設されたものであるかは確認できなかった。

築石は概ね自然石で，矢穴を伴う割石は少ない。刻印，墨書等は確認できなかった。石垣の積み方は，概ね打込接の布積みである。

積み方は場所により異なる。根石から横目地が入った箇所（Ｘ12～14）も存在するが，石材の大きさは大小様々であり，形状は揃っていない部分がほとんどである。石がただ乱雑に積まれて大きさもまちまちの箇所，根石がかなり張り出した箇所（Ｘ１～２）などが特徴的である。根石の標高も一定しない。

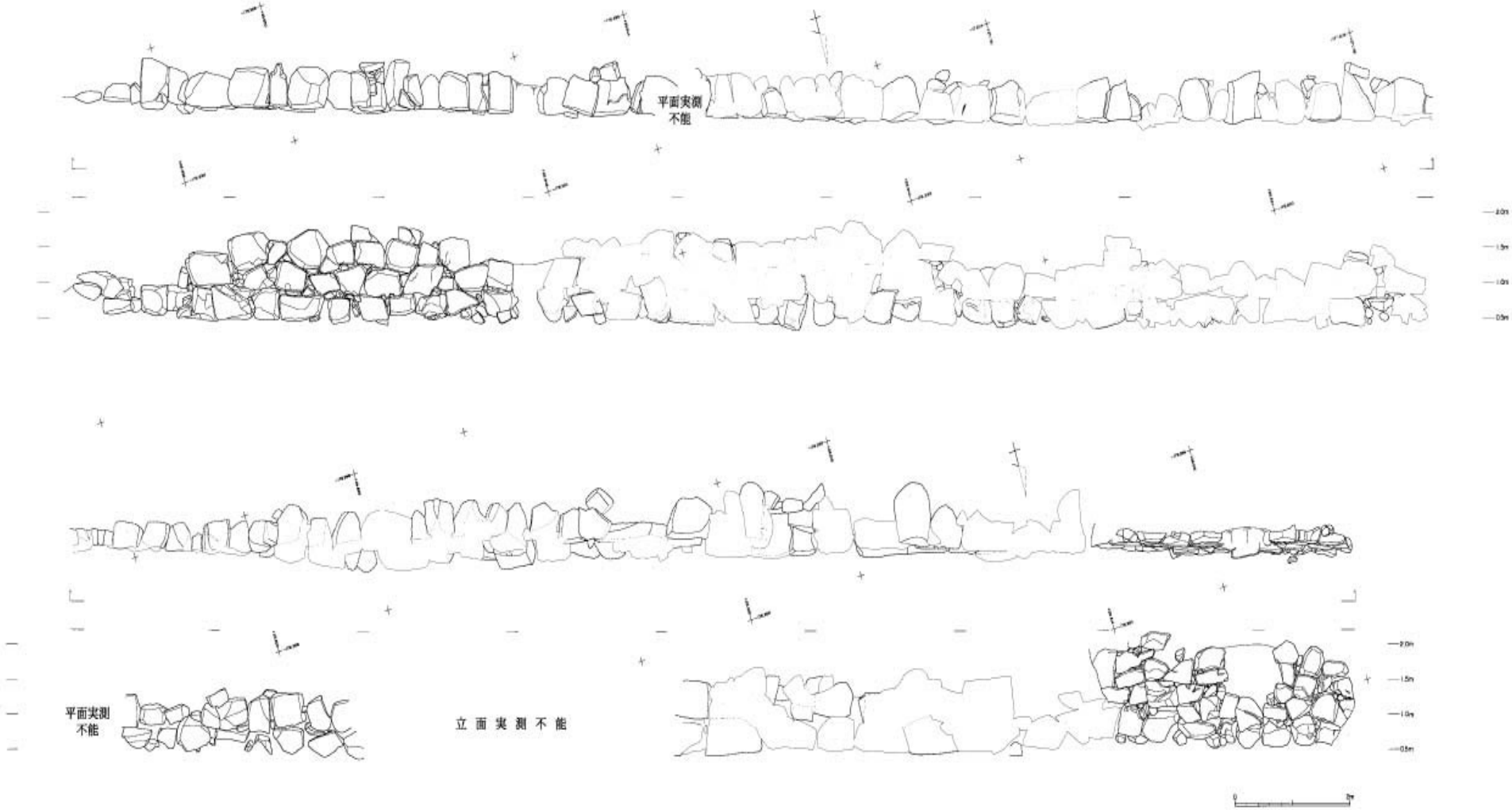
また，上部のみを後から積み替えた箇所（Ｘ－４～13）もあったことなどから，度々積み替えられた可能性が高い。

胴木部分（Ｘ－４～－３，Ｘ－１～０，Ｘ６～７）の規模等の比較は第１表の「西調査区胴木比較表」の通りである。

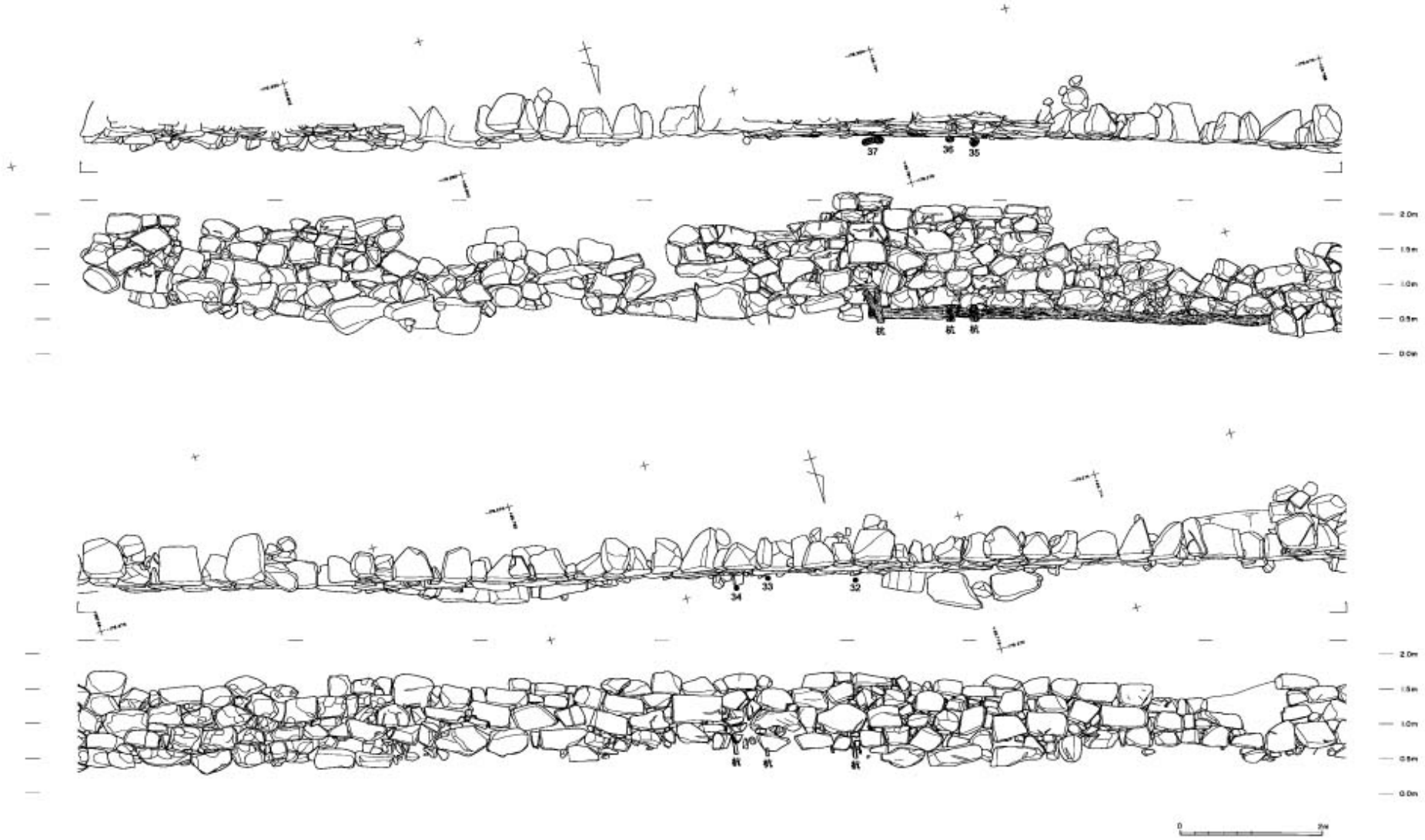
遺物は，Ｘ－５～－４間石垣掘り方から肥前産陶器（８）が，Ｘ－４～－３間胴木裏込めから肥前産陶器（９）が，Ｘ－４～－３間石垣裏込めから中国産磁器（10），肥前産磁器（11～13），肥前系磁器（14），瀬戸・美濃産磁器（15）が，Ｘ－３～－２間石垣裏込めからは肥前産磁器（16）が，Ｘ－１～０間石垣裏込めからは肥前産磁器（17）が，Ｘ－１～０間石垣下からは肥前産磁器（18）が，Ｘ４～５間石垣裏込からは中国産磁器（19），関西系陶器（20）が，Ｘ６～７間の築石間から肥前産陶器（21），肥前産磁器（22），瀬戸・美濃産磁器（23）が，Ｘ６～７間の裏込から肥前産磁器（24），肥前系磁器（25），関西系陶器（26），Ｘ６～７間胴木上から中国産磁器（27），肥前産陶器（28），肥前産磁器（29・30），肥前系磁器（31），関西系陶器（32・33），関西系磁器（34）が，Ｘ７～８間根石からは，肥前産陶器（35），肥前産磁器（36）が，Ｘ13～14間石垣間からは肥前産磁器（37）が出土した。

出土遺物[第20図，図版32・33]

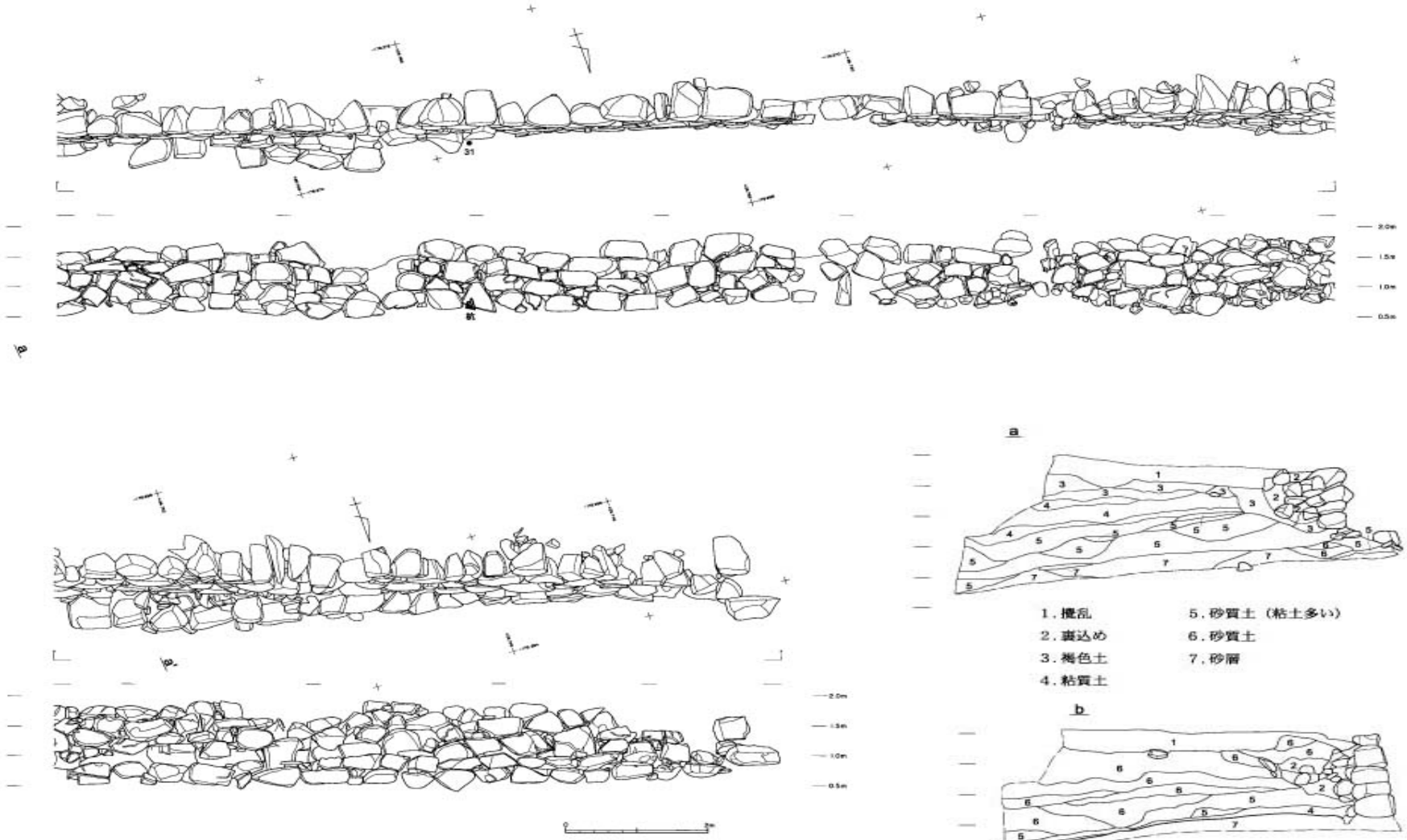
ａ．中国産磁器



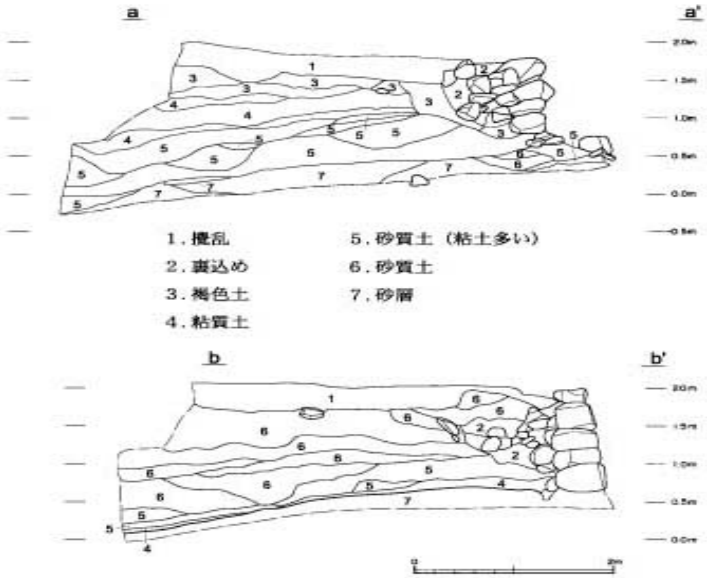
第14図　SV４実測図(1)（S＝1:60）



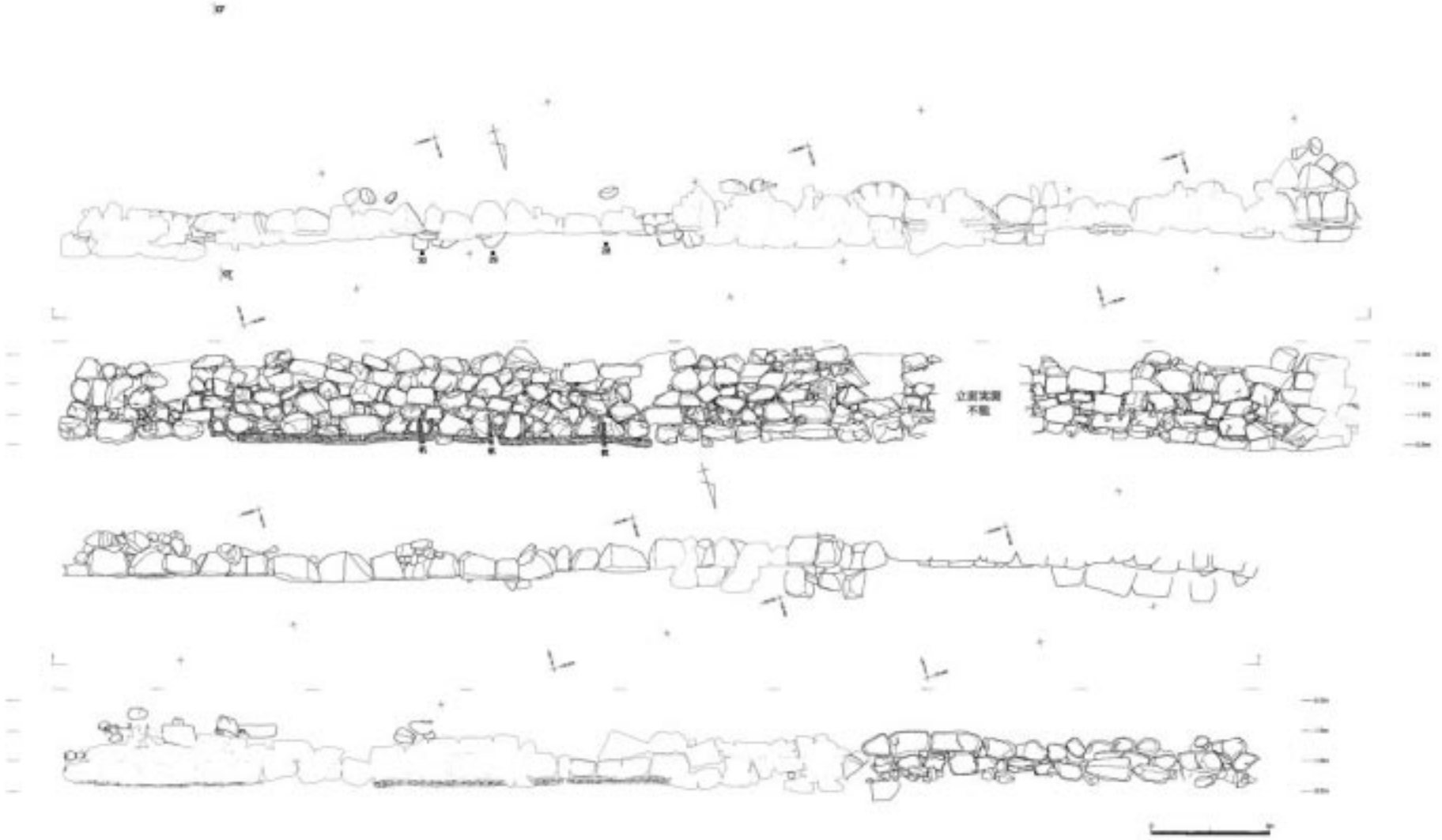
第15図　SV４実測図(2)（S＝1:60）



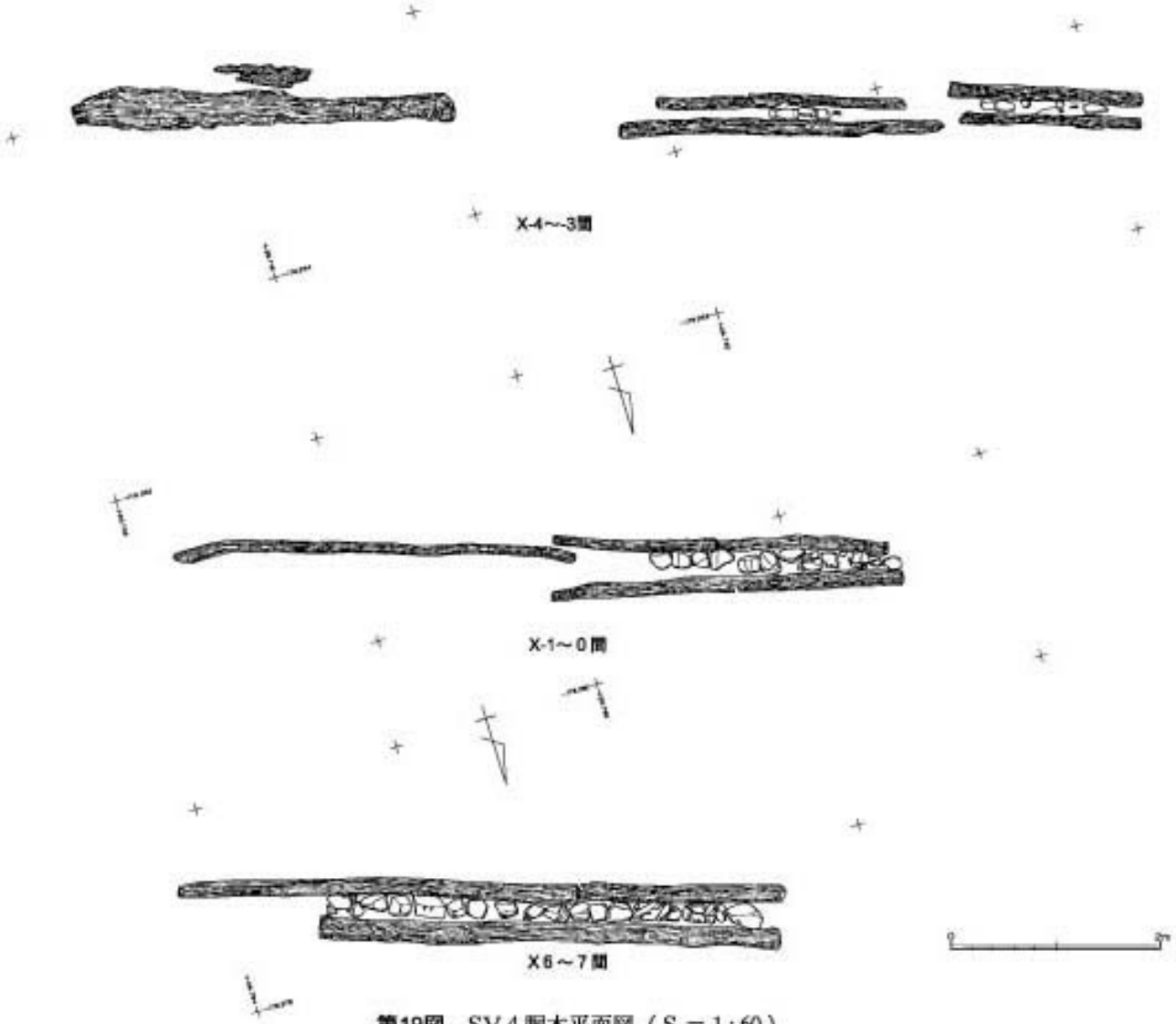
第16図　SV４実測図(3)（Ｓ＝1：60）



第17図　SV４断面実測図（Ｓ＝1：60）



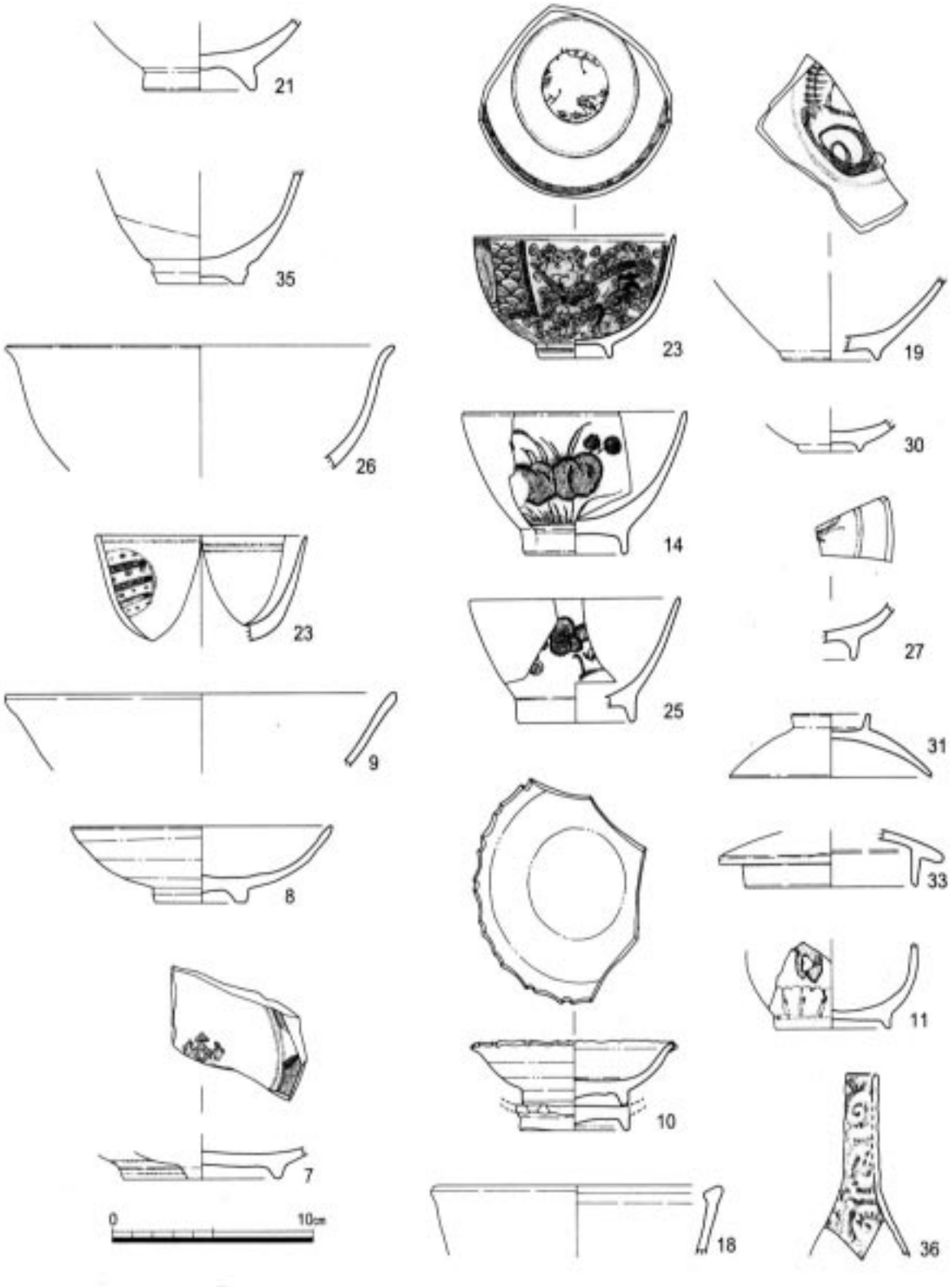
第18図　SV4実測図(6)（S＝1：80）



第19図　SV４厠木平面図（S＝1:60）

白磁皿（10）

底部に焼成時に重ねられた別の個体の高台部が熔着している稜花皿である。福建産で,生産



第20図　ＳＶ４出土遺物実測図（Ｓ＝１：3）

青花碗（19・27）

19　見込に文様が描かれているが文様は不明である。景徳鎮産で,生産年代は16世紀後半から１７世紀前半である。胎土は灰色で，釉もやや青みがかる。粗製で，上田秀夫氏の青花分類のＡ群にあたる。4)

27　見込に草木文が描かれている。高台内にはカンナ削りの痕跡が残る。景徳鎮産で，生産年代は16世紀末から1630年頃である。青花分類のＡ群にあたる。

ｂ．肥前産陶器

碗（21・35）

21　呉器手の碗の底部である。生産年代は17世紀である。

35　高台と体部との境が溝状に削り込まれた灰釉の碗である。生産年代は1600～1630年で　ある。

皿（８・９・28）

８　見込が蛇の目釉剥ぎされた銅緑釉の皿である。内野山窯産で，生産年代は17世紀末から18世紀前半である。

９　刷毛目の皿である。生産年代は18世紀である。

28　細片で器形は判然としないが，皿と思われる。釉薬は内外面とも鉄釉である。生産年代は16世紀末から17世紀前半である。

ｃ．肥前産磁器

染付瓶（11・13・36）

11　高台内に砂が熔着している。外面に植物と思われる文様が描かれている。生産年代は17世紀後半から18世紀である。

13　外面に草の文様が描かれている。生産年代は18世紀中葉である。

36　蛸唐草が描かれた瓶で，生産年代は18世紀末から19世紀前半である。

染付大瓶（12）

外面に植物と思われる文様が描かれている。生産年代は1670年代から1700年代である。

染付碗（16・22・24）

16　染付碗で，生産年代は18世紀中葉である。

22　内面に松竹梅文，外面に雲挌文が描かれた染付である。生産年代は19世紀初頭から幕末である。

24　口縁部の細片で，外面には二重圏線が，内面には圏線が巡らされる。外面には他にも文様が描かれているが，判然としない。生産年代は17世紀後半である。

染付皿（17・37）

17　見込にこんにゃく印判で五弁花が描かれている。畳付には砂が付着する。生産年代は1690年～18世紀である。

37　内面に文様が描かれた皿の底部である。文様は判然としないが，芙蓉手の可能性がある。生産年代は1630～1650年である。

青磁香炉（18）

口縁部の破片で，口縁端部は内側へ折り込まれ断面三魚形を呈する。生産年代は17世紀後半である。

白磁碗（29）

口縁部の細片で，文様が確認できないため白磁と考えられる。生産年代は17世紀後半から18世紀前半である。

染付小碗（30）

高台径の小さな碗の底部である。畳付には砂が付着する。生産年代は18世紀頃である。

ｄ．肥前系磁器

染付碗（14・25）

14　広東碗で外面に植物の文様が描かれている。生産年代は19世紀前半である。

25　外面に蔓草の文様が描かれている。中国地方窯産と考えられる。生産年代は1780年～19世紀前半である。

白磁碗蓋（31）

生産年代は18世紀である。

ｅ．瀬戸・美濃産陶器

鉢（15）

内外両面とも施釉されている。外面には模様が彫り込まれている。火鉢として使用されたと考えられる。生産年代は江戸時代後期である。

ｆ．関西系陶器

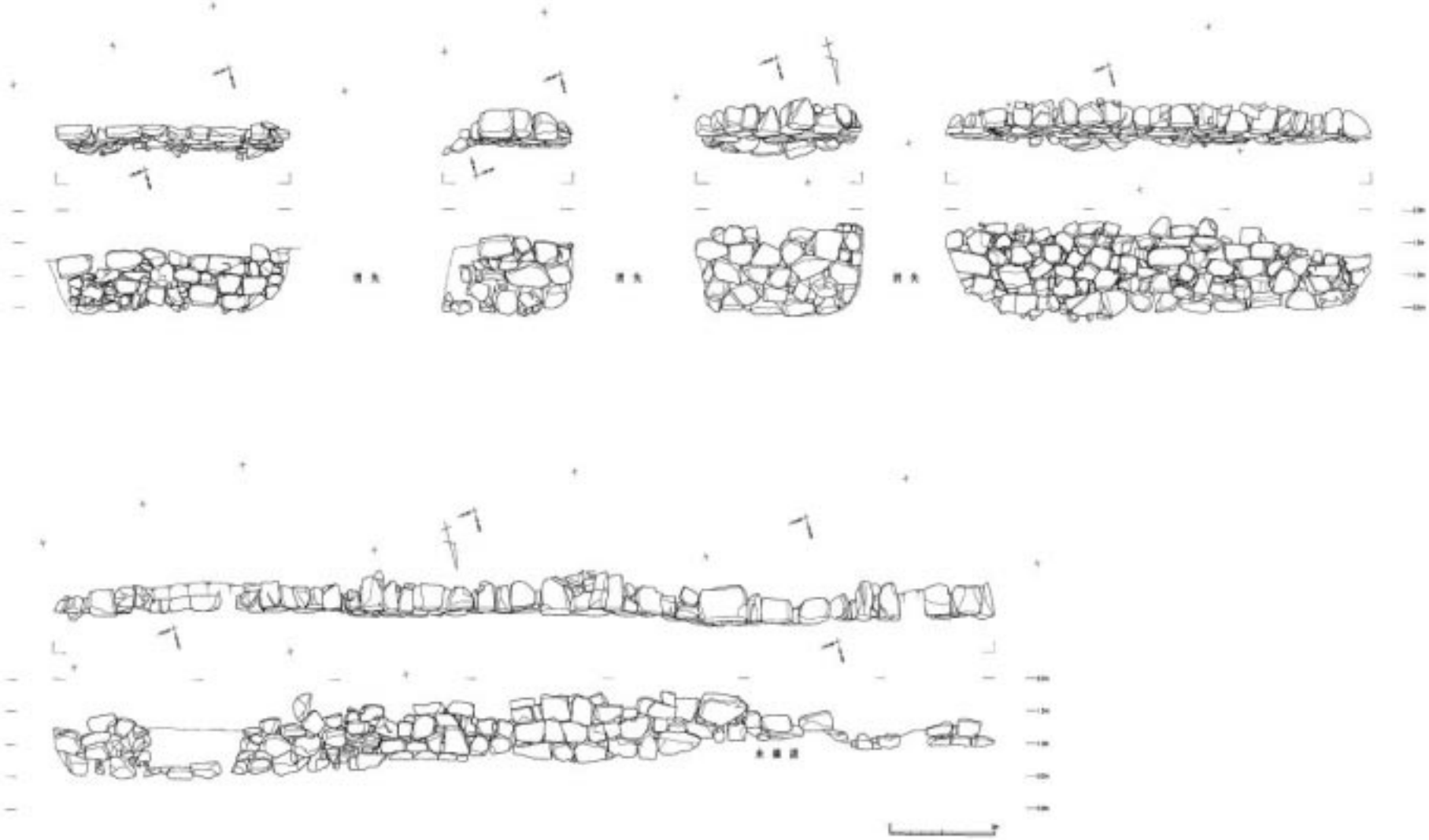
土鍋（20）

鍋の細片で，生産年代は19世紀である。

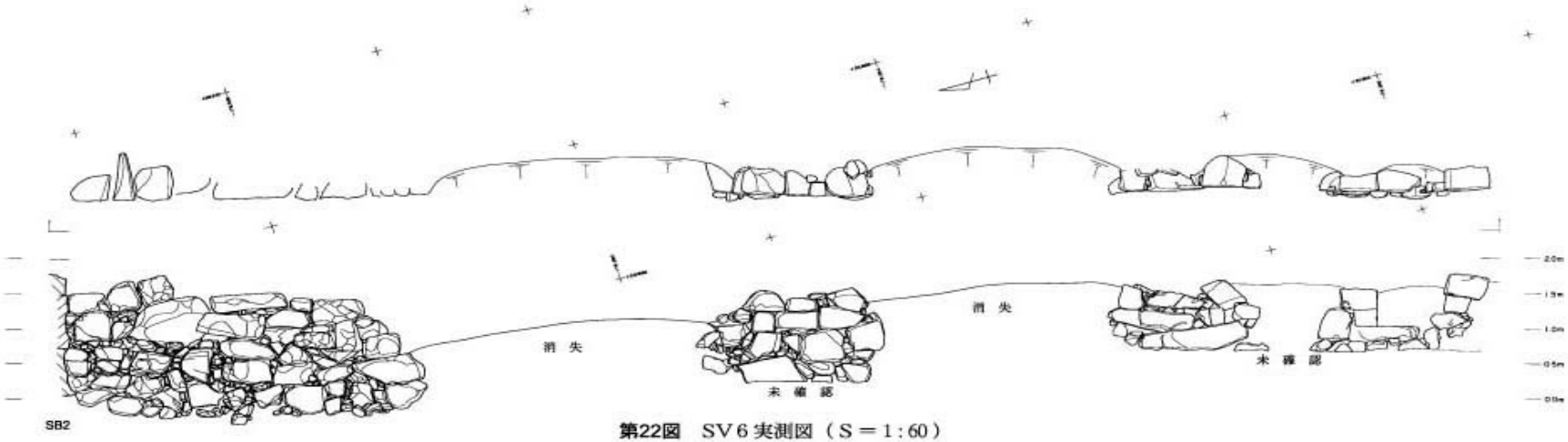
碗（26）

外面に化粧土をかけその上に透明釉をかけている。内面は無釉である。生産年代は19世紀である。

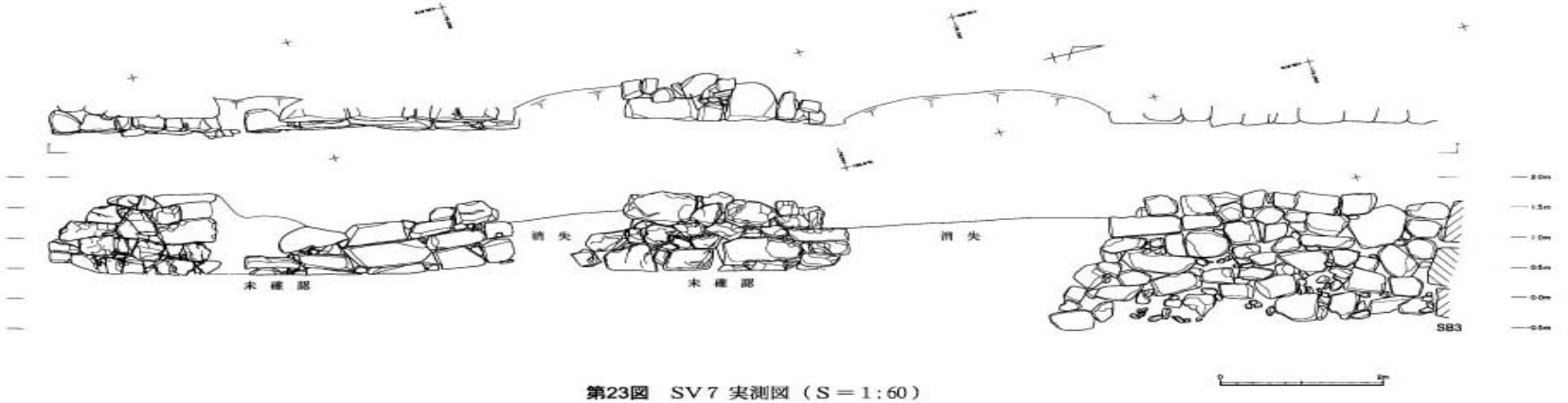
皿（32）



第21図　SV5実測図（S＝1:60）



第22図　SV６実測図（S＝1:60）



第23図　SV７実測図（S＝1:60）

皿と考えられる細片である。釉薬は内外面とも鉄釉である。生産年代は19世紀頃である。

土瓶蓋（33）

土瓶蓋の細片である。生産年代は19世紀頃である。

g．瀬戸・美濃産磁器

染付碗（23）

外面に丸文が描かれている。釉調はやや濁り気味で，呉須の発色も悪い。生産年代は幕末である。

h．関西系磁器

銚子（34）

体部の細片である。釉は透明釉である。生産年代は19世紀頃である。

ＳＶ５[第21図，図版９]

Ｘ16～23間に位置する。外堀ＳＤ２の南岸護岸となる石垣で，ＳＸ１「一丁目口御門」土橋とＳＸ２「研屋町口御門」土橋の間に築かれたものである。

上部は攪乱により消失しており，築石は最大で６段遺存する。西端はＳＶ７に接合すると考えられるが，埋設管によって消失しており確認しえなかった。東へはＸ22～23の間で調査区南端まで達し，調査区外へさらに連続していると考えられる。なお，掘削深度の制限のため，遺構は下端まで確認できなかった。また，埋設物が支障となり，遺構の一部は調査ができなかった。

長さは，消失部分，攪乱部分を含めて約45ｍ，高さは1.6ｍである。築石上端の標高は+1.80ｍ，下端の標高は+0.34ｍである。軸方向は南東一北西である。石垣の最大傾斜角度は断面を測量していないため不明であるが，90°に近いものと思われる。

根石は自然堆積層と考えられる砂層に直接据えられている。築石は概ね自然石で，矢穴を伴う石材も一部確認できた。築石には墨書及び刻印は，確認できなかった。

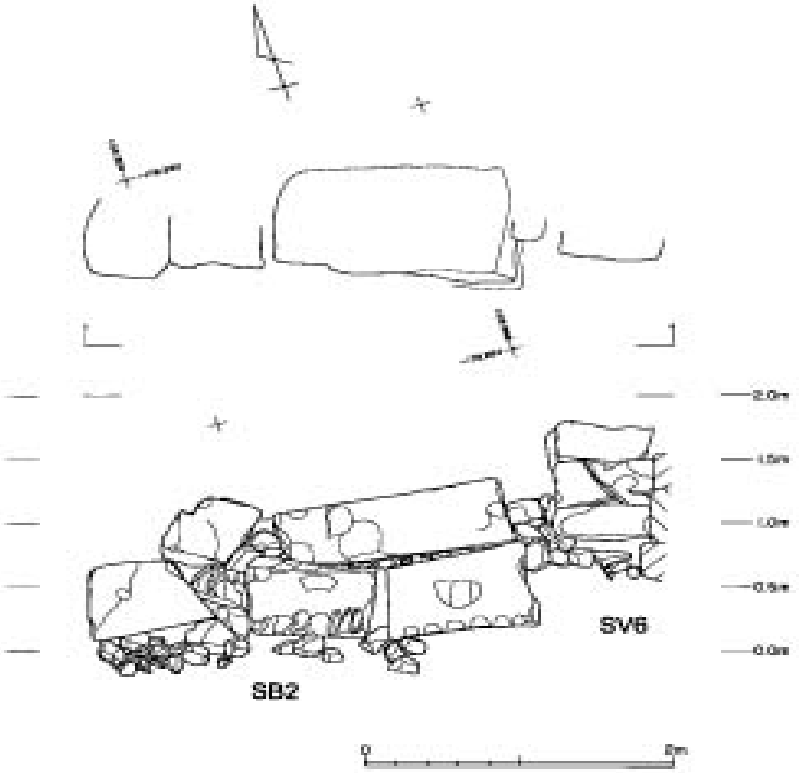
本遺構では遺物の確認を行うことができなかったため，時期は不明である。

土橋石垣

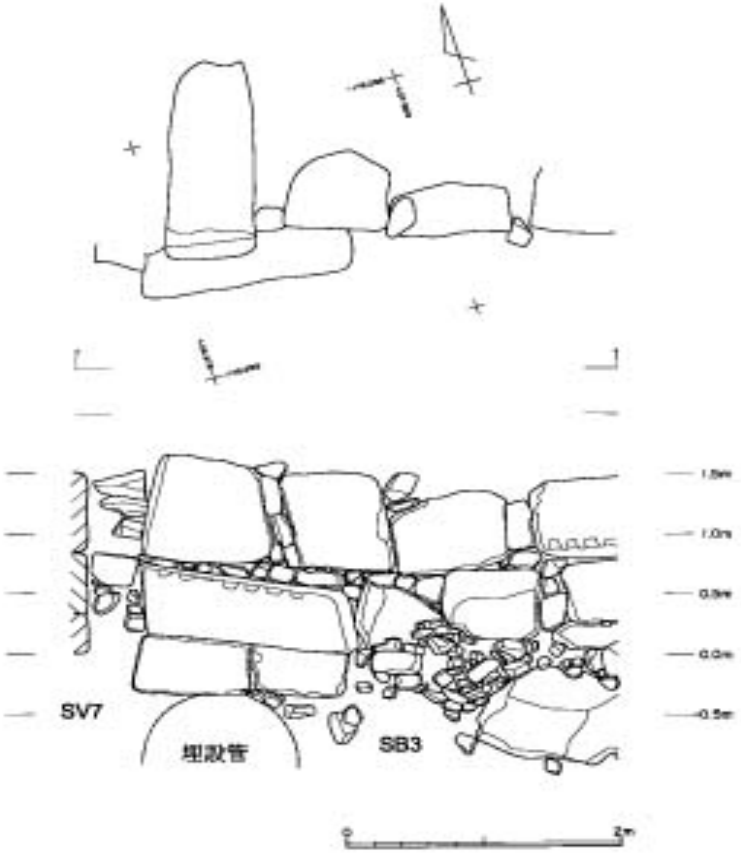
ＳＶ６[第22・24図，図版10・17]

Ｘ15～16間に位置する。「一丁目口御門」土橋の西辺に築かれた石垣で，面を西に向け南北方向に延びる。

遺構は攪乱のため三か所に分断される。上部は攪乱により消失している。築石は遺存状況の良い北側遺存部において最大６段遺存する。北へはＳＢ２南東角付近まで達し，端部を確認した。ＳＢ２南東角石と北端部の間には幅0.6ｍ程度の石材が詰められている。南は埋設管



第24図　SV６，SB２接合部
実測図（S＝1:60）



第25図　SV７、SB３接合部
実測図（S＝1:60）

中央遺存部及び南側遺存部は，掘削深度の制限と湧水のため，下端まで確認できなかった。

北側遺存部の長さは4.6ｍ，高さは約2.1ｍである。築石上端の標高は+1.78ｍ，下端の標高は-0.35ｍである。中央部遺存部の長さは2.0ｍ，高さは1.4ｍである。築石上端の標高は+1.60ｍ，下端の標高は確認できなかった。南側遺存部の長さは4.9ｍ，高さは1.0ｍである。築石上端の標高は+1.72ｍ，下端の標高は確認できなかった。軸方向は北東一南西である。石垣の最大傾斜角度は82°である。断ち割り断面において確認した裏込めの幅は，５～６ｍである。

根石は自然堆積と考えられる砂層に直接据えられている。築石は自然石が使用されていた。築石に墨書・刻印は確認できなかった。石垣の積み方は打込接の乱積みである。裏込め石の規模は10～30ｃｍ大で，いずれも密に詰められている。

遺物は確認できなかったため，本遺構の時期は不明である。

ＳＶ７[第23・25図，図版11]

Ｘ16～17間に位置する。「一丁目口御門」土橋の東辺に築かれた石垣で，面を東に向け南北方向に延びる。遺構は攪乱のため三か所に分断される。上部は攪乱により消失している。築石は遺存状況の良い北側遺存部において最大６段遺存する。北へはＳＢ３南西角付近まで達し，端部を確認した。ＳＢ３南西角石と端部の問には小型の角礫が詰められている。南は埋設管によって消失していたが，さらに延び，ＳＶ５まで達し，直交していたと考えられる。なお，中央遺存部及び南側遺存部は，掘削深度の制限と湧水のため，下端まで確認できなかった。

北側遺存部の長さは4.8ｍ，高さは約2.2ｍである。薬石上端の標高は+1.78ｍ，下端の標高は-0.39ｍである。中央部遺存部の長さは3.4ｍ，高さは1.3ｍである。築石上端の標高は+1.76ｍ，下端の標高は確認できなかった。南側遺存部の長さは5.8ｍ，高さは1.3ｍである。築石上端の標高は+1.70ｍ，下端の標高は確認できなかった。軸方向は南西一北東である。石垣の最大傾斜角度は85°である。断ち割り断面において確認した裏込めの幅は，５～６ｍほどである。

根石は灰白色砂層上に直接据えている。築石は自然石が使用されていた。題書・刻印は確認できなかった。石垣の積み方は打込接の乱積みである。裏込め石の規模は10～30cm大で，いずれも密に詰められている。

遺物は，石垣下端から中国産磁器（38），肥前産磁器（39），肥前系磁器（40）が出土した。

出土遺物[第26図，図版33]

ａ．中国産磁器

青花皿（38）

見込が蛇の目釉剥ぎされた牟饅頭心タイプの皿である。高台の断面形は台形で，高台及び高台内は無釉である。胎土は灰白色で微黒斑を含む。見込の文様は花である。?窯系で，生産年代は16世紀末から17世紀初頭である。青花分類のＢ類にあたる。

ｂ．肥前産磁器

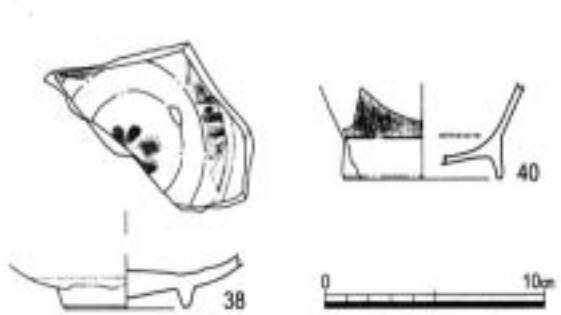
染付皿（39）

底部の破片である。生産年代は18世紀後半から19世紀初頭である。

ｃ．肥前系磁器

染付碗（40）

広東碗で，中国地方窯産の可能性がある。生産年代は1780年から19世紀前半である。



第26図　ＳＶ７出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

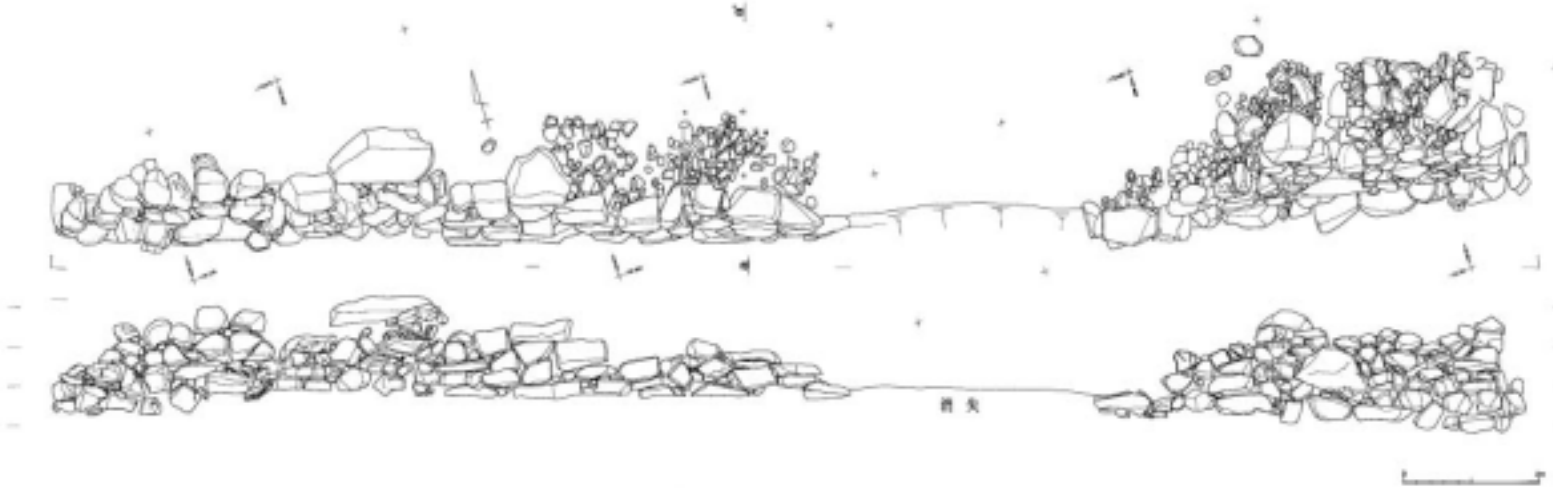
その他の石垣

ＳＶ８[第27・28・30図，図版12・13]

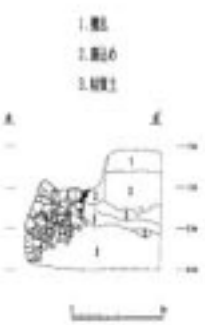
Ｘ15～18間に位置する。「一丁目口御門」内，ＳＢ２・ＳＢ３の南端からは約4.5ｍ北に位置する。面を南に向け，概ね東西方向に延びる。本遺構はＳＢ２東面及びＳＢ３西面と重複しており，これらに先行する。南には水性の沈澱土が堆積しており，水際の護岸石垣であったと考えられる。上部は攪乱反びＳＢ２，ＳＢ３構築時に消失したと考えられ，築石は最大で４～５段遺存している。西へはＳＢ２東面から5.7ｍの地点まで，東へはＳＢ３西面から5.9ｍの地点まで達する。遺存部の東西両端からさらに連続していたかは，確認できなかった。石垣列の前面では堀内同様の遺物を含む沈澱土を確認したが，確認範囲は石垣から南へ約1.5ｍで，その南は攪乱によって消失しており端部は確認していない。

消失部分を含めた長さは22.3ｍである。西側遺存部(西半部〕の長さは2.0ｍ，高さは約1.4ｍである。築石上端の標高は+1.50ｍ，下端の標高は+0.14ｍである。東側遺存部(東半部)の長さは7.0ｍ，高さは1.5ｍである。築石上端の標高は+1.40ｍ，下端の標高は-0.08ｍである。軸方向は北西一南東である。石垣の最大傾斜角度は56°である。断ち割り断面において確認した裏込めの幅は，0.9ｍである。

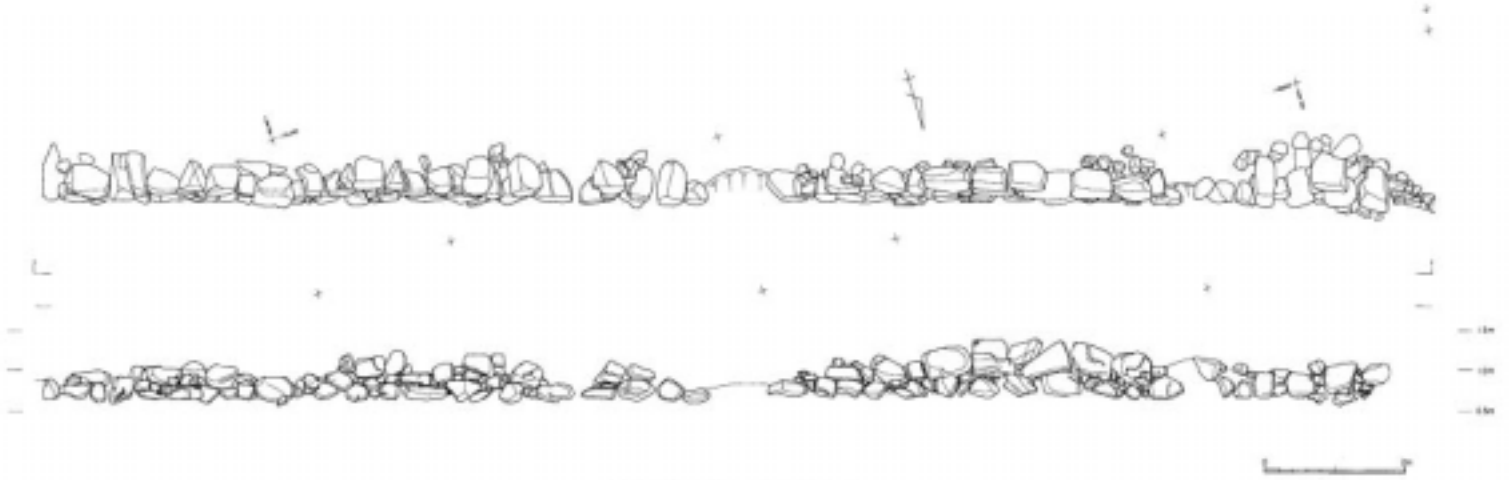
根石は，自然堆積した砂層の上に直接据えている。築石は自然石で，墨書及び刻印は確認できなかった。石垣の積み方は打込接の乱積みである。裏込めは10ｃｍくらいの小礫を中心に密に詰められている。



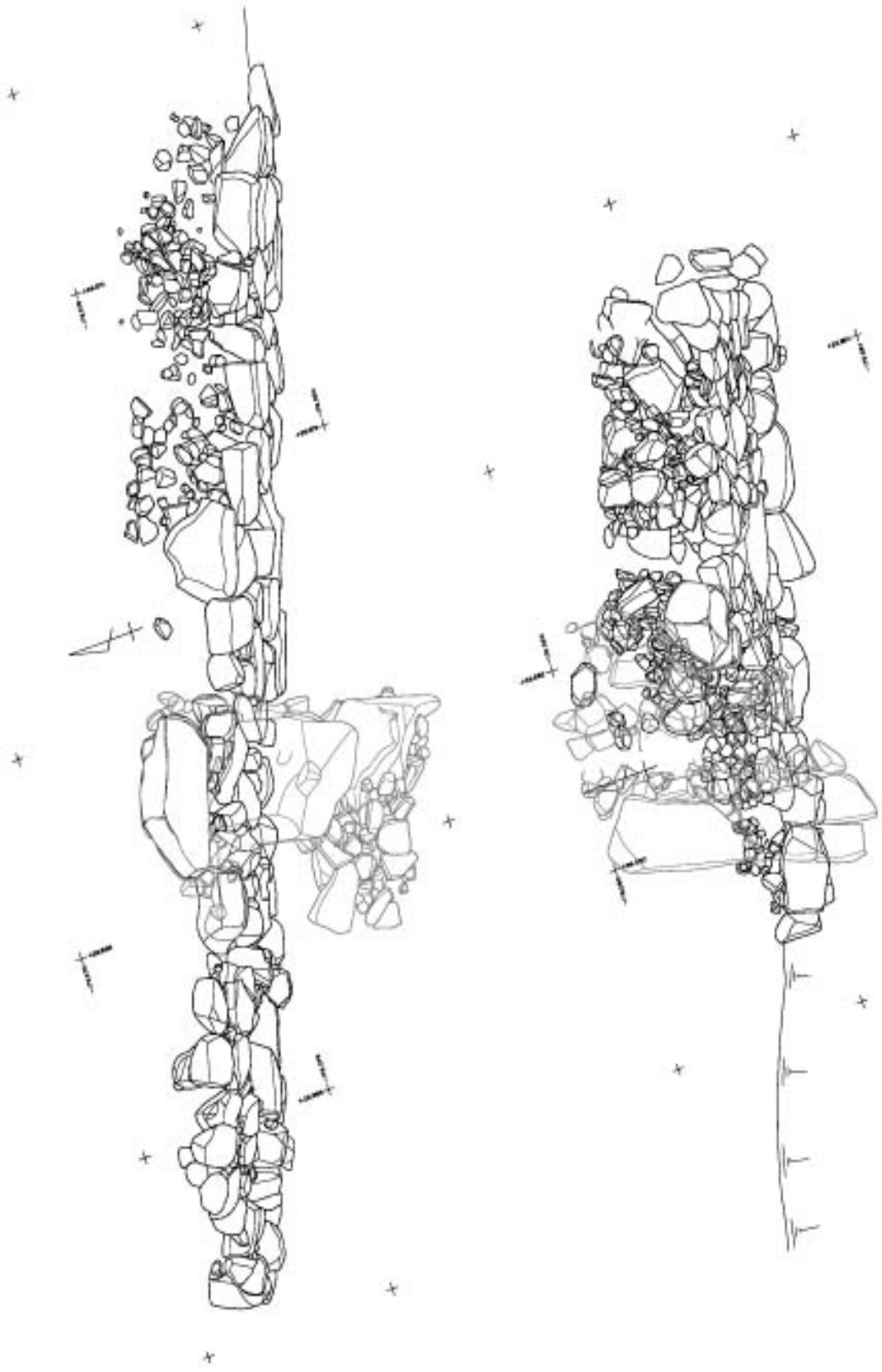
第27図　SV8実測図（S＝1:60）



第28図　SV8断面図（S＝1:8）



第29図　SV10実測図（S＝1:60）



第30図　ＳＶ８及びＳＢ２・ＳＢ３との接合部（Ｓ＝1：60）

石垣の南方約0.8ｍの西半部沈澱土層内に木杭が打設されていた。規模は，直径3.5～6.5cm，長さ120cm，表面に加工痕があり，また上部は折れていた。沈澱土層内に刺さっていたことから，遺構に関連する可能性は低いものと思われる。

遺物は，西半部沈澱土層から中国産磁器（41 ～ 43），瀬戸・美濃産陶器（44・45），産地不明焼き締め陶器（46），土師質土器（49），漆器椀（50・52・53），下駄（54・55・56），蓋（57），箸（58 ～ 82）が，本遺構東半部石垣間から備前産焼き締め陶器（47・48）が，東半部沈澱土層から漆器椀（51）が出土した。

本遺構は遺物の生産年代から，17 世紀中葉までに廃絶されたと考えられる。

出土遺物[第 31・32 図，図版 33 ～ 37]

ａ．中国産磁器（41 ～ 43）

青花碗（41・42）

41　口縁部の細片で，碗もしくは皿と考えられる。胎土は黄白色で陶器質である。　州窯系で，生産年代は 16 世紀末から 17 世紀初頭である。青花編年のＢ群にあたる。

42　見込みに花卉文が描かれた碗の底部で，漆継ぎの痕跡が残る。景徳鎮産で，生産年代は 16 世紀末から 17 世紀前半である。青花編年の亜Ａ群にあたる。

白磁皿（43）

端反りの皿で，高台内には呉須で「日」と思われる銘が記されている。景徳鎮産で，生産年代は 16 世紀である。

ｂ．瀬戸・美濃産陶器

碗（44）

天目碗で生産年代は 17 世紀前半である。

皿（45）

灰釉の内禿皿の底部で，生産年代は16世紀後半である。藤澤良祐氏の瀬戸・美濃編年の大窯第Ⅲ期にあたる。5)

ｃ．備前産焼き締め陶器

小壷（47）

内面にはロクロ成形痕が強く残る。外面は布ナデが施される。底部は回転糸きり底であるが，ナデられてほとんどその痕跡を残していない。生産年代は不明である。

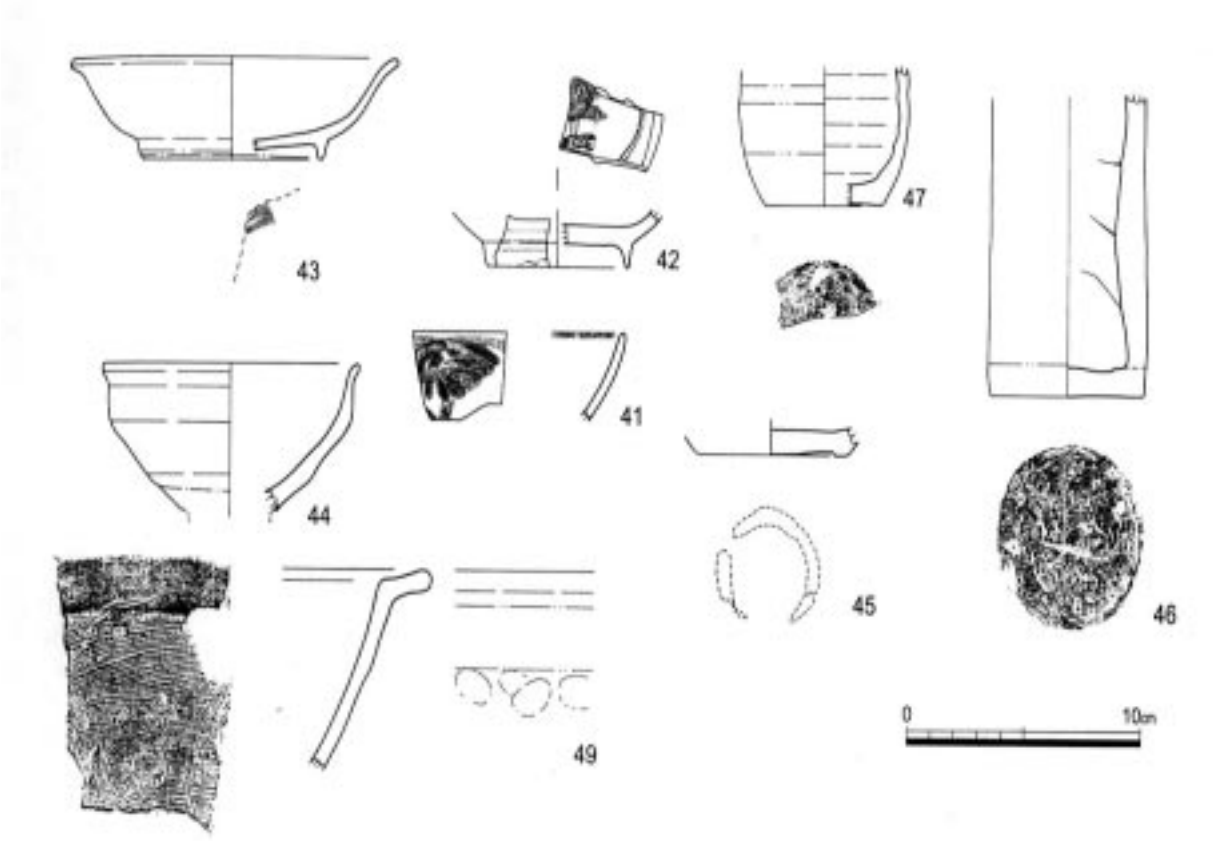
壷（48）

内面にロクロ成形痕が強く残る壷の細片である。生産年代は不明である。

d．産地不明焼き締め陶器

瓶（46 4 6）

丸く水平な底部からほぼ垂直に体部が延びる瓶である。生産年代は不明であるが，近世と思われる。



第 31 図　ＳＶ８出土遺物実測図（1）（Ｓ＝１：3）

e．土師質土器

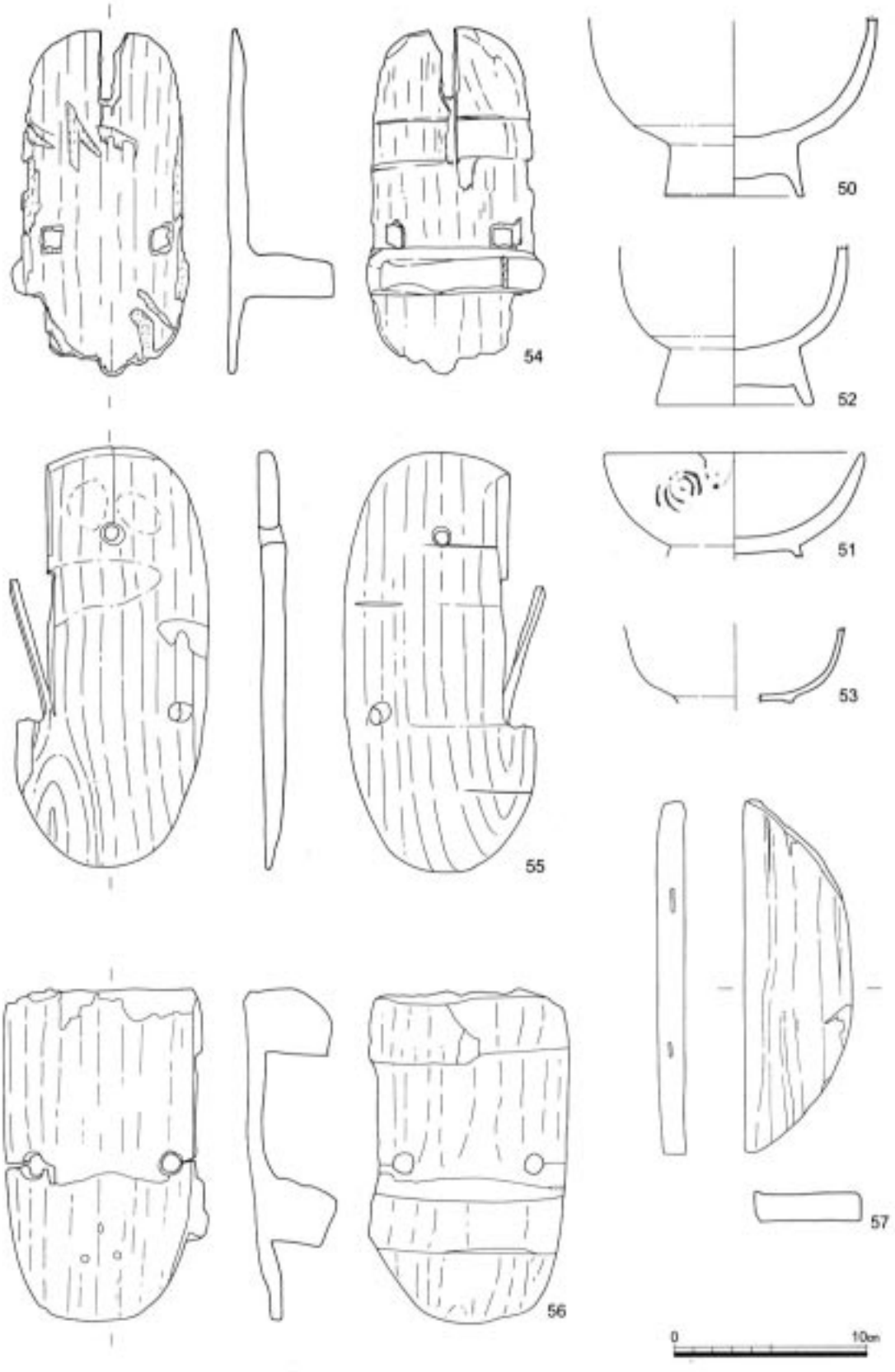
土鍋（49）

やや深めの土鍋の口縁部である。表面に煤が付着する。口縁は斜め上方に屈曲し，やや肥厚して終息する。口縁端面は丸みを帯びる。内面には刷毛目が，外面には指頭圧痕が残る。6）

f．漆器

椀（50 ～ 53）

50　口径は大きく，器高は高く腰部の張り出しが強い。高台は高いが，高台内の削りは浅く，中央部がやや盛り上がる。外面及び高台内の上塗色は，赤である。内面の漆の遺存状況は悪く，漆が塗られていなかった可能性がある。その場合，整形時の乾燥が不十分で仕上がりが悪くなったことあるいは未成品であったことが考えられる。7）


50
52
54
51
53
55
57
56
0
10cm

第32図　ＳＶ８出土遺物実測図（2）（Ｓ＝1：3）

51　器高が低く，低い高台を持つ。器壁は厚い。上塗色は内外面，高台内とも赤である。外面には菊の文様が描かれる。内面は被熱し，こげている。

52　50と同様，口径は大きく，器高は高く腰部の張り出しが強い。高台内は平滑に削られる。上塗色は内外面，高台内とも赤である。

53　器高が低く，低い高台を持つ。器壁は薄い。上塗色は内外面，高台内とも赤である。

ｇ．木製品

下駄（54 ～ 56）

54　連歯下駄で平面形は小判形である。長さ17.4cmで，その大きさから小児用と考えられる。材質は杉科である。

55　連歯下駄で平面形は小判形である。歯は，前後とも磨耗しほとんど残っていない。指が当たる部分は磨耗している。

56　連歯下駄で平面形は長方形である。上面のかかとがあたる部分には，長径2.5 ～ 4mmの　浅い円形の窪みが品字形に彫り込まれている。

蓋（57）

半分のみ残存する。割口に穴が存在する。

箸（58 ～ 82）

25本中，完形品は7本のみである。

ＳＶ９[第33・34図，図版14]

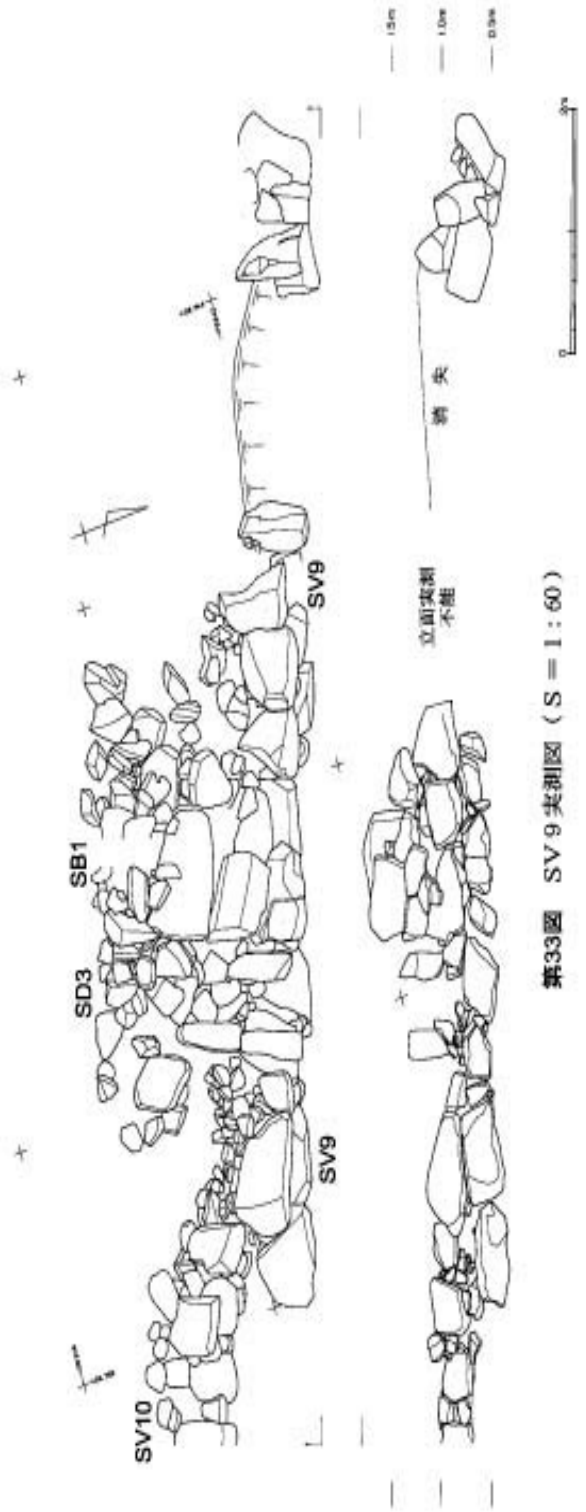
Ｘ－１～１間，ＳＶ２の想定線より約3.0ｍ北に位置する。ＳＢ１東面を挟んで概ね東西に延び，北に面を向ける。東にはＳＶ10が接する。本遺構の中央部にはＳＢ１，ＳＤ３が重複しており，本遺構が両者に先行する。

上部は攪乱により消失しているものと思われ，築石は最大で２段遺存する。また，中央部は攪乱によって消失している。ＳＢ１東面から西へはＳＢ１の内部，東面から西へ6.6ｍの地点まで，東へはＳＢ１東面からＳＶ10まで確認した。遺存部の東西両端からさらに連続していたかは，確認できなかった。なお，ＳＶ10は，本遺構の東端から約0.6ｍ南の地点から派生する。

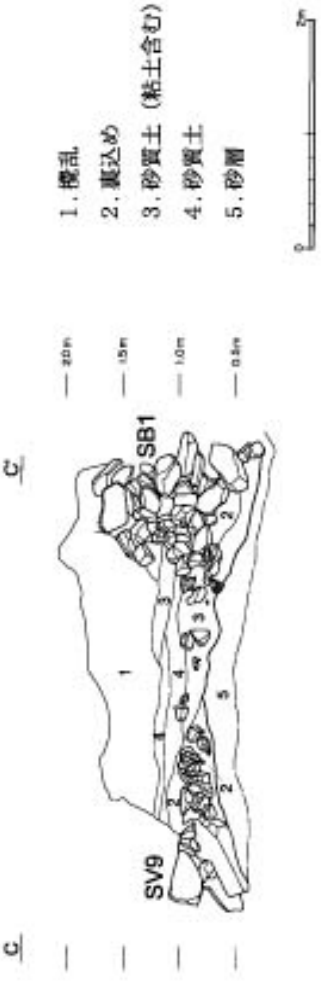
長さは約10.0ｍ，高さは約0.8ｍである。軸方向は南東一北西である。築石上端の標高は+1.26ｍ，下端の標高は+0.38ｍである。断ち割り断面Ｃにおいて確認した裏込めの幅は，約0.8ｍである。

根石は，自然堆積した砂層の上に直接据えている。築石は主に自然石が使用され，東半部はやや大型のものを使用する。墨書及び刻印は確認できなかった。裏込め石は10 ～ 30cm大

で，いずれも密に詰められている。



第33図　SV９実測図（S＝1：60）



第34図　SV９，SB１間断面実測図（S＝1：60）

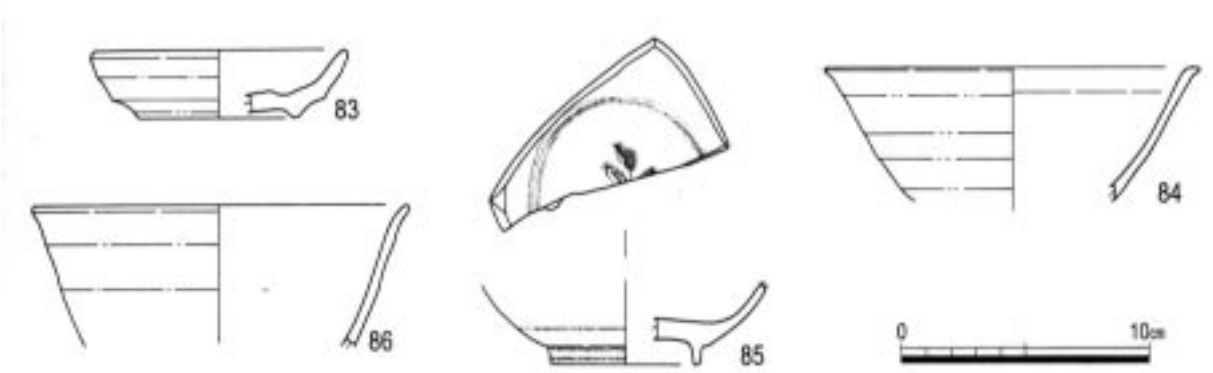
遺物は確認できなかったため，本遺構の時期，性格は不明である。

ＳＶ10[第29図，図版14]

Ｘ１～３間，ＳＶ２の想定線より約2.4ｍ北に位置する。積み面を北に向け概ね東西方向に延びる。西にはＳＶ９が位置し，本遺構の西端部より0.6ｍ北の地点でＳＶ９が派生する。また，ＳＶ２の掘り方は本遺構の裏込めを掘り込んでいるため，本遺構はＳＶ１に先行する。

上部は攪乱により消失しているものと思われ，築石は最大で３段しか遺存しない。西へはＳＶ９の東端付近まで，東へはＸ３付近まで確認した。遺存部の東西両端からさらに連続していたかは確認できなかった。

長さは約18.6ｍ，高さは最大で0.7ｍである。築石上端の標高は+1.40ｍ，下端の標高は



第35図　ＳＶ10出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

築石は自然石が使用されている。墨書・刻印は確認できなかった。石垣の積み方は打込接の布積みである。断ち割り断面において確認した裏込めの幅は，1.2ｍである。裏込め石は10～30cm大で，密に詰められている。

遺物は，石垣前土層から瀬戸・美濃産陶器（83）が，石垣下から中国産磁器（84・85），産地不明陶器（86）が出土した。遺物の生産年代から，本遺構の時期は，16世紀末から17世紀前半と考えられる。遺構の性格は不明である。

出土遺物[第35図，図版38]

ａ．中国産磁器

白磁碗（84）

口縁端部は外側に水平につままれ，断面三角形を呈し，水平な上端面を持つ。生産年代は12～13世紀である。

青花碗（85）

見込みに花と思われる文様が描かれた饅頭心タイプの碗である。景徳鎮産で，生産年代は16世紀末から17世紀前半である。青花編年のＡ群にあたる。

ｂ．瀬戸・美濃産陶器

皿（83）

灰釉の内禿皿である。見込は釉剥ぎされ，炭化物が付着する。高台内には焼成時の煤の痕跡がある。藤澤良祐氏の瀬戸・美濃編年の大窯Ⅲ期にあたる。生産年代は１６～１７世紀である。

ｃ.産地不明陶器

碗（86）

薄黄白色の精緻な胎土をもつ端反りの碗である。生産地は，朝鮮・肥前内野山の何れかと考えられる。生産年代は，朝鮮産の場合は16世紀，肥前内野山産の場合は，17世紀前半である。

櫓台跡

ＳＢ１[第36～39図，図版15・16]

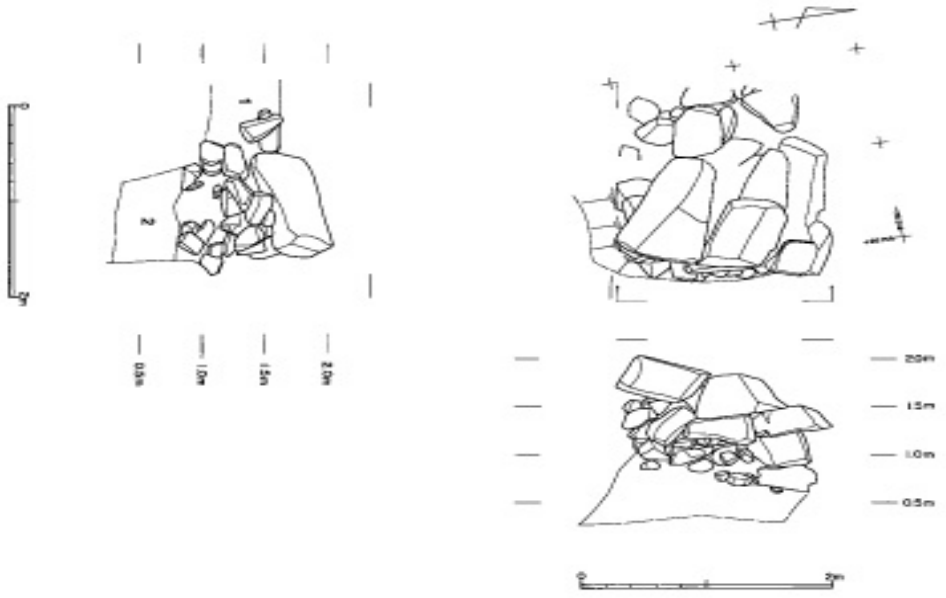
Ｘ－２～１間に位置する。「一丁目口御門」の西に位置する櫓台である。平面形は方形で，周囲四面は石垣で構築されていたと考えられる。上部には単層の櫓(平櫓)が構築されていたと考えられる。

上部は攪乱により消失しており，基底部のみ遺存する。遺存状態は悪く，遺存していたのは西面及び東面の一部のみである。西面の築石は最大で４段，東面の築石は最大２段遺存する。角部は４か所全て攪乱により消失している。また，南面及び北面は確認できなかったが，南面は裏込めが遺存しており，断ち割り断面Ｃにおいて幅2.3ｍ程度，遺存する西面南端部から平面上において幅5.3ｍ程度確認した。

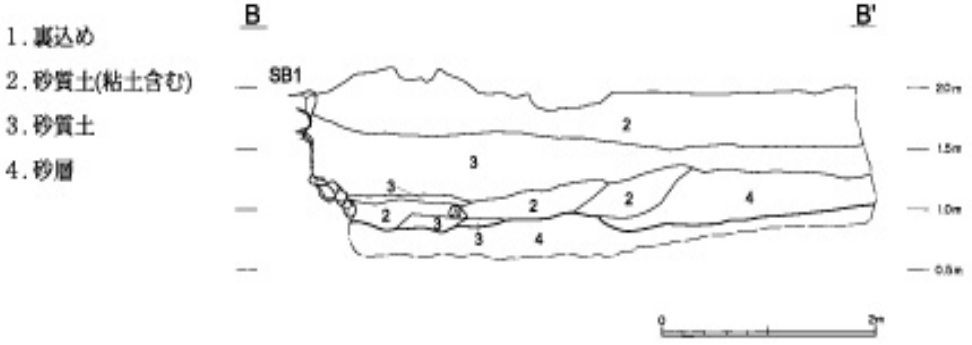
遺存部から推定される東西方向の幅は約15.4ｍである。東面の遺存長は1.7ｍ，築石上端の標高が＋2.02ｍ，下端が＋0.62ｍである。西面の遺存長は3.6ｍ，築石上端の標高が＋1.88ｍ，下端が＋0.96ｍである。石垣の最大傾斜角度は西面が78°，東面は84°である。

根石は，基底部に礫を敷いた上に据えられている。築石は，大型の自然石を中心に割り石も使用されている。築石に墨書・刻印は確認できなかった。石垣の積み方は，東西両面とも打込接であるが，遺存状況が悪く布積みか乱積みかは確認できなかった。

断ち割り断面において確認した裏込めの幅は，東断面が0.5ｍ，両断面が1.5ｍで，櫓台中央部は裏込めは存在しない。



第 36 図　ＳＢ１東面実測図（Ｓ＝１：60）



第 37 図　ＳＢ１西面断面実測図（1）（Ｓ＝１：60）

第 38 図　ＳＢ１西面実測図（Ｓ＝１：60）

第 39 図　ＳＢ１西面断面実測図（2）（Ｓ＝１：60）

本遺構では遺物は確認できなかったため、遺構の時期は不明であるが，ＳＶ９構築後に築かれたと考えられる。

ＳＢ２[第40・41図，図版17～21]

Ｘ13～16間に位置する。「一丁目口御門」西側の櫓台で，平面形は東西方向に長辺をとる長方形で，周囲四面は石垣で構築されている。本遺構はＳＢ３と共に櫓門を形成し，上部には渡櫓が構築されていたと考えられる。南東にはＳＶ６が近接する。本遺構とＳＶ６との距離は0.7～0.8ｍで、ＳＢ３とＳＶ７のそれと比較すると倍以上隙間があいており，そこには幅0.6ｍ程度の石材が詰められている。西面にはＳＶ２が接合すると考えられたが，現状では確認できなかった。ＳＶ２の遺存部から，南面はＳＶ２よりもわずかに南に位置すると考えられる。また，本遺構とＳＶ８重複しており，東面はＳＶ８上に築かれている。

上部は攪乱により消失しており，基底部のみ遺存する。北西角部，南西角部，南面，西面，東面の一部も攪乱により消失している。築石の遺存状態は，北面が平均１段，南面が平均２段である。遺存部から推定される平面規模は，東西17.6ｍ，南北11.6ｍである。南面は，築石上端の標高が＋1.24ｍ，下端が－0.3ｍである。西面は築石上端の標高が＋1.59ｍ，下端が＋0.72ｍである。東面は，北側の築石上端の標高が＋1.96ｍ，下端が＋1.18ｍで，南側の築石上端の標高が＋1.36ｍ，下端が＋0.14ｍである。北面は，築石上端の標高が＋1.96ｍ，下端が＋1.06ｍである。軸方向は北面Ｎ107°Ｅ，南面Ｎ17°Ｅ，東面Ｎ17°Ｅ，西面Ｎ17°Ｅであり，石垣の最大傾斜角度は北面70°，南面90°，東面不明，西面80°である。

南面では，小型の礫を敷き，その上に根石が据えられている。北面，東面，西面では，築石は直接自然堆積した砂層の上に据えられている。

南東名部，南西角部の積み方は，築石の長辺と短辺を交互に直交させて積むいわゆる「算木積み」である。角部の築石の形状は直方体で，矢穴を伴う切り石で，南東名部の根石には鑿による表面加工も見られた。角部以外の築石は，立方体に近い石が大半で，一部に直方体の石も見られる。積み方は打込接の布積みである。築石に刻印は確認できなかった。墨書は，南面東端部の根石で「　」，「　」を，南面遺存部西端の根石で「　」を確認した。

東面の南端では木杭を確認した。規模は，直径4.5cm，長さ65cmである。

断ち割り断面における裏込めの幅は，北面が0.6ｍ，西面が0.5ｍである。南面は攪乱のため裏込めが消失している。東側は断ち割っていない。櫓台中央部は裏込めがなく，黒灰色粘質土層と灰褐色粘質土層が広がっている。裏込め石は10～30cm大で，いずれも密に詰められている。

本遺構では遺物の確認を行うことはできなかった。そのため，遺構の時期は不明である。

ＳＢ３[第42・43図，図版22～26]

Ｘ16～19間に位置する。「一丁目口御門」東側の櫓台で，平面形は東西方向に長辺をとる長方形で，東面を除く周囲三面は石垣で構築されている。本遺構はＳＢ２と共に櫓門を形成し，上部に渡櫓が構築されていたと考えられる。南西にはＳＶ７石垣が近接する。本遺構とＳＶ７との距離は約0.50ｍで，ＳＢ２とＳＶ６のそれよりも短く，隙間には小型の角礫が詰められている。東面にはＳＶ３が直交し，本遺構はＳＶ３よりも約0.5ｍ堀内に突出する。本遺構はＳＶ８と重複しており，西面はＳＶ８上に築かれている。

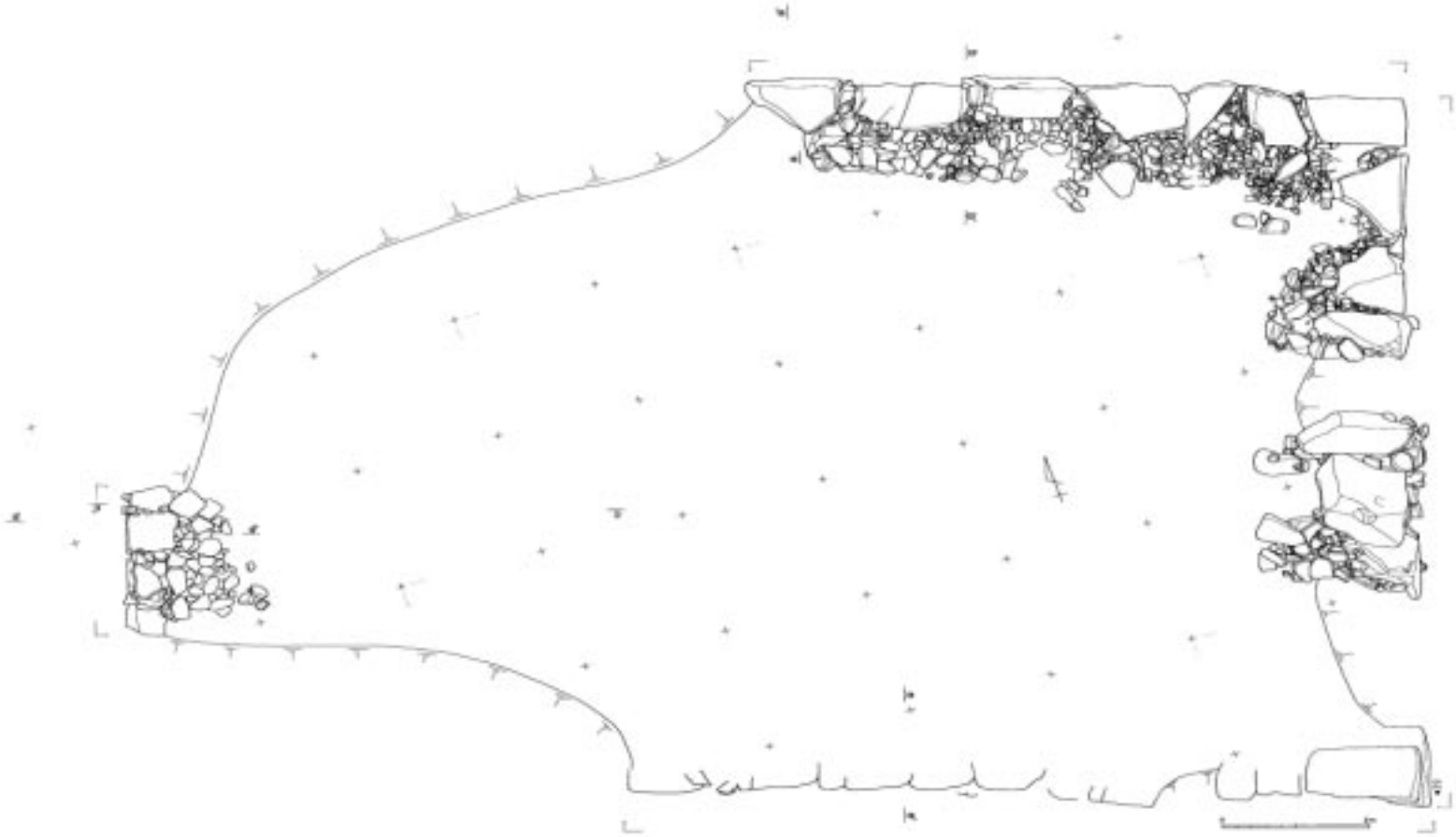
上部は攪乱により消失しており，基底部のみ遺存し，北面では１段，南面では３～４段遺存する。北西角，北面の一部，西面の大部分は攪乱により消失している。東面は南端部，すなわち角部に相当する範囲しか確認できなかった。その北側も，築石を確認することができず，さらに北面において北東角部も確認できず，北面が東へ延長していたことから，南東角部を除いた東面及び北東角部は構築されていなかった可能性がある。

遺存部から推定される平面規模は，東西15.8ｍ，南北12.4ｍである。南面は，築石上端の標高が＋1.70ｍ，下端が－0.40ｍである。西面は，北側の築石上端の標高が＋1.96ｍ，下端が＋0.66ｍで，南側の築石上端の標高が＋1.66ｍ，下端が－0.30ｍである。東面は，築石上端の標高が＋1.66ｍ，下端が－0.46ｍである。北面は，築石上端の標高が＋1.58ｍ，下端が＋0.80ｍである。軸方向は北面Ｎ107°Ｅ，南面Ｎ107°Ｅ，東面Ｎ17°Ｅ，西面Ｎ17°Ｅであり，石垣の最大傾斜角度は北面85°，南面75°，東面不明，西面84°である。

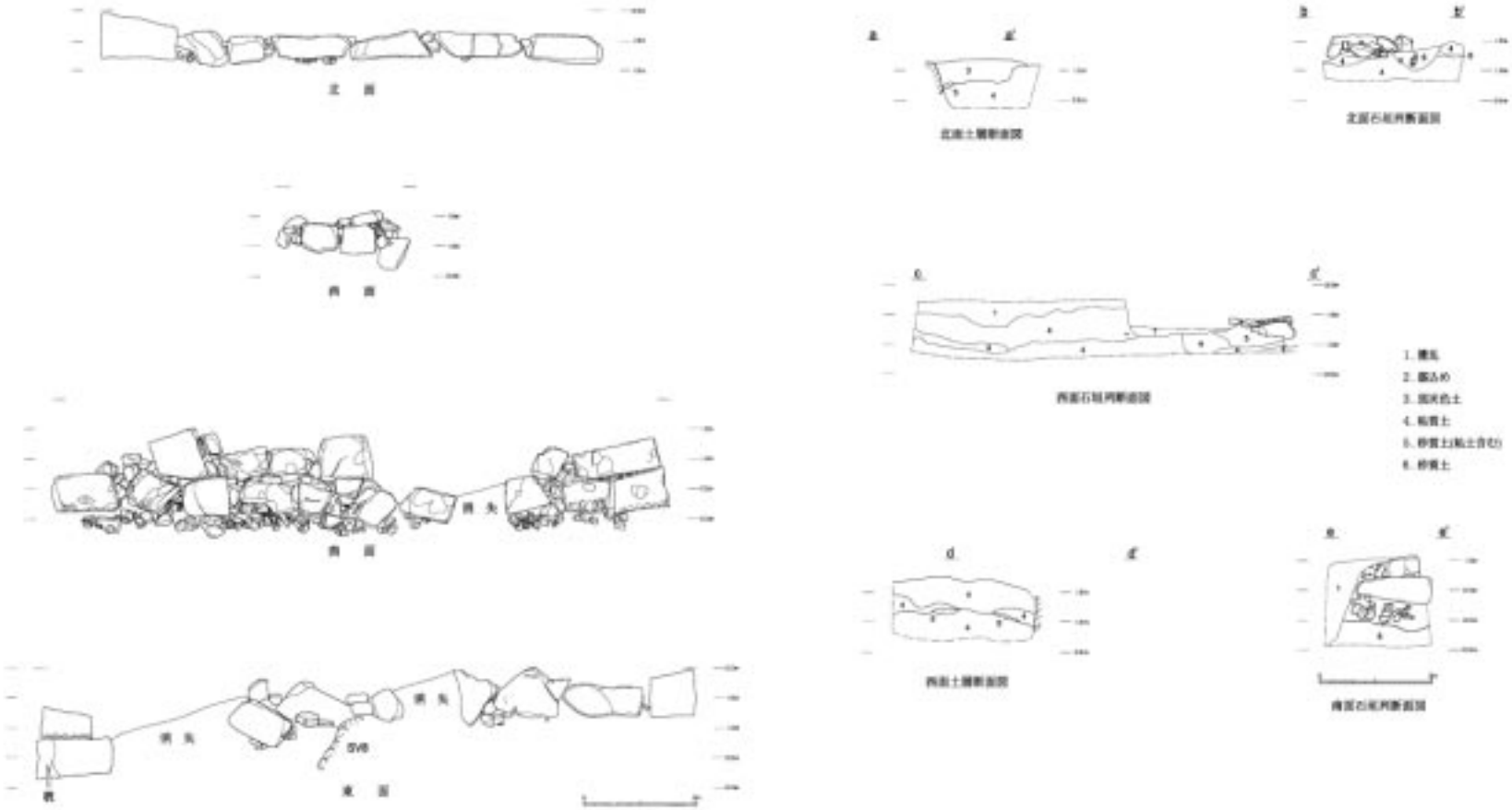
北面を除き，南面，東面，西面では，小型の礫を敷き，その上に根石が据えられている。北面は，直接地盤の上に築石が据えられている。

南東角部，南西角部の積み方は，築石の長辺と短辺を交互に直交させて積むいわゆる「算木積み」である。２か所とも１段目の築石は南北方向に長辺を向け，２段目が東西方向に長辺を向ける。角部の築石は，直方体で矢穴を伴う切り石である。南東部の根石及び２段目の築石には鑿による表面加工も見られた。角部以外の築石は，角部と比べて立方体に近い石が大半であるが，直方体の石も見られる。積み方は打込接の布積みである。築石の刻印は，南東角の根石南面において「　」を確認した。根石の墨書は，東南角根石の東面において「源（？）八」「　」を，その北側の根石において「　」「　」の墨書を確認した。東面の両端で木杭を確認した。規模は，直径5.5ｍ，長さ78cmである。東面の両端で木杭を確認した。規模は，直径5.5ｍ，長さ78cmである。

断ち割り断面ｃにおける西面の裏込めの幅は，3.6ｍである。北面及び南面は攪乱のため，端部まで確認できなかった。裏込め石は10～30cmで，いずれも密に詰められている。櫓台中央部は裏込めがなく，黒灰色粘質土層が広がっている。

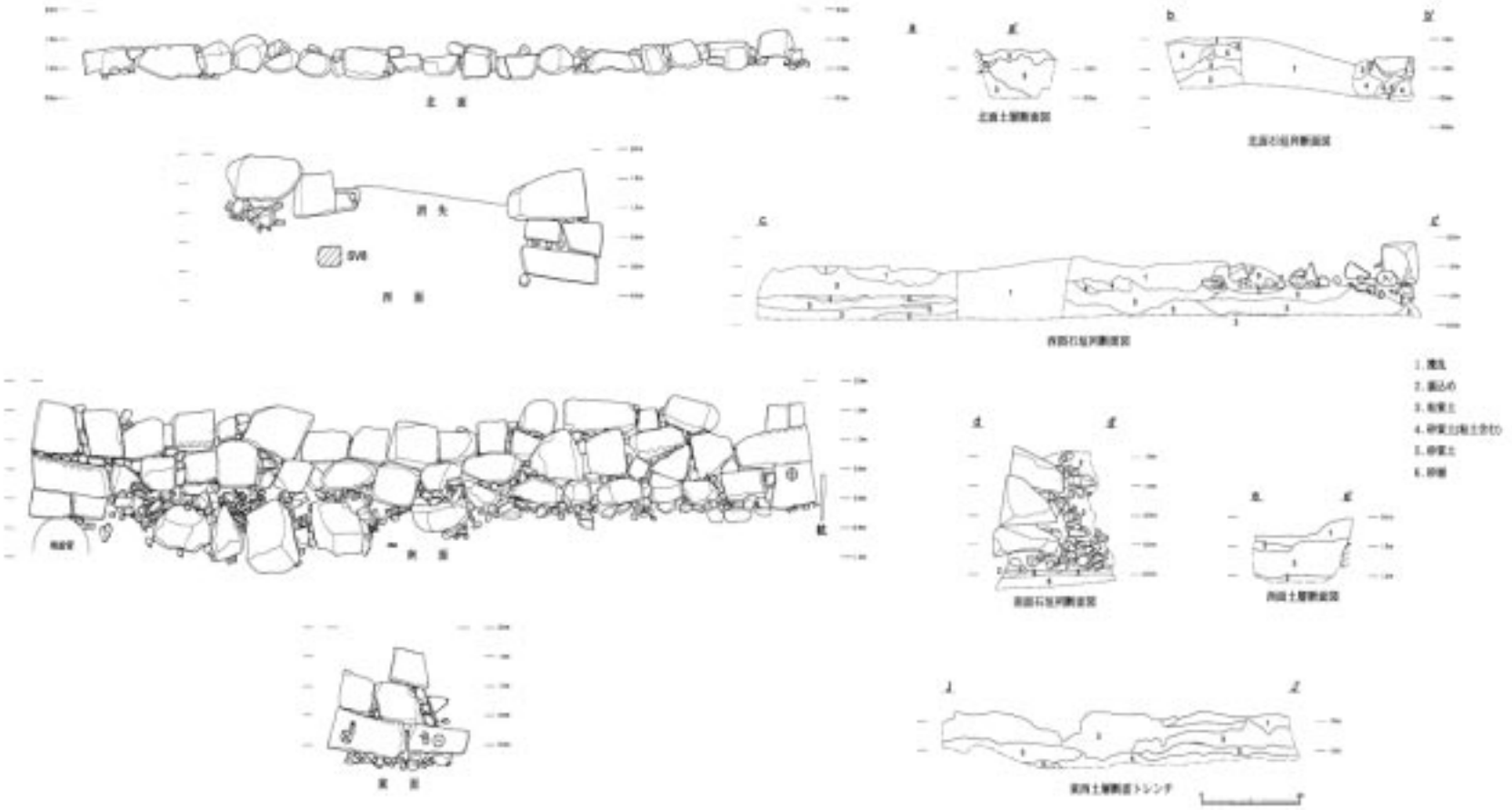


第40図　SB２平面実測図（S＝1:60）



第41図 SB2 立面図、断面実測図（S＝1：60）

第42図　SB３平面実測図（S＝1:60）



第43図 SB3 立面図、断面実測図（S＝1：60）

遺物は，南面石垣から肥前産陶器（87）が，北面石垣下から中国産磁器（88・89）が，北面石垣薬石間からは中国産磁器（90），肥前産磁器（91），堺産焼き締め陶器（92）が，北面石垣上部からは肥前産磁器（93）が出土Lた。

出土遺物[第44図，図版38]

ａ．中国産磁器（88 ～ 90）

青花碗（88・90）

88　見込が蛇の目釉剥ぎされた饅頭心の碗で，素地に煤が付着しており，灯明皿に転用された可能性がある。高台内には墨書で「一」と記されている。胎土は黄白色で陶器質に近く，釉調は白濁している。　州窯系で，生産年代は16世紀末から17世紀初頭である。青花編年のＢ群にあたる。

90　福建か広東産で，生産年代は17世紀末から18世紀前半である。

皿（89）

底部から体部の破片で，見込に露胎部分があり，蛇の目釉剥ぎされたものと考えられる。外面には梵字あるいは種字が描かれている。福建か広東産で，生産年代は18世紀と考えられる。

染付碗（90）

ｂ．肥前産陶器

皿（87）

高台内に砂目が残る灰釉の折縁皿である。内外面とも釉のかかりが雑で，見込には無釉部分がある。鉄釉で見込に植物の葉が描かれているが，全体的ににじんでいる。また，釉の滴が落ちたまま焼成されている。生産年代は1600年～ 1630年頃である。

ｃ．肥前産磁器

染付碗（91）

外面に輪宝文が描かれている。生産年代は１８世紀後半である。

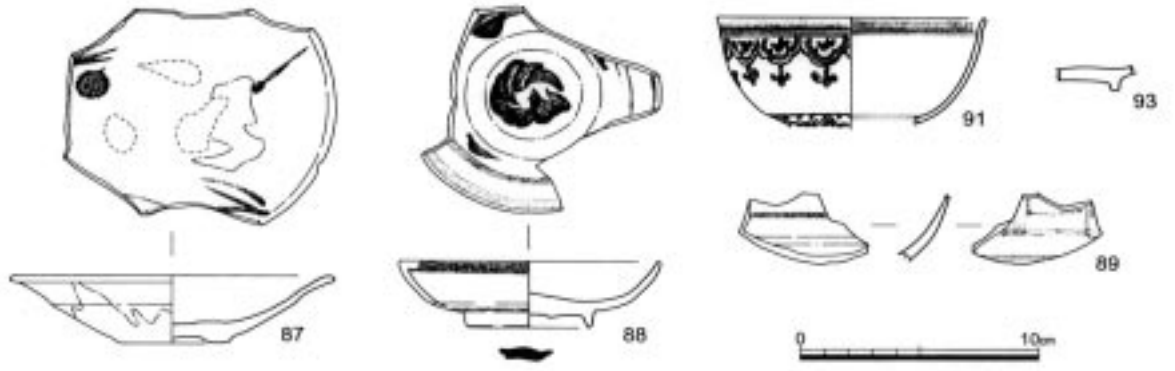
白磁皿（93）

生産年代は19世紀初頭から幕末にかけてのものである。

ｄ．堺産焼き締め陶器

擂り鉢（92）

生産年代は19世紀である。



第44図　ＳＢ３出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

外堀

ＳＤ１[第46図，図版27・28]

概ね東西方向に延びる南辺外堀のうち，土橋ＳＸ１以西の部分である。面的には確認していないが，３か所で土層確認を行った。堀は，自然堆積層と考えられる灰白色砂層を掘り込んで形成されており，底部には暗黒青色の粘性を持つ沈澱土が厚く堆積している。

断ち割り断面Ａを設定したのは，Ｘ－５～－４間である。断ち割り断面ＥはＸ１～２間，断ち割り断面ＧはＸ９～10間であり断面図は両者を合成したものである。断ち割り断面ＨはＸ14～15間でＳＢ２南岸と接合する。

Ａ断面における堀底上端の標高は＋1.16ｍ，下端は－0.90ｍである。また，Ｇ断面における堀底上端の標高は＋0.78ｍ，下端は－0.90ｍである。堀の断面形状は中央に最深部を持つレンズ状である。堀幅は17.6～18.1ｍである。

なお，Ａ断面では，ＳＶ４北側で構築時の掘り方を確認した。

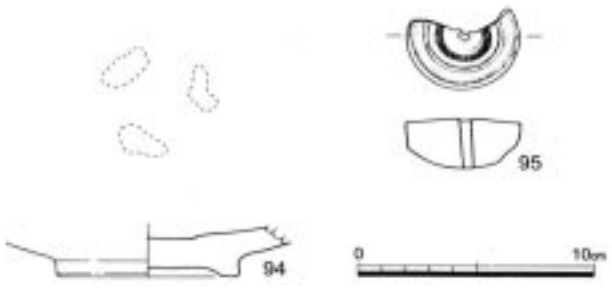
遺物は，Ｘ－５～－４間の堀底から肥前産陶器皿（94）が出土した。また，堀内沈澱土からは大量の陶磁器，木製品等が出土したが，本稿では独楽（95）を報告する。

出土遺物［第45図，図版38］

ａ．肥前産陶器

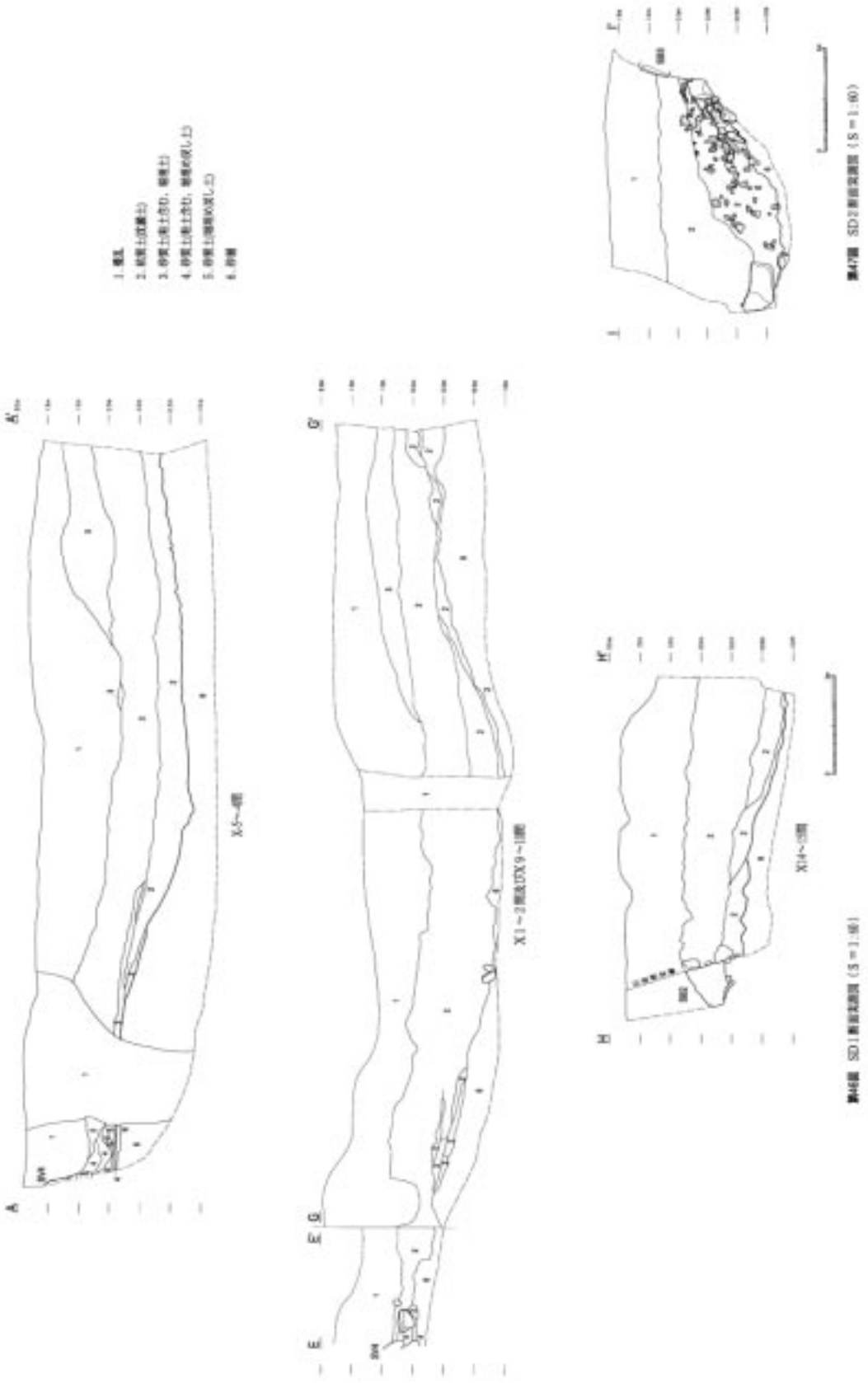
皿（94）

見込みに三か所砂目が残る皿で，生産年代は1600年から1630年である。浅く削られた高台内には墨書で花押が記され



ている。

第45図　ＳＤ１出土遺物実測図（S＝1：3）



ｂ．木製品

独楽（95）

胴部は円筒形で下部へ向かうに連れて先端部が円錐形になる。中心には芯棒を通す四角の穴が穿たれており，心材が残存する。

ＳＤ２[第47図，図版29]

概ね東西方向に延びる南辺外堀のうち,「一丁目口御門土橋」ＳＸ１と「研屋町口御門」ＳＸ２に区画された部分である。面的には確認Ｌていないが，土層確認を行った。堀は，自然堆積層と考えられる灰白色砂層を掘り込んで形成されており,底部には暗黒青色の粘性を持つ沈澱土が厚く堆積している。

断ち割り断面Ｉを設定したのは，Ｘ17～18間である。Ｉ断面における堀底上端の標高は＋0.85ｍ，下端は－1.25ｍである。堀の断面形状は中央に最深部を持つレンズ状である。堀幅は16.9～17.6ｍである。

遺物は，沈澱土からは多量の陶磁器が出上したが，掘り方など遺構に伴う遺物は確認できなかった。

暗渠

ＳＤ３[第48図，図版29]

Ｘ０～１間，ＳＢ１東面沿いに位置する石組みの暗渠である。本遺構はＳＶ９上に築かれており，ＳＢ１に近接する。これらの先後関係はＳＶ９→ＳＢ１→ＳＤ３である。

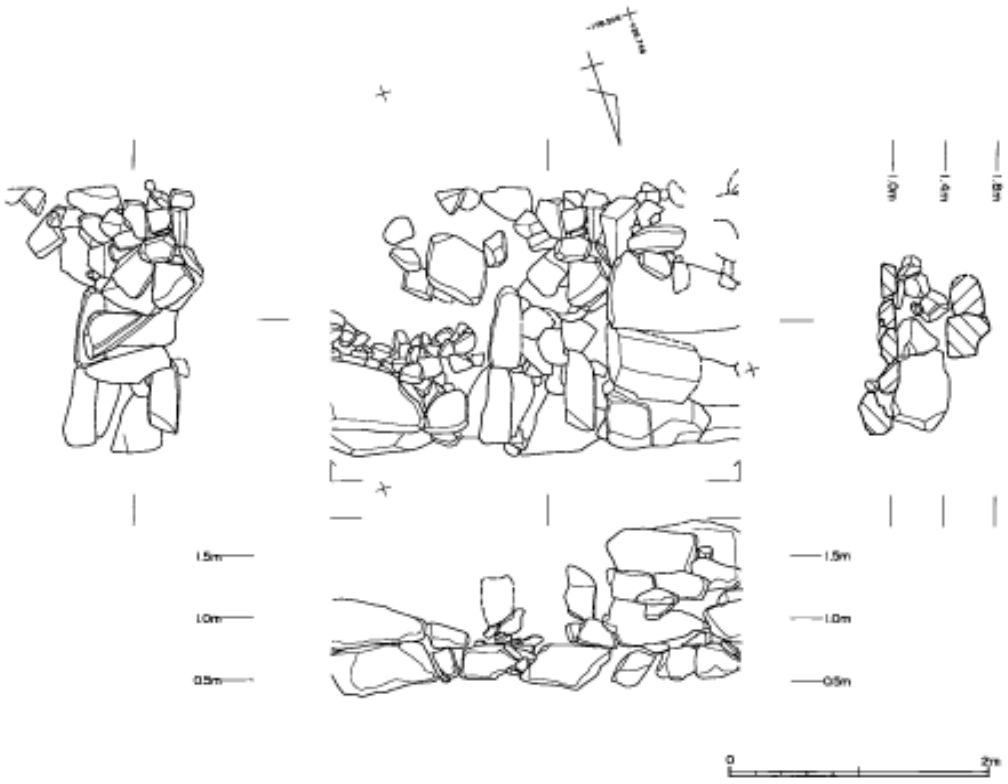
南側は攪乱により消失しているが，ＳＶ２推定線に近接することからさらに延びていたと考えられる。北への延長は確認できなかったが，北端の石材がＳＶ９の築石にそろえて据えられているため，ここで終息していた可能性もある。

長さは約2.1ｍ，幅は0.9ｍ，深さは0.6ｍである。蓋石上端の標高は＋1.65ｍ，底面の標高は＋1.04ｍである。軸方向は南西一北東である。

本遺構の構造は，底面となる石材を据え，それに並行して側壁となる石材を１段積み，さらに蓋石が乗せられている。石材は矢穴を伴わない割り石と思われる。墨書及び刻印は，確認できなかった。

暗渠内には水性の沈澱土は確認できず，砂質土が充満していた。そのため，実際に暗渠として機能していたかは確認できなかった。

遺物は，暗渠石材間から肥前系磁器（96）が出土した。



第 48 図　ＳＤ３実測図（Ｓ＝1：60）

出土遺物[第 49 図，図版 38]

肥前系磁器

白磁(96)

細片で器種は不明である。中国地方窯で生産された可能性が高く，生産年代は 19 世紀である。

第 49 図　ＳＤ３出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

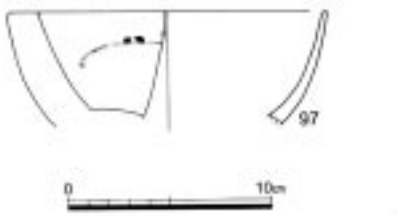
ＳＤ４[第 51 図，図版 30]

ＳＸ１の北部に位置する。本遺構は，底面，両壁面，蓋石の四面が石組みで築かれた暗渠である。ＳＸ１を概ね東西方向に貫き，ＳＶ６，ＳＶ７に開口部が存在したと考えられるが，ＳＶ７側は，確認できたが，ＳＶ６側は確認できなかった。

長さは約 3.8 ｍ，幅は 0.6 ～ 1.1 ｍ，深さは約 0.4 ｍである。蓋石上端の標高は＋ 1.40 ｍである。底面の標高は＋ 0.86 ｍで，傾斜はほぼ水平である。軸方向は北西一南東である。

石材は割石である。墨書及び刻印は，確認できなかった。本遺構は外堀ＳＤ１とＳＤ２の通水に使用されていたと考えられる。

遺物は,暗渠内土層から肥前産磁器（97）が出土した。



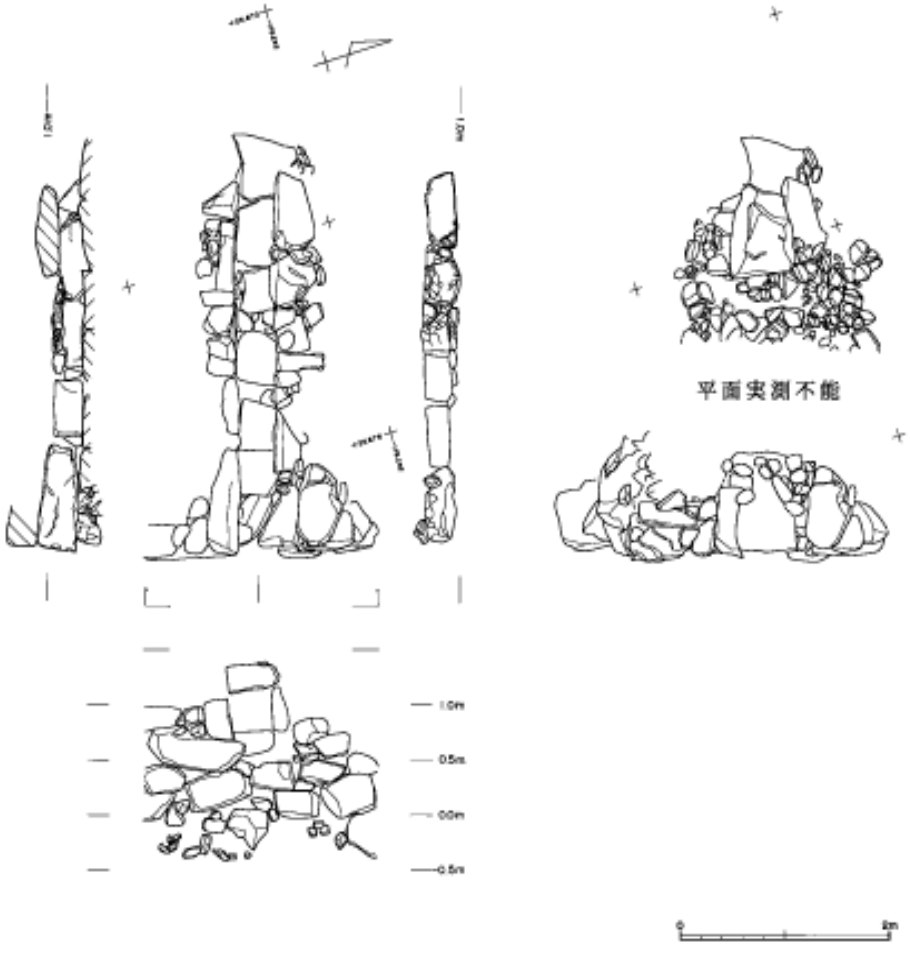
出土遺物[第50図，図版38]　　**第50図**　ＳＤ４出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

肥前産磁器

染付碗（97）

外面に蔓草と思われる文様が描かれている。

生産年代は18世紀である。



第51図　ＳＤ４実測図（Ｓ＝1：60）

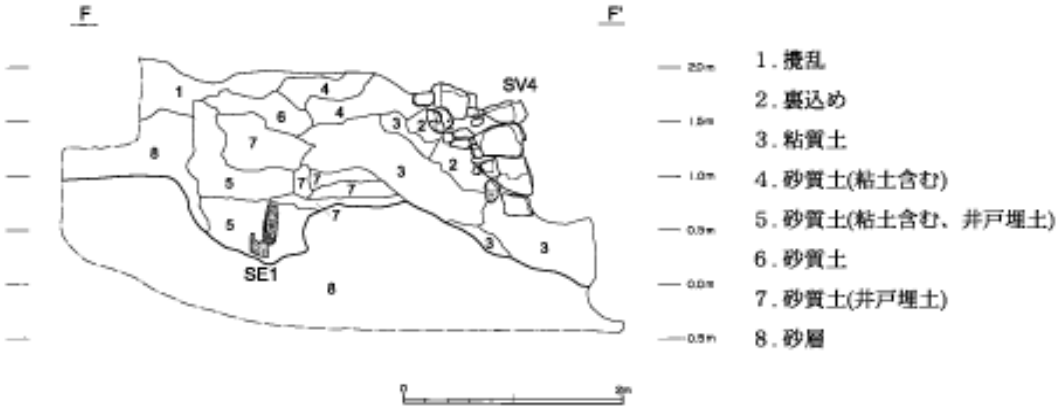
井戸

ＳＥ１[第52図]

Ｘ３～４に位置する。ＳＶ４からは2.4ｍ南に位置する。円形の井側を有する井戸で，ＳＶ４を断ち割った際に確認した。なお，井側は調査中に崩壊したため，平面的な確認及び井側の形状の確認は行えず掘り方の断面のみ確認した。掘り方上部はＳＶ４によって切られているため，本遺構はＳＶ４に先行すると考えられる。

井側は１段分が遺存する。井側の形状は円筒形で，21枚の板材を箍で締めて作られている。井側上端面の径は推定で0.6ｍ，高さは約0.9ｍである。掘り方上端の標高は＋1.05ｍ，下端の標高は＋0.19ｍである。井側の材質は杉科である。

井側内には土砂が充満していた。井側内の埋土から肥前産陶器（98），肥前産磁器（99･100）



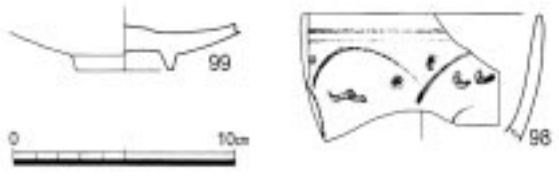
第52図　ＳＥ１断面実測図（Ｓ＝1：60）

出土遺物[第５３図，図版３９]

ａ．肥前産陶器

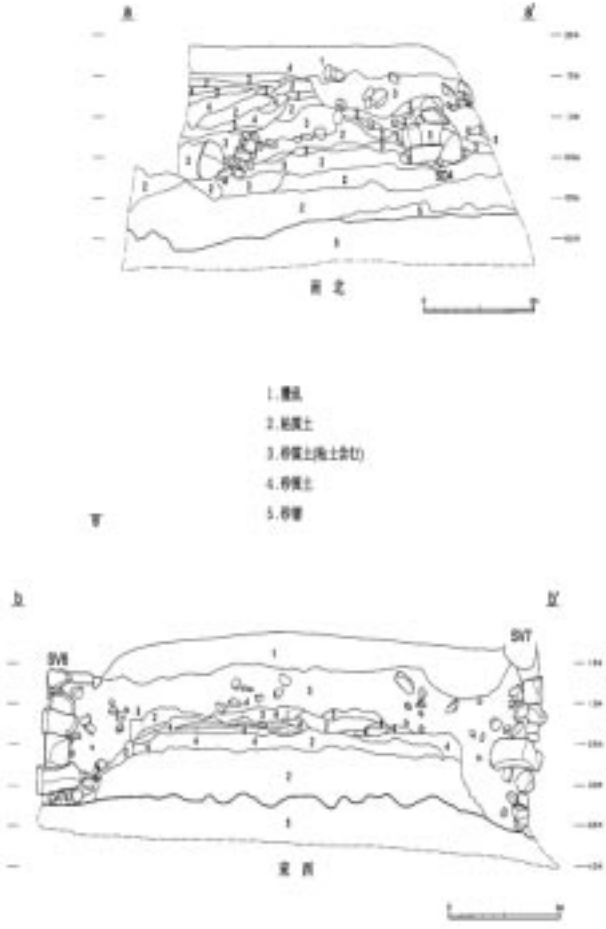
碗（98）

陶胎染付の碗で，外面に唐草が描かれている。生産年代は18世紀前半である。



ｂ．肥前産磁器

第54図　SX１実測図（S＝1:60）



第55図　SX１断面実測図（S＝1:60）

見込みは蛇の目釉剥ぎされる。生産年代は17世紀中葉から末頃である。

染付皿（100）

染付皿で，生産年代は17世紀末～18世紀前半である。

土橋

ＳＸ１[第54・55図，図版31]

Ｘ15～17間に位置する。外堀に架けられ，「一丁目口御門」と城外を結ぶ土橋である。東西には護岸石垣ＳＶ６，ＳＶ７を伴う。北側遺存部には暗渠ＳＤ４が築かれている。平面的には確認できなかったが，東西方向に断ち割って土層断面を観察した。

ＳＶ６，ＳＶ７の位置関係から推測される土橋基底部の幅は8.70ｍである。南側は埋設管により消失しているため全長は不明であるが，ＳＶ４，ＳＶ５の位置関係から推定される長さは約18.0ｍである。

注

１．陶磁器の生産地，生産年代については佐賀県教育庁文化財課大橋康二氏にご教示をいただいた。

２．胴木は，広島城発掘調査では昭和44（1969）年の内堀石垣整備工事に伴い，裏御門南側から発見されたのを初めとして，これまで２例が報告されているが，外堀では初めての発見である。

広島市教育委員会「史跡広島城跡保存修理工事報告書・広島市の文化財第２集」1971年

３．材質の同定については広島市植物公園世羅徹哉氏，宮本和弥氏にご教示をいただいた。

４．上田秀夫「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年の予察」『関西近世考古学研究Ⅰ』1991年

５．（財）瀬戸市埋蔵文化財センター編「瀬戸・美濃系大窯とその周辺から～大窯生産の成立と展開～』1997年

６．土師質土器については広島県立歴史博物館　鈴木康之氏にご教示をいただいた。

７．椀については，東京都豊島区遺跡調査会　中井さやか氏，東京都立大学山田昌久氏，明治大学記念館前遺跡調査団追川吉生氏にご教示をいただいた。

	遺構	位置	遺存長(cm)	最大幅(cm)	形態・調整
1	ＳＶ１	X-4～-3	64	3.2	先端部丁寧に削り
2	ＳＶ２	X13～14	55	3.5	断面四角形、先端粗仕上げ
3	ＳＶ２	X13～14	51	4.5	断面丸い。一方の先端のみ斜めに削り尖らせている。
4	ＳＶ２	X13～14	50.5	3.5	断面五角形。先端粗尖り
5	ＳＶ２	X13～14	21	2.0	破砕
6	ＳＶ２	X13～14	27	3.5	断面五角形。先端粗削り
7	ＳＶ２	X13～14	35	3.5	断面丸い。先端粗削り
8	ＳＶ２	X12～13	74	4.5	断面台形状。胴部長辺の部分は削っていない。両端は尖らしてある。
9	ＳＶ２	X12～13	44	3.5	先端丁寧に削り
10	ＳＶ２	X12～13	41.5	3.0	胴部を四角形に削る。一方の先端のみを削って尖らす
11	ＳＶ２	X12～13	29	3.0	両端は欠損
12	ＳＶ２	X12～13	50	4.0	断面五角形。先端欠損
13	ＳＶ２	X12～13	120	6.0	断面五角形。先端粗削り
14	ＳＶ２	X12～13	99	6.5	表面・先端粗削り。
15	ＳＶ２	X12～13	76	3.0	断面丸い。三方から削って尖らす
16	ＳＶ２	X12～13	71	4.5	断面丸い。先端粗削り
17	ＳＶ２	X12～13	71	3.0	断面丸い。先端粗削り
18	ＳＶ２	X12～13	136	6.0	断面五角形。先端粗削り
19	ＳＶ２	X11～12	77	3.5	断面三角形。先端粗削り
20	ＳＶ２	X11～12	102	4.0	断面丸い。先端粗削り
21	ＳＶ２	X11～12	120	7.0	断面丸い。先端断面四角形
22	ＳＶ３	X19～20	73	3.5	断面丸い。先端粗削り
23	ＳＶ３	X19～20	91	5.0	断面丸い。先端粗削り
24	ＳＶ３	X23～24	68	4.0	断面五角形と断面円形両端尖り
25	ＳＶ３	X24～25	33.5	3.5	断面丸い。先端粗削り
26	ＳＶ３	X24～25	33.5	5.0	断面丸い。両端欠損
27	ＳＶ３	X24～25	69	5.0	胴部を五角形に削る
28	ＳＶ４	X-1～０	81	7.0	胴部丸太のまま。先端粗尖り
29	ＳＶ４	X-1～０	80	8.0	先端粗削り
30	ＳＶ４	X-1～０	94	9.0	先端粗削り
31	ＳＶ４	Ｘ３～４	81	6.0	先端粗削り
32	ＳＶ４	Ｘ４～５	62	4.5	胴部を五角形に削る。先端粗削り
33	ＳＶ４	Ｘ４～５	50	4.5	先端粗削り
34	ＳＶ４	Ｘ４～５	68	5.0	先端丁寧に削り
35	ＳＶ４	Ｘ６～７	81	10.0	（丸太のまま）両端から削り尖らす
36	ＳＶ４	Ｘ６～７	49.5	4.0	先端丁寧に削り
37	ＳＶ４	Ｘ６～７	53	5.0	先端丁寧に削り
38	ＳＶ８	X14～15	120	6.5	表面加工あり
39	ＳＢ２	東南角	65	4.5	削りあり。詳細未詳
40	ＳＢ３	南東角	78	5.5	断面五角形。両端欠損

第２表　西調査区木杭計測表

第３表　西調査区　出土遺物観察表　陶磁器

第４表　西調査区出土遺物観察表　土師質土器

第５表　西調査区　出土遺物観察表　木製品－椀－

No.	出土場所	出土位置・層位	器種	口径	底径	器高	上塗色			文様	木取り	備考
							外面	内面	内			
50	ＳＶ８	石垣前 沈澱土	椀	－	(4.0)	－	赤	不明	赤		横	
51	ＳＶ８	石垣前 沈澱土	椀	(6.6)	－	－	赤	赤	赤	菊か	横	被熱し，こげている
52	ＳＶ８	石垣前 沈澱土	椀	－	(2.9)	－	赤	赤	赤		横	
53	ＳＶ８	石垣前 沈澱土	椀	－	(2.9)	－	赤	赤	赤		横	

第６表　西調査区　出土遺物観察表　木製品－下駄－

No.	出土場所	出土位置・層位	器種	長さ	幅	器高	平面形	前緒穴	横緒穴	特徴
54	ＳＶ８	西半部 沈澱土	連歯下駄	17.4	8.2	－	小判形	破損	ほぼ垂直に窄孔	
55	ＳＶ８	西半部 沈澱土	露地下駄	21.1	9.8	1.3	小判形	ほぼ垂直に窄孔	破損	
56	ＳＶ８	西半部 沈澱土	連歯下駄	(23.0)	10.2	4.4	長方形	－	ほぼ垂直に窄孔	

第７表　西調査区　出土遺物観察表　木製品－蓋－

第８表　西調査区　出土遺物観察表　木製品－箸－

Ⅳ 東 調 査 区

（1）概要

東調査区は広島市中区紙屋町一丁目1番地先に位置する。調査地点の現状は，中央に2本の路面電車軌道，その両脇に三車線の車道の通る幹線道路(県道広島海田線）であり，調査区は，軌道部，車道部，さらに歩道部まで及ぶ。調査区前の舗装面の平均標高は2.2ｍで遺構の上部は削平されていることが予想された。また，地下には，下水道，電話，電気などの埋設物が多数存在し，遺構に影響を及ぼしていることが予想された。

調査は工事の工程に合わせ，4段階で実施した。第1次・第2次調査では先行して掘削される杭の打設範囲を調査した。第3次調査では，道路面の舗装撤去・覆工板敷設に伴い掘削される標高約1.5ｍまでの遺構を調査した。本調査となる第4次調査では，覆工板下の標高約1.5ｍ以下の遺構を調査した。なお，第1～3次調査は全て夜間に，第4次調査は一部を除いて昼間に調査を実施した。

調査方法は，第1～3次調査では路上から重機で遺構面上端面を確認するまで掘削し，確認後は手掘りで行った。第4次調査では，覆工板下において南から北へ向かって堀内の堆積土を機械掘削し，石垣の積み面を確認した後に，手掘りで掘削した。遺構の測量は写真測量に拠ったが，一部手計りで行った。

調査区は，第1～3次調査では任意に区画し設定した。第4次調査では工事に伴って打設された杭を基準として設定した。

調査の結果，遺構は外堀石垣2条，土塁基底部石垣3条，櫓台2基，側溝2条，土坑4基，井戸1基を確認した。遺物は，輸入陶磁器，国産陶磁器，瓦，土師質土器，瓦器，木器，金属器が出土した。

なお，本報告では，遺構の位置関係の記述には西調査区で用いたＸ軸を用いて記述する。しかし，遺物観察表の出土位置は東調査区の杭番号（ＳＲ）も並用する。両者の位置関係については，第56図遺構配置図を参照されたい。

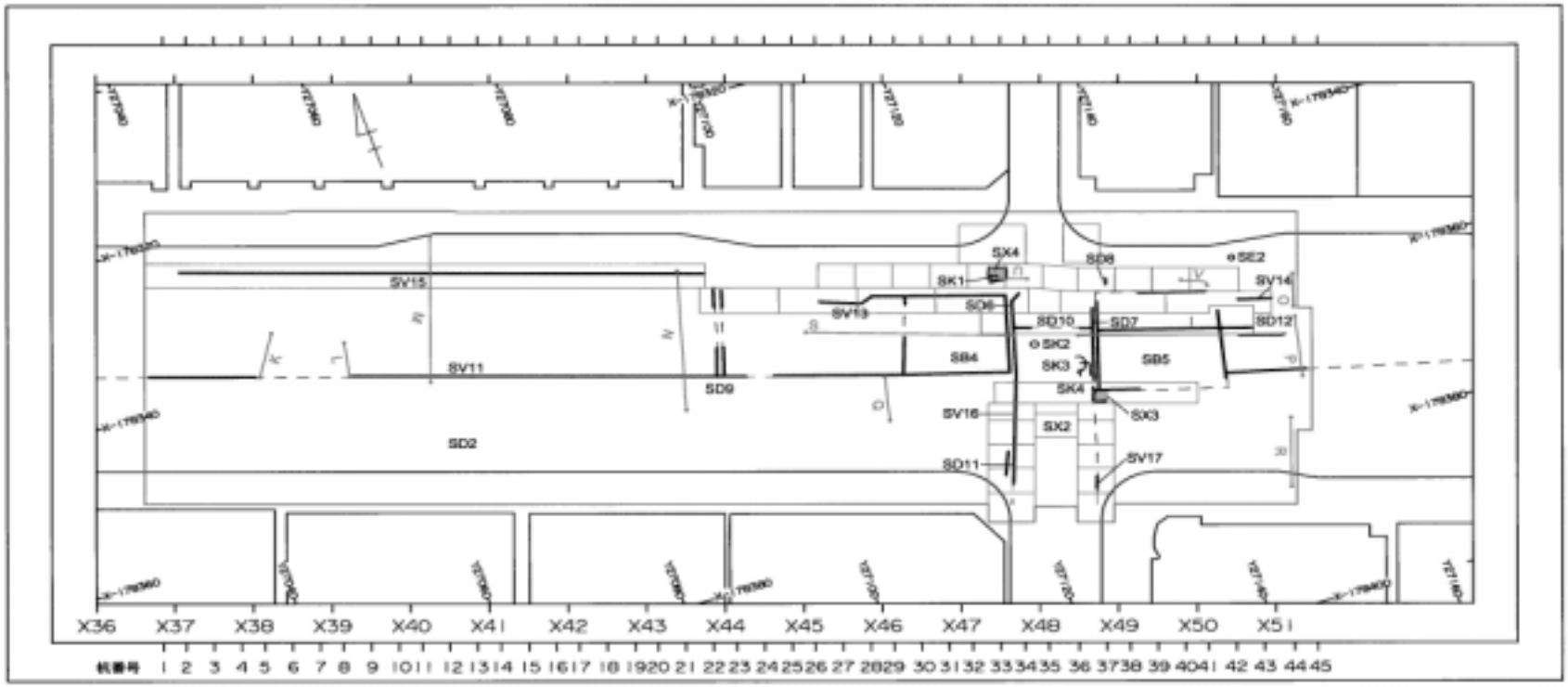
（2）遺構と遺物

石垣

ＳＶ11[第57，58図・図版39～42]

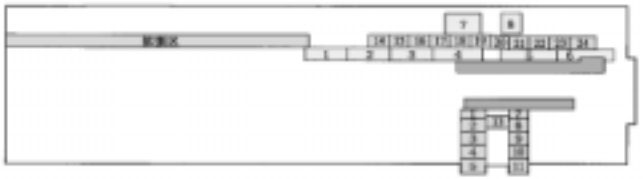
Ｘ36～47間に位置する。外郭南辺を区画し，外堀ＳＤ2の北岸護岸となる石垣で，ＳＢ4とその西方に位置する平櫓との間に築かれたものである。面を南に向け概ね東西方向に延びる。

上部は消失しており，築石は最大で2段遺存する。西へは調査区西端まで達し，さらに調査区外へ延長している。東へはＳＢ4南西角まで達する。東端部約2ｍは，ＳＢ4西面石垣の掘り方と重複しており，その前後関係はＳＢ4西面石垣→ＳＶ11である。東端より19ｍの地点には暗渠ＳＤ9の開口部が構築されている。

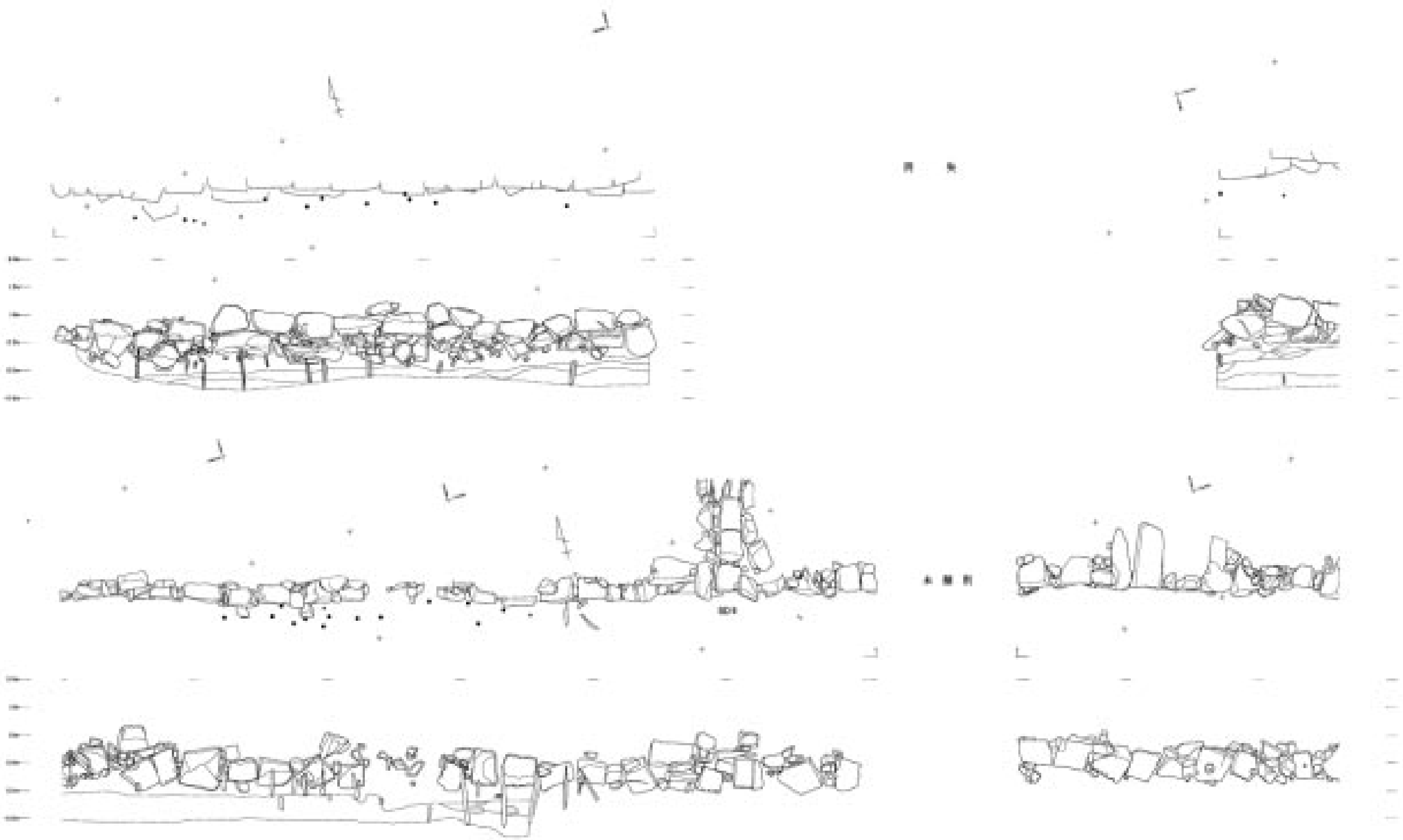


第56図　来調査区遺構配置図（S＝1：500）

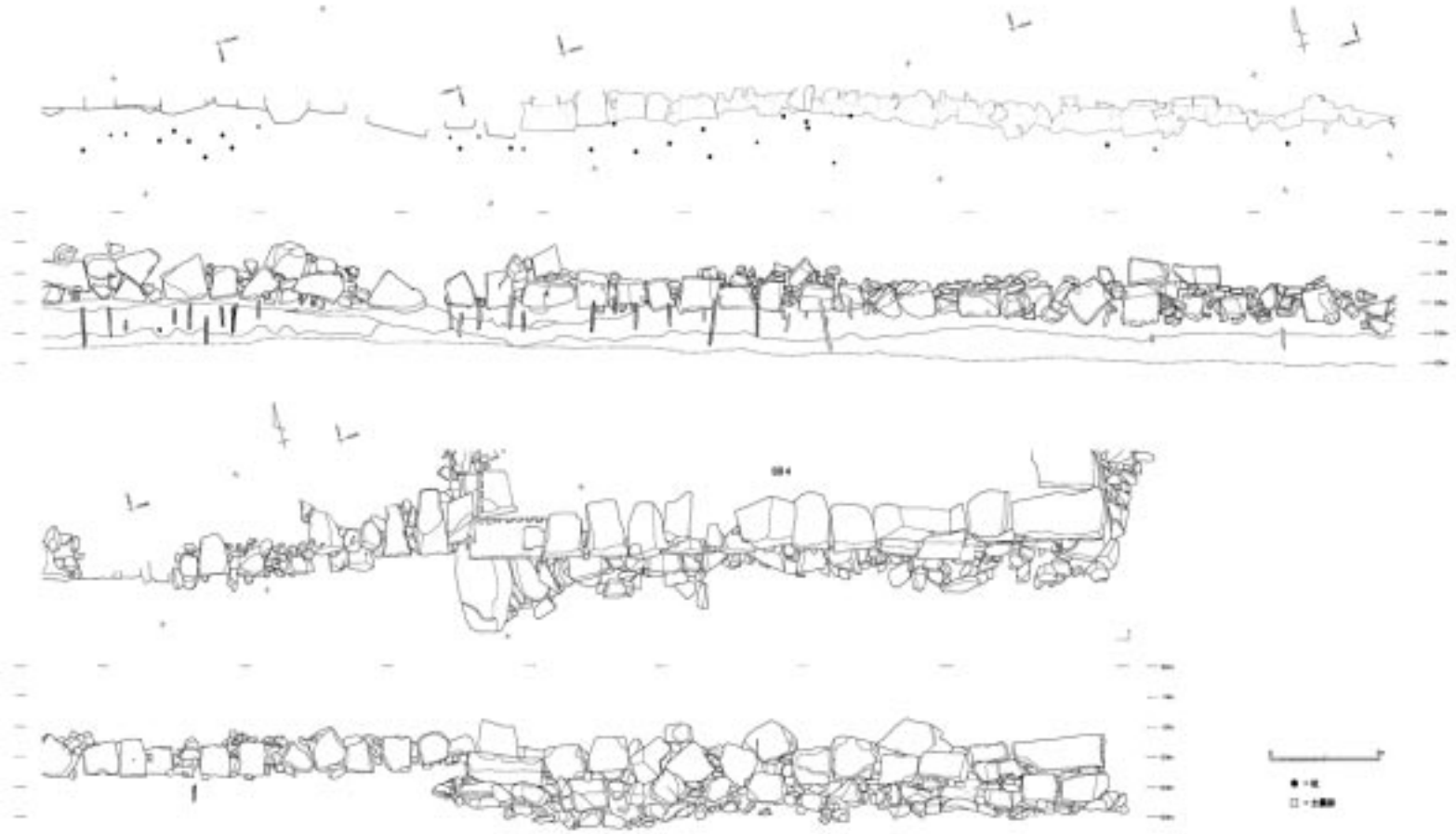
0　10　20　30m

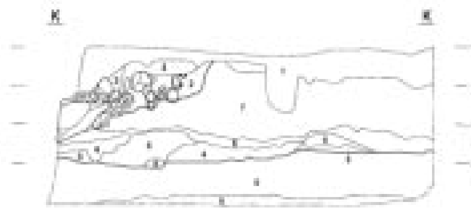


第1次調査調査区
第2次調査調査区(6区、12区は欠番)
第3次調査調査区

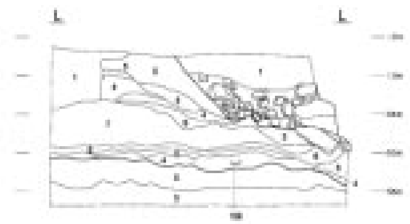


第57図　SV11実測図（S=1:60）

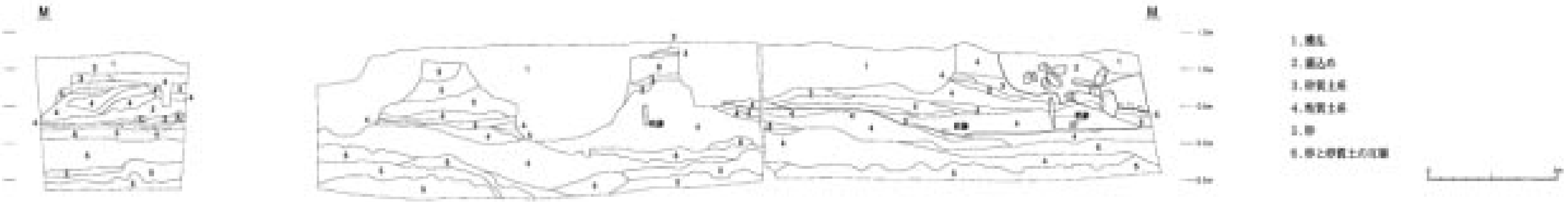




1. 攪乱
2. 掘込め
3. 砂質土系
4. 粘質土系
5. 砂
6. 粗砂
7. 粘質土系(炭化物多く含む)



1. 攪乱
2. 掘込め
3. 砂質土系
4. 粘質土系
5. 砂
6. 粗砂
7. 粘質土系(炭化物多く含む)



1. 攪乱
2. 掘込め
3. 砂質土系
4. 粘質土系
5. 砂
6. 砂と砂質土の互層

1. 攪乱
2. 床盤土
3. 砂質土系
4. 粘質土系
5. 砂
6. 砂(土嚢袋)
7. 砂質土系(土嚢袋)
8. 砂と砂質土の互層

第66図 SV11, SD2断面図 (S＝1:50)

東へ約32.7ｍ範囲は，築石上の覆土を取り除くことができず，立面のみしか図化できなかった。そのため，当該箇所は，立面図における築石上端部の外郭線を平面に展開して位置関係を図示した。

長さは消失部分，未掘削部分を含めて81.76ｍ，高さは最大で1.1ｍである。軸方向はＮ107°Ｅである。上端の標高は1.5ｍ，下端の標高は-0.07ｍである。断ち割り断面における裏込め部の幅は，Ｋ断面が2.45ｍ，Ｌ断面が2.3ｍ，Ｍ断面が2.34ｍである。裏込め石は10～30cm大で，いずれも密に詰められている。

根石は直接地盤の上に据えられている。基底部は，概ね砂質土を突き固めたものと考えられるが，断ち割り断面Ｋ・Ｌでは根石下に粗朶層を，Ｍでは根石直下に砂層を確認した。また，Ｎにおいては，根石下に断面長円形の土層を確認した。図示しえなかったが，この土層の周縁部には厚さ34mmの薄い褐色の土層が認められたことから，土嚢の痕跡と考えられる。

築石は矢穴を伴う割石が主である。刻印は面側において，「大」「 」「 」「 」を確認した。墨書は確認していない。

石垣の積み方は，築石が基底部しか遺存せず判然としない部分が多いが，２段以上遺存している西端部付近においては概ね打込接の乱積みである。築石は，概ね横長に向けて置かれるが，ＳＢ４近くでは控えを長くとり縦長に据えられる。

杭は築石側に傾斜しており，一部の杭は築石の面に接する。また，杭の一部は，あたかも前傾する築石の面を支えるかのように接しているため，これらの杭列は築石設置前に打設され，築石は杭に接するよう据えられたものと考えられる。杭の多くは断面円形に粗く削られているが，わずかに断面方形のものも見られた。上端まで遺存している杭の多くは，上部が粗く削られ尖っている。

遺物は，石垣基底部前方から中国産磁器（101），東南アジア産陶器（102），肥前産磁器（103），焼塩壷（104）が，裏込めから瓦（105）が，断ち割り断面Ｂの粘質土層から漆器（106）が出土した。

出土遺物[第59図・図版69]

ａ．中国製磁器

青花碗（101）

見込がふくらむいわゆる饅頭心タイプの碗である。高台はやや薄めで，垂直に立ち上がる。畳付は面取りされ，砂が付着する。高台内も施釉されており，若干砂が付着する。見込には蓮花と法螺貝が描かれている。　州窯系で，生産隼代は1590～1630年代である。1）上田秀夫氏による青花編年のＣ－Ⅲ類にあたる2）。

ｂ．東南アジア産陶器

壷（102）

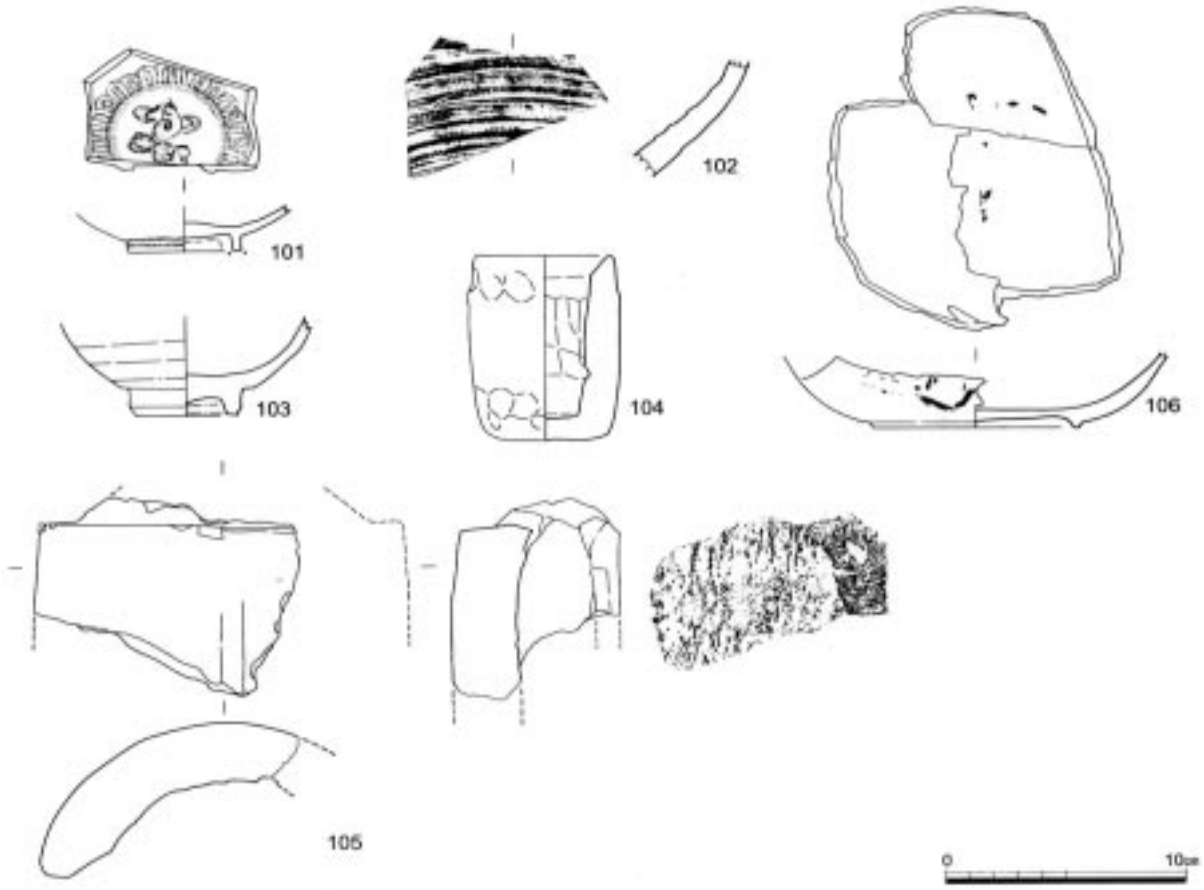
壷あるいは甕の体部の細片である。外面には鉄漿が塗られており，内面にはロクロ成形痕が残る。胎土は0.5～22mm大の濃紫色の斑点を含み，色調は紫褐色である。生産地はベトナ

ム，生産年代は16～17世紀と考えられる。

ｃ．肥前産陶器

碗（103）

厚く高い高台を持つ灰釉碗である。外面にはヘラ削りの痕跡がよく残る。また，内・外面ともロクロ成形痕が残る。高台の高さにくらべ，高台内の削りは浅い。高台内には砂の塊が付着する。生産年代は1600～30年代である。



第59図　ＳＶ１１出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

ｃ．土師質土器

焼塩壷（104）

板積み成形で，体部は底部よりほぼ垂直に立ち上がり，口縁部はやや尖り気味に終息する。外面の調整はていねいな市ナデで，口縁部と底部付近に指頭圧痕が残る。内面は板積みの後，粗くヘラでナデて継ぎ目をふさぎ，指ナデで仕上げられる。小林謙一氏による江戸出土土師質塩壷類の編年Ⅱｂ期に相当すると考えられる。3)

ｄ．瓦

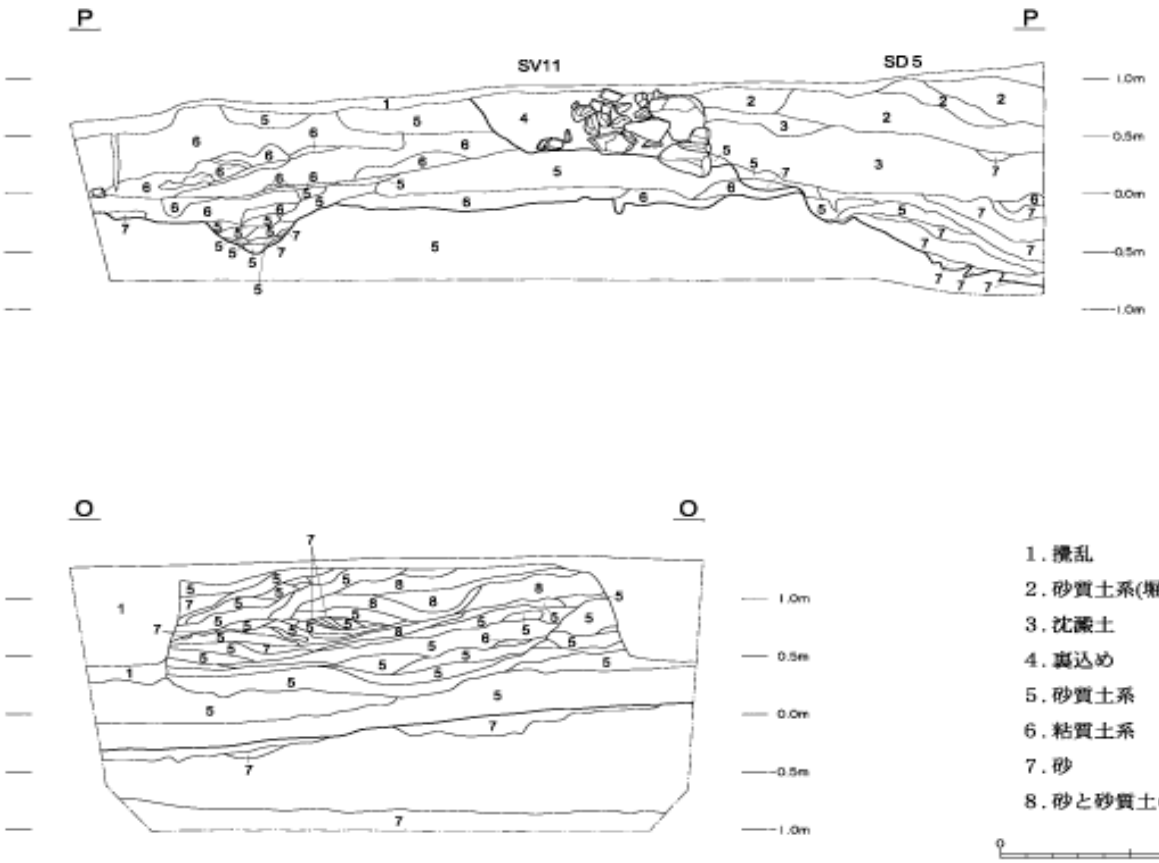
丸瓦（105）

色調は薄橙褐色である。凸面は磨耗が著しい。凸面の調整は，縦方向のヘラ削りの後，ていねいに磨かれている。側面及び胴部凹面側縁はヘラナデの後，面取りされる。凹面には粗

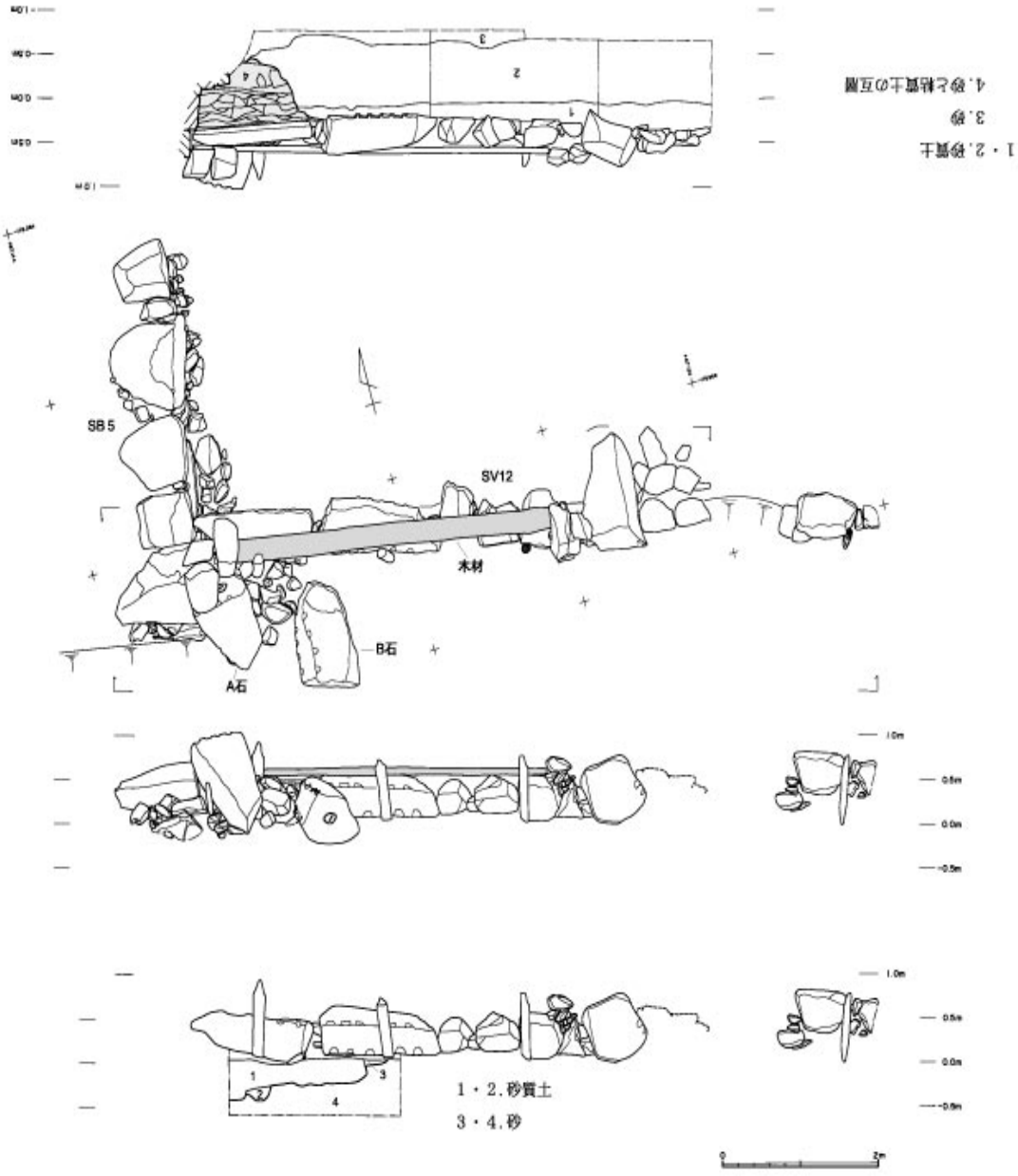
い布目が残る。
玉縁凸面の調整は横方向のナデである。
ｅ．漆器
皿（106）
低い高台を持つ皿である。体部の器壁は底部よりも厚く，口縁部に向けて徐々に薄くなる。上塗色は内･外面とも黒色である。外面の漆塗は，高台外面からさらに高台内面まで及ぶ。高台裏は木胎雷出している。外面体部と内面見込には赤色漆で文様が描かれているが，摩耗しているため判別できない。

ＳＶ12[第60，61図・図版43，44]
Ｘ50から調査区東端にかけて位置する。外郭南辺を区画し，外堀ＳＤ５の北岸護岸となる石垣で，ＳＢ５と，「立町口御門」西側の櫓台との間に構築されたものである。面を南に向け東西方向に延びる。
上部は消失しており，築石は最大で２段遺存する。東へは東調査区東端まで達し，さらに東側へ延長している。西端はＳＢ５東面に直交する。西端の築石二つはＳＢ５東面の掘り方，及びその南部をさらに切って掘り込んだ２つの掘り方と重複し，後者を埋め戻した後に据えられている。本遺構とＳＢ５との接合部では，堀内側から築石に向けて，大型の肩材が２つ（以後，西側をＡ石，東側をＢ石と称する）が傾けて据えられている。石垣の南側には，４本の杭が打設されている。築石上には長さ4.58ｍ，幅28cm，厚さ約8cmの細長い板材が先述の杭に接するように据えられ，さらに東端部には比較的大きめの石材が，西端部には小さな礫が積まれていた。
消失部分を含めた長さは約8.82ｍ，高さは0.78ｍである。軸方向はん103゜Ｅで　ある。上端の標高は0.78ｍ，下端の標高は-0.02ｍである。Ａ石の規模は約1.2ｍ×約0.75ｍ，Ｂ石の規模は約1.3ｍ×約0.75ｍである。断ち割り断面における裏込め層の幅は，最大1.39ｍである。裏込め石の規模は10～40cm大で，裏込め層の南半部にのみ密に詰められている。杭の径は9～14cm程度である。
根石は直接地盤の上に据えられている。基底部は，砂質土を突き固めたものと考えられる。築石及びはＡ石・Ｂ石は，矢穴を伴う割石である。築石には刻印・墨書は確認できなかったが，　Ａ石・Ｂ石は，「　」という刻印が刻まれている。石垣の積み方は，基底部しか築石が遺存しないため不明であるが，西半部では長辺を東西方向に，東半部では長辺を南北方向に向け控側が長くなるよう設置されている。
遺物は，木材周辺から中国産磁器（107），肥前産磁器（108），杭の根本から瓦（109）が出土した。また，掘り方向からも瓦片が出土したがいずれも細片のため，図示しえなかった。

出土遺物[第62図・図版69]
ａ．中国製磁器
青花碗（107）
やや外開きの高台を持つ碗である。畳付は面取りされ砂が付着する。高台内も施釉され，



第60図　SV12，SD５断面図（S＝１：50）



第61図　ＳＶ12実測図（Ｓ＝1：60）

砂が付着する。見込には草花が描かれ，高台には二重圏線が巡らされる。釉は乳白色，胎土は精緻，焼成は良好である。　州窯系で，生産年代は1590～1630年代である。青花編年のＣ－Ｖ類にあたる。

ｂ．肥前産磁器

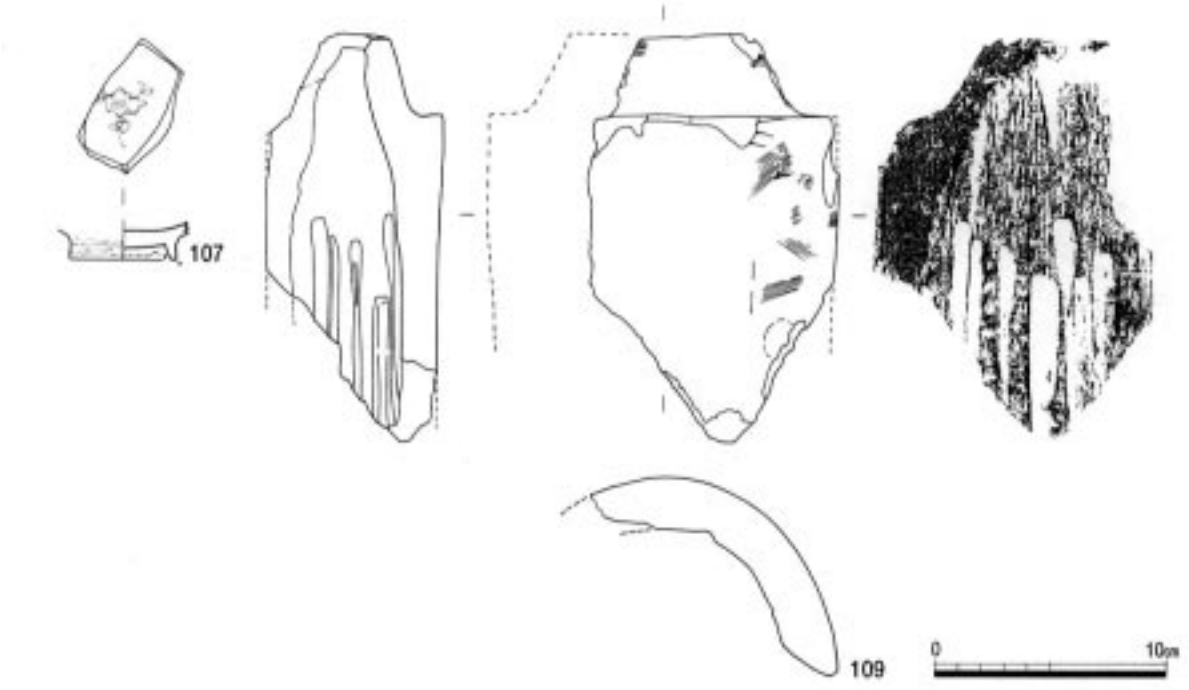
染付碗（108）

体部の破片である。生産年代は1630～60年代と考えられる。

ｃ．瓦

丸瓦（109）

色調は黒灰色である。凸面の調整は，斜め方向のヘラナデの後，ていねいにナデ消しが施されている。凹面は布で模様に粘土を掻き取った痕跡が残る。



第62図　ＳＶ１２出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

ＳＶ13[第63図・図版45 a]

Ｘ50～51間，ＳＶ11の北，ＳＢ４北面石垣の西側延長線上に位置する。面を北へ向け，概ね東西方向に延びる。本遺構は，外郭南辺沿いの土塁の基底部に築かれた石垣と考えられる。

上部は消失しており，築石は最大で２段遺存する。東端はＳＢ５北西角部に接合する。東端より約3.7ｍ西進し，一旦南へ屈曲し，再度方向を転じ西進して終息する。屈曲部以東はＳＢ４北面と直線的につながる。断ち割り断面において確認した裏込め層の幅は1.75mmであるが，裏込め端部まで完掘していないため，さらに南へ延長している。裏込め石は20cm大の礫が主であり，密に詰められている。

規模は，全長9.28ｍ，高さ1.11ｍである。築石上端の標高は1.71ｍ，下端の標高は0.6ｍ

である。

根石は直接地盤の上に据えられている。築石の規模及び加工度は，屈曲部を境に西半部と東半部で異なり，前者よりも後者のほうが大きく，ＳＢ４・ＳＢ５に使用される築石の規模に近い。石垣の積み方は打込接の布積みである。築石のほとんどが長辺横長に据えられているが，西端部のみは長辺縦長，控えを長くとって据えられている。

遺物は確認できなかったため，本遺構の時期は不明である。

ＳＶ14[第63図・図版45 ｂ]

Ｘ45～47間、ＳＶ12の北，ＳＢ５の東に位置し，面を北に向け概ね東西方向に延びる。本遺構は外郭南辺沿いの土塁の基底部に築かれた石垣と考えられる。上部は消失しており，築石は最大で２段遺存する。西側は攪乱のため消失していたが，さらに延長しＳＢ５東面に達すると考えられる。東は終息しているが，南側に築石と同規模の石材が３つ存在するため，南に方向を転ずる可能性も考えられる。

長さは４ｍ，高さは最大で0.9ｍである。軸方向はん105゜Ｅである。積み石上端の標高は1.62ｍ，下端の標高は0.63ｍである。遺構面上端における裏込め幅は，約1.7ｍである。

根石は直接地盤の上に据えられている。

築石は，面の形状が概ね長方形の粗割石である。積み方は，打込接の布積みである。裏込め石は20～60cm大の角礫が主であり，密に詰められている。なお，本遺構の西側延長線上，ＳＢ５東面脇には長辺を南北方向に向ける石材が存在するが，本遺構との関係は明確にしえなかった。

遺物は出土していないため，本遺構の時期は不明である。

ＳＶ15[第64図・図版46]

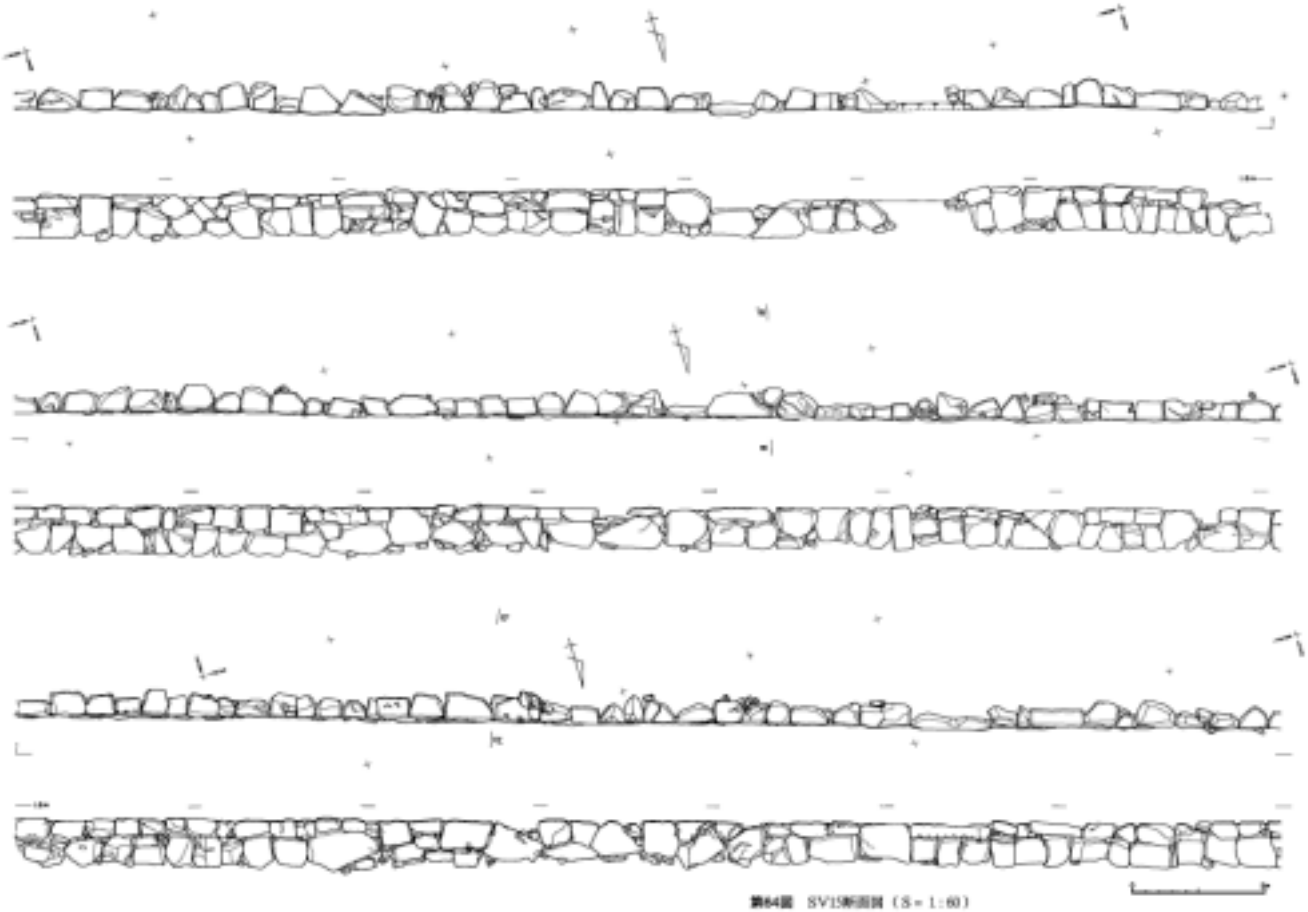
Ｘ37～44間，ＳＶ11の北，ＳＢ４の北西に位置し，面を北に向けて概ね東西方向に延びる。ＳＢ44の西，外郭南辺沿いの土塁の基底部に築かれた石垣である。

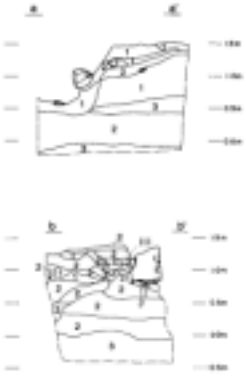
築石は最大で２段遺存する。長さは約60ｍ，高さは最大で0.84ｍである。上端の標高は1.48ｍ，下端の標高は0.56ｍである。東西両端は確認できず，両方向ともさらに延長している。軸方向はＮ107゜Ｅである。

根石は直接地盤の上に据えられている。築石は，表面を平滑に加工された整形の切石が主で，前者よりも若干加工程度が低く矢穴を伴う不整形な割石が若干混在する。規模は前者が小さく，後者が大きい。石垣の積み方は，打込接の布積みである。所々に縦長の築石を配し，その間は横長に築石を積み重ねている。２ケ所で遺構を断ち割ったが，裏込めは確認できなかった。

遺物は裏込め部から，肥前産陶器(110，111)，肥前産磁器（112)，堺産焼き締め陶器（113）が，石垣下から瓦（114）が出土した。また，出土位置は不明であるが，古銭（115）も出土した。出土遺物の年代から，本遺構の築造時期は18世後半以降と考えられる

出土遺物[第65図・図版69・70]



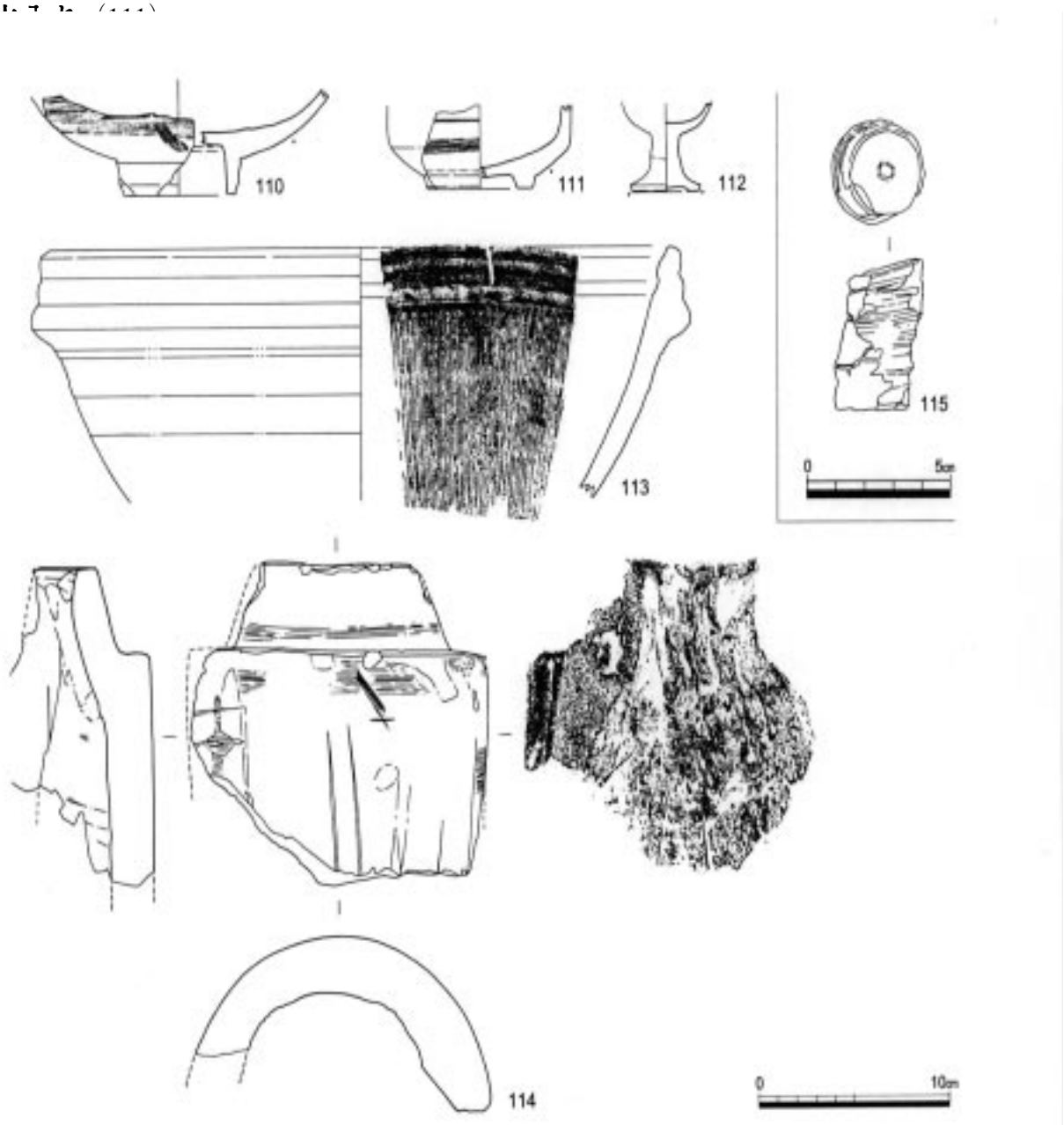


1.砂質土系
2.粘質土系
3.砂

第64図 SV15断面図（S＝1:60）

刷毛目の皿もしくは鉢の底部である。生産年代は18世紀第２四半期～後半である。

小丸皿（111）



第65図　ＳＶ１５出土遺物実測図（Ｓ＝1：2，1：3）

ｂ．肥前産磁器

仏飯器（112）

白磁あるいは染付の仏飯器である。高台内の削りは浅く中心部がやや盛り上がる。畳付には砂が少量付着している。生産年代は18世紀代である。

ｃ．堺産焼き締め陶器

擂り鉢（113）

８条の擂り目を持つ。生産年代は 18 ～ 19 世紀である。

ｄ．瓦

丸瓦（114）

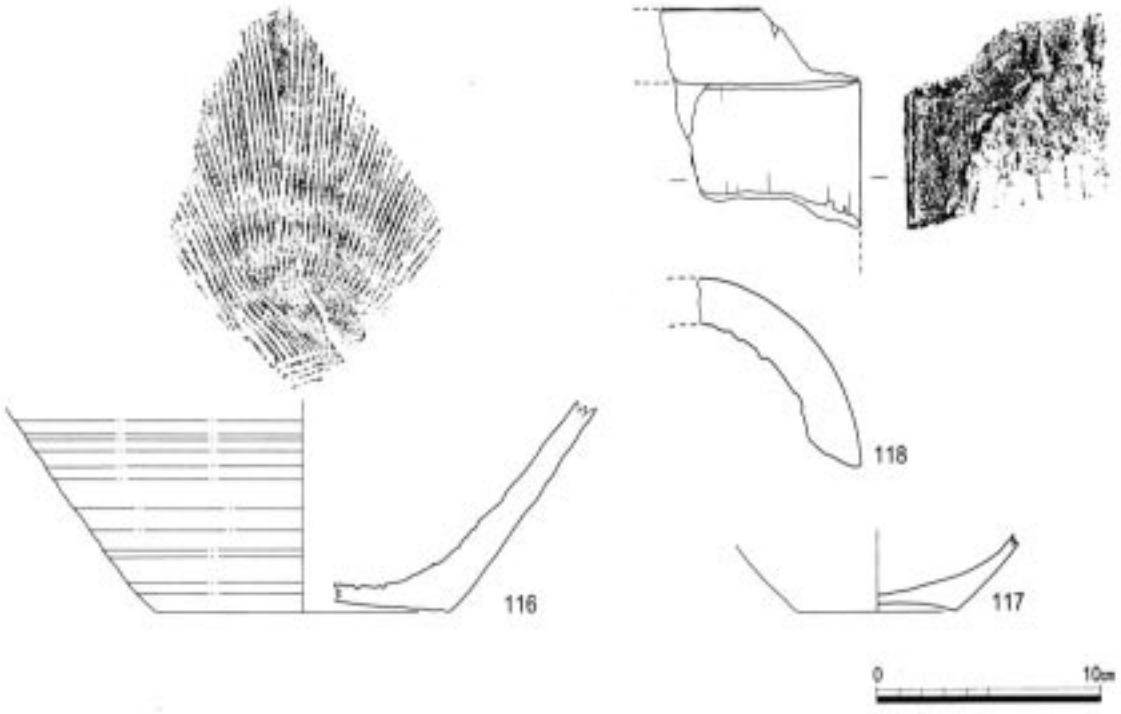
色調は薄灰褐色である。凸面の調整は，横方向のハゲによる調整の後，縦方向にていねいな磨きが行われている。側面及び胴部凹面側縁はヘラナデが施されている。凹面にはやや細かい布目が残る。玉縁凸面には横方向のハケ目が残る。

古銭（115）

いわゆる差し銭である。枚数は錆のため正確には分からないが，厚さから30枚前後と考えられる。出土時には穴に植物の茎のような繊維片が残存していたため，藁紐に通されていたと考えられる。又，外周部には葉脈状の筋を持つ繊維片が付着しているため，植物の葉に巻かれていた可能性が高い。高さは 4.4cm，幅は 3.2cm である。

ＳＶ１６[第６７図・図版４７]

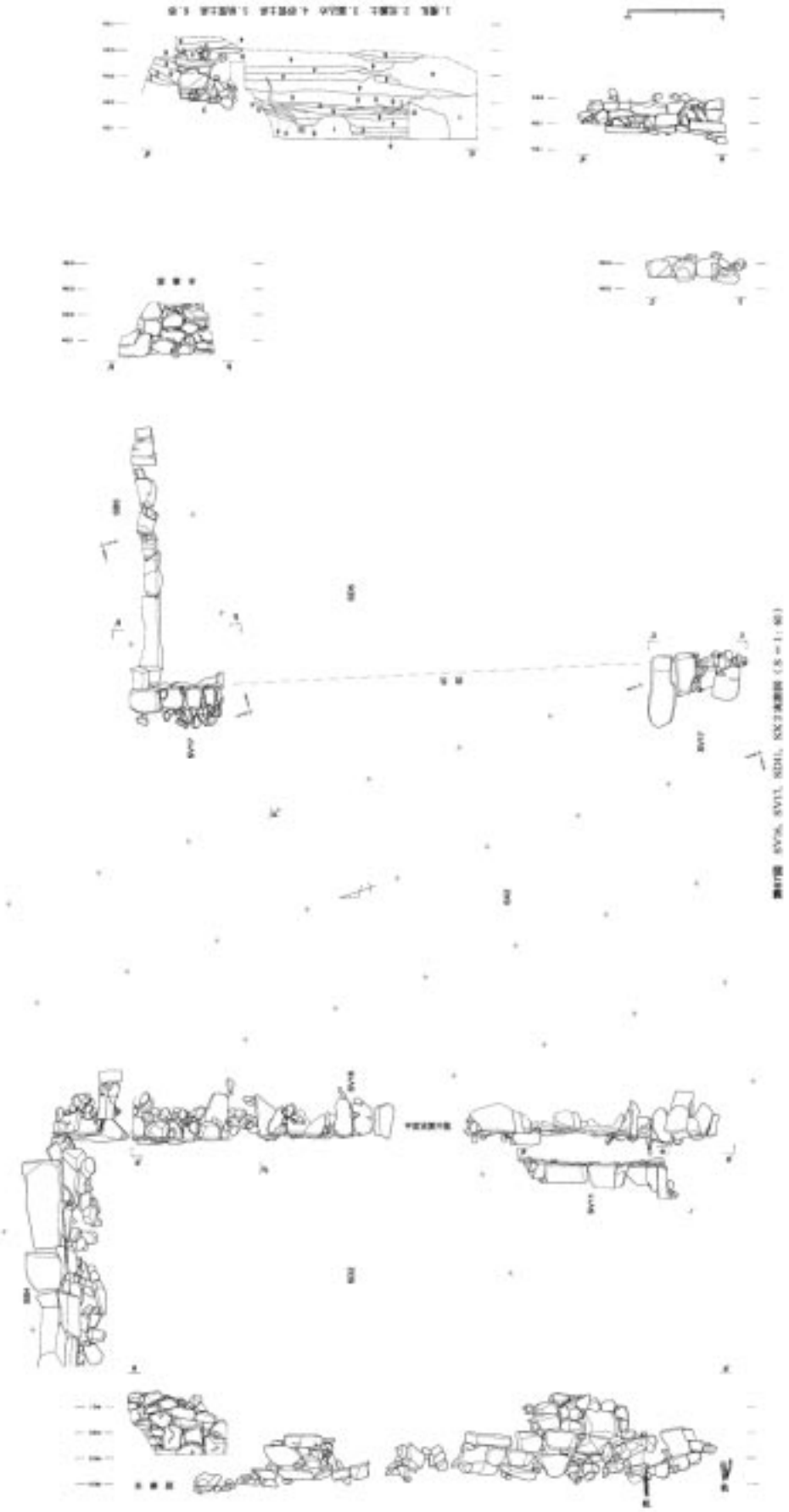
Ｘ 47 ～ 48 間に位置する。「研屋町口御門」土橋（ＳＸ２）の西辺に築かれた石垣で，面を西に向け南北方向に延びる。



第 66 図　ＳＶ１６出土遺物実測図（Ｓ＝１：3）

きなかったが，根石のみはＳＢ４南面の軸線よりも北へ延びていることを確認した。南は消

失している[illegible]設されている。



残存長は12.46ｍ，最高遺存高は1.7ｍである。上端の標高は1.2ｍ，下端の標高は-0.71ｍである軸方向はＮ17゜Ｅである。

根石は直接地盤に据えられている。石垣の積み方は，打込接の布積みである。築石の規模は，上部と基底部とでは異り，根石から３段程度が大きく，上端側２段が小さい。築石の設置は，根石のみ長辺縦長に据えられ，２段目以上は横長に据えられる。根石の前方には杭が打設されている。

断ち割り断面において確認した裏込め部の幅は，0.65ｍである。裏込め石は10～30cm大で密に詰められている。

遺物は，裏込めから備前産擂り鉢（116），関西系土瓶（117），瓦片（118）が出土した。

出土遺物[第66図・図版70]

ａ．備前産焼き締め陶器

擂り鉢（116）

10条の擂り目を持つ。生産年代は17世紀である。

ｂ．関西系陶器

土瓶（117）

底部の破片である。生産年代は18世紀後半から19世紀である。

ｃ．瓦

丸瓦（118）

色調は橙灰褐色である。丸瓦部凸面の調整は，縦方向のミガキである。玉縁凸面，端面及び丸瓦部凸面狭端縁連結面の調整は横方向のナデである。玉縁凹面側縁，凹面玉縁面及び胴部凹面側縁はヘラ切りの後軽くナデが施されている。また，丸瓦部の凹面には溝状の粘土掻き取り痕が，玉縁の凹面には細かな布目が残る。

ＳＶ17[第67図・図版48]

Ｘ48～49間に位置する。「研屋町口御門」土橋（ＳＸ２）の東辺に築かれた石垣で，面を東に向け南北方向に延びる。北東には石敷状遺構ＳＸ３が築かれている。

遺存状況は悪く，攪乱により２ケ所に分断されている。北側は良好に遺存していたが，掘削深度の制限と湧水のため下端まで確認しえていない。一方，南側は攪乱が深くまで及んでおり，根石のみ遺存する。北へはＳＢ５南西角部を越えてさらに延びていると考えられるが，端部は確認しえていない。また，南は消失していたが，さら延長し南岸まで達していたと考えられる。

規模は，北側が長さ4.0ｍ，上端の標高1.32ｍで，下端の標高は不明である。南側は，長さ2.12ｍ，上端の標高-0.05ｍ，下端の標高-0.7ｍである。軸方向はＮ15゜Ｅである。

根石は直接地盤の上に据えられている。遺存状況の良い北側における石垣の積み方は，打込接の布積みである。築石の規模は，ＳＶ６と同様に上部と基底部とで異なり，前者が小さく，

後者が大きい。根石は長辺横長に据えられており，上部の築石は横長に据えられている。

遺物は出上してないため，本遺構の時期は不明である。

櫓台跡

ＳＢ４[第 68 ～ 70 図・図版 49 ～ 54]

Ｘ 46 ～ 48 間に位置する。「研屋町口御門」西側の櫓台で，平面形は方形を呈し，周囲四面は石垣で構築されている。本遺構はＳＢ５と共に櫓門を形成し，上部に渡櫓が構築されていた。南西角部にはＳＶ 11 が接合し，土橋以西のＳＤ２北岸は直線となる。東面沿いにはＳＤ６が位置する。

上部は消失しており，基底部のみ遺存する。北半部の築石は最大２段遺存する。南半部は路面電車の軌道敷設により北半部よりも低いレヴェルまで攪乱が及んでいたが，基底部が北から南に向けて下がるため，築石は最大３段遺存する。角部は４ケ所全て遺存していたが、西面・東面の一部は攪乱により消失している。

本遺構の東側，西側，南側では構築時の掘り方を確認した。西掘り方はＳＶ 11 東端部と重複しており，掘り方埋め戻し後にＳＶ 11 東端部が築かれている。東掘り方向にはＳＤ６が構築されており，掘り方埋め戻し過程あるいは埋め戻し後に構築されたと考えられる。また，東掘り方の底部には，人頭大程度の石材が据えられている。南掘り方は堀底及び堀内沈澱土層を掘り込んでおり，埋土には礫と瓦片が含まれる。

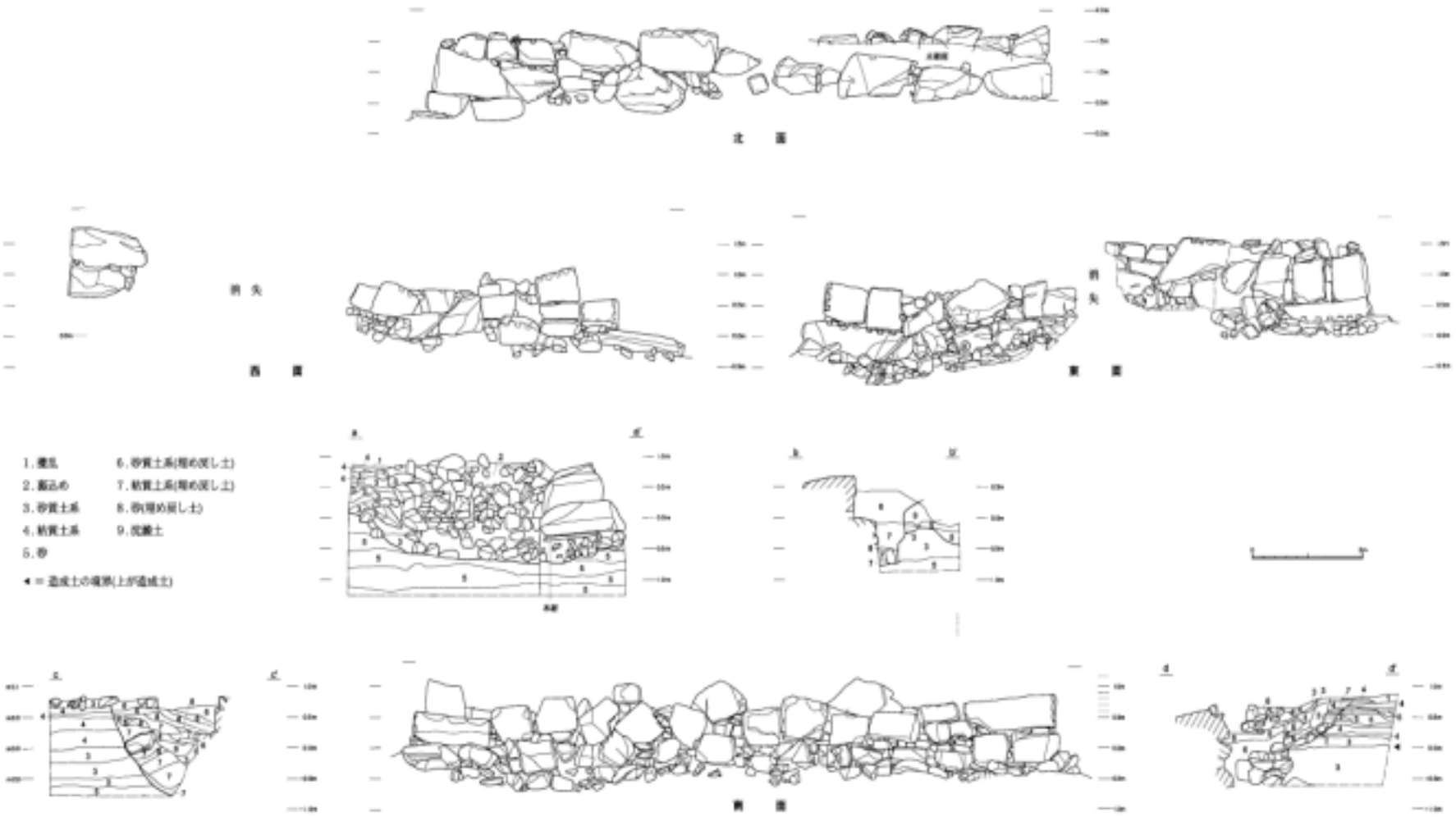
平面規模は，東西 12.2 ｍ，南北 9.9 ｍである。南面は，長さ 12.33 ｍ，上端の標高 1.09 ｍ，下端の標高 -0.68 ｍである。西面は，長さ 12.02 ｍ，上端の標高 1.76 ｍ，下端の標高 -0.35 ｍである。東面は，長さ 10.82 ｍ，上端の標高 1.61 ｍ，下端の標高 -0.79 ｍである。北面は，長さ 11.66 ｍ，上端の標高 1.75 ｍ，下端の標高は不明である。

断ち割り断面における裏込めの幅は，南面が 3.3 ｍ，西面が 3.21 ｍ，東面が 2.3 ｍである。北面は断ち割っておらず，未確認である。櫓台中央部は裏込めがなく、粘質土と砂質土の互層となっている。なお，断ち割り断面Ｓでは，東面石垣から西へ 3.3 ～ 4.9 ｍの範囲において，レンズ状の礫の集積を確認したが，性格は不明である。

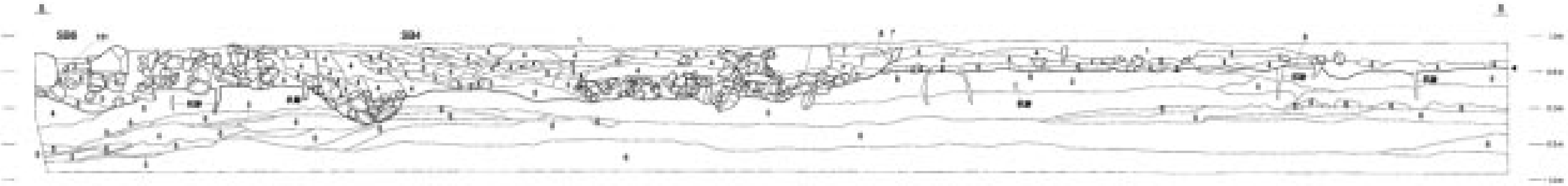
基底部は４面とも砂質土を突き固めたものと考えられる。南面，東面及ぴ西面の南半部では，基底部に礫を敷き，その上に根石が積まれている。礫の敷設範囲は，根石よりも外方へ広がり，特に南面西端部は基底部が南に突出し，根石も大きく突出する。また，南面では西半部の基底部がレンズ状に落ち込んでおり，この箇所のみ深めに礫が敷かれる。西面では基底部の礫は裏込め部まで広がっている。他の３面とは異なり，西面の前方には築石と同規模の大型の石材が石垣に向けて傾けて据えられている。北面は，北東角石を除いて根石は直接地盤に据えられる。北東角の築石は，平滑な上端面を持つ石材の上に据えられている。なお，南北方向の断ち割り断面では，根石下に南北方向に据えられた木材を確認したが，胴木のような地盤沈下を防ぐ役割を果たすものではなく，築石の設置を安定させるために使用されたものと考えられる。

角部の築石は矢穴を伴う割石で，北東角の２段目の築石にはノミによる表面加工も見られた。その他の部分は矢穴を伴う割石と自然石が混在し，割石の加工は角部ほど厳密に行われていない。墨書は東面において「　」を確認した。刻印は確認していない。

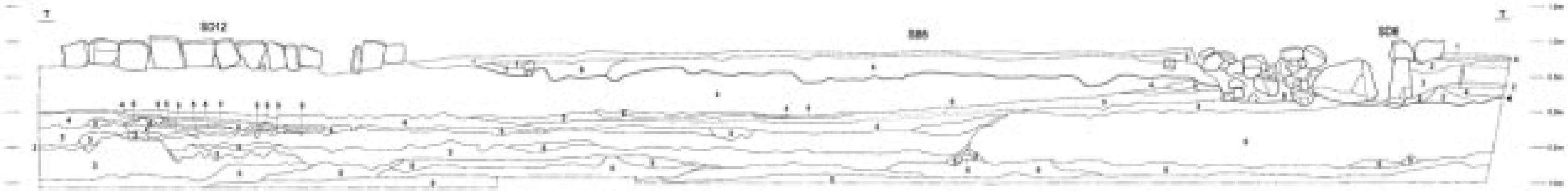
南東角，北東角，北西角の積み方は，いわゆる算木積みである。南西角は概ね算木積みであるが，根石が大きく南に突出していることと，ＳＶ11との接合を考慮したためか，長辺と



第66図　SB4実測図(2)(S＝1：60)



1.攪乱　　　6.砂
2.旧耕土　　7.砂質土系(埋め戻し土)
3.盛込め　　8.粘質土系(埋め戻し土)
4.砂質土系　◆=造成土の境界(上が造成土)
5.粘質土系



1.攪乱　　　6.木質層
2.旧耕土　　7.砂質土系(埋め戻し土)
3.砂質土系　8.盛込め
4.粘質土系　◆=造成土の境界(上が造成土)
5.砂

第79図　SB4, SB5, SD6, SD7断面図(S=1:50)

短辺を交互に積むという規則性がつらぬかれておらず，変則的になっている。南東角，北東角，南西角では，１段目の築石は南北方向に長辺を向けて，２段目は東西方向に長辺を向けて設置される。北西角では，１段目の築石は東西方向に長辺を向けて，２段目は南北方向に長辺を向けて設置される。

角部以外の石垣の積み方は，４面とも概ね打込接の布積みであるが，南半部，特に南面は目地が乱れ，乱積みに近い。なお，西面では南西角部脇に大きな隙間があき，また，西面においても南西角部脇には小振りの築石が乱雑に詰め込まれ，他の部分とは若干異なる様相を示している。

遺物は南掘り方向から軒丸瓦（119），軒平瓦（120）が出土した。

本遺構からは，生産年代の明らかな遺物は出土していない。しかし，東掘り方内に構築されたＳＤ６の構築年代が１７世紀初頭と考えられることから，本遺構の時期もほぼ同じと考えられる。

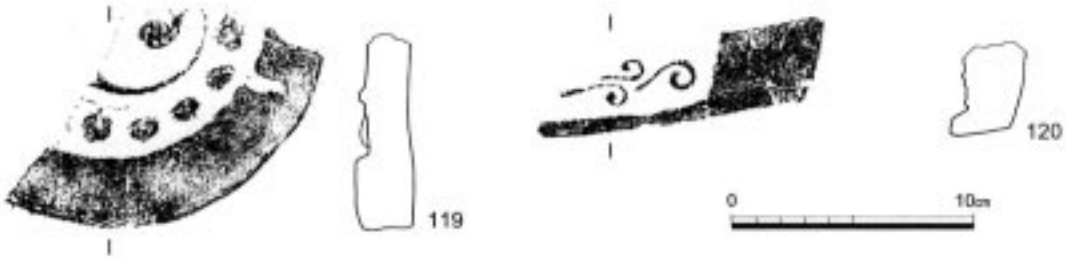
出土遺物[第 71 図・図版 70]

瓦

軒丸瓦（119）

文様は左巻きの巴文である。巴文の頭部は首幅に対して大きめて，上端は平滑に仕上げられる。連珠の形状は不揃いで，数は推定 14 個である。瓦当は周辺部よりも中央部が薄い。瓦当裏の調整は，円弧を描くようにナデを施した後，周縁部を円周方向に横ナデしている。表面にはわずかに赤い付着物が見られる。ＳＸ５出土の軒丸瓦（224）と同じである。

軒平瓦（120）



第 71 図　ＳＢ４出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

ＳＢ５[第 72，73 図・図版 55 ～ 58]

Ｘ 48 ～ 51 間に位置する。「研屋町口御門」東側の櫓台で，平面形は方形を呈し，周囲四面は石垣で構築されている。東面にはＳＶ 12 が直交し，南東角部にはＳＶ 17，ＳＸ３が近接する。また，西面沿いにはＳＤ７が位置する。本遺構とＳＶ 12 の位置関係は，ＳＢ４とＳＶ 11

のそれとは異なり，ＳＶ12よりも約２m堀内に突出する。

上部は消失しており，基底部のみ遺存する。全体的に遺存状況は悪く，4面とも攪乱による消失部分が存在する。特に，南面は全体の4分の1程度，北面も半分程度しか遺存していない。また，中央部には東西方向に近代の石組み溝ＳＤ12が構築されており本遺構を破壊している。築石は北半部で最大2段遺存する。南半部はＳＢ4同様に路面電車の軌道敷設によって北半部よりも低いレヴェルまで攪乱が及んでいたが，基底部が北から南に向けて下がるため，築石は最大3段遺存する内角部は南西角のみ遺存するが，掘削深度の制限と涌水のため下端まで確認できなかった

本遺構の外周部，東側では構築時の掘り方を確認した。この掘り方はＳＶ12西端部と重複しており，掘り方の埋め戻し後にＳＶ12西端部が築かれている。掘り方の底部，東面石垣前方には，人頭大から拳大までの小型の礫が据えられていた。西側には掘り方は存在しなかった。また，東面の南端では杭を確認した。

残存部から推定される平面規模は東西14.1ｍ，南北12.5ｍである。南面は，遺存長4.7ｍ，上端の標高0.98ｍ，下端の標高は不明である。西面は，遺存長11.28ｍ，築石上端の標高1.7ｍ，下端の標高-0.6ｍである。東面は，遺存長8.88ｍ，上端の標高1.72ｍ，下端の標高-0.52ｍである。北面は，遺存長7.9ｍ，上端の標高1.62ｍ，下端の標高0.32ｍである。

断ち割り断面における裏込めの幅は，北面が0.84～0.15ｍ，東面が1.64ｍ，西面が1.82ｍである。南面は不明である。櫓台中央部は裏込めがなく，粘質土の単一層が広がる。

東面，西面基底部は，シルト層を突き固めたものと考えられる。また，北面中央部の断ち割り断面においては，根石下に羊歯や松の小枝や葉，皮などが敷き詰められたいわゆる粗朶層を確認した。羊歯類の茎は刃物によって切断された痕跡があり，また，箸なども含んでいたことから人工的に敷設されたものと考えられる。粗朶架層は断ち割り時に掘肖した３ｍ×３ｍ程度の範囲と東面の下部においてのみ確認しえなかったため，北半部に敷設された可能性が高い。

東面，西面の根石は，地盤に直接据えられている。築石の形状は概ね矢穴を伴う割石で，南西角部には直方体の大型のものが使用されている。

南西角部の積み方は，1段しか遺存していないが，築石の形状から算木積みと考えられる。その他の部分は，4面とも打込接で，北面が乱積み，東面布積みである。西面は遺存状況が布積みか，乱積みか判然としない。

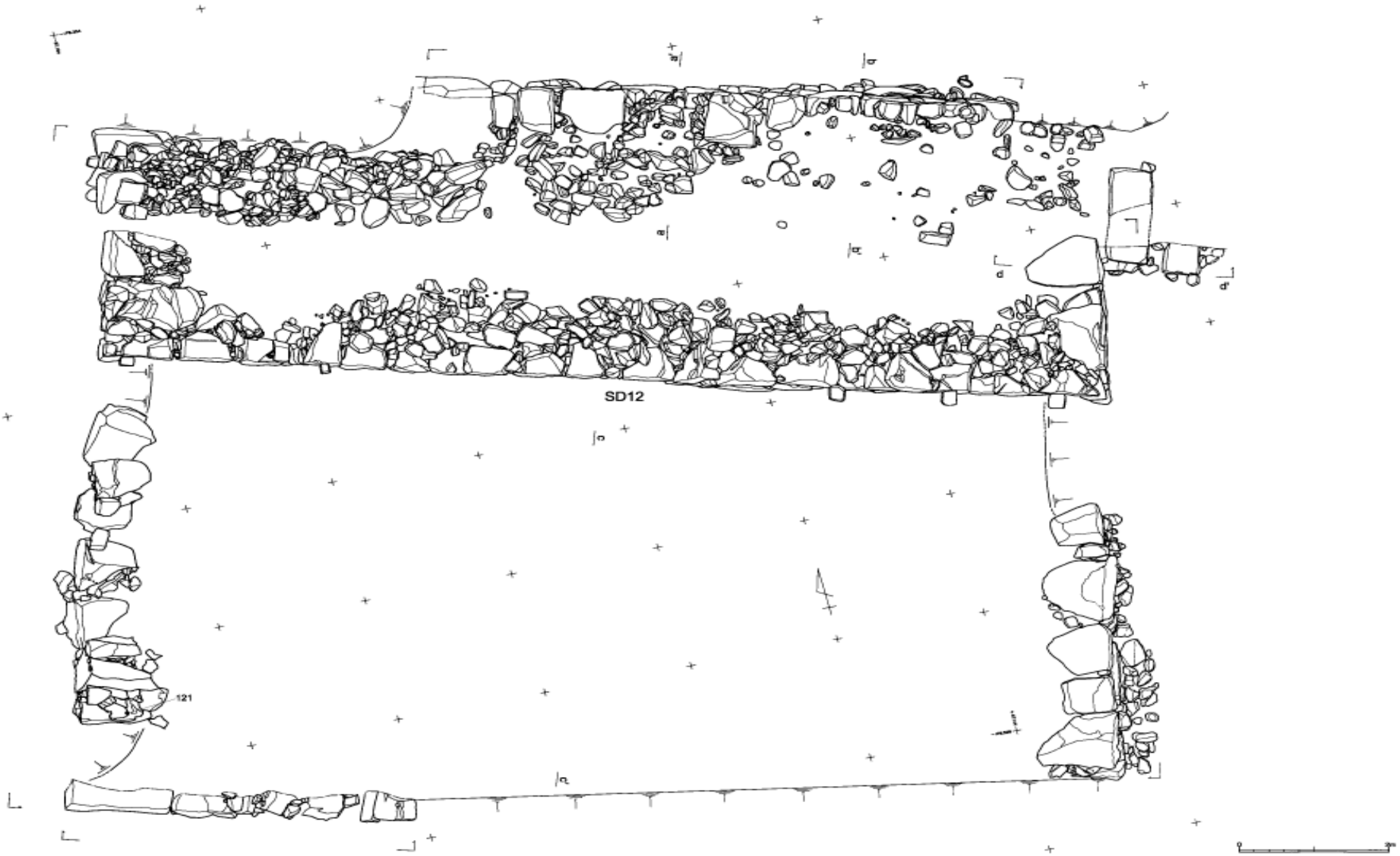
遺物は東面築石間から肥前産陶器皿（121），土鍋（122）が，北面築石間から福岡産陶器（123），瓦（124，125），基底部の粗朶層から箸（126）が出土した。遺物の生産年代なお，本遺構の時期は17世紀初頭と考えられる。

なお，南北方向の断ち割り断面では，掘り方の下方，標高0.02～0.54ｍにかけて溝状の落ち込みが確認されたため，本遺構に先行する遺構が存在した可能性がある。

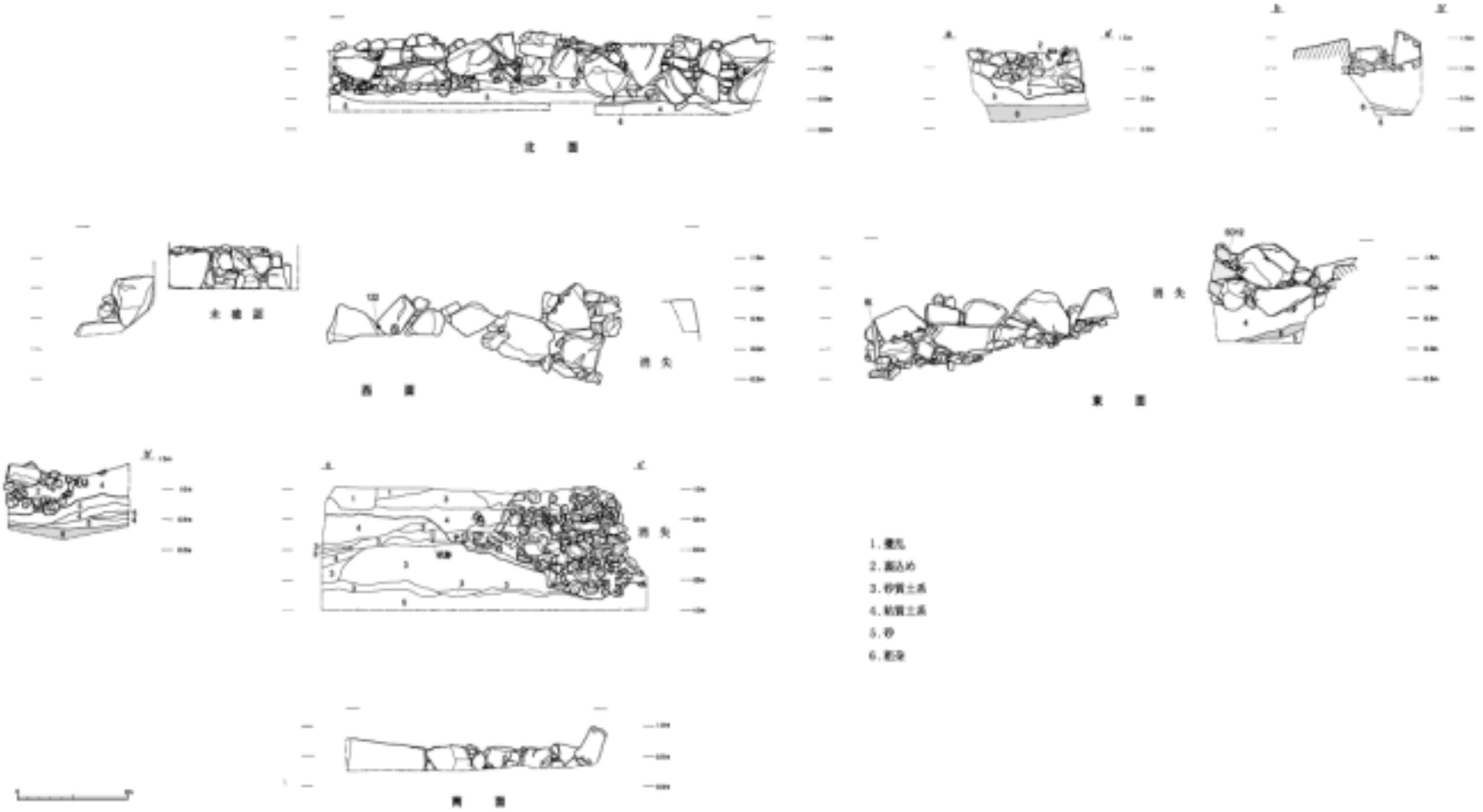
出土遺物[第74図・図版70，71]

ａ．肥前産陶器

皿（121）



第72図　SB５実測図(１)（S＝1：60）



第73図　SB5実測図(2)（S＝1:60）

砂目を持つ大型の皿の底部である。生産年代は1600～30年代である。

ｂ．福岡産陶器

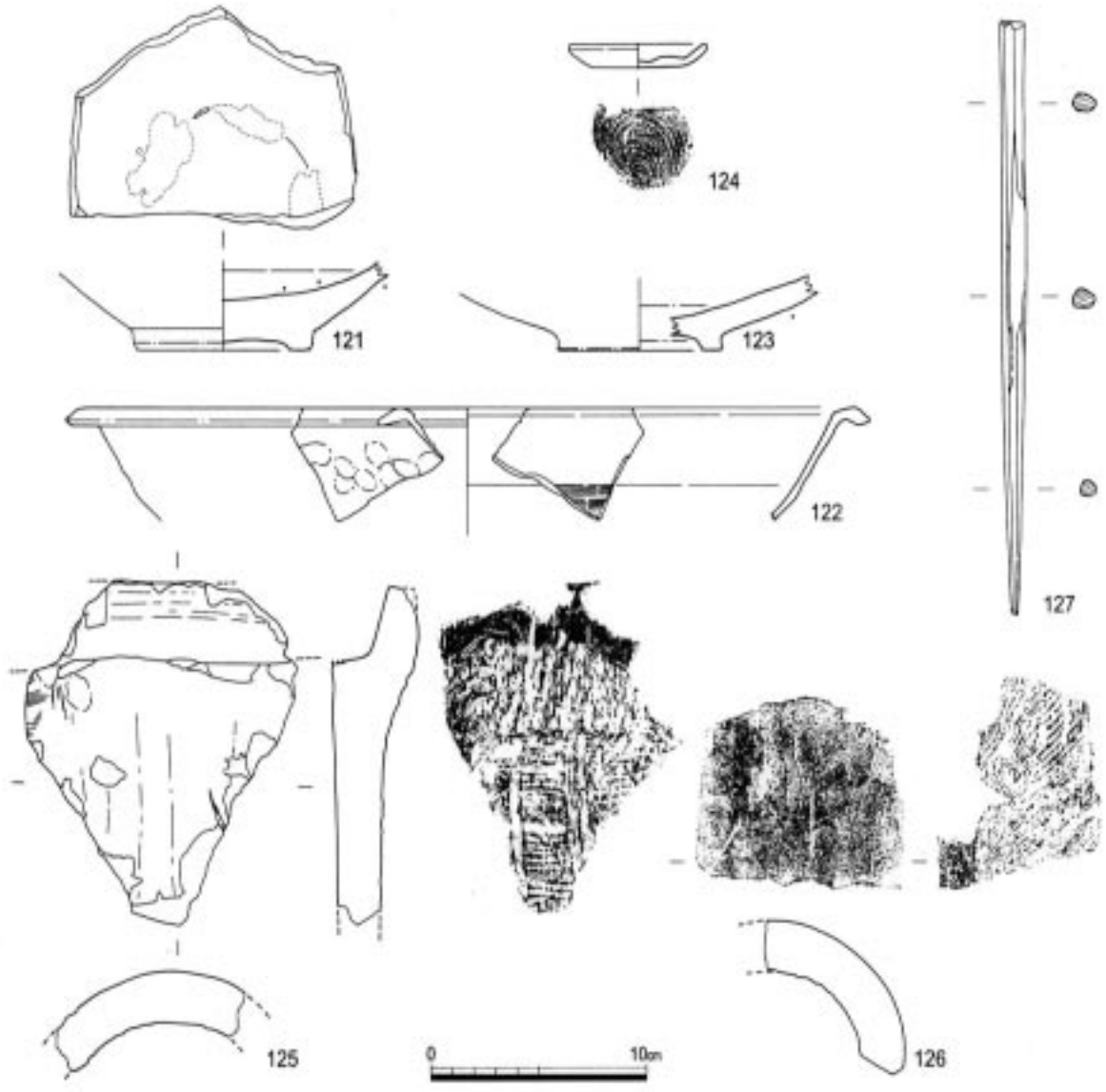
皿（123）

厚く，幅広い高台をもつ皿である。釉は　灰紬で，高台及び体部下方は無釉である。生産年代は17世紀初頭である。

ｃ．土師質土器

土鍋（122）

口径に対して器高の低い内耳の土鍋である。口縁部は内湾気味の体部より外方へ屈曲し水平に延び肥厚して端部を尖り気味におさめる。体部の器厚は薄い。体部内面の調整は，口縁



第74図　ＳＢ５出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

皿（124）

右回転の糸きり離し底の皿である。内面の中央部が凹む。胎土は精緻，色調は黒褐色，焼成は良好である。

ｄ．瓦

丸瓦（125・126）

125　色調は薄灰色である。凸面は横方向の布ナデの後，縦方向に磨かれている。玉縁凸面の調整は横方向の布ナデである。丸瓦部凹面には横方向の筋が残り，玉縁凹面には粗い布目が残る。森田克行氏による瓦分類のコビキＢにあたる。4)

126　丸瓦部の破片である。色調は薄橙灰色である。凸面は，縦方向にていねいに磨かれる。凹面には粘土塊から切り離した際に付いた弧線の糸切り離し痕が良好に残る。側面及び胴部凹面側縁はヘラナデが施されている。森田氏による瓦分類のコビキＡにあた。

ｅ．木製品

箸（127）

粗く不整に削って整形された箸で，断面形状は概ね六角形である。長さ23.1cm，最大径1.1cmである。

外堀

ＳＤ２[第75図・図版59 ａ]

Ｘ36～48間に位置する。概ね東西方向に延びる外堀南辺のうち，「一丁目口御門」土橋と「研屋町口御門」土橋によって区画された部分で，西調査区に位置するＳＤ２の東側延長部分である。面的な確認は行っていないが，北岸際の２ケ所で断面形状を確認した。堀は，自然堆積層と考えられる灰白色砂層を掘り込んで形成されており，底部には暗黒青色の粘性を持つ沈澱土が厚く堆積している。

断ち割り断面Ｍにおける堀底の標高は，岸際が0.05ｍ，岸際から南へ5.00ｍの地点が-1.16ｍである。一方，断ち割り断面Ｑにおける堀底の標高は，岸際が0.24ｍ，岸際から南へ5.5ｍの地点が-1.16ｍである。

堀の南北方向の断面形状は，南側が未確認であるため明らかではないが，北岸際に限っては両者とも南へ約３ｍの地点までが急角度で落ち込み，それより中央部にあたる南側の傾斜は緩やかである。

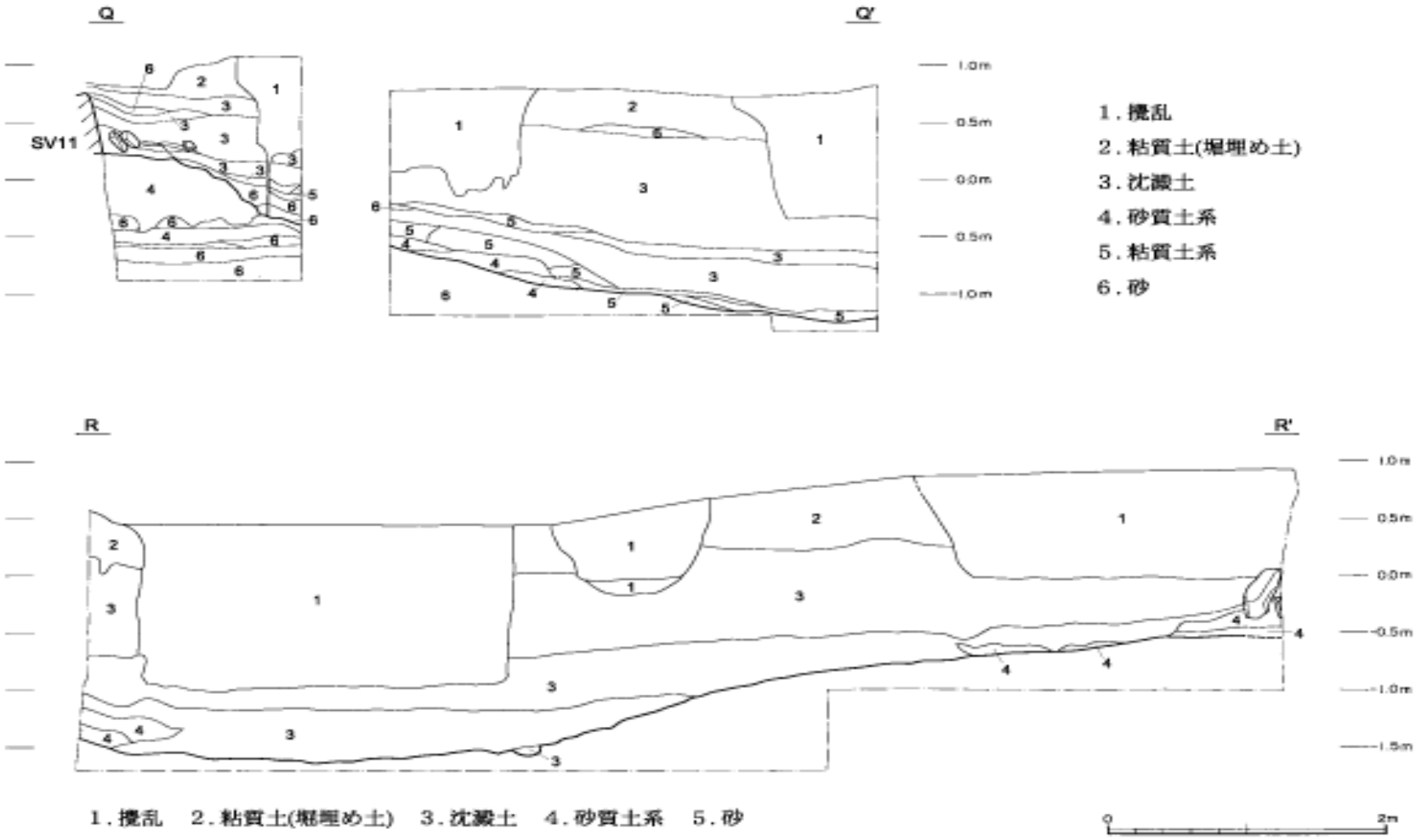
遺物は，主として沈澱土層から，近世以降近代までの陶磁器，木製品，金属製品などが多数出土した。紙面に限りがあるため，ここでは中国産磁器皿（128），肥前産陶器（129），肥前産磁器（130），瓦（131・132），木製品（133～135）を抽出し，報告する。

出土遺物[第76図・図版71・72]

ａ．中国製磁器

青花皿（128）

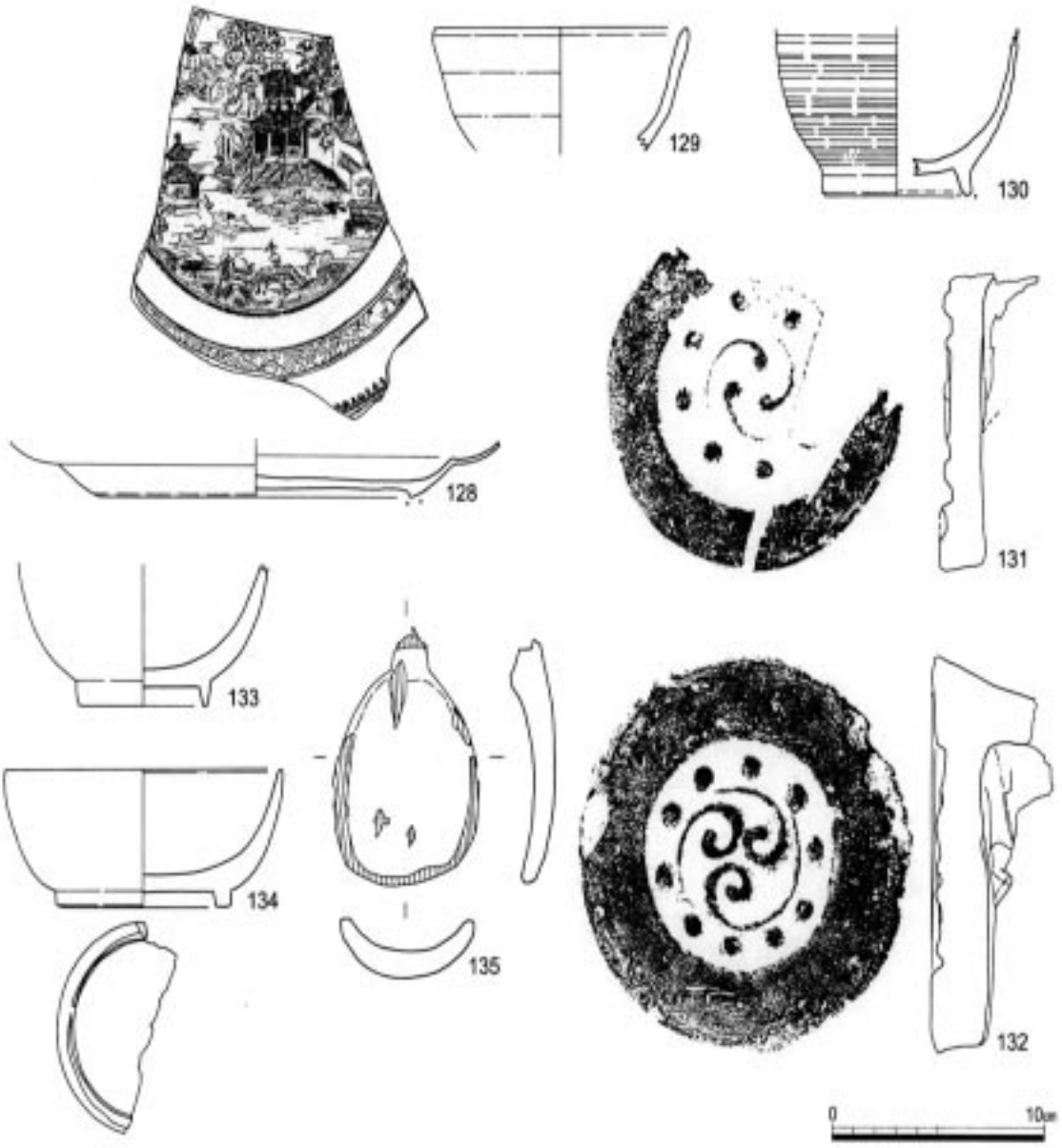
見込に楼閣山水文が描かれたつば皿である。見込は概ね平滑だが，わずかにロクロ成形痕



第75図　SD２，SD５断面図（Ｓ＝1:50）

b．肥前産陶器

碗（129）



第 76 図　ＳＤ２出土遺物実測図（Ｓ＝１：3）

c．肥前産磁器

自磁瓶（130）

外面に細かい沈線が多数入る瓶である。高台内は施釉され，農村は無釉である。生産年代は 1630 ～ 40 年代である。

ｄ．瓦

軒丸瓦（131・132）

131　文様は左巻きの巴文である。連珠は推定８個で，断面は半円形を呈する。巴区の径は瓦当径に対して小さく，頭部径も小さい。巴の長さは40.3％である。瓦当の厚さは，外縁部がやや厚いがほぼ均一である。胎土は密で，色調は暗灰色，焼成は良好である。

132　外縁部の広い左巻きの巴文の軒丸瓦である。連珠はやや大きめで，数は10個である。巴文の頭部は細く，内側へ強く巻き込む。巴文の長さは38.9％である。瓦当は丸瓦部との接合部が薄く，周辺部が厚い。

ｅ．木製品

椀（133・134）

133　器壁の厚い椀である。内面の上塗色が赤色，外面の上塗色が黒色のいわゆる根来塗である。高台は断面逆台形に，高台内は平滑に刳り抜かれる。高台内は黒色に塗られる。畳付は摩耗のため不明である。

134　体部は内外面とも赤色に，高台内のみ黒色に塗られた，いわゆる根来塗の椀である。畳付は，外周部が黒色，内側が赤色に塗り分けられている。木胎漆器の椀である。

匙（135）

柄が欠損している。上塗り色は黒である。漆は木漆だけでなく，発色を良くするため何らかの成分が混入されてい可能性がある。5)

ＳＤ５[第75図・図版59ｂ]

Ｘ48から調査区東端にかけて位置する。概ね東西方向に延びる南辺外堀のうち，「研屋町口御門」土橋と「立町口御門」土橋によって区画された部分である。面的な確認は行っていないが，２ケ所で堀の断面形状を確認した。

堀は，自然堆積層と考えられる灰白色砂層を掘り込んで形成されており，底部には暗黒青色の粘性を持つ沈澱土が厚く堆積している。南端，すなわち南岸は確認できなかった。さらに南の調査区外に位置すると考えられる。

断ち割り断面Ｐにおける堀底上端の標高は0.24ｍ，下端の標高は-0.8ｍである。断ち割り断面Ｒにおける堀底上端の標高は-0.55ｍ，下端の標高は-1.64ｍである。堀の断面形状はレンズ状と考えられ，最深部は北岸からは約６～９ｍ南である。

本遺構では埋設管が多数存在したため，遺物の確認はほとんど行えなかった。ここでは，沈澱土から出土した産地不明陶器（136）を報告する。

出土遺物[第77図・図版71]

産地不明陶器

碗（136）

見込が兜巾状にふくらむ京焼風の碗の部

である。高台は断面台形に削り出され，高
台内は平滑である。生産地は確定できなか　**第77図**　ＳＤ５出土遺物実測図（Ｓ＝１：3）
ったが，肥前産もしくは土佐尾戸焼と考えられる。生産年代は，肥前産の場合には17世紀後半～18世紀初頭という隼代が与えられるが，尾戸焼の場合は不明である。

溝

ＳＤ６[第78図・図版60ａ，60ｂ，61ａ]

Ｘ47～48間に位置する。「研屋町口御門」の西端，ＳＢ４沿いに位置する石組み側溝で，ＳＢ４東面沿いに面を西に向ける石積の側壁を構築し溝として機能させている。側壁中央部には暗渠ＳＤ10が開口する。

本遺構はＳＢ４東面石垣の掘り方向に構築されており，掘り方埋め戻し過程，あるいはそれ以後に構築されたと考えられる。

ＳＢ５東面と同程度の長さで遺存していたが，南側の大部分は平面的な確認ができなかったため，断ち割り土層観察を行った。また，北半部も，基底部まで確認できなかった。側壁北部は北東に屈曲しているが，下部の積み石がそのまま北進するため，この部分は積み直しと考えられる。よって，北へは，さらに延長していた可能性があるが，ＳＢ４の北側では確認できなかったため，ＳＢ４の北東角を越えた地点で終息あるいは東西どちらかに屈曲していた可能性が高い。

長さは11.28ｍ，幅は0.55～1.45ｍ，深さは0.35～0.5ｍである。北半都の積石の規模は，上部よりも下部が大きく，前者は幅30～50cm，高さ25～40cm程度の直方体の切石，後者は高さが不明であるが幅70～135cm程度の矢穴を伴う厚い板状の割石である。積み方は布積みである。南半部の石材は図化Lえていないが，断ち割った箇所の石材の規模は，高さが30cm程度で北半部のものよりも低く小さい。

遺物は，掘り方内から中国産磁器（137・140），肥前産陶器（138），肥前産磁器（139）が出土した。また，溝内からは，陶磁器（141～166），土師質土器（167・168），瓦質土器（214），瓦（169・170）などが多数出土した。溝内出土遺物は図化できるものを抽出し，報告する。

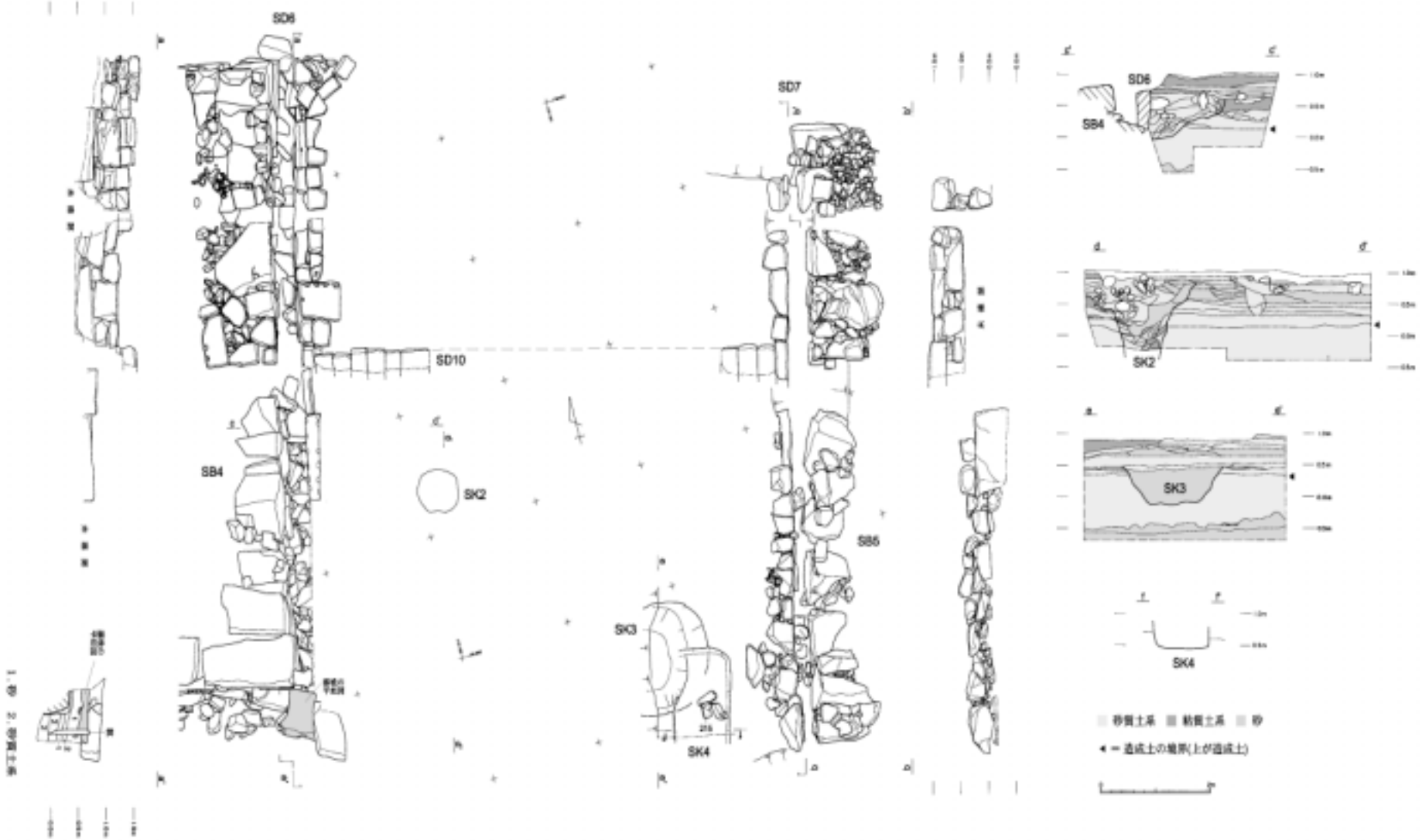
なお，本遺構の開口部の南側，すなわち堀ＳＤ２の北東角に相当する位置では，漆喰によって南北75cm，東西70cm程度の平坦面が築かれていた。この平坦面の上端は0.7ｍで，北半部の底部よりも，南半部の断ち割り断面における底部の標高に近い。平坦面下には砂と砂質土が厚く堆積しており，後者からは17世紀代の肥前産陶器（171）が出土したほか，土師質土器皿（172～176）が積み重ねられた状態で出土した。ＳＤ６に付属する構造物である可能性があるため，ここで併せて報告する。

本遺構の時期は，掘り方内出土遺物の生産年代から，17世紀初頭と考えられる、また，開口部の平坦面の時期も17世紀代である可能性がある。

掘り方出土遺物[第79図・図版72]

ａ．中国産磁器

白磁碗（137）



第78図　SD6，SD7，SD10，SK2～4実測図（S＝1:60）

青花皿（140）

内･外面とも二重圏線が巡らされた皿の口縁部の細片である。景徳鎮産で，生産年代は1590～1630年代である。上田氏の青花編年のＡ群にあたる。

ｂ．肥前産陶器

向付（138）

ロクロ成形した皿の口縁部を折曲げた向付である。内外面ともヘラ削りの痕跡が顕著に残り，露胎部ではやや器表が毛羽立つ。見込には鉄絵で植物文が描かれている。生産年代は1590～1610年代である。

ｃ．肥前産磁器

染付皿（139）

見込に圏線と蝶が描かれた皿である。高台には二重圏線が描かれている。畳付は無釉で，砂が付着する。生産年代は1610～30年代である。

溝内出土遺物[第79図・図版72～74]

ａ．中国産磁器

青花皿（141）

見込に巡らされた圏線の中に大きく寿字文が描かれた皿である。畳付は無釉で，少量の砂が付着する。高台内も施釉されており，カンナ削りが見られる。口縁部内面には四方　が描かれる。また，口縁部外面，高台にもそれぞれ圏線が巡らされる。景徳鎮産で，生産年代は1590～1630年代である。上田氏の青花編年のＡ－Ⅲ類にあたる。

ｂ．肥前産陶器

碗（142・143）

142　刷毛目の碗で，生産年代は17世紀代である。体部の立ち上がりが比較的緩やかであるため，皿の可能性もある。

143　見込に三つのハマ跡を残す京焼風の碗である。見込には鉄絵で山水文が描かれている。生産年代は18世紀前半である。

皿（144～146）

144　灰釉の皿で，生産年代は16世紀末～1630年代である。

145　灰釉の皿で，生産年代は17世紀前半～中葉である。

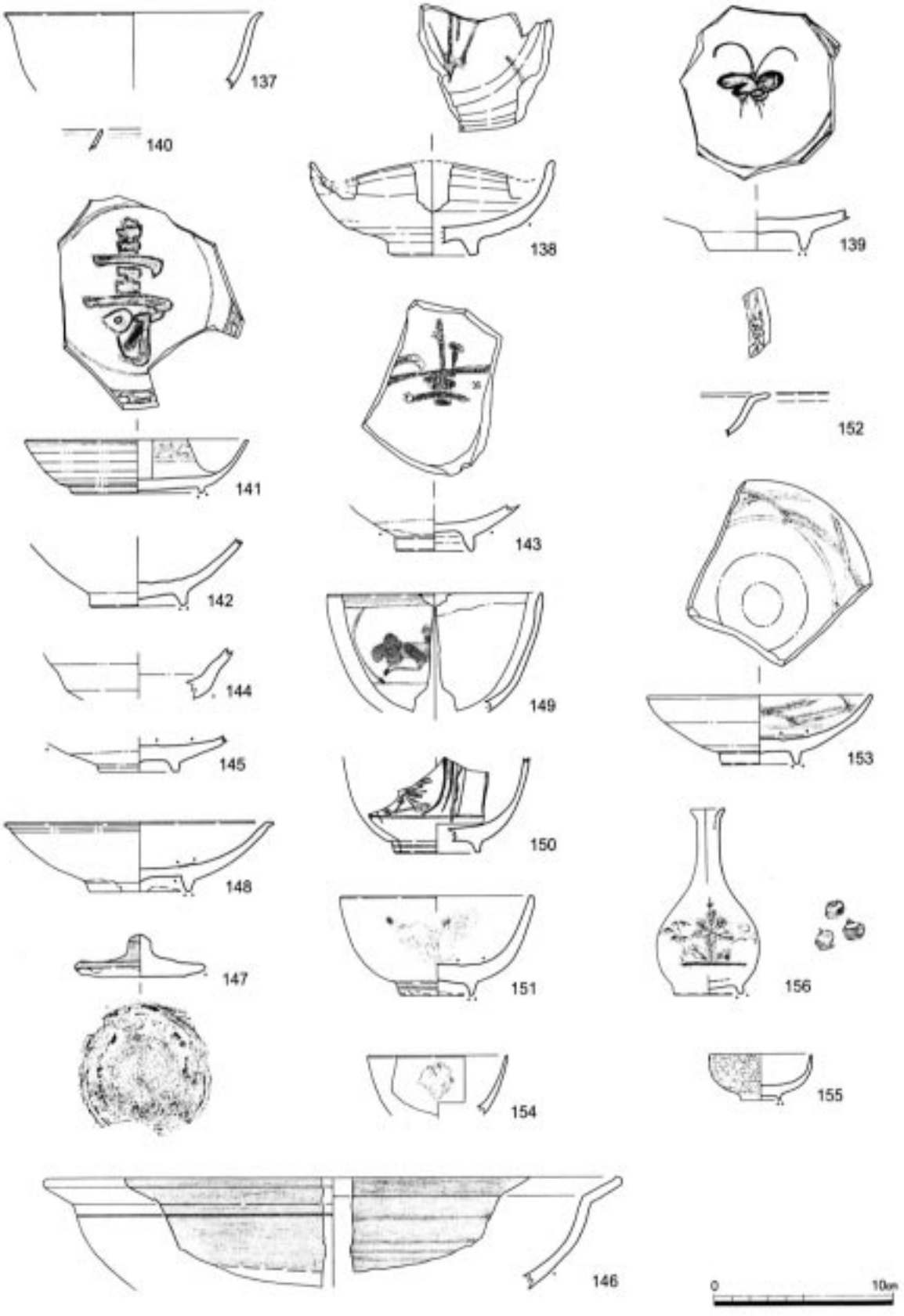
146　刷毛目の皿で，生産年代は18世紀代である。

壺蓋（147）

底部に右回転の糸切り痕を持つ鉄釉の壷蓋である。生産年代は１７世紀前半～中葉である。

白磁皿（148）

見込の２カ所に砂目が残る。胎土は陶質である。高台は断面逆台形に削られる。高台内及び畳付以外はすべて施釉される。内面の器表には細かな貫入が見られる。生産年代は1610～


137
140
138
139
141
152
143
142
144
149
153
145
150
148
147
151
156
154
155
146
0
10cm

第 79 図　ＳＤ６出土遺物（1）（Ｓ＝1：3）

染付碗（149 ～ 151）

149　外面に植物文を持つ染付碗の破片である。生産年代は 1610 ～ 40 年代である。

150　生産年代は 17 世紀後半である。

151　見込が蛇の目釉剥ぎされた染付碗である。体部外面 3 ケ所にコンニャク印判で菊の文様が描かれている。波佐見産で，生産年代は 18 世紀前半から中葉である。

染付皿（152・153）

152　草花文が描かれた端反の染付皿の口縁部で，生産年代は 1630 ～ 50 年代である。

153　見込が蛇の目釉剥ぎされた染付皿である。波佐見産で，生産年代は 18 世紀後半である。

染付小坏（154・155）

154　コンニャク印判で葉が描かれた染付小坏で，生産年代は 18 世紀代である。

155　氷裂文の描かれた染付小坏で，生産年代は 18 世紀代である。

染付瓶（156）

体部に松竹梅と宝珠の描かれた小型の瓶で，生産年代は 18 世紀後半である。

ｄ．肥前系磁器

染付碗（157 ～ 160）

157　笹と思われる文様が描かれた広東碗で，生産年代は 1780 年～ 19 世紀前半である。

158　見込が欠損しているが，五弁花が描かれた広東碗である。外面には「火」の字をモチーフとした文様が描かれている。生産年代は 19 世紀前半である。

159　竹の文様が描かれた広東碗である。生産年代は 19 世紀前半である。

160　見込に井桁状の文様が描かれている。生産年代は 1820 ～ 60 年代である。

染付蓋（161）

欠損しているが，ノシ状の取手が付く蓋である。生産年代は 18 世紀後半～ 19 世紀前半である。

ｅ．肥前系陶器

碗（162・163）

162　体部は内湾しつつ立ち上がり，口縁部はやや外反する。口縁端部は若干肥厚し，端面は丸くおさめる。釉は透明釉である。生産年代は 17 世紀と考えられる。

163　体部は直線的に立ち上がり，口縁部はやや外反する。釉は灰釉である。生産年代は 17 世紀と考えられる。

ｆ．備前系焼き締め陶器

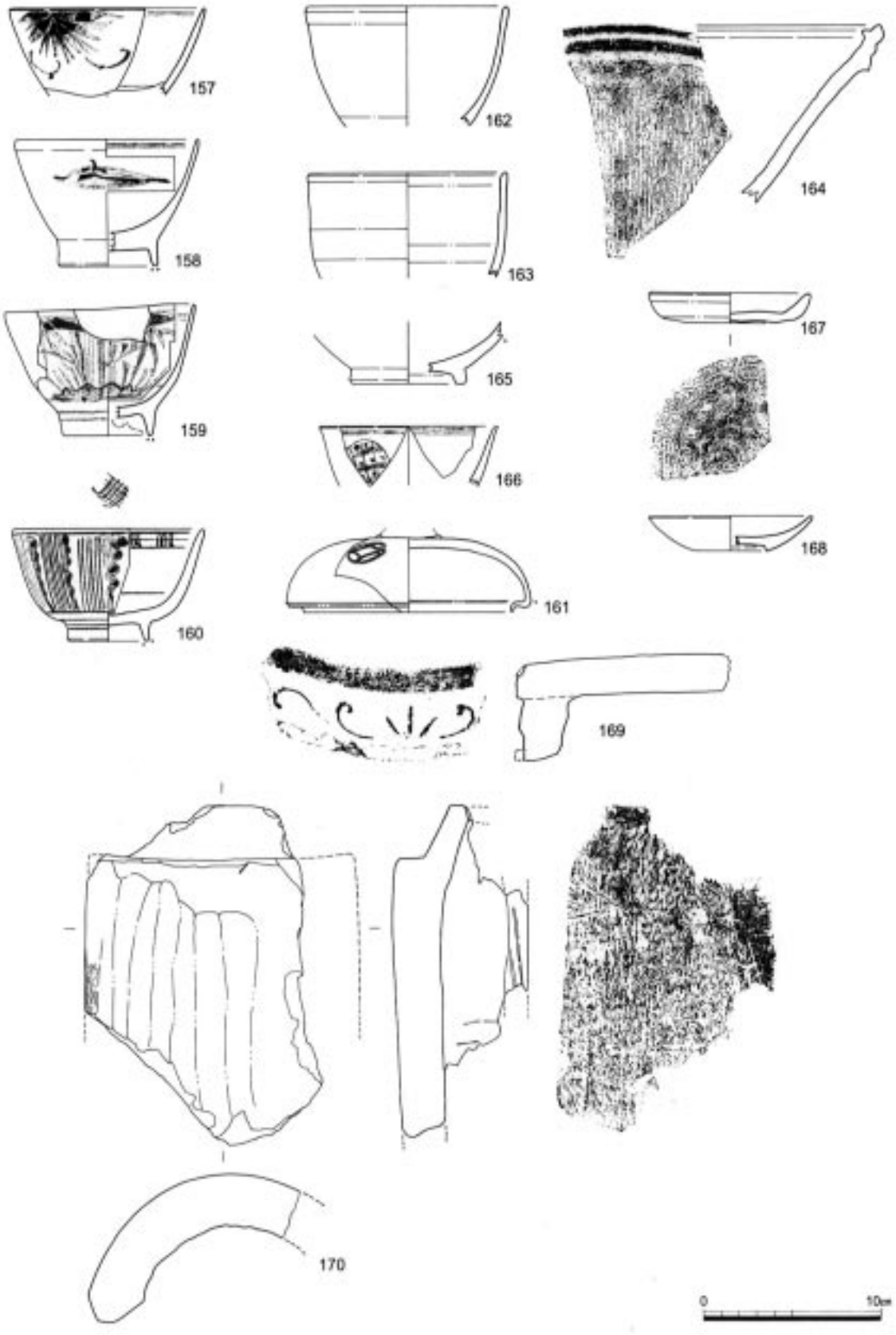
擂り鉢（164）

10 条の擂り目を持つ器壁の薄い擂り鉢で，生産年代は 17 世紀頃である。

ｇ．瀬戸・美濃産陶器

碗（165）

灰釉の碗で，生産年代は近世である。


157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
0
10cm

第80図　ＳＤ６構内出土遺物（2）（Ｓ＝1：3）

丸文が描かれた端反の碗で，生産年代は幕末頃である。

ｉ．土師質土器

皿（167・168）

167　左回転の糸切り底を持つ皿である。内面には指頭によるナデ痕跡が螺旋状に残る。

168　碁笥底を持つ皿である。胎土は精緻であるが，焼成は不良気味である。

ｊ．瓦質土器

釜（214）

丸く張った体部を持つ釜で，ＳＫ４出土の破片と接合する。体部に２つの取手が付く。口縁部は内湾する体部から屈曲し，垂直にのびて終息する。外面には粘土の貼り付けによる格子状の文様と，径２mm程度の粒状の文様が施されている。全体のモチーフから金属製の釜を模したものと考えられる。

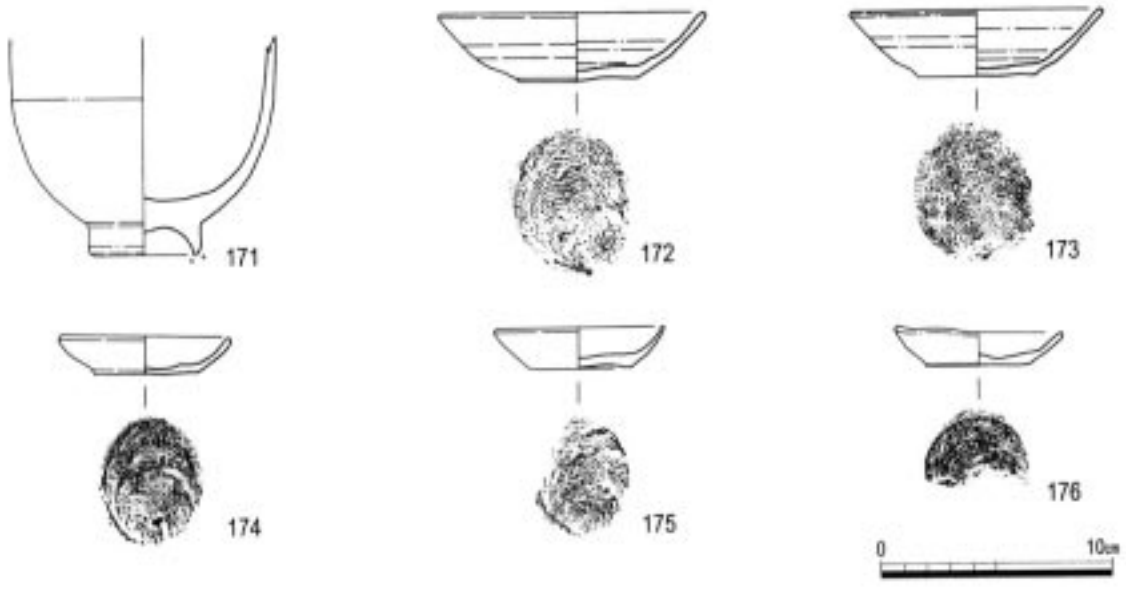
ｈ．瓦

軒平瓦（169）

中心飾りは三弁の花文で，脇に二葉の唐草文が残る。瓦当外縁上端面は大きく面取りされる。瓦当内の平担面はていねいにナデが施される。平瓦部上面の調整は横方向のナデ，下面の調整は縦方向のナデである。瓦当裏，平瓦部との接合部には，指頭による凹線が残る。

丸瓦（170）

色調は薄灰色である。凸面は，縦方向に磨かれている。側面及び胴部凹面側縁はヘラナデ



第81図　ＳＤ６平坦面下出土遺物（Ｓ＝1：3）

平坦面下出土遺物[第 81 図・図版 74]

ａ．肥前陶器

碗（171）

黄白色の胎土を持つ呉器手腕で，生産年代は 17 世紀である。

ｂ．土師質土器

皿（172 ～ 176）

口径から大小２つに大別できる。172・173 は大型で，口径は 172 が 10.6cm，　173 が 10.8cm である。174 ～ 176 が小型で，口径は 174 が 7.2cm，175 が 7.1cm，176 が 7.1cm である。いずれもロクロ成形で内面に螺旋状ないし，同心円状の成形痕が残る。体部は薄く直線的にのびる。口縁端面は内・外面の調整のためわずかに凹状を呈する。底部は同転糸切り底で，いずれも右回転である。

ＳＤ７[第 78 図・図版 60 ｄ，61 ｄ]

Ｘ 48 ～ 49 間に位置する。「研屋町口御門」の東端に位置する石組み側溝で，ＳＢ５西面石垣沿いに面を東に向ける石積みの側壁を構築し，溝として機能させている。側壁中央部には暗渠ＳＤ 10 が開口する。本遺構の北東には石組みの溝ＳＤ８が存在する。ＳＤ８は本遺構の延長線上からははずれるが，本遺構に接続していた可能性がある。

遺存状況は良好で，ＳＢ５西面と同程度残存していたと考えられるが，北半部は下端まで確認できなかった。北側へはさらに延長していたと考えられるが，消失しており，端部は確認しえていない。南はＳＢ５南西角において開口する。

長さは 9.4 ｍ，幅は 0.35 ～ 0.5 ｍである。積石の規模は，南半部，北半部とでは異なる。北半部では，上部に幅 30 ～ 80cm，高さ 15 ～ 45cm の切石が使用される。下部は未確認である。南半部は幅 40cm 前後の小さな自然石が使用される。積み方は北半部が布積みで，南半部ま乱積みである。

遺物は，構内から陶磁器が多数出土したほか，土師質土器，瓦，金属器が出土した。ここでは，図化できるものを抽出し，報告する。

出土遺物[第 82，83 図・図版 74 ～ 75]

ａ．肥前産陶器

碗（177）

刷毛目の碗で，生産年代は 18 世紀前半である。

皿（178）

灰釉の溝縁皿の口縁部である。生産年代は 1600 ～ 30 年代である .

ｂ．肥前産磁器

染付碗（179 ～ 183）

179　外面に唐草を描く染付碗で，生産年代は 1610 ～ 30 年代である。

180　内面口縁部に四方　が描かれた青磁染付碗である。有田産と考えられ，生産年代は18世紀前半～中葉である。

181　見込に手書きの五弁花が，高台内に「福」字の銘が描かれた青磁染付で，生産年代は18世紀中葉～末である。

182　やや焼成不良の青磁染付碗である。広瀬向窯産と考えられ，生産年代は18世紀後半である。

183　二重網目文の染付碗で，生産年代は18世紀後半頃である。

染付皿（184・185）

184　削り出しによって成形された低い輪高台を持つ染付皿である。高台内は高台高に比べ深目に削り込まれている。畳付は無釉で，有台内は施釉される。畳付及び高台内には多量の砂が付着する。見込の文様は目の字鳳　文である。生産年代は1640～50年代である。

185　見込が蛇の目釉剥ぎされた染付皿で，全体的に歪んでいる。高台内には砂が付着する。波佐見産と考えられ，生産年代は18世紀中葉～末である。

瓶 or 油壷（186）

白磁か染付の袋物で，瓶か油壺と思われる。生産年代は17世紀末～18世紀中葉である。

ｃ．肥前系磁器

染付碗（187・188）

187　外面に蝶の文様が描かれた端反の染付碗で，生産年代は1820～60年代である。

188　見込みが蛇の目釉剥ぎされた端反の染付碗で，生産年代は1820～60年代である。

ｄ．備前座焼き締め陶器

鉢（189）

底部からＬ字状に体部が立ち上がる筒型の深鉢である。生産年代は不明である。

ｅ．堺産焼き締め陶器

擂り鉢（190）

９条の擂り目を持つ。生産年代は18～19世紀である。

ｆ．瀬戸・美濃産磁器

染付碗（191）

丸文の描かれた染付碗で，生産年代は幕末頃である。

ｇ．瀬戸・美濃系陶器

碗（192・193）

192　円盤状を呈する高台の被片で，天目碗のものと考えられる。高台内は浅くヘラ削りされ，無釉である。見込の釉薬は鉄釉である。生産年代は16～17世紀と考えられる。

193　腕の底部である。高台は円盤状に削り出される。高台内は浅く削り込まれ，無釉である。生産年代は近世である。

ｈ．土師質土器

土鍋（194～196）

194　内耳の土鍋の口縁部である。体部の傾斜から，口径に対して器高は低いと考えられ

る。口縁部は外下方へ緩やかに折り返し，丸く終息する。口縁端部は若干肥厚し，面取り気味におさめられる。外面には指頭圧痕が残る。

195　内耳の土鍋の口縁縁部である。体部の傾斜から，口径に対して器高は高いと考えられる。口縁部は内湾する外方へ屈曲し，水平にのび，肥厚して終息する。口縁端部は丸くおさめられる。内耳への移行は直線的で，穴は２つ斜めに穿たれている。

196　内耳の土鍋である。体部の傾斜から，口径に対して器高は低いと考えられる。口縁部は体部から水平方向に屈曲し，水平にのび，肥厚し終息する。口縁端部は面取気味におさめられ，端面は垂直に近い。口縁部から内耳への移行は直線的で，穴は２つ斜めに穿たれている。

焙烙（197）

器壁が厚く丸底の焙烙である。底部と体部との境界は明瞭でなく，口縁部は肥厚し，丸く終息する。外面及び内面の器表には煤が付着する。内面には市ナデの痕跡が残る。

ｉ．瓦

軒丸瓦（198・199）

198　文様は左巻きの三巴である。連珠の数は14個で，上端は平滑に仕上げられる。巴の長さは64.4％で，頭部はやや小振りで，頭部径と首幅の差が小さい。やや湾曲する瓦当の厚さは，外縁部を除いて均一である。胎土は密で，色調は暗灰色，焼成は良好である。

199　文様は左巻きの三巴である。連珠の数は推定12個で，上端は平滑に仕上げられる。巴の長さは41.7％で，頭部の径は大きく，上面はやや平滑である。頭部径と首幅の差は小さい。瓦当の厚さは，ほぼ均一である。胎土は樒で，色調は暗灰色，焼成は良好である。

軒平瓦（200）

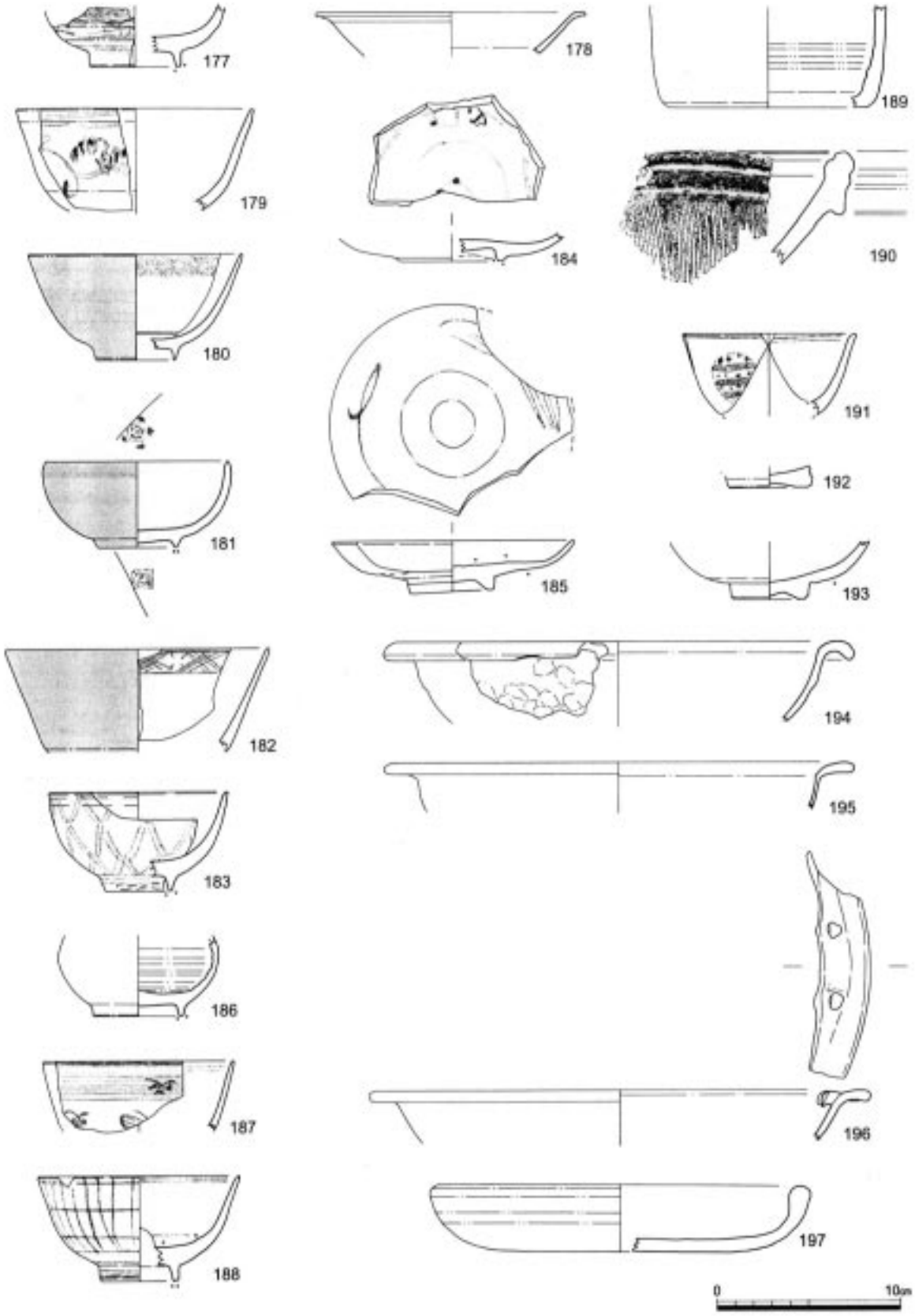
中心飾りは，下方に開く三葉の竹で，脇に二葉の唐草文が残る。瓦当内はていねいにナデが施される。平瓦部上面の調整は横方向のナデ，下面の調整は縦方向のナデである。

ｊ．金属製品

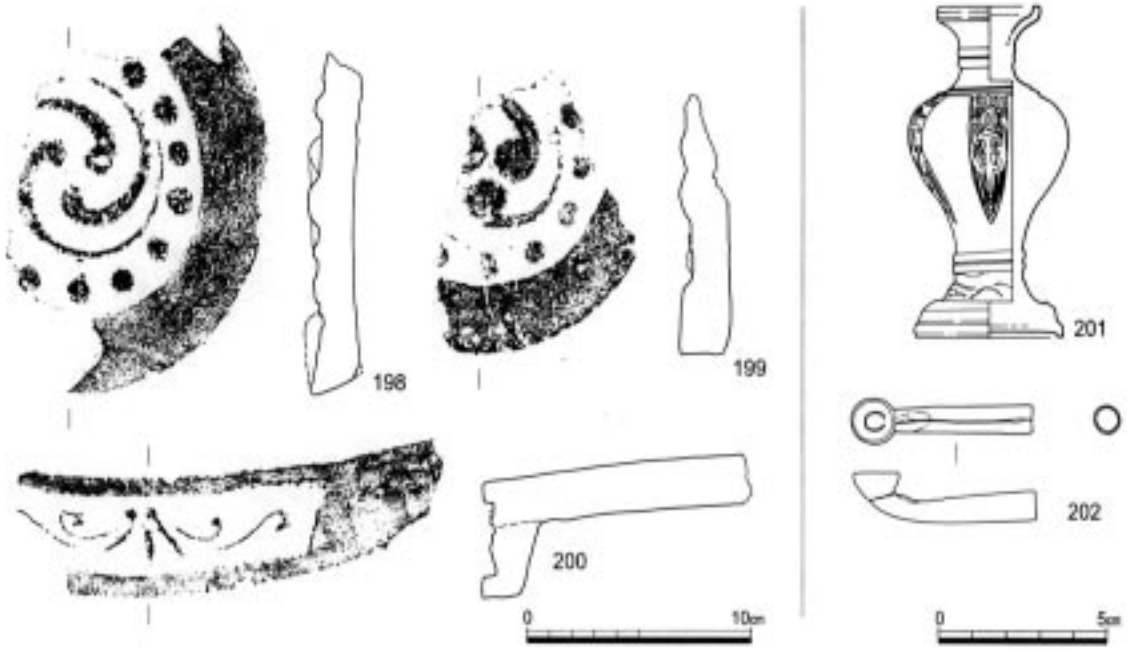
花入（201）

鋳物の花入である。欠損部分があるが，ぽぼ完形である。３分割の合わせ型で制作されている。

雁首（202）


177
178
189
179
184
190
180
191
181
192
185
193
182
194
195
183
186
196
187
197
188
0
10cm

第 82 図　ＳＤ７出土遺物実測図（1）（Ｓ＝１：3）



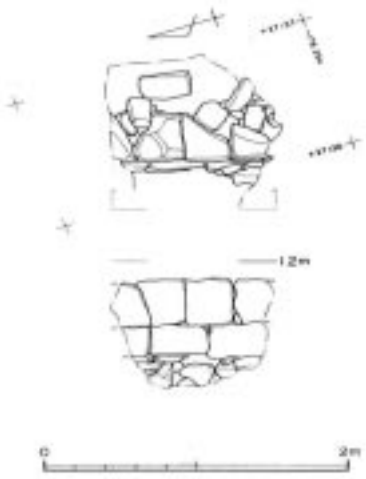
第 83 図　ＳＤ７出土遺物実測図（2）（Ｓ＝１：3，１：2）

ＳＤ８[第 84 図・図版 60 ｃ]

Ｘ 48 ～ 49 間，ＳＤ４の北東に位置する石組みの溝である。西側の側壁は攪乱により消失しており，東側の側壁しか遺存していなかった。

上部は消失しており，築石は２段遺存する。下端は確認していない。確認した規模は，幅 0.7 ｍ，高さ約 0.9 ｍで，上端の標高は 1.07 ｍである。南北両方向へは，さらに延長している。築石は切石である。石垣の積み方は切込接の布積みで，基底部に礫を積み，その上に築石が据えられている。

本遺構からは遺物が出土していないため，時期は不明である。



第 84 図　ＳＤ８実測図（Ｓ＝１：50）

ＳＤ９[第 85 図・図版 62・63]

Ｘ 43 ～ 44 間，ＳＢ４からは西へ約 20 ｍに位置する。本遺構は，底面，両側面，蓋石の四面が石組みで築かれた暗渠である。ＳＶ 11 に開口部が築かれており，概ね南北方向に延びる。開口部の状況から，本遺構はＳＶ 11 と同時に築かれたと考えられる。

消失
掘り方
1.褐色土　2.粘質土　3.砂　4.沈澱土
204
203
砂質土
粘質土
砂
木質層
0
1
2m

第 85 図　ＳＤ９実測図（Ｓ＝１：60）

は割れており，溝内に落ちこんでいた。溝内には沈澱土と砂が充満していた。南側遺存部は北側よりも低いレヴェルまで攪乱が及んでおり，蓋石は消失していた。

北側遺存部の全長は 3.1 ｍ，全幅は 2.06 ｍ，溝の幅は 55 ～ 60cm である。蓋石上端の標高は 1.49 ｍである。南側遺存部の長さは 3.82 ｍ，全幅は 1.52 ｍ，溝の幅は 52 ～ 60cm である。ＳＶ 11 に築かれた開口部から北側遺存部北端までの距離は 11.55 ｍである。底面の標高は，北端が 0.81 ｍ，南端の開口部が 0.8 ｍである。

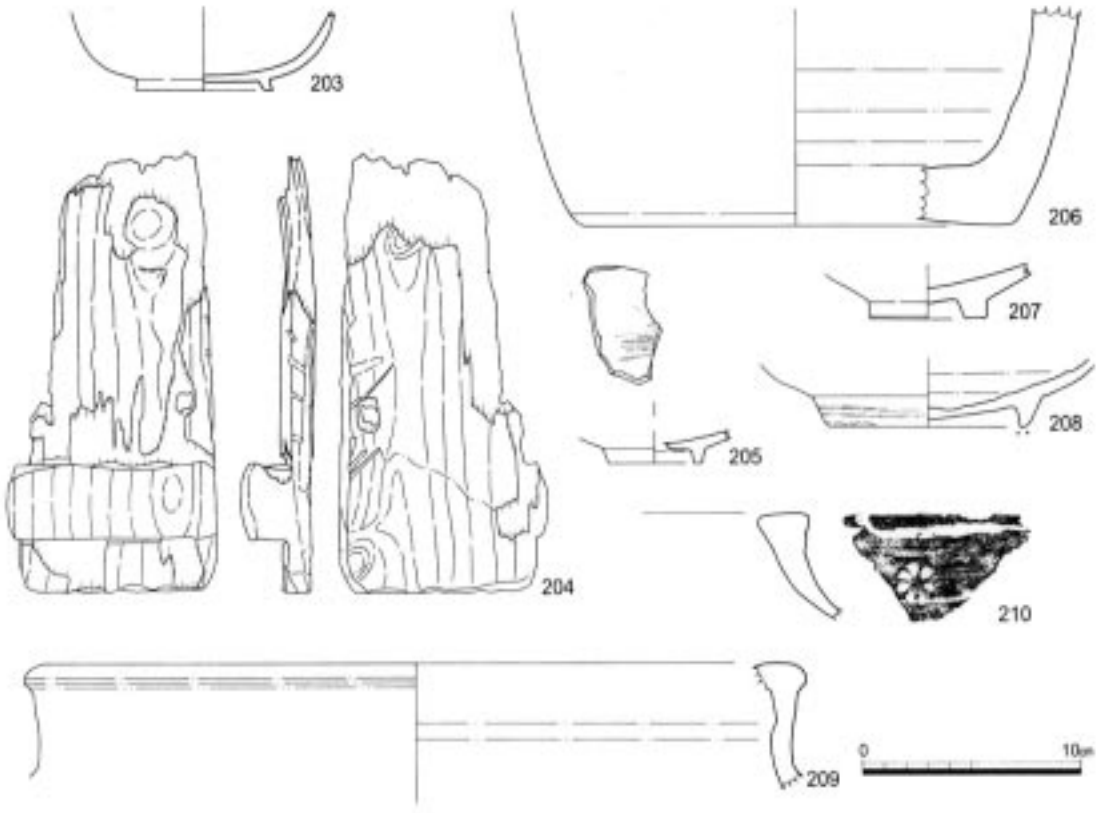
遺構内には沈澱土と砂が充満していた。

遺物は，南側遺存部の石材下砂質土層から漆器椀（203），下駄（204）が，北側遺存部溝内沈澱土層から肥前産陶器（205・206），肥前系磁器（207・208），中国地方窯産陶器（209），土師質土器（210）が出土した。

石材下砂質土層出土遺物[第 86 図・図版 76]

ａ．漆器

椀（203）



第 86 図　ＳＤ９出土遺物実測図（Ｓ＝１：3）

ｂ．木製品

下駄（204）

前歯及び前部が欠損した連歯下駄である。上面後方，かかとの当たる部分はやや凹む。上面には刃物による傷が残る。後歯に沿って鋸で溝引きした痕跡が残る。材質は杉科と考えられる。8)

溝内出土遺物[第 86 図・図版 76]

ａ．肥前産陶器

皿（205）

精緻な胎土を持つ京焼風の皿である。高台は断面台形，高台内は平滑である。小片で高台内に刻印は残っていなかったが，刻印のあるタイプと考えられる。見込の文様は山水文である。生産年代は 17 世紀である。

壺（206）

土灰釉がかけられた壺で，生産年代は 17 世紀代である。

火入れ（207）

厚目の高台を持つ火入れで，生産年代は 17 世紀後半～ 18 世紀である。

ｂ．肥前系磁器

瓶 or 大とっくり（208）

高台に二重圏線が描かれた瓶あるいは大とっくりである。生産年代は18世紀後半～幕末である。

ｃ．中国地方窯産陶器

壺 or 甕（209）

大型の壺あるいは甕の底部で，生産年代は 18 ～ 19 世紀と考えられる。

ｄ．土師質土器

壺（210）

外面に花の刻印が押され，１条の沈線が巡らされた壺の口縁部である。口縁部は，内湾しつつ上方へのび，断面三角形に肥厚する。生産年代は18世紀以降と考えられ，東広島市原で生産された可能性が高い。9)

ＳＤ 10[第 78 図・図版 61 ｂ]

Ｘ 47 ～ 49 間に位置する。「研屋町口御門」内を東西に横断し，ＳＤ６及びＳＤ７に開口する暗渠である。東側延長線上には，近代の溝ＳＤ 12 が連続する。

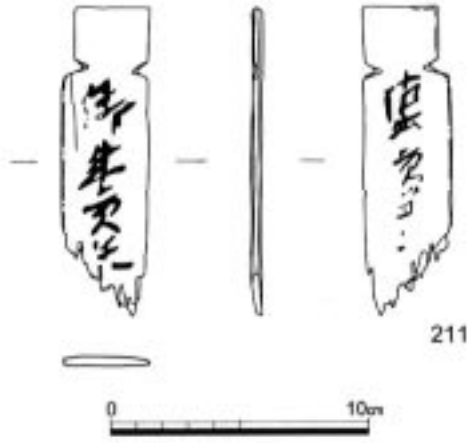
遺存状況はよく蓋石まで遺存していたが，遺構の大部分が路面電車軌道部に位置するため，平面的には蓋石の北端部しか確認できなかった。また，中央部は確認できなかった。開口部も下端まで確認できず，図化しえたのはＳＤ７側のみである。

長さは 8.86 ｍで，軸方向はＮ 108゜Ｅである。

本遺構では他の遺構との切り合い関係を明確は不明である。しかし，東側にＳＤ１２が連結ＳＤ11[第67図・図版64 ａ]

Ｘ47～48間に位置する。ＳＶ６の西側すなわち堀内側において面を東に向けＳＶ６と平行する石積を確認した。本遺構とＳＶ６との間には堀内と同様の沈殿土が堆積していたため，溝として機能していたと考えられる。長さは3.16ｍ，幅は0.5ｍである。石組み上端の標高は1.49ｍで，下端の標高は0.52ｍである。北へはさらに連続していると考えられるが，端部は確認しえなかった。軸方向はＮ21°Ｅである。

遺物は溝内から，近代の陶磁器のほか，木簡（221）が出土した。石組に伴って遺物が出土していないため時期は不明である。



第87図　ＳＤ11出土遺物実測図（Ｓ＝1：60）

出上遺物[第87図・図版76]

木製品

木簡（211）

長方形の材に切れ込みを入れた木簡である。切れ込みは上部２ケ所に残るが，欠損する下部にも入れられていた可能性がある。両面とも墨で文字が記されている。一方は墨痕が明瞭で「御年貢米」と判読できる。もう一方は，墨痕が薄く不明瞭であるが反対側と同様に「御年貢米口」と記されている。文言から年貢米に付けられた荷札と考えられる。「御年貢」という呼称は明治５年（1872）の地租改正以前に使用されたと考えられるため，遺物の年代は近世と考えられる。

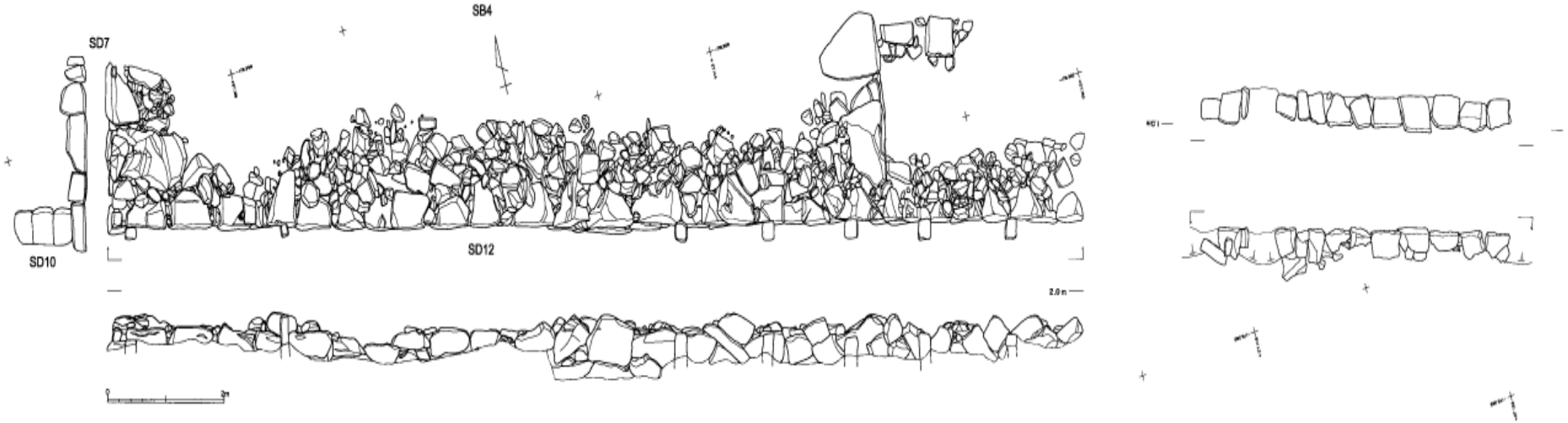
ＳＤ１２[第88図・図版64Ｂ]

Ｘ48～51間に位置する。ＳＢ５を概ね東西方向に貫く近代の溝である。西はＳＢ５西面石垣を切って，ＳＤ４へ達する。その延長線上には暗渠ＳＤ10が位置する。東へはＳＢ５の東11.9ｍの地点まで達するが，さらに延長していたと考えられる。長さは24.6ｍで幅は不明である。軸方向はＮ115°Ｅである。

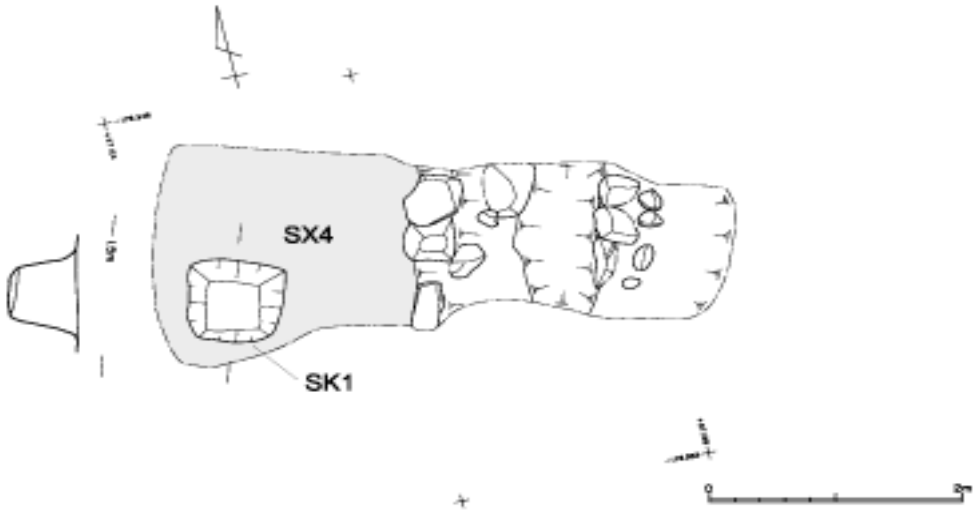
土坑

ＳＫ１[第89図・図版65 ａ，68 ａ]

Ｘ47～48間，ＳＸ４の南西部に位置する。平面形は方形で，断曲形は逆台形である。規模は南北約66cm×東西約66cm，深さは約50cmである。底面・壁面には淡黄褐色の漆喰が塗られていた。



第88図　SD12実測図（S＝1:60）



第 89 図　ＳＫ１，ＳＸ４実測図（Ｓ＝１：60）

ＳＫ２[第 78 図・図版 65 ｂ，65 ｃ]

Ｘ 47 ～ 48 間，「研屋町口御門」内に位置する。本遺構は土層確認のためＳＢ４とＳＢ５の間を南北方向に断ち割った際に発見した。標高 0.15 ｍより上の造成土と考えられる土層を掘り込んで形成されている。上端面は覆工板が近接するため確認できなかった。そのため，実測図には，検出面最下端における掘り方の形状を図示した。

なお，図示できなかったが，検出面最下端では，礫の集積を確認した。

掘り方の断面形状は，逆台形である。検出面最下端における長径は 0.74 ｍ，短径は 0.66 ｍである。内部には礫と土砂が充満していた。

本遺構からは遺物は出土していないため，時期は不明である。

ＳＫ３[第 78 図・図版 66 ａ]

Ｘ 48 ～ 49 間，「研屋町口御門」の南東，土橋ＳＸ２の付け根付近に位置する。ＳＢ４・ＳＢ５間を南北方向に断ち割った際に発見したため，西半部は消失している。南西部はＳＫ２によって切られている。

平面形は残存部からいびつな円形と推定される。断面形は逆台形である。上端面の径は 1.78 ｍ，底面の径は 0.95 ｍ，深さは約 0.4 ｍである。

覆土は砂で，覆土中から遺物は出土しなかった。

本遺構の時期は，遺物が出土していないため不明であるが，遺構上端面の上に造成土と考えられる土層がひろがっていることから，城門の整備段階以前である可能性がある。なお，

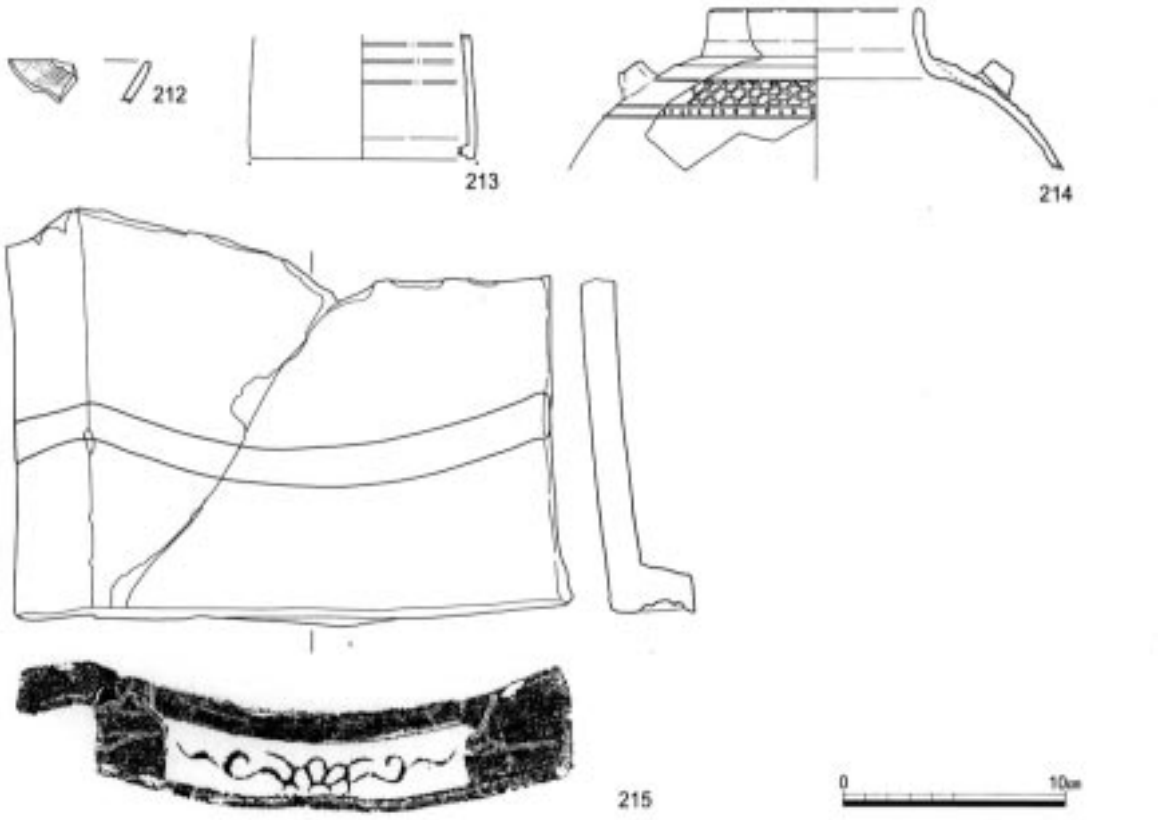
覆土が単一の砂層であるため，人為的に埋められた可能性がある。

ＳＫ４[第78図・図版66 ａ]

Ｘ47～48間,「研屋町口御門」の南東部，ＳＫ６の南東に位置し，ＳＫ３を切って掘り込まれた土坑である。南は攪乱のため消失しているが，さらに延長していたと考えられる。平面形は残存部から隅丸長方形と推定される。

規模は南北約1.39ｍ，東西約1.03ｍ，深さ最大で約0.4ｍである。断面形は箱形である。覆土は沈澱土の単層である。

遺物は，覆土より肥前産磁器（212），関西系陶器（213），瓦質土器（214），底面直上から瓦（215）が出土した。遺物の生産年代から，本遺構の築造年代は18世紀後半以降と考えら



第90図　ＳＫ４出土遺物実測図（Ｓ＝1：3）

出土遺物[第90図・図版76]

ａ．肥前産磁器

染付碗（212）

内面に四方襷が描かれた青磁染付の口縁部の細片で，生産年代は18世紀後半である。

ｂ．関西系陶器

瓶（213）

底面外周部に高台が付く透明釉の瓶である。生産年代は18世紀～19世紀である。

ｃ．瓦質土器

釜（214）

丸く張った体部を持つ釜で，ＳＤ５出土の破片と接合する。体部に２つの取手が付く。口縁部は内湾する体部から屈曲し，垂直にのびて終息する。外面には粘土の貼り付けによる格子状の文様と，径２ｍｍ程度の粒状の文様が施されている。全体のモチーフから金属製の釜を模したものと考えられる。

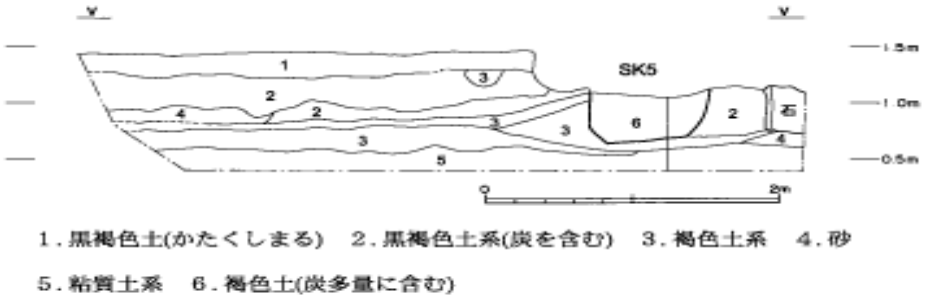
ｄ．瓦

軒平瓦（215）

桟瓦の軒平側である。瓦当の中心飾りは五弁の花，脇飾りは枝葉を持つ唐草である。胎土は１～３ mm大の砂粒を含む。雲母が多く含まれており，表面は光沢を持つ。

ＳＫ５[第91図・図版66 ｂ]

Ｘ50～51間，ＳＢ５の北に位置する。近接する埋設管のため平面形状は確認できず，土層断面観察によって掘り方を確認した。断面形は逆台形と考えられ，深さは最大で45cmである。



第91図　ＳＫ５実測図（Ｓ＝1：60）

井戸

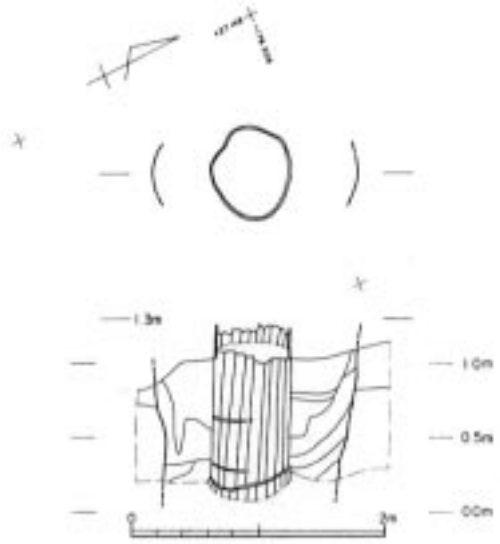
ＳＥ２[第92図・図版67 ａ]

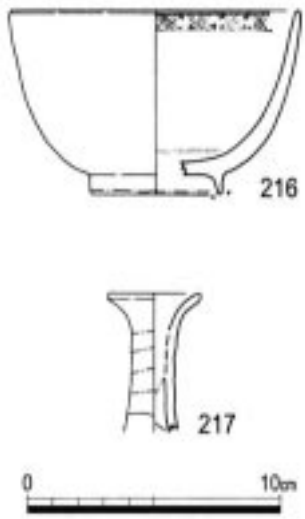
Ｘ50～51間，ＳＢ５の北東約4.5ｍに位置する。円筒形の井側を有する井戸で，井側の側面が半分程度露出した状態で発見した。井側は２段分遺存していることを確認したが，掘削深度の制限のため下端まで確認していない。又，掘り方は，平面的には確認しておらず，断面のみ確認した。

井側の形状は上から下に向かって広がる円筒形で，上段の井側は板目木材を竹製の箱で締めて作られている。上段の井側の高さは，約1.15ｍ程度で，上端部径は43cmである。上端

面における掘り方の径は，1.61 mである。下端は確認していないが，下段の井側の規模を上段と同程度と仮定すれば，標高 -0.9 m程度までは掘削されていると考えられ，その場合，湧水層はさらに下方であったと考えられる。

井側内には土砂が充満しており，その堆柏状況から人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は掘り方内から肥前産磁器（216）が，井側内の埋土から肥前産磁器（217）が出土した。





第 92 図　ＳＥ２実測図（Ｓ＝１：60）　　**第 93 図**　ＳＥ２出土遺物実測図（Ｓ＝１：3）

出土遺物[第 93 図・図版 77]

肥前産磁器

染付碗（216）

見込に五弁花，口縁部に四方襷が描かれた青磁染付碗である。内外面とも貫入が見られ，呉須の発色もやや不良である。生産年代は 18 世紀第２～第３四半期である。

瓶（217）

染付あるいは青磁の瓶の口縁部で，外面にはロクロ成形痕が残る。生産年代は１８世紀代である。

土橋

ＳＸ２[第 67 図]

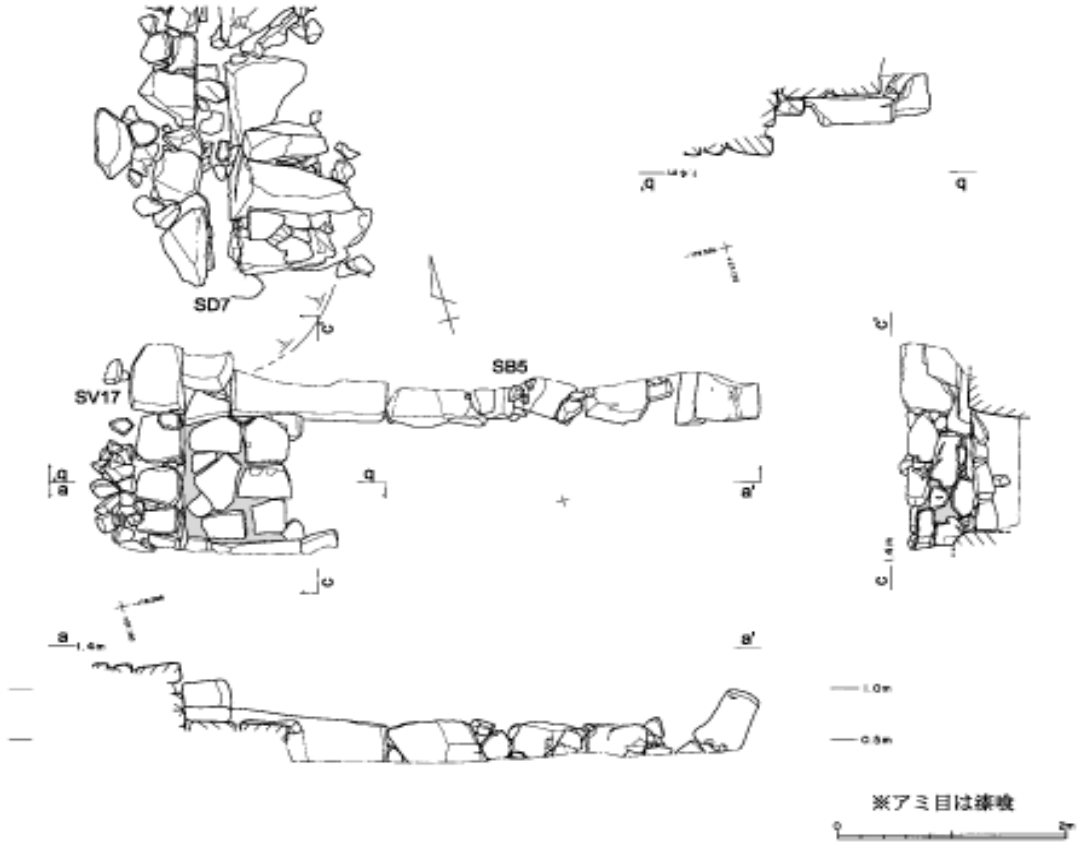
Ｘ 47 ～ 49 間に位置する。外堀に架けられた土橋で，「研屋町口御門」と城外を結ぶ土橋である。東西には護岸石垣ＳＶ 16，ＳＶ 17 を伴う。

本遺構は，平面全体の確認はできなかったが，ＳＶ 16 側からＳＶ 17 側に向けて東西方向に断ち割り，土層観察を行った。ＳＶ 16，ＳＶ 17 の位置関係から復元される土橋の幅は，約 9 ～ 9.4 mである。南北長は確認できなかった。

ＳＸ３[第94図・図版67ｂ]

Ｘ48～49間に位置する。本遺構は外堀ＳＤ３の北西角，ＳＶ16とＳＢ５南面に接合するよう構築された石敷きの平坦面で，ＳＢ５南面に平行し，かつＳＶ16に直交する石材との間に，上面が平滑な石材を配置して形成されている。隙間には漆喰が充填されている。湧水のため下端は確認できなかった。また，堀内に配置された石材の南端も確認しえていない。平面規模は南北1.2ｍ，東西１ｍで，上端面の標高は0.63～0.71ｍである。平坦面下端から堀底までは１ｍ近くの隔たりがあると考えられるが，石材直下には本遺構を支える構造物は存在せず，砂が堆積しているのみであった。

遺物は，石材下の砂層から中国製磁器（218），備前産焼き締め陶器（219），瀬戸・美濃産



第94図　ＳＸ３実測図（Ｓ＝1：60）

出土遺物[第95図・図版77]

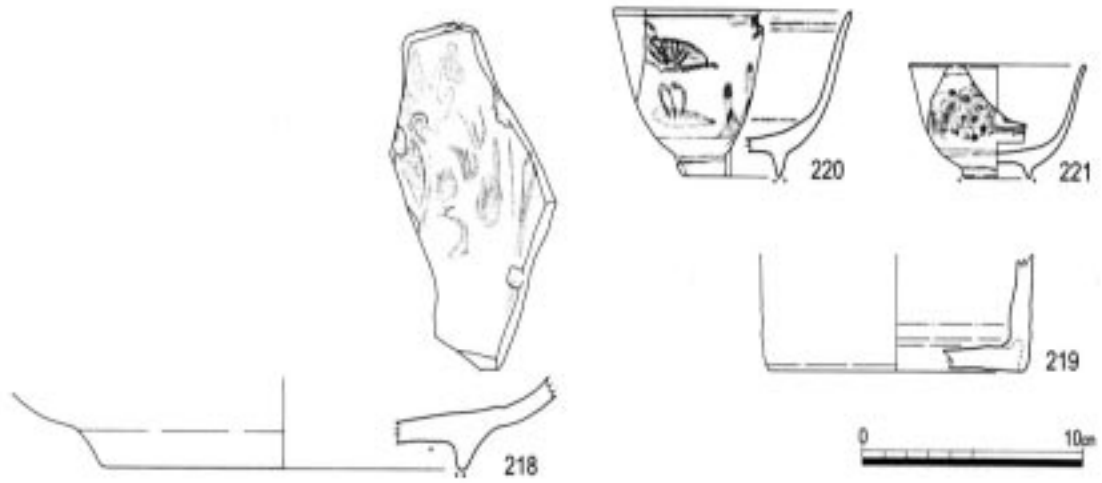
ａ．中国製磁器

色絵盤（218）

いわゆる呉須赤絵の盤の底部である。白化粧土がかけられ，その上に色絵書きされている。文様は鳳凰文である。高台内には焼成時に付着した砂が残る。二次焼成を受けており，器表の釉が溶け，土砂が付着している。　州窯産で，生産年代は16世紀末～1630年代である。

ｂ．備前産陶器

筒型深鉢（219）



第95図　ＳＸ３出土遺物実測図（Ｓ＝１：3）

ｃ．瀬戸・美濃産磁器

碗（220）

外面に山水文が描かれた端反碗である。生産年代は1820～60年代である。

ｄ．瀬戸・美濃系磁器

小坏（221）

端反の色絵小坏で，生産年代は幕末・明治である。

ＳＸ４[第89図・図版68 ａ]

ＳＢ４の北に位置する。本遺構は，硬く締まった平坦面を形成しており，南西部には，ＳＫ１が掘り込まれている。絵図では当該個所を通路として描いているため，本遺構は通路に関連する遺構と考えられる。断ち割り断面では，平坦面を形成する層の下において，砂と粘質土の互層となった三和土状の層を確認した。この層もある時期の路面と考えられる。さらに，その下層ではＳＸ４を確認した。したがって，本遺構はＳＸ４を埋めた後に，２度平坦面が構築されていると考えられる。

確認した規模は，東西約4.2ｍ，南北約２ｍであるが，東半部はトレンチを設けたため，図化したのは東西約２ｍ，南北約２ｍのみである。上端面の標高は約1.25～-0.09ｍである。下層の三和土状の層の上端の標高は0.98～1.07ｍである。南は埋設管のため消失していたが，

ＳＢ４まで延長していたと考えられる。また，北へもさらに延長していると考えられる。東へもさらに延長していると考えられるが，埋設管のため確認できなかった。

遺物は出土しなかったため，本遺構の時期は不明である。

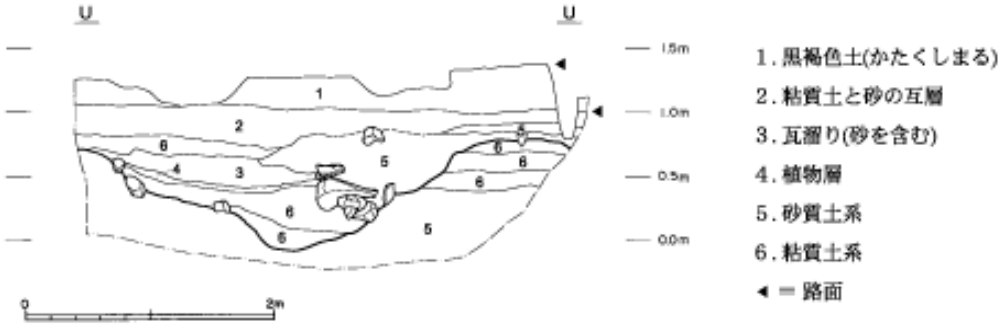
ＳＸ５[第96図・図版68 ｂ]

Ｘ47～48間，ＳＢ４の北に位置する。平面的には明確にしえなかったが，土層断面において瓦片の集積とレンズ状の掘り方を確認した。木遺構はＳＸ３の下方に形成されており，ＳＸ４に先行する。

幅は約1.6ｍ，高さは約0.3ｍである。掘り方上端の標高は0.89ｍ。下端の標高は-0.09ｍである。掘り方内には瓦片の集積を確認した。

本遺構は西側側溝よりも下位の上層に掘り方が掘り込まれていたため，西側側溝に先行する遺構と考えられる。

遺　　，木製品



第96図　ＳＸ５実測図（Ｓ＝1：50）

出土遺物[第97図・図版77・78]

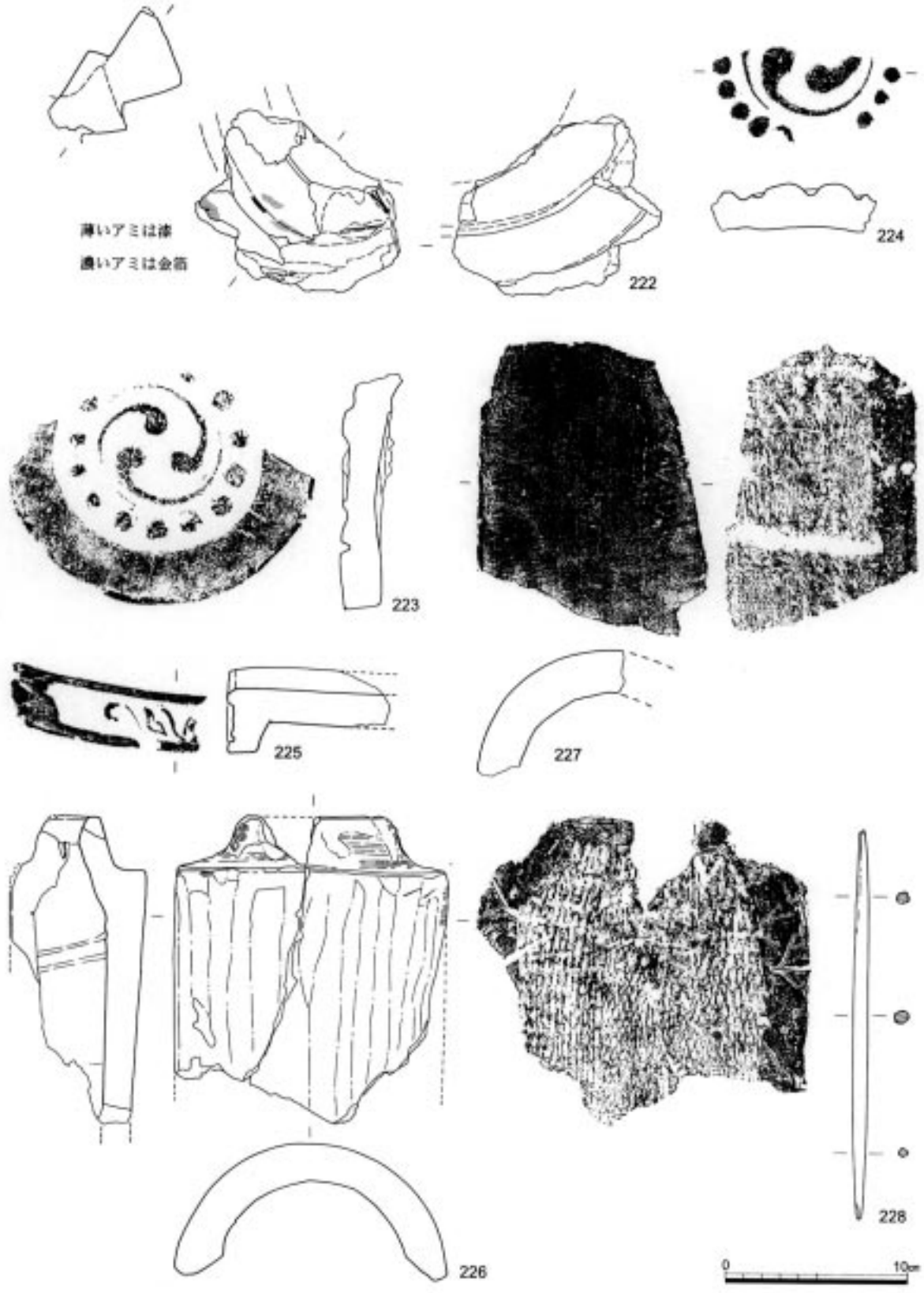
ａ．瓦

鯱瓦（222）

鯱瓦の胸鰭，あるいは鬼瓦に付く鰭状の飾りの破片と思われる。器表に赤い漆と金箔が残存する。遺存部は図面右から左上方に向かって先細りになっており，尖り気味に終息すると考えられる。本体との接合部は図面下側である。現状で金箔が良好に遺存する面が表側と推測される。反対側の面
にも若干金箔が残る。

軒丸瓦（223・224）

223　周縁部が広めの左巻きの巴文の瓦である。巴の長さは48.9％，頭部は首幅に対して大きめて，上端は平滑に仕上げられる。連珠数は14個で，形状は不揃いである。瓦当の厚みは



第97図　ＳＸ５出土遺物実測図（Ｓ＝１：3）

掘り方出土の軒丸瓦（119）と同笵である。

224　文様は左巻きの巴文である。巴部の上半分のみの破片である。残存部から推定される連珠数は20，巴の長さは50.0％である。巴の頭部は大きめで丸く盛り上がる。また，連珠も盛り上がっている。瓦当裏は左右のナデが施される。

軒平瓦（225)

中心飾りは不明であるが，三葉の唐草文を持つ。平瓦部上面は縦方向の調整を，横方向のナデで消している。

丸瓦（226・227）

226　玉縁に近い部分の破片である。色調は薄橙褐色である。丸瓦凸面には縦方向の磨きが施されている。また，図示しえなかったが，鋭利な刃物による縦方向の筋目が残る。凹面には細か布目と吊り紐痕跡が残る。

227　色調は濃橙褐色である。丸瓦凸面には縦方向の磨きが施されている。凹面には粗い布目と吊り紐痕跡が残る、

ｂ．木製品

箸（228）

断面形状が概ね円形で，上下両端とも細く整形されている。表面が磨耗しているため加工痕跡は不明確である。長さ20.9cm，最大径0.8 mある。

注

1．陶磁器の生産地及び生産年代の同定は佐賀県教育庁文化財課，大橋康二氏のご教示による。

2．上田秀夫「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年の予察」『関西近世考古学研究Ⅰ』1991年

3．小林謙一「江戸在地系土器と江戸出土土師質塩壷類の編年（要旨)」「シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題発表要旨資料集』，江戸陶磁器研究グループ。1996年

4．森田克行　昭和59.3「高槻市文化財調査報告書第14冊　摂津高槻城　本丸跡壁掘調査報告書」p.p140，高槻市教育委員会

5．広島県立歴史博物館，下津間康夫氏のご教示による。

6．森田勉　「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究№２』1982年

7．古泉弘『江戸を掘る』柏書房1984年

8．広島市植物公園　世躍徹哉氏，官本和弥氏のご教示による。

9．財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター，立川敏之氏のご教示による。

第10表　東調査区出土遺物観察表　陶磁器

No.	出土遺構	出土位置・層位	器種	口径	底径	器高	釉薬	文様	素地	胎土	焼成	備考	産地	生産年代
101	SV11	SR11－12 石垣埋め戻し層	染付 碗	－	4.8	－	内 透明釉 外 透明釉	見込に蓮弁文、ほら貝 高台に二重圏線	乳白色	精緻	良好	饅頭心。畳付無釉。高台内及び畳付に砂付着。上田編年C－V類	中国（漳州窯系）	1590～1630
102	SV11	SR21-22 石垣前砂層	陶器 壺	－	－	－	内 無釉 外 －	－ －	濃紫色	精緻	良	外面には鉄漿が塗られる。内面にはロクロ成形痕が残る	ベトナム	16～17世紀か
103	SV11	SR18－19 石垣前砂層直上	陶器 碗	－	4.2	－	内 灰釉 外 灰釉	－ －	薄紫褐色	精緻	良好	砂目。高台内に砂塊付着。内面に渦巻き状のロクロ成形痕。外面はヘラ削り痕顕著	肥前	1600～30
107	SV12	SR41-42 木材直上砂層	染付 碗	－	4.7	－	内 透明釉 外 透明釉	見込に草花 高台に二重圏線	乳白色	精緻	良好	高台内に砂付着	中国（漳州窯系）	1590～1630
108	SV12	SR41-42 木材直上砂層	染付 皿	－	－	－	内 透明釉 外 透明釉	花弁 口縁部に二重圏線	白色	精緻	良好		肥前	1630～60
110	SV15	断面a 粘質土	陶器 皿 or 鉢	－	(5.9)	－	内 鉄釉 外 鉄釉	－ －	灰色	緻密	良好	刷毛目。砂目	肥前	18世紀第２四半期～後半
111	SV15	断面b 粘質土	陶胎染付 火入れ	－	(5.4)	－	内 無釉 外 透明釉	圏線 －	濃褐色	緻密	良好	陶胎染付。胎土は灰色	肥前	18世紀前半
112	SV15	X40付近	磁器 仏飯器	－	3.3	－	内 透明釉 外 透明釉	－ －	灰白色	精緻	良好	白磁か染付。高台内浅く平滑。畳付に少量の砂付着	肥前	18世紀代
113	SV15	X40付近 黒灰色粘質土	焼締め陶器 擂り鉢	(32.5)	－	－	内 － 外 －	－ －	赤褐色	密	良好	擂り目８条	堺か	18～19世紀
116	SV16	２次調査第１区 裏込め	焼締め陶器 擂り鉢	－	(13.0)	－	内 － 外 －	－ －	暗赤褐色	密	良	擂り目10条	備前	17世紀
117	SV16	２次調査第３区 裏込め	陶器 土瓶	－	(7.0)	－	内 － 外 透明釉	－ －	黄白色	緻密	良	重ね積み痕跡有。外面すす付着	関西系	18世紀後半～19世紀
121	SB5	東面 築石間	陶器 皿	－	(7.9)	－	内 灰釉 外 灰釉	－ －	赤褐色	精緻	良好	砂目。露胎部赤褐色。胎土はごく少量の砂粒（0.5～３㎜大）を含む	肥前	1600～30
123	SB5	北面 築石間	陶器 皿	－	(7.5)	－	内 藁灰釉 外 藁灰釉	－ －	薄黄灰褐色	緻密	良好	中皿	福岡	17世紀初頭
128	SD2	SR１－４ 沈澱土	染付 皿	－	(12.6)	－	内 透明釉 外 透明釉	見込楼閣山水文、口縁部四方襷 －	白色	精緻	良好	つば皿。基笥底	中国（景徳鎮）	18世紀前半～中葉
129	SD2	SR35－36 沈澱土	磁器 瓶	－	(7.1)	－	内 無釉 外 透明釉	－ －	薄灰色	精緻	良好	外面細かい沈線が入る。高台内施釉。畳付無釉	肥前	1630～40
130	SD2	２次調査第１区 沈澱土層下砂層	陶器 碗	11.7	－	－	内 灰釉 外 灰釉	－ 植物か	淡赤褐色	緻密	良好		肥前	1590～1610
136	SD5	沈澱土	陶器 碗	－	5.1	－	内 透明釉 外 透明釉	見込山水文 －	薄黄灰色	緻密	良好	京焼風。見込が兜巾状に膨らむ	肥前or土佐尾戸	17世紀後半～18世紀初
137	SD6	掘り方	白磁 碗	(14.2)	－	－	内 白磁釉 外 白磁釉	－ －	薄黄灰色	精緻	良好	端反。森田編年E類	中国	16世紀
138	SD6	掘り方	陶器 皿	(13.2)	4	5	内 灰釉 外 灰釉	見込に植物文か －	橙褐色	精緻	良好	向付。胎土目。露胎部のヘラ削り跡は毛羽立つ	肥前	1590～1610
139	SD6	石材下	染付 皿	－	5.3	－	内 透明釉 外 透明釉	見込に蝶と二重圏線 －	灰白色	精緻	良好	七寸皿。高台畳付無釉かつ砂付着	肥前	1610～30
140	SD6	底部礫群中	染付 皿	－	－	－	内 透明釉 外 透明釉	口縁部二重圏線 口縁部二重圏線	灰白色	精緻	良好	口縁部の細片。上田編年A群	中国（景徳鎮）	1590～1630
141	SD6	溝内	染付 皿	(12.2)	6.8	2.9	内 透明釉 外 透明釉	見込に寿字文と圏線、口縁部四方襷 圏線	灰白色	精緻	良好	上田編年A－Ⅲ類。畳付無釉。高台内施釉	中国（景徳鎮）	1590～1630

No.	出土遺構	出土位置・層位	器種	口径	底径	器高	釉薬	文様	素地	胎土	焼成	備考	産地	生産年代
142	SD6	溝内	陶器	31.5	—	—	内 透明釉	—	褐色	細緻	良好	刷毛目	肥前	17世紀代
			碗 or 皿				外 透明釉	—						
143	SD6	溝内	陶器	—	4.3	—	内 透明釉	山水文	濃橙色	密	良	京焼風。見込にハマ跡3ヵ所。鉄絵はやや発色不良	肥前	18世紀 前半
			碗				外 透明釉	—						
144	SD6	溝内	陶器	—	—	—	内 灰釉	—	赤褐色	細緻	良好		肥前	16世紀末～1630
			皿				外 灰釉	—						
145	SD6	溝内	陶器	—	4.4	—	内 灰釉	—	濃褐色	緻密	良好	見込蛇の目釉剥ぎ。少量の砂付着	肥前	17世紀前半～中葉
			皿				外 灰釉	—						
146	SD6	溝内	陶器	(31.5)	—	—	内 灰釉	—	褐色	精緻	良好	刷毛目	肥前	18世紀代
			皿				外 灰釉	—						
147	SD6	溝内	陶器	最大径7.3	つまみ径1.3	2.3	内 鉄釉	—	橙褐色	細緻	良	回転糸切り底	肥前	17世紀前半～中葉
			蓋（壺）				外 鉄釉	—						
148	SD6	溝内	白磁	(14.6)	(5.7)	3.7	内 白磁釉	—	薄赤褐色	緻密	良好	見込に砂目2ヵ所。内面は細かな貫入あり。軸だまりあり	肥前	1610～30
			皿				外 白磁釉	—						
149	SD6	溝内	染付	(11.8)	—	—	内 透明釉	—	薄灰色	細緻	良	内・外面とも細かい貫入あり	肥前	1610～40
			碗				外 透明釉	不明						
150	SD6	溝内	磁器	—	(4.6)	—	内 透明釉	—	灰白色	細緻	良好	畳付無釉	肥前	17世紀後半
			碗				外 透明釉	—						
151	SD6	溝内	染付	10.6	4	5.3	内 透明釉	—	灰白色	細緻	良好	波佐見。こんにゃく印判。見込蛇の目釉剥ぎ。	肥前	18世紀前半～中葉
			碗				外 透明釉	菊						
152	SD6	溝内	磁器	—	—	—	内 透明釉	—	灰白色	細緻	良好	細片	肥前	1630～50
			皿				外 透明釉	草花						
153	SD6	溝内	染付	(12.3)	4.5	3.6	内 透明釉	—	灰白色	精緻	良好	見込蛇の目釉剥ぎ	肥前 波佐見	18世紀後半
			皿				外 透明釉	—						
154	SD6	溝内	染付	(7.6)	—	—	内 透明釉	—	薄灰色	細緻	良	こんにゃく印判	肥前	18世紀代
			小坏				外 透明釉	葉						
155	SD6	溝内	染付	5.6	2.2	2.4	内 透明釉	—	薄黄灰色	細緻	やや軟	高台畳付無釉	肥前	18世紀後半
			小坏				外 透明釉	氷裂文						
156	SD6	溝内	染付	1.8	3.7	9.8	内 無釉	—	白色	細緻	良好		肥前	18世紀後半
			瓶				外 染付	松竹梅・宝珠						
157	SD6	溝内	染付	(10.8)	—	—	内 透明釉	口縁部に二重圏線	灰白色	細緻	良好	広東碗	肥前系	1780～19世紀前半
			碗				外 透明釉	不明						
158	SD6	溝内	染付	(10.1)	6.8	(5.4)	内 透明釉	見込に五弁花か？、口縁部二重圏線	灰白色	細緻	良	広東碗	肥前系	19世紀前半
			碗				外 透明釉	不明						
159	SD6	溝内	染付	(10.5)	7	4.9	内 透明釉	口縁部に二重圏線	薄灰色	細緻	良	広東碗	肥前系	19世紀前半
			碗				外 透明釉	竹、口縁部に二重圏線						
160	SD6	溝内	染付	10.5	4.6	6	内 透明釉	不明	薄橙褐色	細緻	良	端反碗。畳付釉剥ぎ。高台内施釉	肥前系	1820～60
			碗				外 透明釉	不明						
161	SD6	溝内	染付	最大径13.8	口径11.7	—	内 透明釉	—	薄乳白色	細緻	良	ノシ状の取手が付く	肥前系	18世紀後半～19世紀前半
			蓋				外 透明釉	不明						
162	SD6	溝内	陶器	(11.1)	—	—	内 透明釉	—	黄白色	密	良		肥前系か	17世紀か
			碗				外 透明釉	—						
163	SD6	溝内	陶器	(10.9)	—	—	内 灰釉	—	黄白色	緻密	良		肥前系か	17世紀か
			碗				外 灰釉	—						
164	SD6	溝内	焼き締め陶器	—	—	—	内		濃赤褐色	密	良	口縁部外面に二重の沈線	備前系か	17世紀頃
			擂り鉢				外 —	—						
165	SD6	溝内	陶器	—	(6.2)	—	内 灰釉	—	薄黄灰色	密	良		瀬戸・美濃	近世
			碗か				外	—						

No.	出土遺構	出土位置・層位	器種	口径	底径	器高	釉薬	文様	素地	胎土	焼成	備考	産地	生産年代
166	SD6	溝内	染付	(9.8)	—	—	内 透明釉	—	黄灰色	細緻	良		瀬戸・美濃系か	幕末頃
			碗				外 透明釉	丸文						
171	SD6	SR33−34 平坦面下砂層	陶器	—	4.9	—	内 透明釉	—	明黄白色	密	良	畳付無釉。呉器手	肥前	17世紀
			碗				外 透明釉	—						
177	SD7	溝内	陶器	—	(4.8)	—	内	—	濃紫色	精緻	良好	刷毛目	肥前	18世紀前半
			碗				外	—						
178	SD7	溝内	陶器	(14.4)	—	—	内 灰釉	—	淡灰色	細緻	良好	溝縁皿。砂目	肥前	1600〜30
			皿				外 灰釉	—						
179	SD7	溝内	染付	(12.8)	—	—	内 透明釉	—	灰白色	細緻	良好		肥前	1610〜30
			碗				外 透明釉	唐草						
180	SD7	溝内	青磁染付	(11.7)	(4.2)	5.7	内 透明釉	口縁部に四方襷	白色	精緻	良好	有田か。青磁染付	肥前	18世紀前半〜中葉
			碗				外 青磁釉	—						
181	SD7	溝内	青磁染付	(9.9)	(4.3)	4.7	内 透明釉	見込に五弁花	白色	精緻	良好	青磁染付	肥前	18世紀中葉〜末
			碗				外 青磁釉	高台内に福						
182	SD7	溝内	青磁染付	(14.2)	—	—	内 透明釉	—	薄灰色	緻密	不良	広瀬向窯。内外面とも降灰のためにごった釉調	肥前	18世紀後半
			碗				外 青磁釉	口縁部に四方襷						
183	SD7	溝内	染付	(9.7)	(3.5)	5.3	内 透明釉	—	薄灰色	精緻	やや不良	畳付無釉。高台内施釉	肥前	18世紀後半頃
			碗				外 透明釉	二重網目文						
184	SD7	溝内	染付	—	—	5.4	内 透明釉	日の字鳳凰文	灰白色	精緻	やや不良	高台畳付に砂付着。細かな貫入あり。東南アジア向けの製品	肥前	1640〜50
			皿				外 透明釉	—						
185	SD7	溝内	染付	13	4.5	2.9	内 透明釉	—	灰白色	細緻	やや不良	波佐見か。蛇の目釉剥ぎ	肥前	17世紀 中葉〜末
			皿				外 透明釉	—						
186	SD7	溝内	磁器	—	4.8	—	内 透明釉	—	灰白色	精緻	良好	白磁か染付。畳付無釉、少量の砂付着。	肥前	17世紀 末〜18世紀中葉
			瓶or油壺				外 透明釉	—						
187	SD7	溝内	染付	(10.3)	—	—	内 透明釉	口縁部に二重圏線	薄灰色	細緻	良好		肥前系(地方窯)	1820〜60
			碗				外 透明釉	八重圏線，蝶						
188	SD7	溝内	染付	(10.9)	(4.0)	5.7	内 透明釉	口縁部に二重圏線	灰白色	細緻	良好	端反碗。見込蛇の目釉剥ぎ	肥前系(地方窯)	1820〜60
			碗				外 透明釉	不明						
189	SD7	溝内	焼き締め陶器	—	(10.7)	—	内 —	—	濃茶色	密	良好		備前	
			筒型深鉢				外 —	—						
190	SD7	溝内	焼き締め陶器	—	—	—	内	—	赤褐色	緻密	良好	擂り目９条	堺	18・19世紀
			擂り鉢				外	—						
191	SD7	溝内	染付	(9.2)	—	—	内 染付	—	薄灰色	緻密	良好	文様部分盛り上がる	瀬戸・美濃	幕末頃
			碗				外	丸文						
192	SD7	溝内	陶器	—	4.2	—	内 鉄釉	—	薄褐色	細緻	良好	高台部のみ遺存。高台無釉。見込に釉溜まりあり	瀬戸・美濃系か	16・17世紀
			碗				外	—						
193	SD7	溝内	陶器	—	3.9	—	内 透明釉	—	灰色	緻密	良好	高台内へら削り	瀬戸・美濃系か	近世
			碗				外 透明釉	—						
205	SD9	暗渠沈澱土	陶器	—	(4.2)	—	内 無釉	見込に山水文	薄黄白色	精緻	良好	京焼風。刻印のあるタイプ	肥前	17世紀
			皿				外 透明釉	—						
206	SD9	暗渠沈澱土	陶器		(35.9)	—	内 土灰釉	—	暗黒灰色	緻密	良	焼むらあり	肥前	17世紀代
			壺				外 無釉	—						
207	SD9	暗渠沈澱土	陶器	—	5.2	—	内 無釉	—	薄褐色	緻密	良		肥前系	17世紀後半〜18世紀か
			火入れ				外 無釉	—						
208	SD9	暗渠沈澱土	磁器	—	8.8	—	内 無釉	—	灰色	精緻	良好	畳付釉剥ぎ	肥前系	18世紀後半〜幕末
			瓶 or 大とっくり				外 染付	高台に二重圏線						

No.	出土遺構	出土位置・層位	器種	口径	底径	器高	釉薬		文様	素地	胎土	焼成	備考	産地	生産年代
209	ＳＤ９	暗渠 沈澱土	焼き締め陶器 壺 or 甕	－	(19.0)	－	内 外	 －	－ －	暗褐色 暗赤褐色	密	良好		中国地方（地方窯）	18・19世紀
212	ＳＫ４	覆土	青磁染付 碗	－	－	－	内 外	透明釉 青磁釉	口縁部に四方襷 －	薄灰色	精緻	良好		肥前	18世紀後半
213	ＳＫ４	覆土	陶器 瓶	－	(10.2)	－	内 外	透明釉 －	－ －	黄灰色	緻密	良		関西系	18世紀～19世紀
216	ＳＥ２	掘り方	青磁染付 碗	(11.2)	6.2	(5.1)	内 外	透明釉 青磁釉	見込に五弁花と二重圏線、口縁部に四方襷 －	薄灰色	緻密	良	青磁染付。発色不良	肥前系	18世紀第２・第３四半期
217	ＳＥ２	井側内 埋土	磁器 瓶	3.4	－	－	内 外	透明釉 透明釉	－ －	灰色	緻密	良好	染付か青磁	肥前	18世紀代
218	ＳＸ３	石敷下 砂層	磁器 盤	(16.6)	－	－	内 外	透明釉 色絵	鳳凰か －	灰色	緻密	良か	高台内に砂付着。白化粧土をかける。二次焼成をうける	中国（漳州窯系）	16世紀末～1630
219	ＳＸ３	石敷下 砂層	焼き締め陶器 筒型深鉢	－	(11.6)	－	内 外	－ －	－ －	紫褐色	密	良好	底部に重ね焼きの痕跡有り	備前	
220	ＳＸ３	石敷下 砂層	染付 碗	(8.8)	5.7	(4.4)	内 外	透明釉 透明釉	口縁部に二重圏線 山水文	乳白色	緻密	良好	高台内にも圏線。畳付無釉	瀬戸・美濃	1820～60
221	ＳＸ３	石敷下 砂層	染付 小坏	(8.0)	(3.1)	3.9	内 外	透明釉 色絵	－ －	乳白色	精緻	良好		瀬戸・美濃系	幕末・明治

第11表　東調査区出土遺物土師質土器・瓦質土器

No.	出土遺構	出土位置・層位	器種	口径	底径	器高	素地	胎土	焼成	備考
104	ＳＶ11	基底部	塩壺	(5.5)	3.1	8.4	橙褐色	密	良	板積み成形。小林謙一による江戸出土土師質塩壺類の編年Ⅱb期に相当
122	ＳＢ５	北面 築石間	皿	6.2	4.4	0.9	黒灰色	精緻	良好	右回転の回転糸切り底
124	ＳＢ５	東面 築石間	土鍋	(37.0)	－	－	薄褐色	密	良好	外面黒褐色、内面薄褐色
167	ＳＤ６	溝内	皿	(8.8)	(5.2)	1.6	薄褐色	密	良	1mm大の砂粒含む。雲母多量に含む
168	ＳＤ６	溝内	皿	(9.0)	(4.0)	1.9	黄灰色	緻密	良	碁笥底
172	ＳＤ６	ＳＲ33－34 平坦面下砂層	皿	(10.6)	5.1	2.4	肌色～薄褐色	密	良好	右回転の糸切り底
173	ＳＤ６	ＳＲ33－34 平坦面下砂層	皿	(10.8)	5.1	2.5	肌色～薄褐色	密	良好	右回転の糸切り底
174	ＳＤ６	ＳＲ33－34 平坦面下砂層	皿	7.2	4.4	1.4	肌色～薄褐色	密	良好	右回転の糸切り底
175	ＳＤ６	ＳＲ33－34 平坦面下砂層	皿	(7.1)	4.5	1.5	明褐色	密	良好	右回転の糸切り底
176	ＳＤ６	ＳＲ33－34 平坦面下砂層	皿	(7.1)	4.2	1.5	褐色	密	良	右回転の糸切り底
194	ＳＤ７	溝内	土鍋	(25.6)	－	－	暗褐色	密	良好	内面に炭化物付着。外面に指頭圧痕
195	ＳＤ７	溝内	土鍋	(25.6)	－	－	薄赤褐色	密	やや軟	
196	ＳＤ７	溝内	土鍋	(27.3)	－	－	薄灰色	密	良	内耳。つり穴が２つ穿たれる
197	ＳＤ７	溝内	焙烙	(20.0)	(12.0)	4.1	薄灰色	やや粗	良	底面は火を受けて薄橙褐色に変色
210	ＳＤ９	溝内 沈澱土	壺	－	－	－	明褐色	密	軟	中国地方窯。18世紀後半～19世紀。花のスタンプあり
214	ＳＫ４	覆土	釜	(9.1)	－	－	黒灰色	密	良好	外面に取っ手付く

第12表　東調査区出土遺物観察表　軒丸瓦

No.	遺構名	出土位置・層位	瓦当 径	瓦当 厚	文様区径	巴区径	周縁 幅	周縁 高	連珠 径	連珠 数	巴文 尾の角度	巴文 長(%)	巴文 頭径	巴文 距離	巴文 首幅	巴文 巻 方向	色調	胎土	焼成	備考
119	SB4	南掘り方 砂質土	(16.8)	2.4	(10.4)	(6.9)	3.2	0.5	1.3	(14)	—	—	1.8		1.0	左	黒色	密	やや不良	外面炭素が吸着し黒くなる。巴文の頭及び尾の上端面は平滑
129	SD2	SR28−29 沈殿土	14	2.2	(9.2)	4.3	2.7	0.6	1.2	(8)	145	40.3	0.9	1.5	0.7	左	暗灰色	緻密	良	
130	SD2	SR28−29 転石下	15.1	2.7	8.8	5.8	3.5	0.5	1.2	10	140	38.9	1.0	2.5	0.8	左	暗灰色	密	良	西白島・中堀・二の丸で類似例出土
198	SD7	溝内	(17.4)	2.6	(10.6)	7.3	3.4	0.6	1.3	(14)	232	64.4	1.4	1.7	1.2	左	暗灰色	密	良	
199	SD7	溝内	(16.5)	2.3	(10.2)	6.4	3.2	0.5	1.0	(12)	150	41.7	1.7	2.1	0.9	左	暗灰色	密	良	
223	SX5	掘り方 瓦だまり層	(17.3)	2.3	(11)	6.6	3.2	0.5	1.3	(14)	176	48.9	1.8	2.5	1.1	左	薄黒灰色	密	良	連珠の形状は不揃い。巴文の頭及び尾の上端面は平滑。瓦当面に赤い付着物あり
224	SX5	沈殿土	—	—	—	(7.0)	—	—	1.1	(20)	180	50.0	1.9	2.6	1.4	左	暗灰色	密	良	

第13表　東調査区出土遺物観察表　軒平瓦

No.	遺構名	出土位置・層位	上弧幅	弧深	下弧幅	厚さ	中心飾り	脇飾り	文様区幅 横	文様区幅 縦	外区 上	外区 下	脇区幅 左	脇区幅 右	外縁 高	顎 上厚	顎 下厚	顎 厚さ	全長	全幅	厚さ	尻部 弧幅	尻部 弧深	色調	胎土	焼成	備考
120	SB4	南掘り方 砂質土	—	—	—	—	—	唐草 (三葉)	—	1.9	—	1.1	—	4.7	0.7	3.1	2.4	3.5	—	—	—	—	—	黒灰色	精緻	良好	
169	SD6	溝内底部	—	—	—	5.1	三弁の花	唐草 (二葉)	—	2.6	2.0	0.6	—	—	0.4	2.9	2.3	3.4	—	—	2.0	—	—	薄灰色	精緻	良	胎土は微砂粒含む
200	SD7	溝内	—	—	—	4.6	三葉の笹か	唐草 (二葉)	—	2.8	0.7	1.0	—	5.2	0.6	2.9	1.7	3.1	—	—	2.0	—	—	薄灰色	密	良	
215	SK4	覆土	20.7	21.2	2.3	3.7	五弁の花(菊か)	唐草 (一葉)	13.2	2.3	1.4	0.6	4.9	3.2	0.3	2.0	1.5	2.4	—	25.4	1.5	—	—	黒灰色	密	良	桟瓦。1〜3㎜大の砂粒、雲母多く含む
255	SX5	掘り方 粘質土	—	—	—	2.5	—	—	—	—	1.0	0.6	2.4	—	0.3	2.4	1.5	1.9	—	—	1.8	—	—	黒灰色	精緻	良好	

第14表　東調査区出土遺物観察表　丸瓦

No.	出土遺構	出土位置・層位	全長	全幅	高さ	厚さ	玉縁 幅	玉縁 端面幅	玉縁 長さ	色調	胎土	焼成	備考
105	SV11	SR13−14 裏込め粘質土	—	—	6.9	2.8	(12.0)	—	—	薄橙灰色	1㎜大の砂粒を多く含む	やや軟	凸面器表の剥離が著しい。凹面には目の粗い布目痕跡が残る
109	SV12	SR41−42 石垣前杭根元	—	—	7.4	1.6	(12.0)	(8.0)	3.1	黒灰色	精緻	やや軟	凹面にヘラによる掻き取り痕跡残る
114	SV15	SR15 石垣下砂層	—	—	7.5	2.5	(11.8)	8.0	3.7	薄灰色	密。1〜3㎜大の砂粒を多く含む	良好	スサ状の植物痕あり
118	SV16	2次調査1区 裏込め	—	—	—	1.7	—	—	2.3	薄橙褐色	1〜3㎜大の砂粒を多く含む	良好	凹面にヘラによる掻き取り痕跡残る
125	SB5	北面 築石間	—	—	—	2.1	—	—	2.6	薄灰色	密。1〜3㎜大の砂粒を多く含む	良好	コビキBか
126	SB5	北面 築石間	—	—	—	2.0	—	—	—	薄橙褐色	密。1㎜大の砂粒を多く含む	良好	コビキA
170	SD4	側溝内	—	(15.2)	7.5	2.7	(10.6)	—	2.8	薄灰色	密。1㎜大の砂粒を多く含む	良好	凹面に細かな布目残る
226	SX5	掘り方 瓦だまり層	—	—	—	2.3	—	—	—	薄橙色	1〜2㎜大の砂粒を多く含む	良好	凹面に吊り紐痕跡。細かい布目残る
227	SX5	掘り方 瓦だまり層	—	(14.9)	7.3	1.8	(13.0)	(8.0)	2.9	濃橙色	1〜2㎜大の砂粒を多く含む	良	凹面に粗い布目と吊り紐痕残る

第15表　東調査区出土遺物観察表　漆器

No.	出土遺構	出土位置・層位	器種	口径	底径	器高	上塗色			文様	備考
							外面	内面	高台内		
106	ＳＶ11	断ち割り断面Ｌ	椀	－	8.6	－	黒	黒	黒	磨耗のため不明	
132	ＳＤ２	ＳＲ22－23 堀内沈澱土	椀	－	5.9	－	黒	赤	黒	－	
133	ＳＤ２	ＳＲ12－13 堀内沈澱土	椀	12.8	5.2	8.2	赤	赤	黒	－	
134	ＳＤ２	堀内沈澱土	杓子	全長 9.9	全幅 6.9	全高 2.1	黒	－	－	－	先端部のみ遺存
203	ＳＤ９	暗渠 基底部砂層	椀	－	6.1	－	赤	赤	赤	－	

Ⅴ　ま　と　め

調査の結果，西調査区からは石垣10条，櫓台３基，堀２条，暗渠２条，井戸１基，土橋１基を，東調査区からは外堀石垣２条，土塁基底部石垣３条，櫓台２基，溝５条，暗渠２条，土坑４基，井戸１基，土橋１基，石敷遺構１基，溝状遺構１条を確認した。
外堀北岸石垣ＳＶ１・ＳＶ２・ＳＶ３・ＳＶ11・ＳＶ12，平櫓台ＳＢ１，「一丁目口御門」の櫓台ＳＢ２・ＳＢ３及び上橋ＳＸ１，「研屋町口御門」の櫓台ＳＢ４・ＳＤ５及び土橋ＳＸ２，外堀ＳＤ１・ＳＤ２・ＳＤ３，は正保３年（1646）頃成立の「安芸国城所絵図」以降の絵図類においてその存在が確認できる。「安芸国城所絵図」より景観年代が古い絵図も存在するが，成立年代が明確で最も古いものは同絵図であり，上記遺構に現時点で絵図から与えられる暦年代の上限は1646年頃である。外堀南岸石垣ＳＶ４・ＳＶ５，「一丁目口御門」土橋の東西護岸石垣ＳＶ６・ＳＶ７，「研屋町口御門」土橋の東西護岸石垣ＳＶ16，ＳＶ17は，「安芸国城所絵図」に描写されていないが，これらは省略された可能性があり，こちらも遺構に絵図から与えられる暦年代の上限は1646年頃である。

ＳＢ２・ＳＤ３に先行するＳＶ８，ＳＤ１に先行するＳＶ９，ＳＶ２に先行するＳＶ10を，「安芸国城所絵図」に描かれた縄張り以前の遺構と考えるなら，下限を1646年頃までとすることができる。

なお，留意したいのはこれらはあくまでも，絵図によって確認できる上限・下限であり，本調査で確認した遺構の構築年代の上限を示していることにはつながらない。
以下，この前提の下，若干の考察を行いたい。

西調査区
・胴木について

ＳＶ４では，Ｘ－４付近，Ｘ－３付近，Ｘ６付近の３ケ所で胴木を確認した。胴木と共に埋められた遺物，あるいは裏込めから出土した遺物の生産年代から，各部分の構築年代は，Ｘ－４付近の胴木は19世紀前半を，Ｘ－３付近の胴木は18世紀中葉を遡ることはないと考えられる。Ｘ６付近の胴木近辺からは，19世紀の陶磁器が多く出土しており，19世紀を遡ることはないと考えられる。胴木の採用は軟弱な地盤の補強を目的としたことが予想されるが，今回確認した石垣のほとんどが直接地盤に築石を据えていたことから，胴木の有無は補修に伴う時期差を示すものと考えられる。

・ＳＶ８，ＳＶ９，ＳＶ10について

ＳＶ８，ＳＶ９，ＳＶ10は，今回の調査で初めてその存在を確認した遺構である。

ＳＶ８は，南側に沈澱土層が確認できたことから堀あるいは溝の護岸石垣と考えられる。ＳＶ８が堀の護岸石垣であった場合は，ＳＤ１に伴うものであった可能性が高く，土橋ＳＸ１は外郭に接合していなかったと考えられる。しかし，その場合，ＳＸ１そのものが存在していなかったのか，ＳＸ１の北部のみ接合していなかったのかは不明である。ＳＶ８では遺

構に伴って遺物が出土していないが，ＳＶ８の南側の沈澱土から遺物が出土した。この遺物群は，ＳＶ８が堀あるいは溝の護岸石垣として機能していた期間に投棄されたものである。出土陶磁器の年代観と，絵図から与えられる1646年という下限とを比較した場合，瀬戸・美濃産陶器碗44の江戸時代前半という生産年代とも大きく矛盾しない。その他の陶磁器は，16世紀の城館からよく出土するＥ－２類1)にあたる磁皿43，1585年以前の根来寺坊院跡から出土しており大坂城では石山本願寺期の後半に現れる上田秀夫氏の編年のＢ群2)にあたる青花碗41，大坂城では1580～1590年前後とされる第７層から出土し前述の根来寺坊院跡からは出土していないＡ－Ｖ類にあたる青花碗42，瀬戸・美濃編年の大窯第Ⅲ期3) の内はげ皿45，間壁忠彦氏の備前焼編4) 年のⅣ期の小壺47，というように16世紀後半代の遺物が出土している。遺物の廃棄状況を充分考慮せねばならないが，これらの年代から，ＳＶ８は16世紀第４四半期には機能していた可能性が高い。

ＳＶ９，ＳＶ10の性格は不明であるが，何らかの境界を区画するものであった可能性がある。また，ＳＶ９の東端部南側においてＳＶ10が派生していること，両者の軸方向に大きな差が認められないことから，両者は相互に関連を持つ遺構であった可能性がある。ＳＶ10の出土遺物は，わずか４点であるが石垣下から出土しており，現位置を保った構築時の遺物である可能性が高い。伝世品と考えられる中国製白磁椀８４以外に，16世紀中葉から後半に盛期があると考えられるＡ－Ⅲ類にあたる青花碗85，大窯Ⅲ期にあたる瀬戸・美濃産内はげ皿83，16世紀末から17世紀初頭に盛期のある5) 朝鮮産白磁碗86が出土している。したがって，ＳＶ10の上限は16世紀第４四半期まで遡る可能性がある。また，上述したＳＶ９とＳＶ10の関連性から，ＳＶ９の時期もＳＶ10のそれと大差がない可能性がある。

ＳＢ３では，遺物が多数出土しているが，確実に原位置を保ち構築時の遺物と考えられるのは南面石垣下出土の砂目積みの肥前産陶器Ⅲ87と北面石垣下出土の　州窯系青花88である。87は砂目積み段階の溝縁皿で，生産年代は1600～1630年である。大坂城では，1622年を上限とする船場の魚市場跡の土坑ＳＸ201から出土した肥前産陶磁器のうち目積みが認められるものは胎土目がほとんどであったことに対し，1650年を下限とする層では砂目積みの溝縁が大半を占めており6)，1620年頃を境に胎土目積みから砂目積みへの変化が認められる。安芸では，館の下限が1600年と考えられている吉川元春館跡において遺構より出土した胎土目の肥前産陶器は，第１時調査ＳＫ122出土の皿161，第３次調査ＳＧ304出土の皿34のわずか２点であること7)，さらに下限が1619年頃と推定される広島城県庁前地点の第２号溝状遺構から胎土目積みの肥前系陶器は出土するが砂目積みの溝縁皿が出土していないこと8)から，胎土目の肥前産陶器の盛期は大阪城など他の消費地遺跡と同様に17世紀に入ってからと考えられ，それに次ぐ砂目積みの溝縁Ⅲの盛期は17世紀第２四半期頃にある可能性が高い。したがって，ＳＢ３の構築年代は17世紀第２四半期頃の可能性が高い。

現時点では広島城関連遺構出土遺物の編年が行われていないためＳＢ３に暦年代を与えることはできないが，遺構の上限が生産年代の上限である1600年を遡ることはないため，少なくとも毛利期の可能性はなく，福島期以後の遺構であると考えられる。

・外堀ＳＤ１出土の花押が記された肥前産陶器皿について

外堀ＳＤ１では，堀底から見込に砂目を持ち高台内に花押が記された肥前産陶器皿９４が出土した。出土位置からは，堀底面の成形後，沈澱土が堆積するまでの期間に廃棄されたことが推測されるが，廃棄時期を限定できないため，遺構の創設時期は不明である。堀あるいは溝の護岸石垣と考えられるＳＶ８との関係が想起されるため，本遺構も16世紀第４四半期まで遡りうる可能性がある。また，なお，花押は，徳川家康の使用によって江戸時代に流行する明朝体で[9]，平成７年に調査を行った城北駅北交差点地点の外堀沈澱土層から出土した砂目積みの肥前産陶器壺48に類似する。

東調査区

・ＳＶ12の木材について

ＳＶ12で確認した木材は，その上部の状況が未確認であるため想像の域を脱しえないが，他の石垣の構築状況と比較すると創設時当初より設置されていたと考えるよりも，修復時に設置されたと考える方が妥当であり，東端部に複数の掘り方が存在することとも矛盾しないと考えられる。その場合，木材の上には築石が据えられていたことになるが，これは築石の座りを安定させる一種の胴木として使用されたと想像される。また，ＳＢ５との接合部に傾けて据えられていた石材（Ａ石・Ｂ石）は，補強のために据えられたと考えられる。改修の年代は，木材の周辺から17世紀初頭頃に盛期のある[10] Ｃ－Ｖ類の青花碗107，生産年代が1630～60年の肥前産染付碗108が出土しているため，17世紀代に行われた可能性があるが，後世に混入した可能性もあり限定できない。

・地盤改良について

ＳＶ11の基底部とＳＢ５北面の基底部で確認された粗朶の集積層は，いずれも羊歯を主として松の皮，木片などが敷き詰められており，軟弱な地盤の補強を目的とした地盤改良と考えられる。粗朶層の類例としては，京都府舞鶴市の田辺城第20次調査[11]が挙げられる。また，施工方法は異なるが，広島県内における類例としては，草戸千軒遺跡で確認された枝材，芦，葦による埋立[12]や，吉川元長の菩提寺の万徳院で確認された木材と花崗岩バイラン土を交互に埋める地盤改良[13]が挙げられる。植物や木材を用いた地盤改良は発見例は少ないものの，中・近世では普遍的な技術であったと予想される。なお，ＳＶ11では，粗朶層の上側には微細な炭化物を含んだ層も確認しており，埋め土に炭の他何らかの混ぜものをいれて盛った可能性がある。

・「研屋町口御門」の構築状況

「研屋町口御門」では，櫓台ＳＢ４，ＳＢ５に沿って構築された側溝ＳＤ６，ＳＤ７に挟まれた範囲で，これらの遺構の構築後に盛られた造成土を確認することができた。この造成土はＳＢ５，ＳＤ７の構築後にほぼ水平に盛られている。ＳＢ４，ＳＤ６の掘り方は，この造成土を掘り込んでいたことから，「研屋町口御門」における遺構の先後関係は，ＳＢ５→ＳＤ７→ＳＢ４→ＳＤ６と考えられる。

ＳＢ４は，遺構に伴う陶磁器が出土していないため構築年代を推測できないが，東面に

そって構築された側溝ＳＤ６の石材下から生産年代が1610～30年の肥前産染付139が出土しているため,すくなくともその生産年代の上限である1610年を遡ることはないと考えられる。また，南側で確認された掘り方がＳＤ２の堀底と沈澱土を掘り込んでいたことから，ＳＤ２が水堀として機能していた段階で構築されたと考えられる。また，南側掘り方内からは瓦が出土しており，ＳＢ４構築時には周辺に瓦葺き建物が存在したと考えられる。

ＳＢ５の時期は,櫓台の内部とも言える位置から出土した砂目積みの肥前産陶器121から考察したい。121は西面の築石と礫に挟まれた状態で確認したことから，構築時の遺物であると考えられる。121は生産年代が1610～30年代で，その盛期は生産年代の後半にある[14]。また，県庁前地点遺跡の第２号溝状遺構において比較的多く出土し[15]，大阪城でも1622年を下限とする土坑で肥前産陶器に次いで多く出土する福岡産陶器[16]が，北面の築石間から出土していることから，ＳＢ５は17世紀の前半代に構築され，遺物の生産年代からは少なくとも毛利期に遡ることはないと考えられる。

ＳＤ７は側壁の石材が南半部と北半部で異なる。ＳＤ６は南半部の平面的な確認が行えなかったが，断ち割り断面で確認した石材は北半部よりも小さく，ＳＤ７同様に南半部と北半部で石材の規模が異なる可能性がある。しかし，この差異が何を示すのかは明らかにできなかった。ＳＤ６は，石材下より生産年代が1610～30年の肥前産染付が出土しており，先行するＳＢ５の年代とも矛盾しない。暦年代を与えることはできないが，下限が1619年までと推定される広島城県庁前地点の第２号溝状遺構からは肥前産染付が出土していないことから，17世紀第２四半期頃の遺構である可能性が高い。

ＳＢ４・ＳＢ５間に位置する土坑ＳＫ２とＳＫ３は，遺物が出土していないため時期が不明であるが，前者が造成土を掘り込んで形成されていたこと，後者の上部に造成土が盛られていたことから，後者は前者よりも先行し「研屋町口御門」の整備以前の遺構である可能性がある。なお，ＳＫ２は，掘削レベルの深さと，掘り方内から絶えず水がしみだしてきたことから，井戸の可能性がある。

ＳＢ４の直北で確認したＳＸ５は,その位置関係からＳＢ４構築時の掘り方である可能性もあるが,レンズ状を呈する掘り方の形状から他の遺構として考えた方が妥当と考えられる。出土遺物については，ＳＢ４南側掘り方から出土した軒丸瓦と同笵の瓦及び金箔を押された鯱瓦が出土したこと，ＳＢ４構築前に周辺に瓦葺き建物が存在したと考えられること，ＳＢ４がＳＢ５よりも後に構築されたことから,ＳＢ４の構築に伴って廃棄された可能性が高い。

・結語

今回の調査によって広島城の外郭及び南辺外堀は,「安芸国城所絵図」に見られるような縄張り以前に，それとは異なる形態の時期があったことが判明した。浅野期には大手であった「一丁目口御門」の櫓台は毛利期には存在せず,同門へ続く土橋も存在していなかった可能性がある。また,「研屋町口御門」の櫓台も，毛利期まで遡ることはなく，福島期あるいは浅野期に構築されたと考えられる。これらから，今後縄張りの点においては,「安芸国城所絵図」に見られる縄張りか否かによって毛利期とそれ以降の遺構とに区別できる可能性がでてきた。また，毛利期における広島城の縄張りが「安芸国城所絵図」のそれとは異なり，特に「一丁

目口御門」の櫓台及び土橋が描かれていないという点では，従来計画図などと評価されてきた「芸州広島城町割之図」17) を改めて評価する必要があると思われる。同絵図の成立年代は描写方法から江戸中期以降と考えられている18)が，掲載人物の官途や受領名から景観年代についての厳密な検証を行う必要があると考えられる。遺物については，現時点では毛利・福島・浅野の変遷を確実に追える編年が確立していないため，今後の資料増加を待ちたい。

注

1．森田勉「14 ～ 16 世紀び白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№2　1982 年

2．上田秀夫「16 世紀末から 17 世紀前半における中国製薬付碗・皿の分類と編年の予察」『関西近世考古学研・』1991 年

3．（財）瀬戸市埋蔵文化財センター編『瀬戸・美濃系大窯とその周辺～大窯生産の成立と展開～』1997 年

4．間壁忠彦『備前焼』考古学ライブラリー 60　ニューサイエンス社　1991 年

5．今井敦 「概説」『日本出土の舶載陶磁一朝鮮・ベトナム・タイ・イスラム』1993 年

6．森毅「16 世紀後半から 17 世紀初頭の陶磁器」『難波宮跡の研究　第九』1992 年

7．第 3 次調査終了時点での報告数値による。
広島県教育委員会編『中世城館遺跡保存整備事業　発掘調査報告 6　史跡吉川氏城館跡吉川元春館跡一第 1 次調査概要一』１９９４年
同『中世城館遺跡保存整備事業　発掘調査報告 8　史跡吉川氏城館跡吉川元春館跡一第 3 次調査概要一』1996 年
なお，遺構外や覆土からは一定量出土しているようである。

8．財団法人広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 12 集『広島城県庁前地点発掘調査報告』1994 年

9．佐藤進一『花押を読む』平凡杜選書 124　平凡杜　1988 年

１０．２と同じ

１１．舞鶴市教育委員会社会教育課吉岡博之氏の指示による。

１２．広島県立歴史博物館，下津間康夫氏のご教示による。

１３．広島県敦育委員会偏『中世城館コロ跡保存整備事業　発掘調査報告 4　史跡吉川氏城館跡万徳院跡一第 3 次発掘調査概要一』1993 年

１４．佐賀県教育庁文化財課大橋康二氏のご教示による。

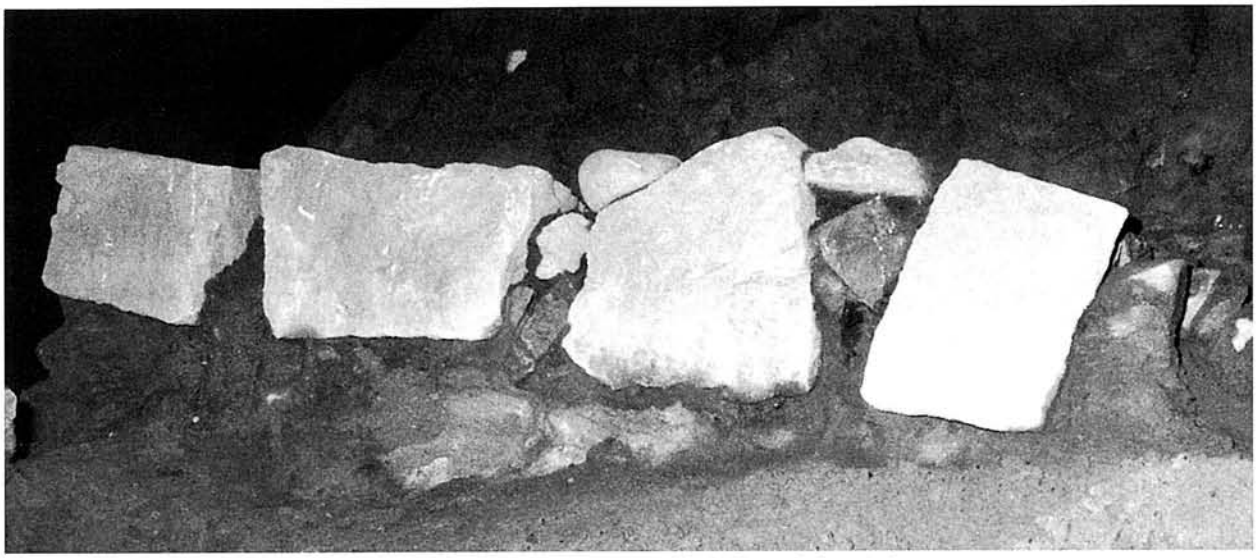
１５．８と同じ

１６．６と同じ

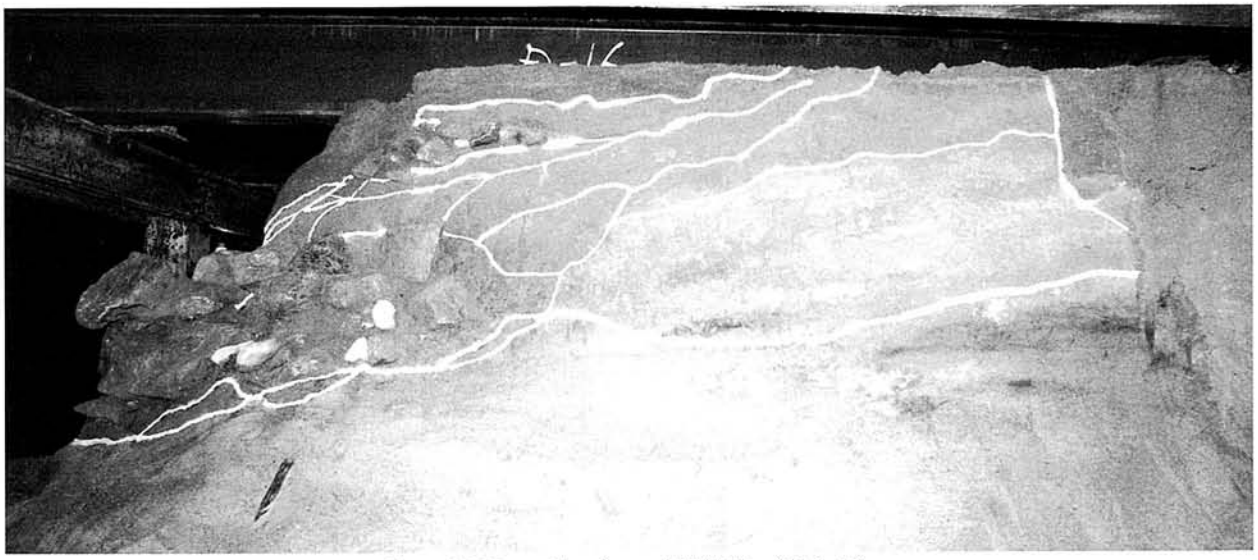
１７．山口県文書館蔵。広島市立中央図書館偏『広島城 F 町絵図集成』1990 年所収。評価は同書の解題による。

１８．広島市立中央図書館編『広島城下町絵図集成』1990 年の解題による。

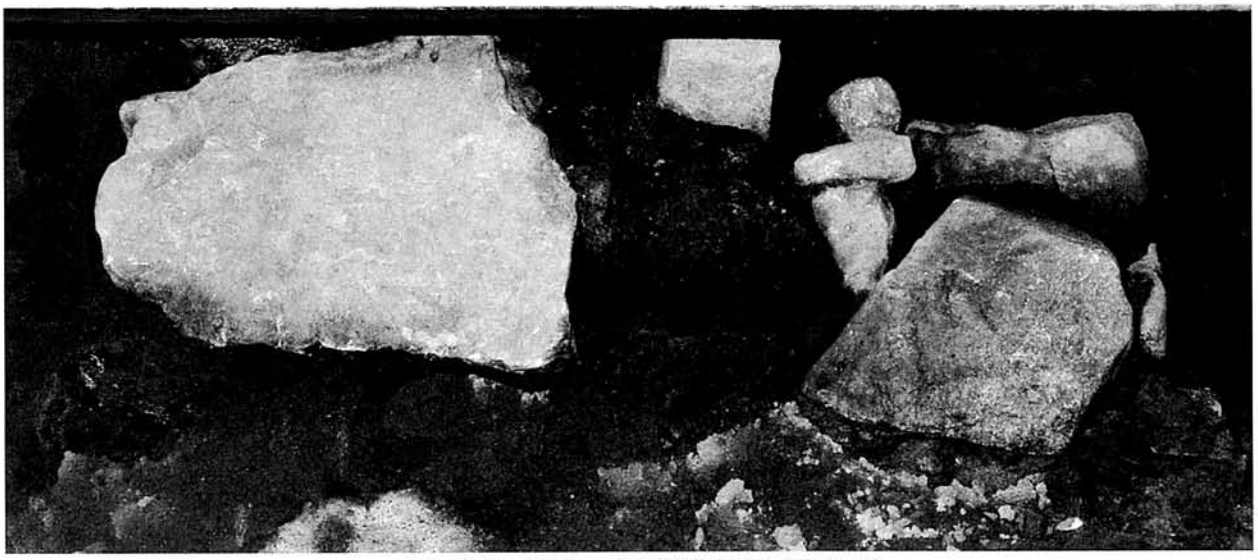
図　　版



a　ＳＶ１　Ｘ－3～－2間検出状況（南から）



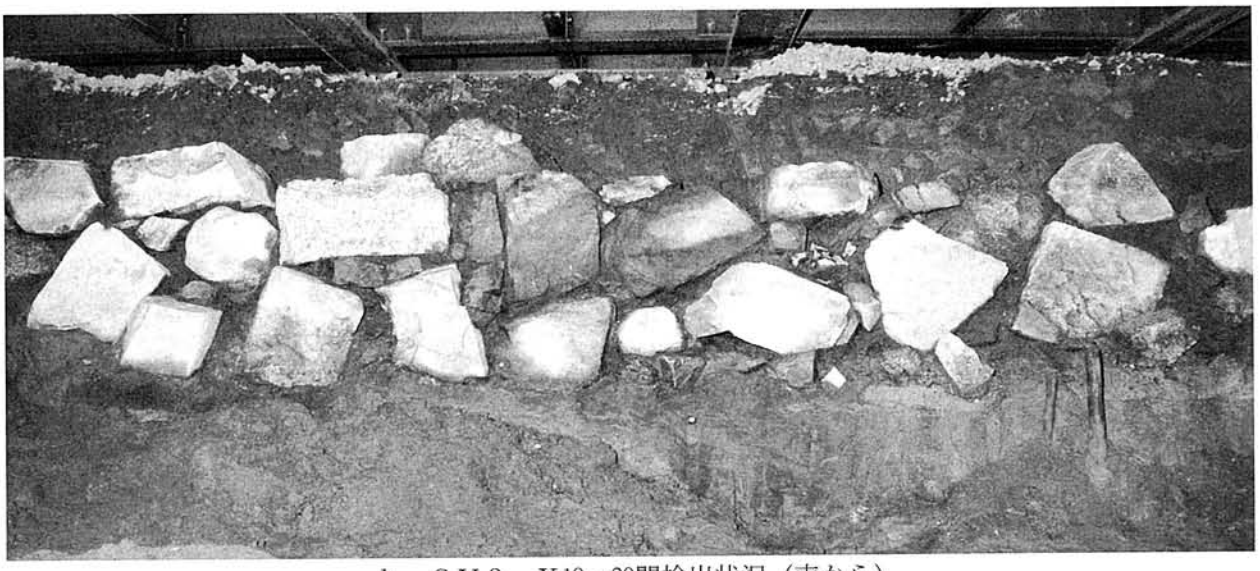
b　ＳＶ１　Ｘ－3～－2間断面（東から）



c　ＳＶ２　Ｘ２～３間検出状況（南から）

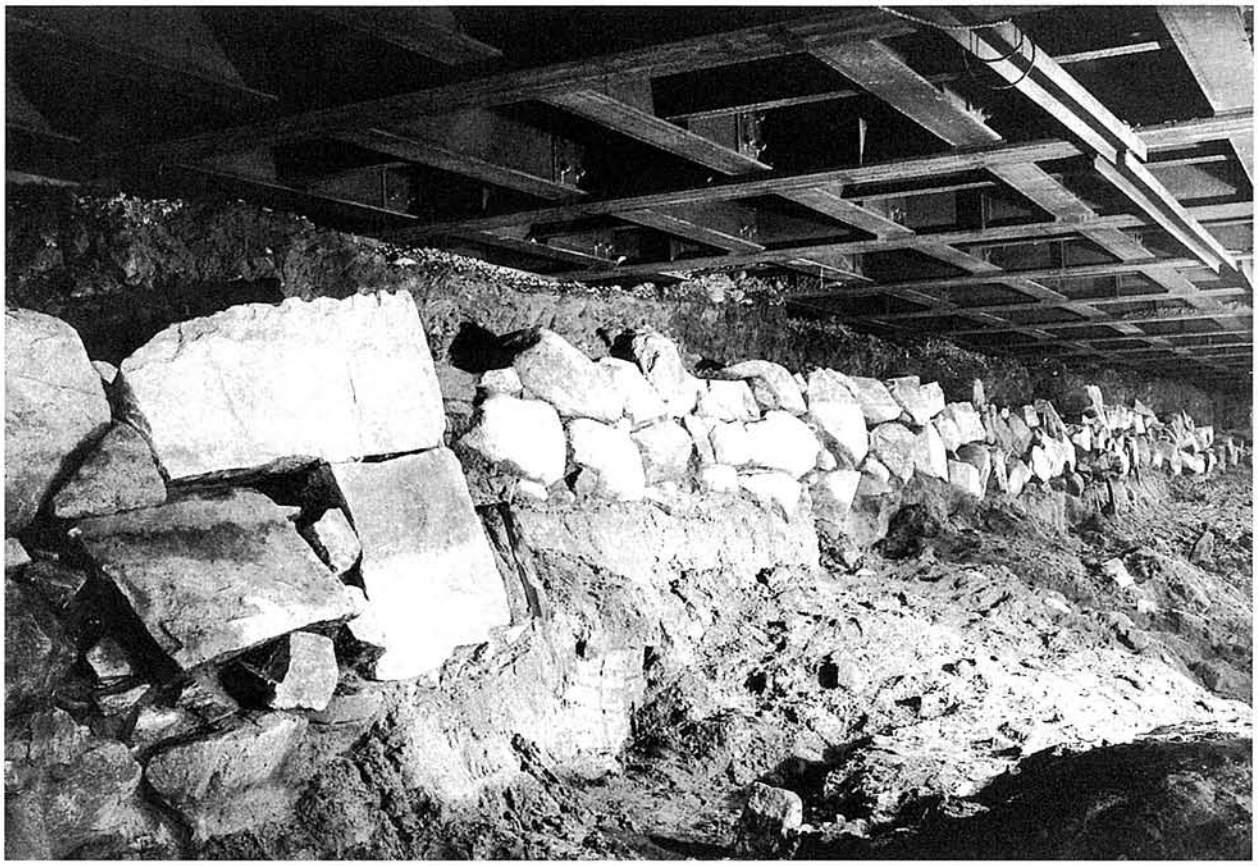
図版２

a　ＳＶ２　Ｘ12～13間検出状況（南から）

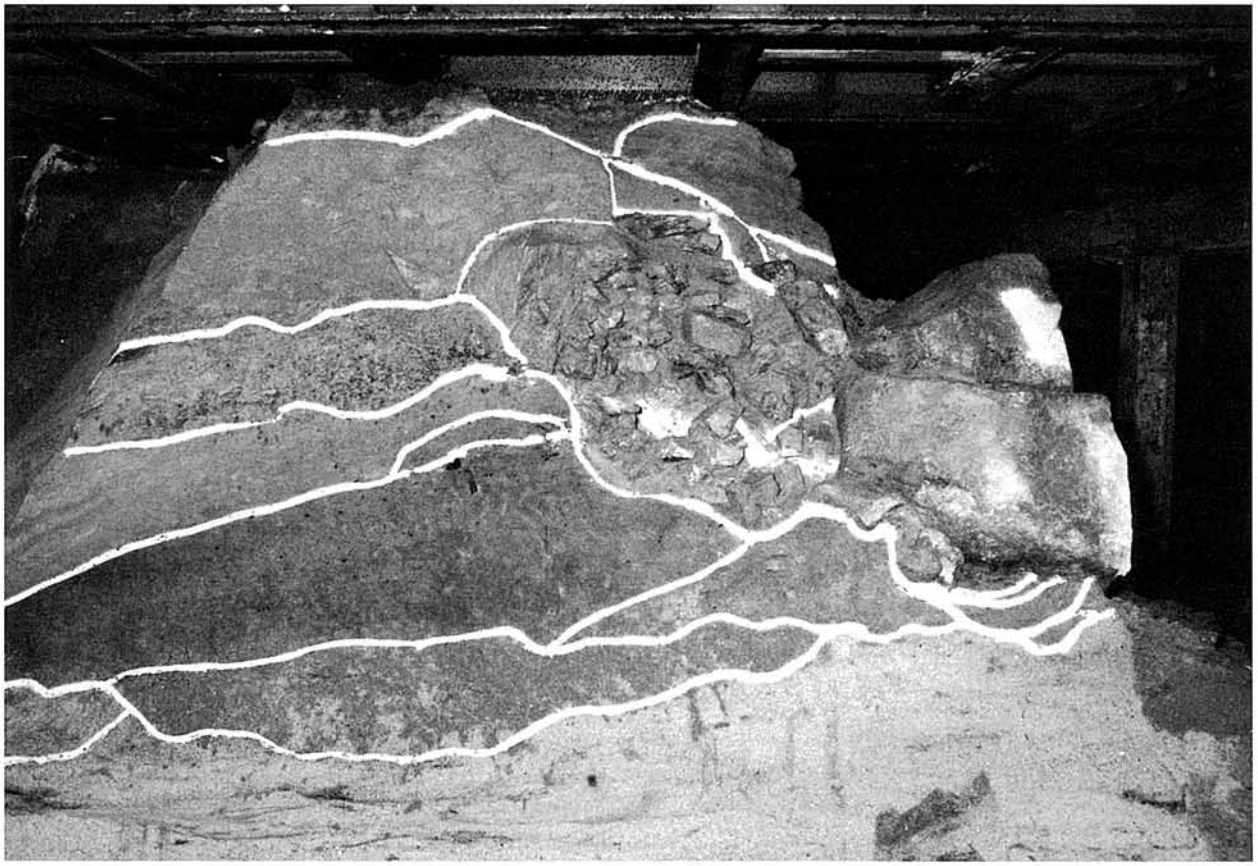


b　ＳＶ３　Ｘ19～20間検出状況（南から）

c　ＳＶ３　Ｘ22～23間検出状況（南から）

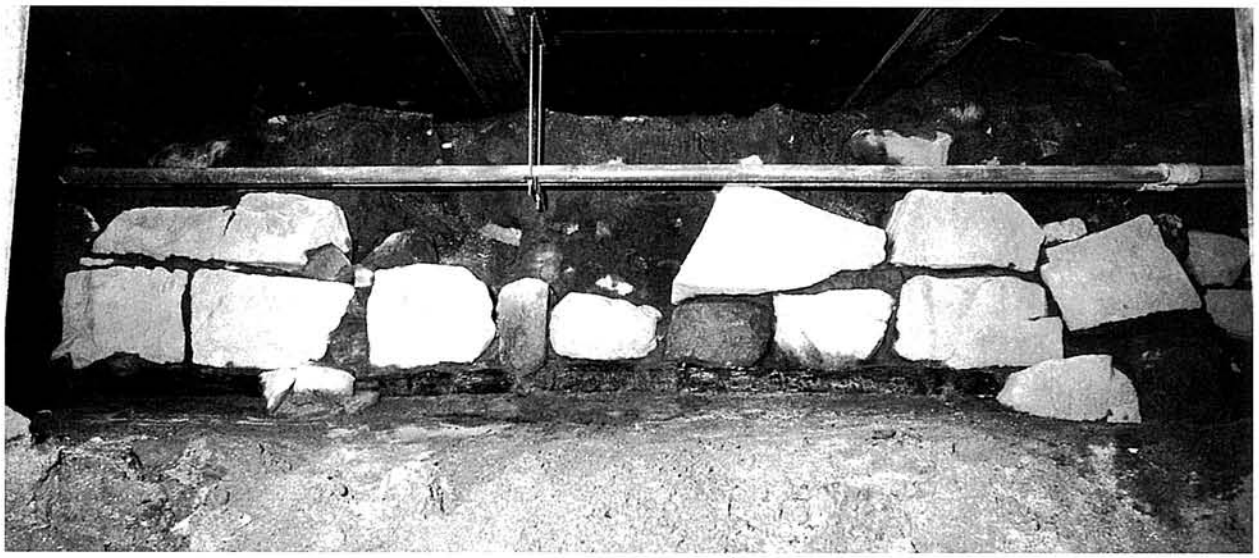


a　ＳＶ３　X18～19間検出状況（ＳＢ３南東角から）



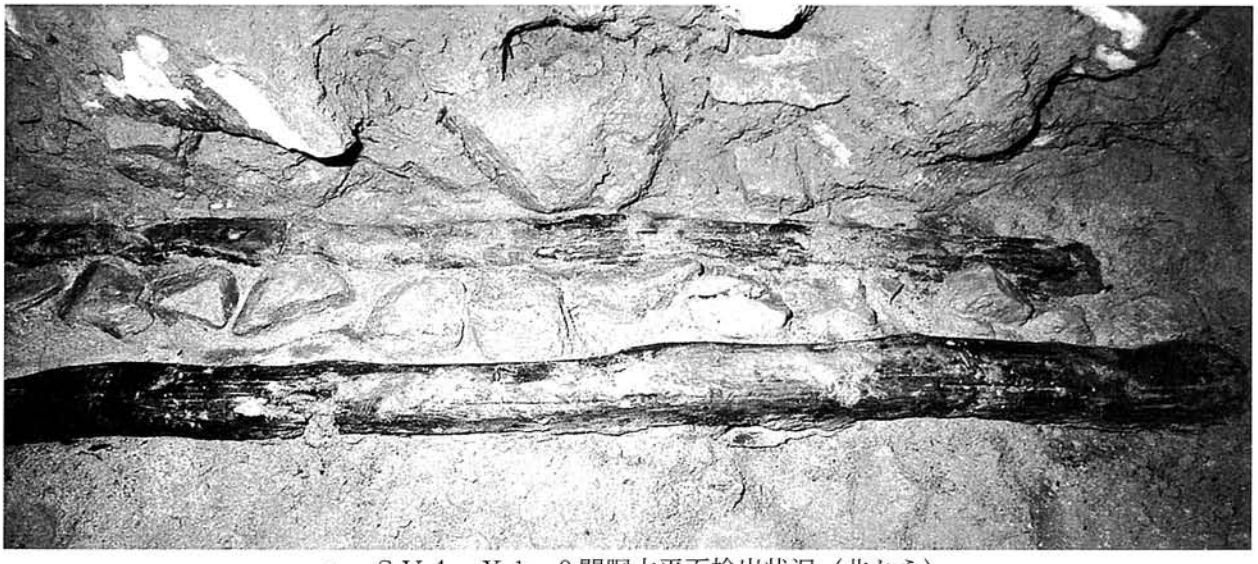
b　ＳＶ３　X24～25間断面（西から）

図版４



ａ　ＳＶ４　X-4～-3間検出状況（北から）

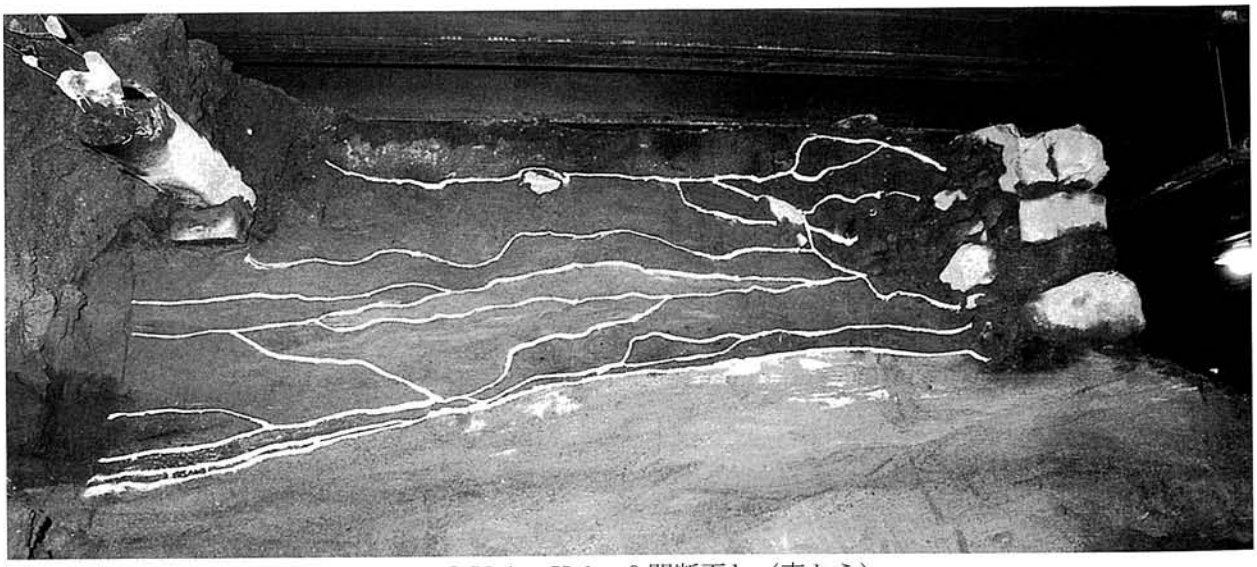
ｂ　ＳＶ４　X-4～-3間胴木平面検出状況（北から）



ｃ　ＳＶ４　X-1～０間胴木平面検出状況（北から）

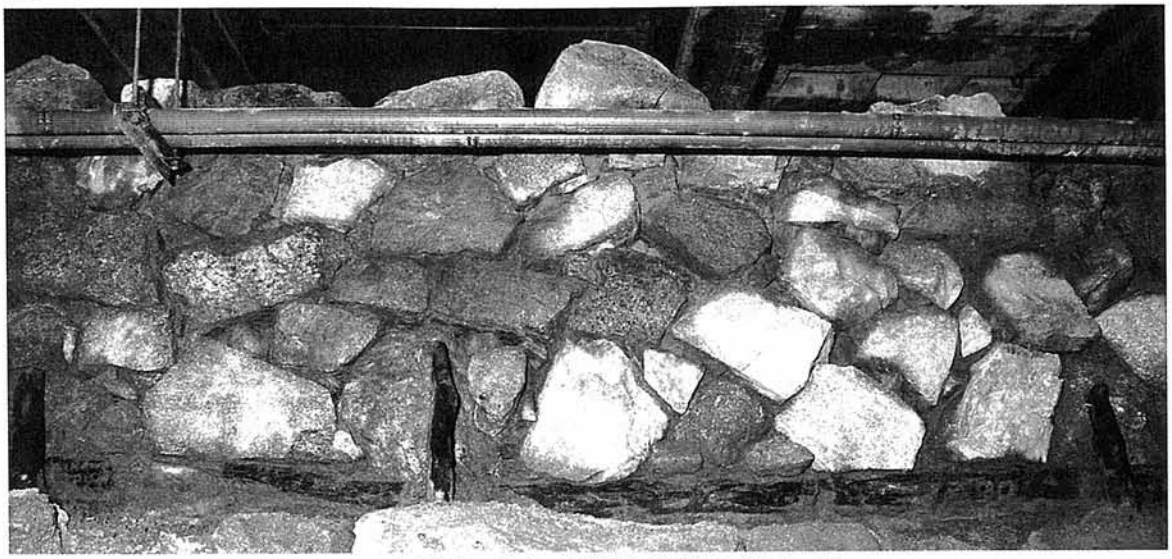
a　ＳＶ４　X-2～-1間遺物検出状況１

b　ＳＶ４　X-2～-1間遺物検出状況２

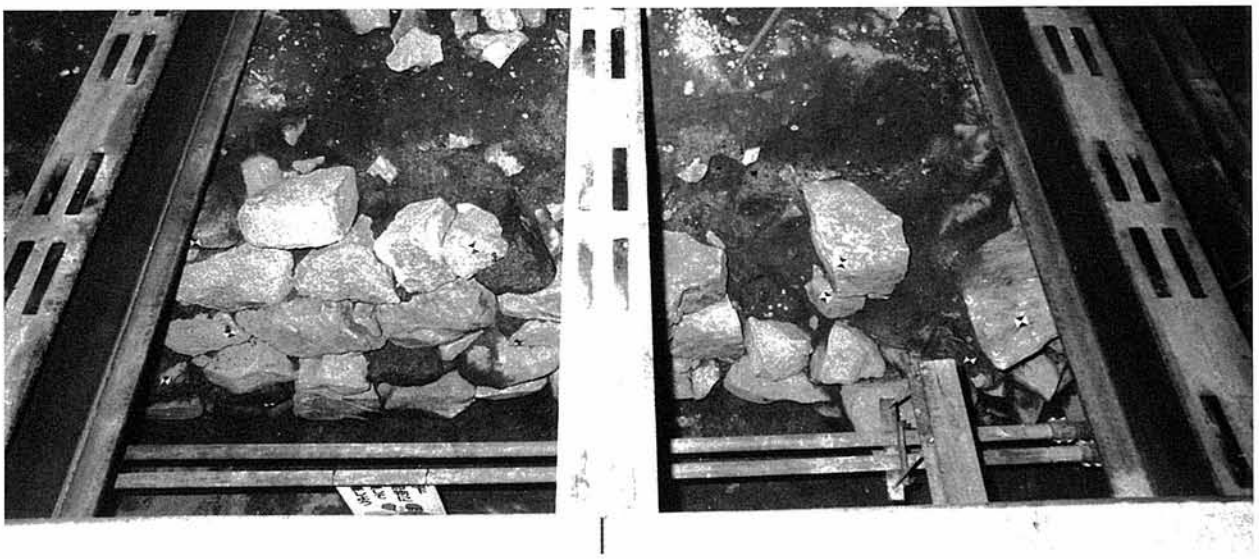


c　ＳＶ４　X-1～０間断面ｂ（東から）

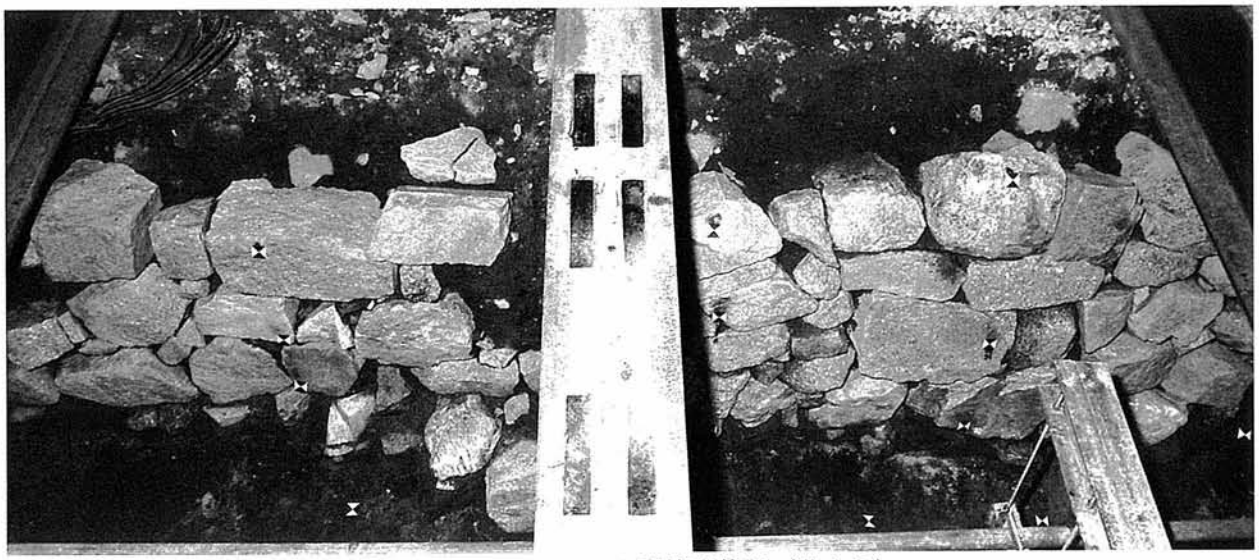
図版6



a　ＳＶ４　X-1～０間検出状況（北から）



b　ＳＶ４　Ｘ１～２間検出状況（北から）



c　ＳＶ４　Ｘ２～３間検出状況（北から）

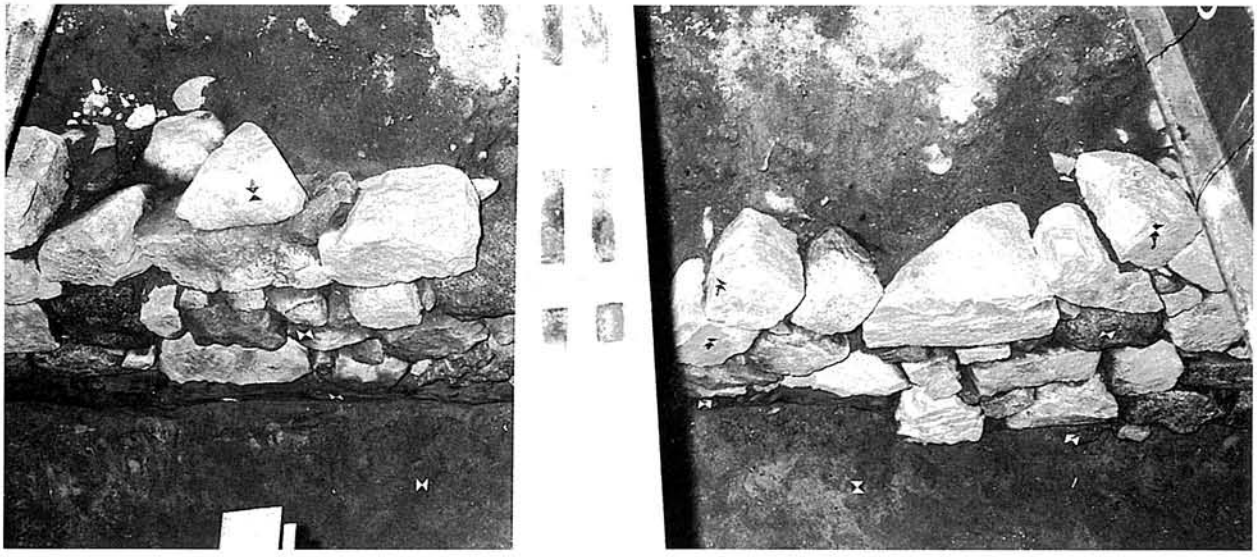
a　ＳＶ４　Ｘ２～３間検出状況（北から）

b　ＳＶ４　Ｘ６～７間胴木平面検出状況（西から）

図版８

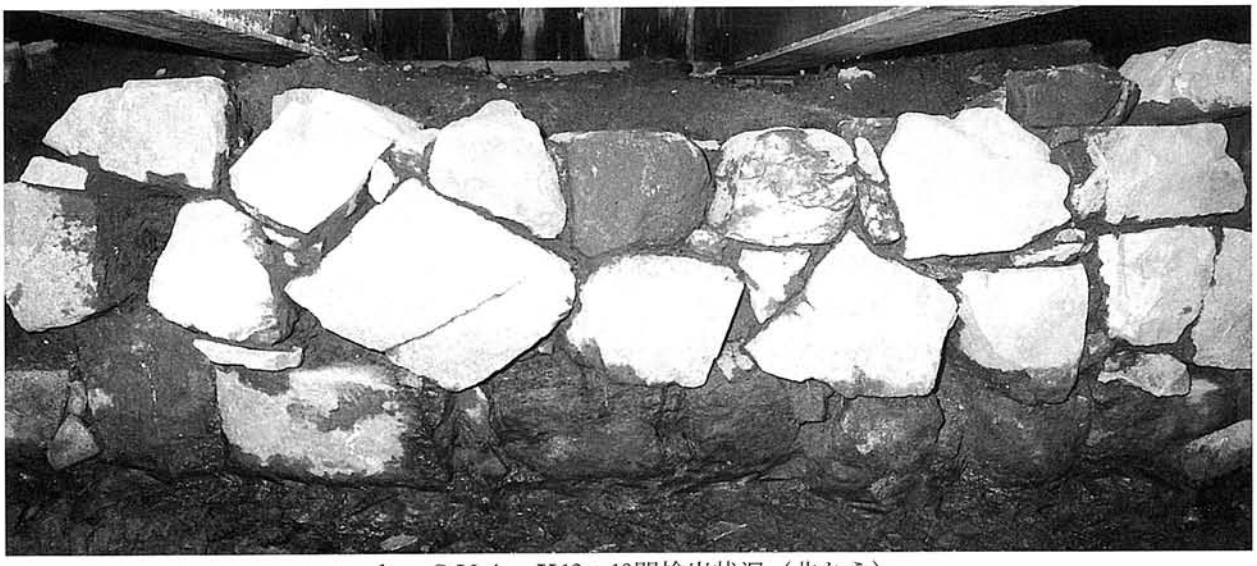
a　ＳＶ４　Ｘ６～７間検出状況（北から）

b　ＳＶ４　Ｘ６～７間検出状況（北から）



c　ＳＶ４　Ｘ７～８間検出状況（北から）

a　ＳＶ４　Ｘ11～12間検出状況（北から）



b　ＳＶ４　Ｘ12～13間検出状況（北から）

c　ＳＶ５　Ｘ18～19間検出状況（北から）

図版10

a　ＳＶ６北部検出状況（西から）

b　ＳＶ６南部検出状況（西から）

a　ＳＶ７北部検出状況（東から）

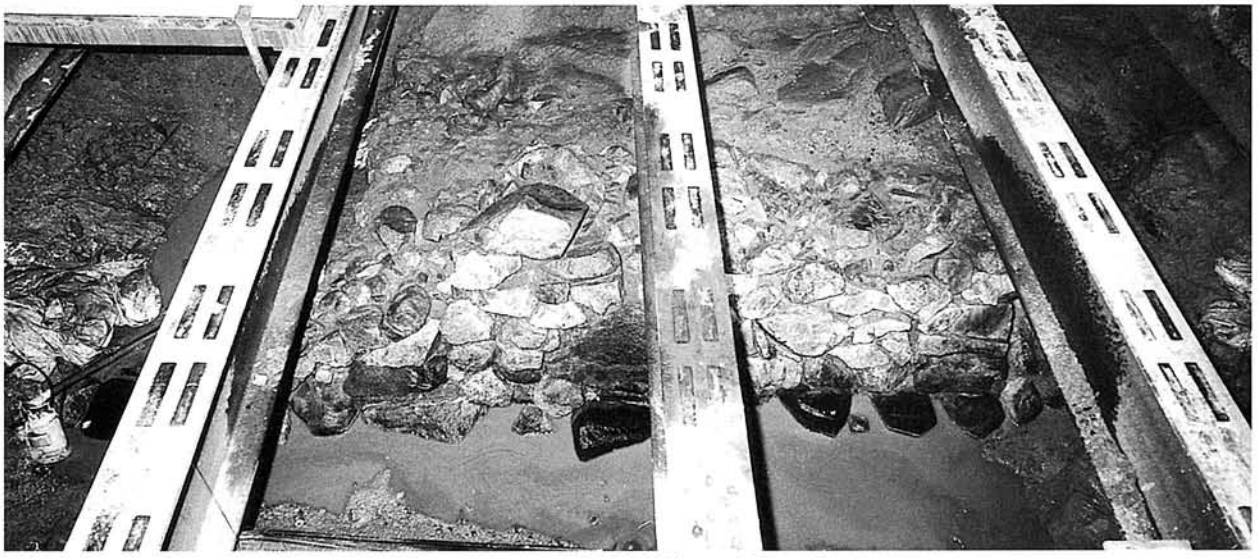
b　ＳＶ７南部検出状況（東から）

図版12

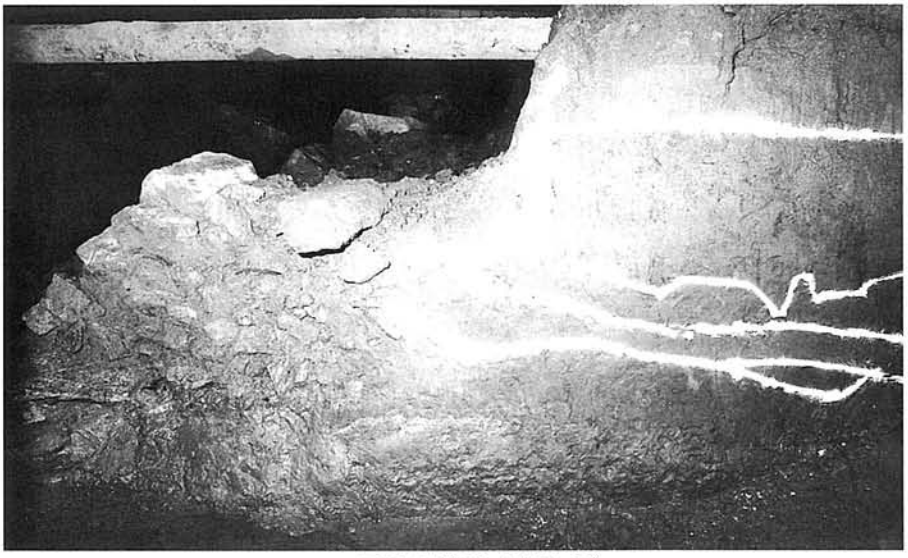
a　ＳＶ８中央部・ＳＢ２東面検出状況（南から）

b　ＳＶ８中央部・ＳＢ２東面検出状況（南東から）

a　ＳＶ８西部検出状況（南から）

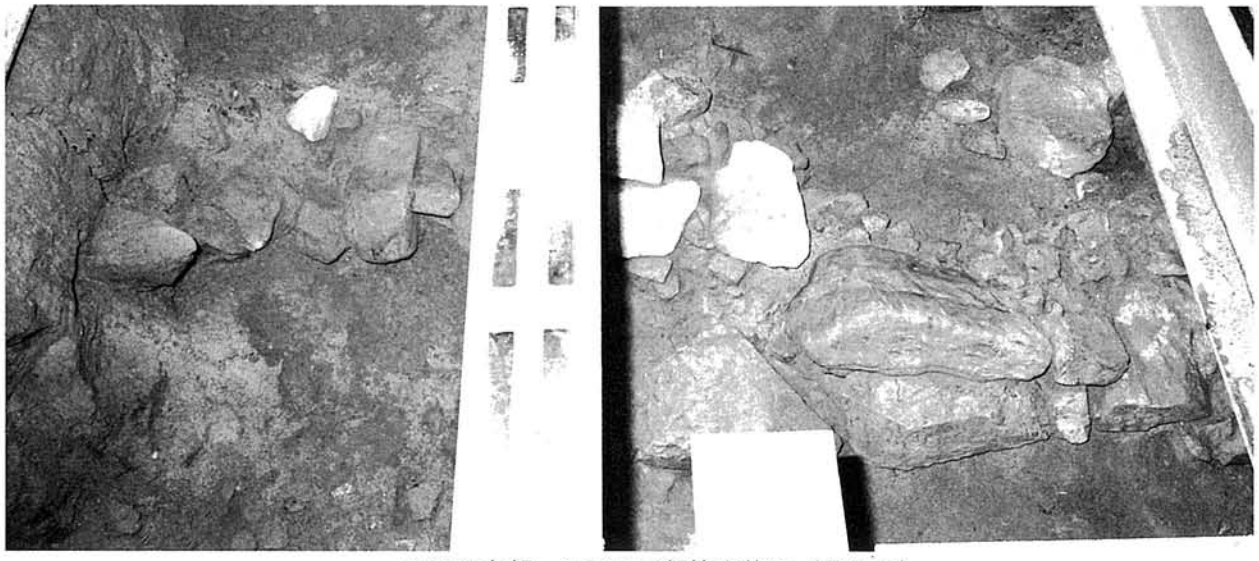


b　ＳＶ８東部検出状況（南から）



c　ＳＶ８断面（東から）

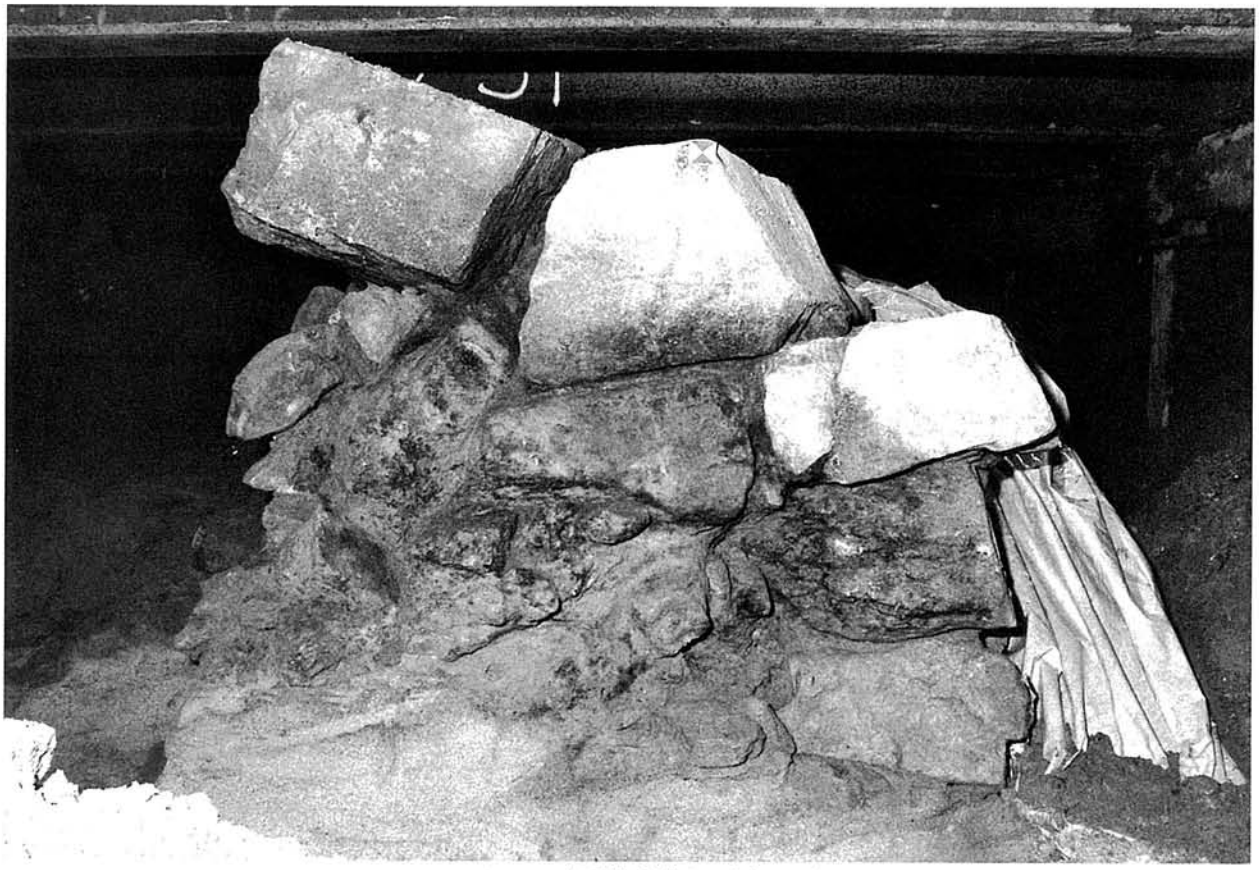
図版14



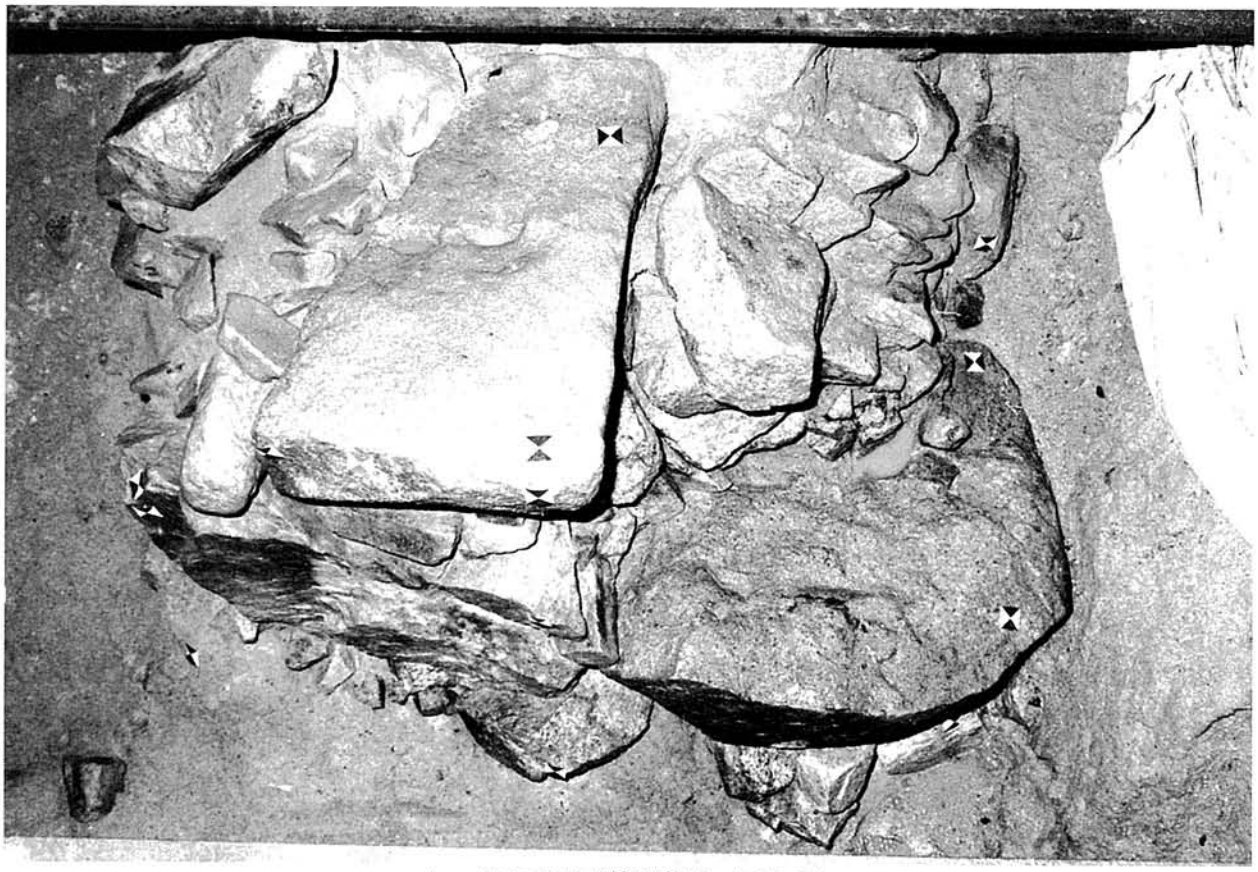
a　ＳＶ９東部・ＳＶ10西部検出状況（北から）

b　ＳＶ10中央部検出状況（北から）

c　ＳＶ２・ＳＶ10間断面Ｄ（東から）



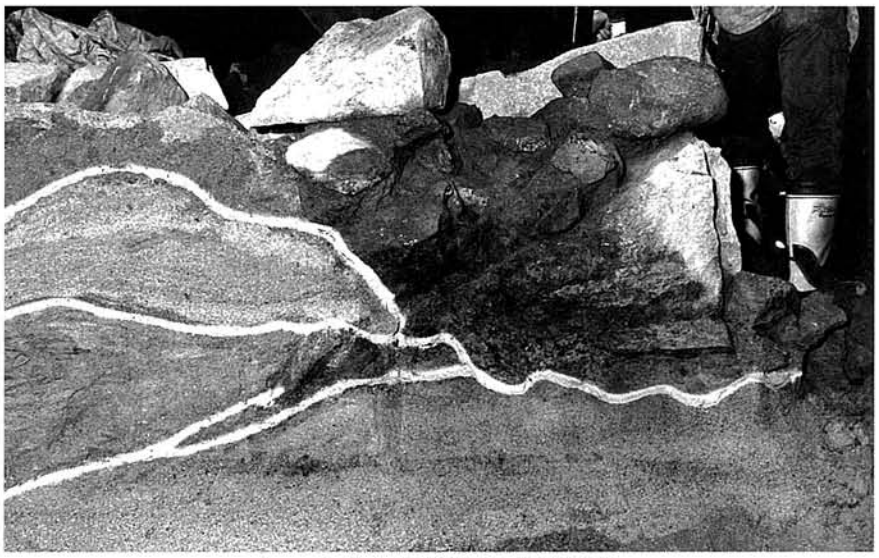
a　ＳＢ１東面検出状況（東から）



b　ＳＢ１西面検出状況（西から）

図版16

a　ＳＶ９・ＳＢ１間断面Ｃ（西から）



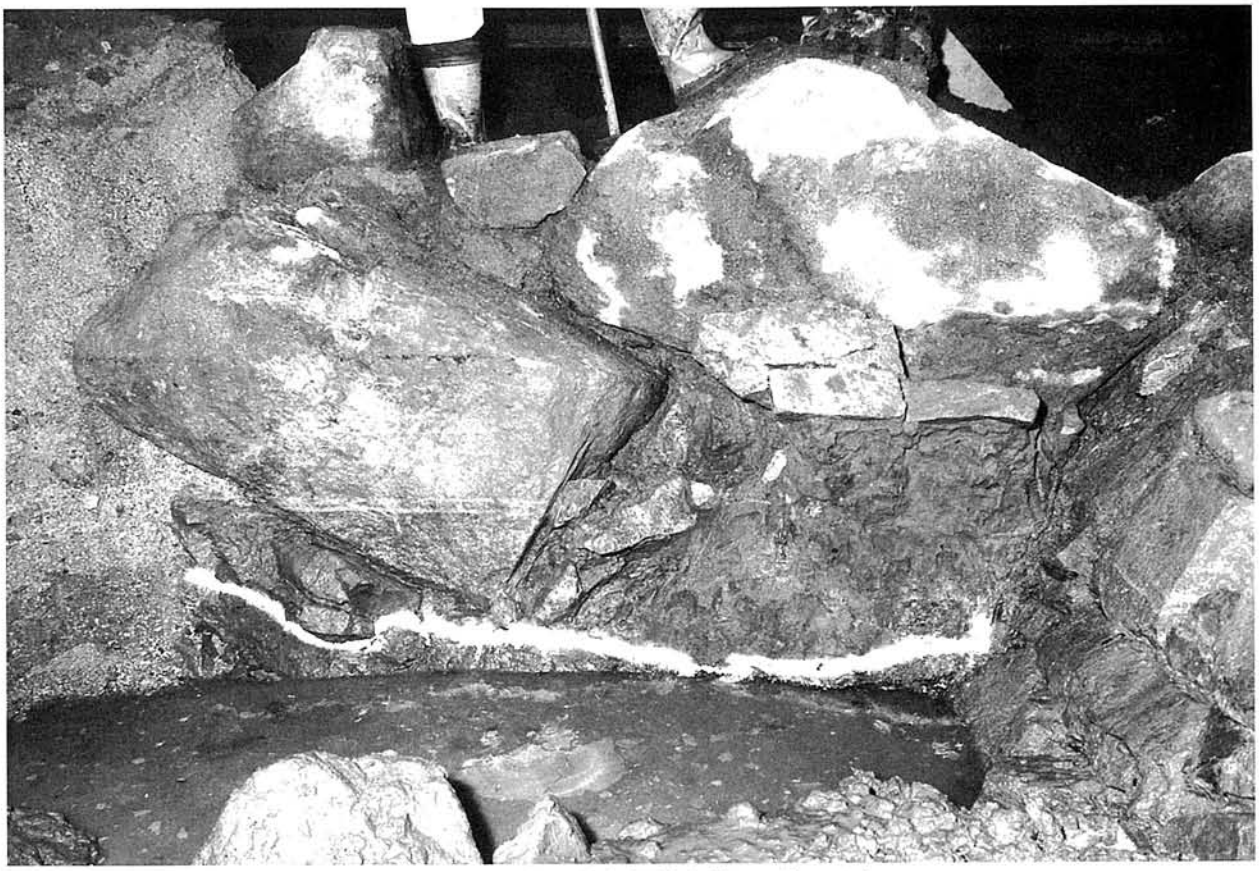
b　ＳＢ１西面断面（北から）

c　ＳＢ１西面土層断面Ｂ（北から）

a　ＳＢ２南面・ＳＶ６北端検出状況（南から）

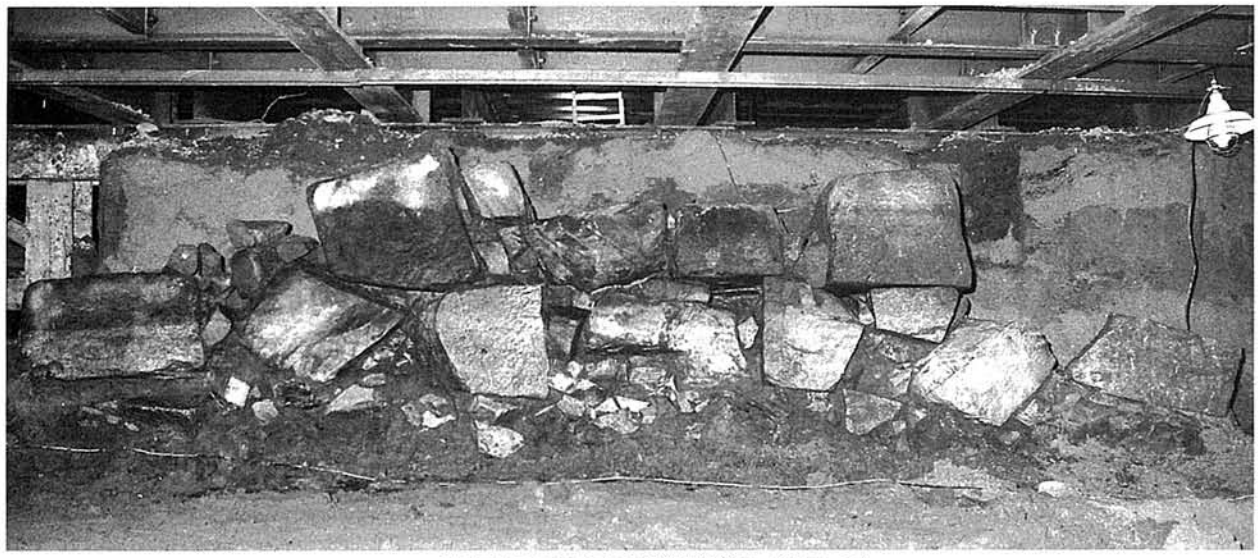
b　ＳＢ２東面南端検出状況（東から）

図版18



a　ＳＢ２東面中央部検出状況（東から）

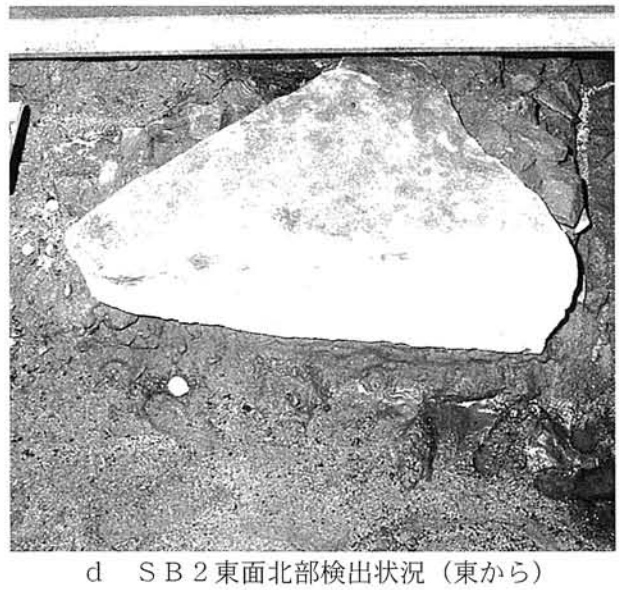
b　ＳＢ２北面中央部検出状況（北から）



a　ＳＢ２南面中央部検出状況（南から）

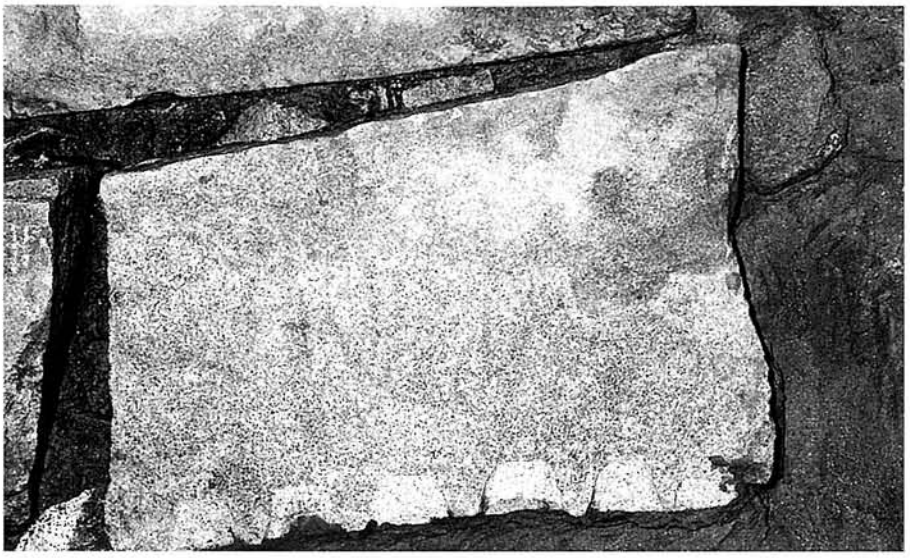
b　ＳＢ２西面検出状況（西から）

c　ＳＢ２東面中央部検出状況（東から）

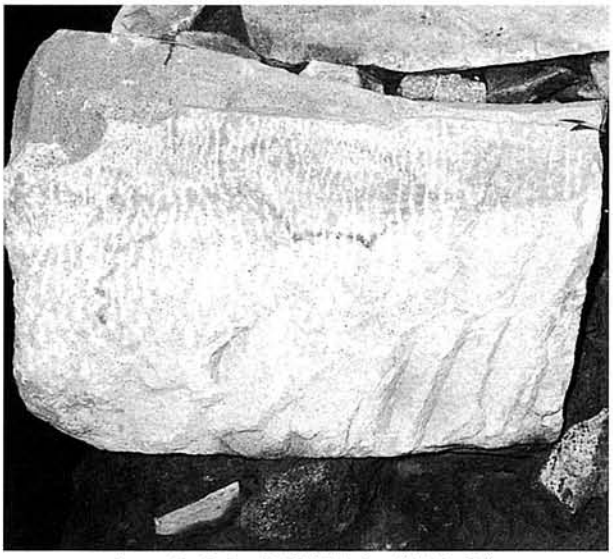


d　ＳＢ２東面北部検出状況（東から）

図版20



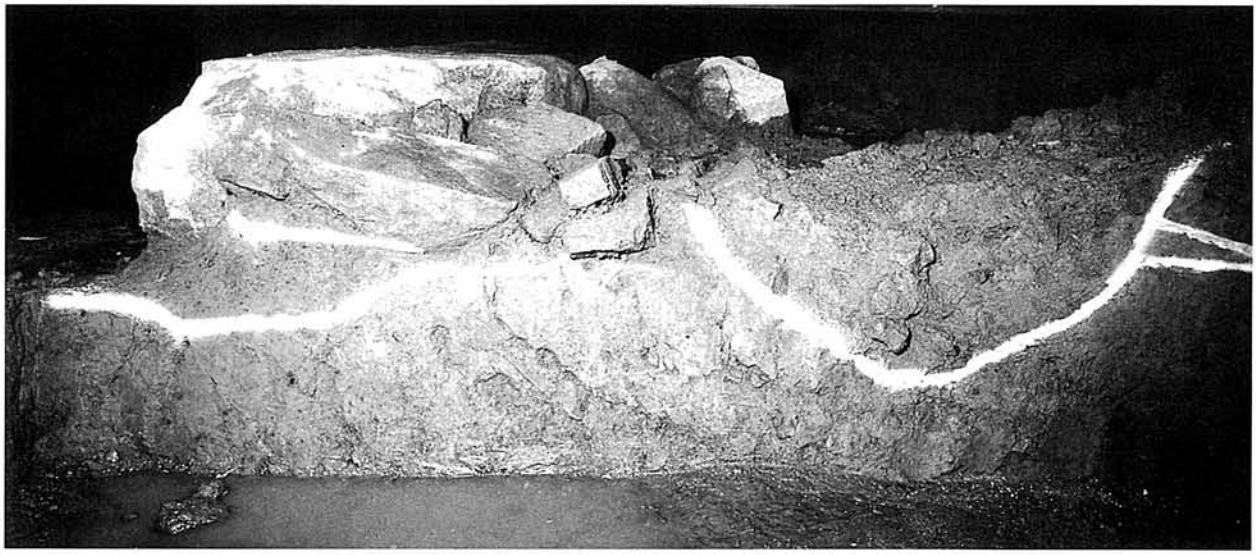
a　ＳＢ２南面墨書１（南から）



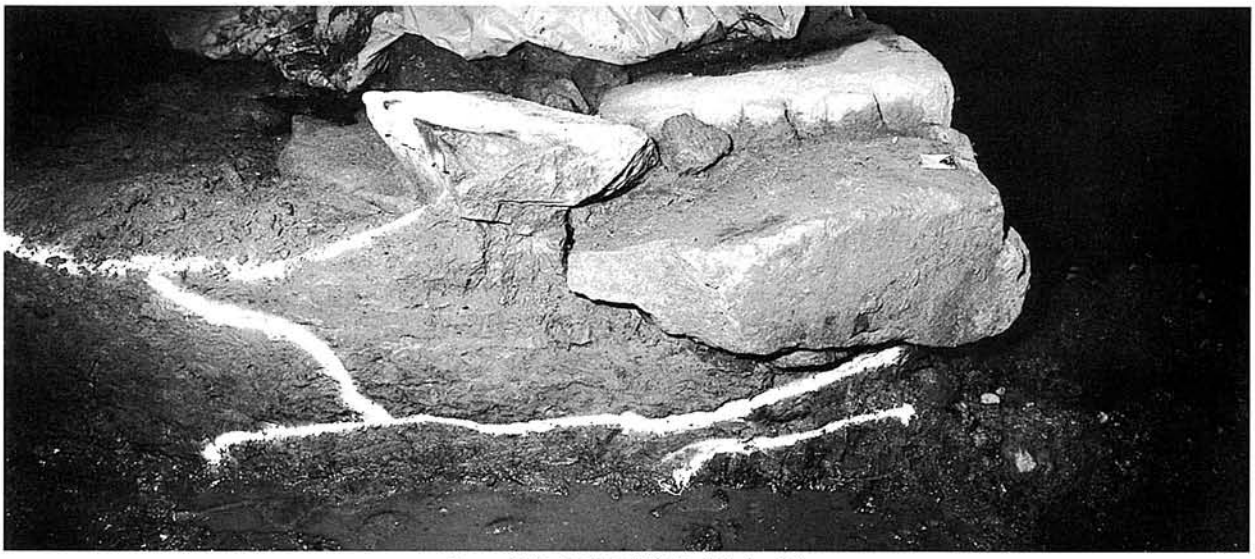
b　ＳＢ２南面墨書２（南から）

c　ＳＢ２南面墨書３（南から）

d　ＳＢ２南面断面（西から）



a　ＳＢ２北面断面（西から）



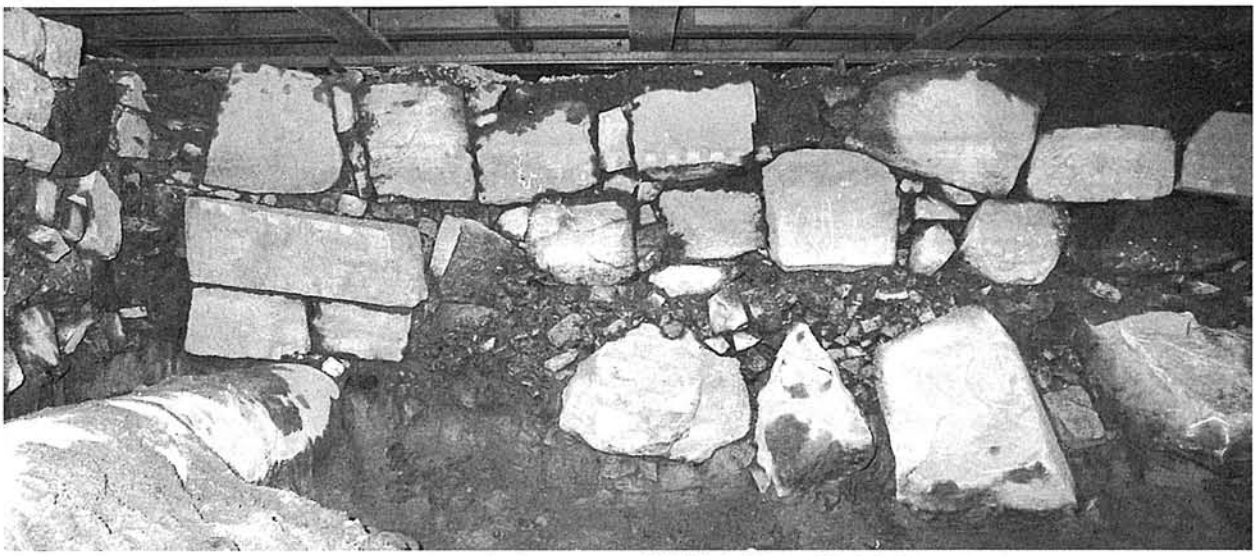
b　ＳＢ２西面断面（北から）

c　ＳＢ２西面土層断面（南から）

図版22

a　ＳＢ３南面・ＳＶ３西端検出状況（南から）

b　ＳＢ３西面南端検出状況（西から）



a　ＳＢ３南面・ＳＶ７北端検出状況（南から）

b　ＳＢ３西面中央部検出状況（西から）

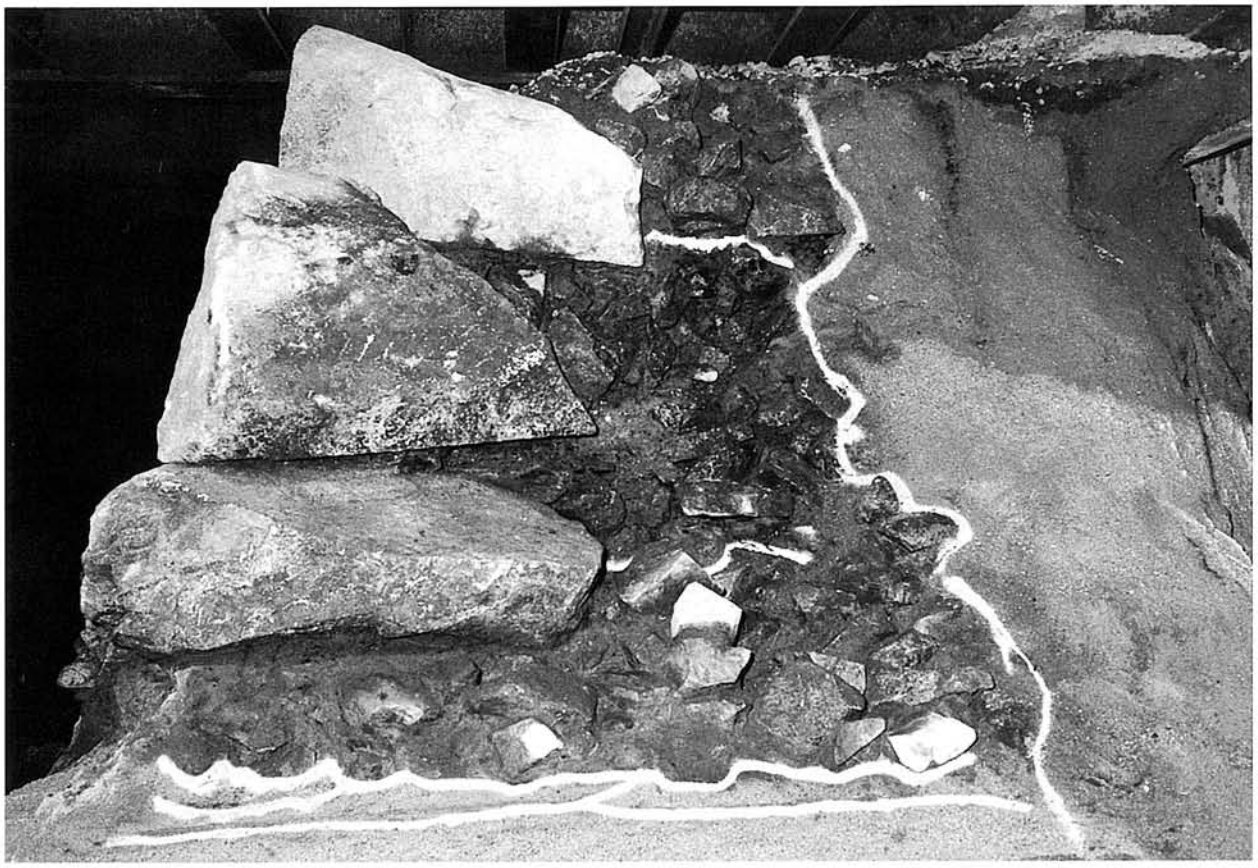
c　ＳＢ３北面中央部検出状況（北から）

図版24

a　ＳＢ３東面南端検出状況（東から）

b　ＳＢ３東面墨書１（東から）

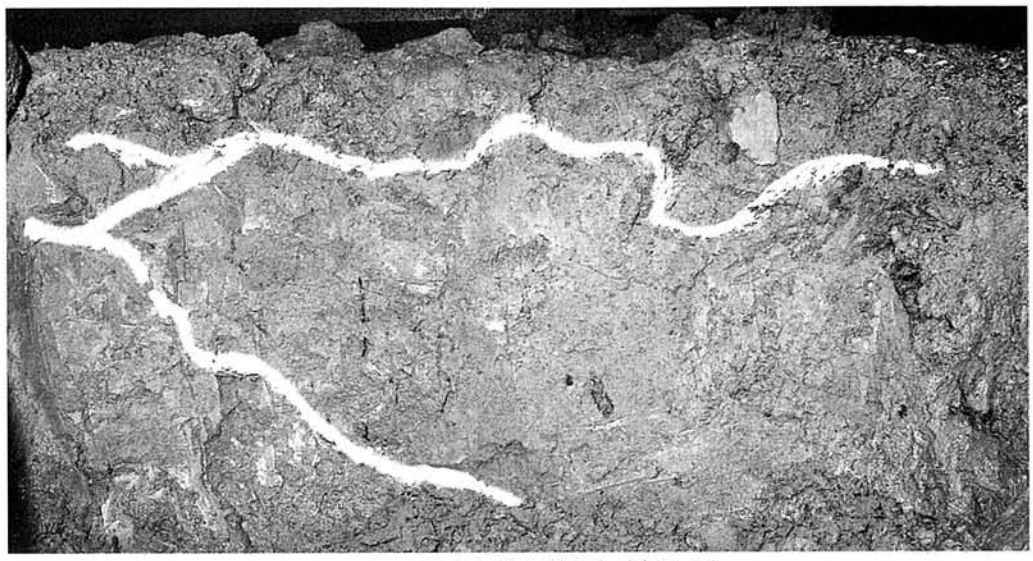
c　ＳＢ３東面墨書２（東から）



a　ＳＢ３南面断面（東から）

b　ＳＢ３北面断面（東から）

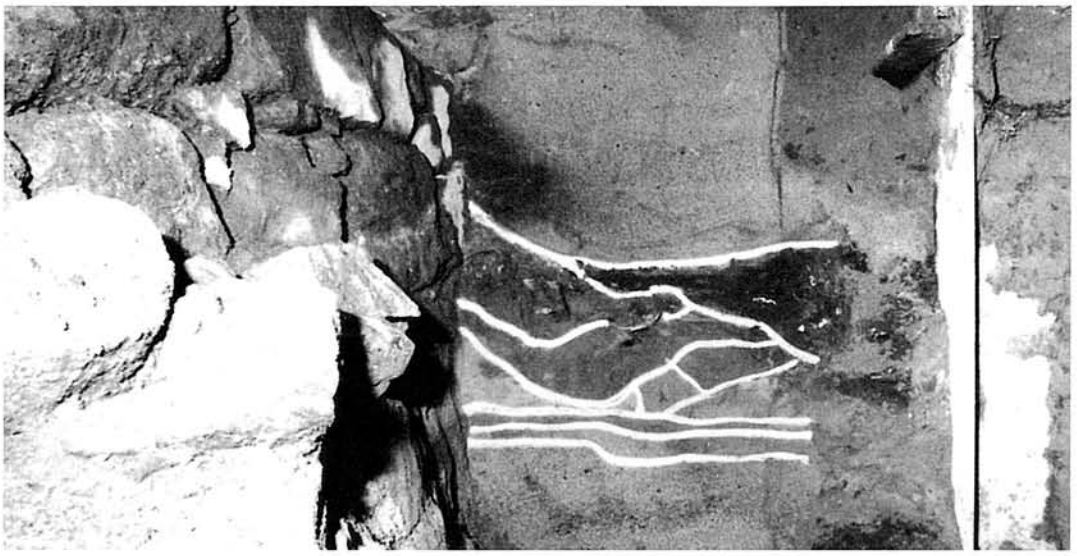
図版26



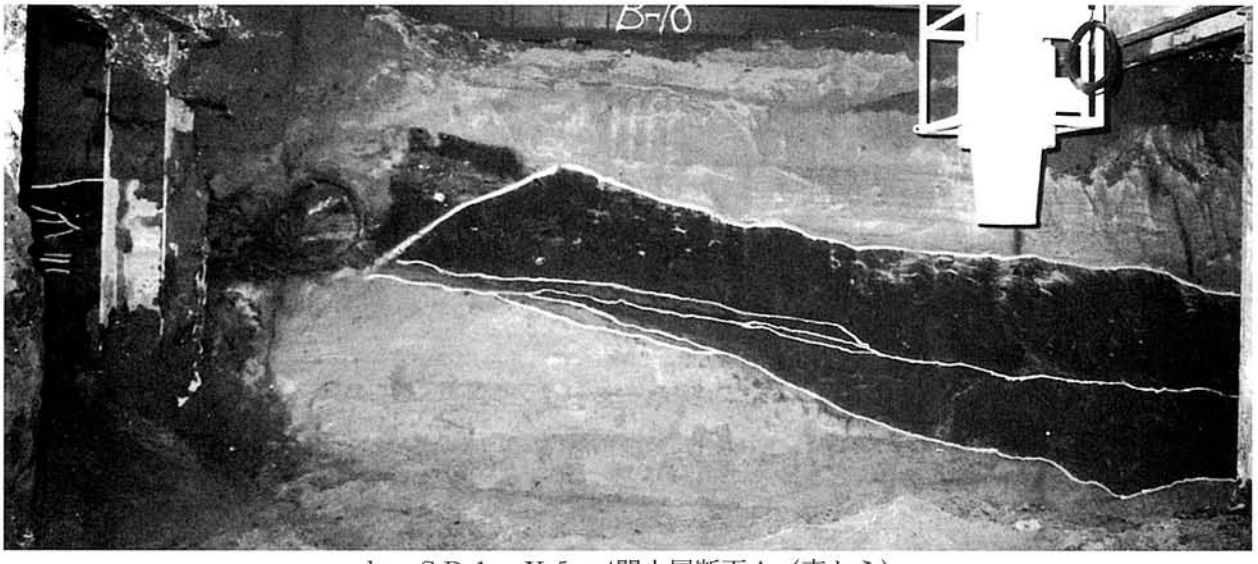
a　ＳＢ３北面土層断面（東から）

b　ＳＢ３西面土層断面（南から）

c　ＳＢ３西面断面（北から）



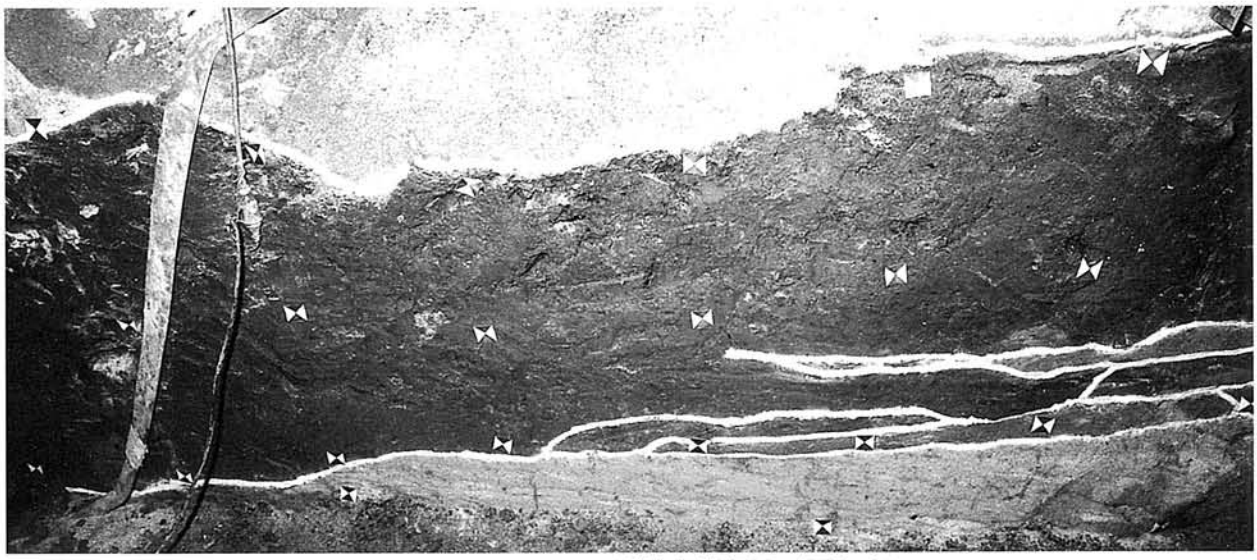
a　ＳＤ１　X-5～-4間土層断面Ａ（東から）



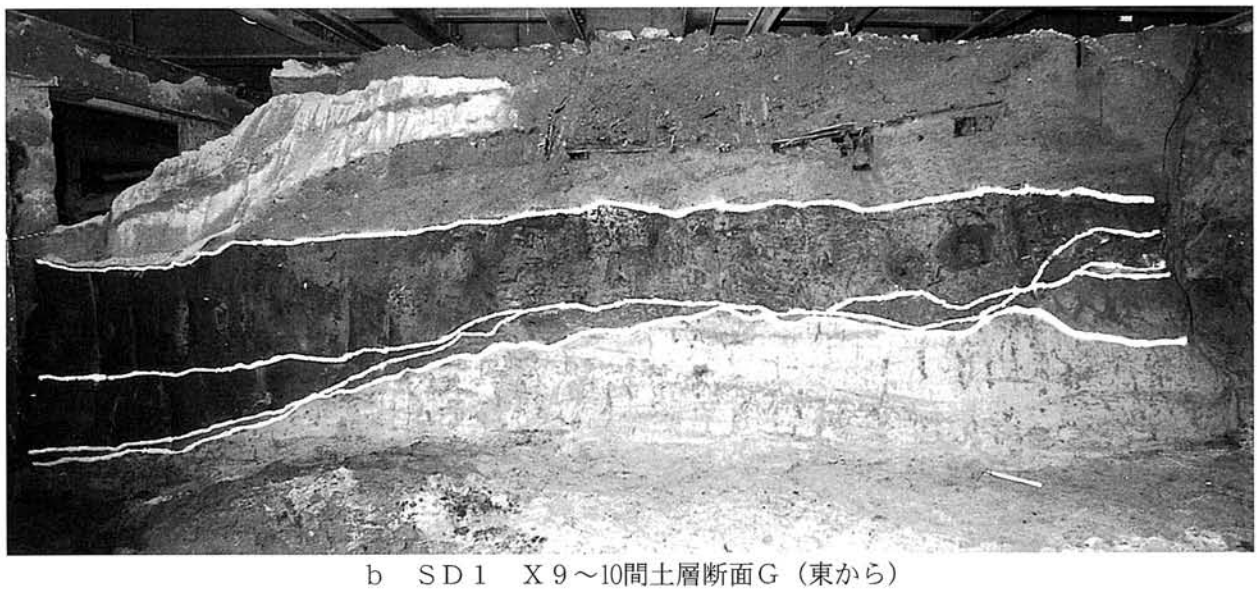
b　ＳＤ１　X-5～-4間土層断面Ａ（東から）

c　ＳＤ１　Ｘ１～２間土層断面Ｅ（東から）

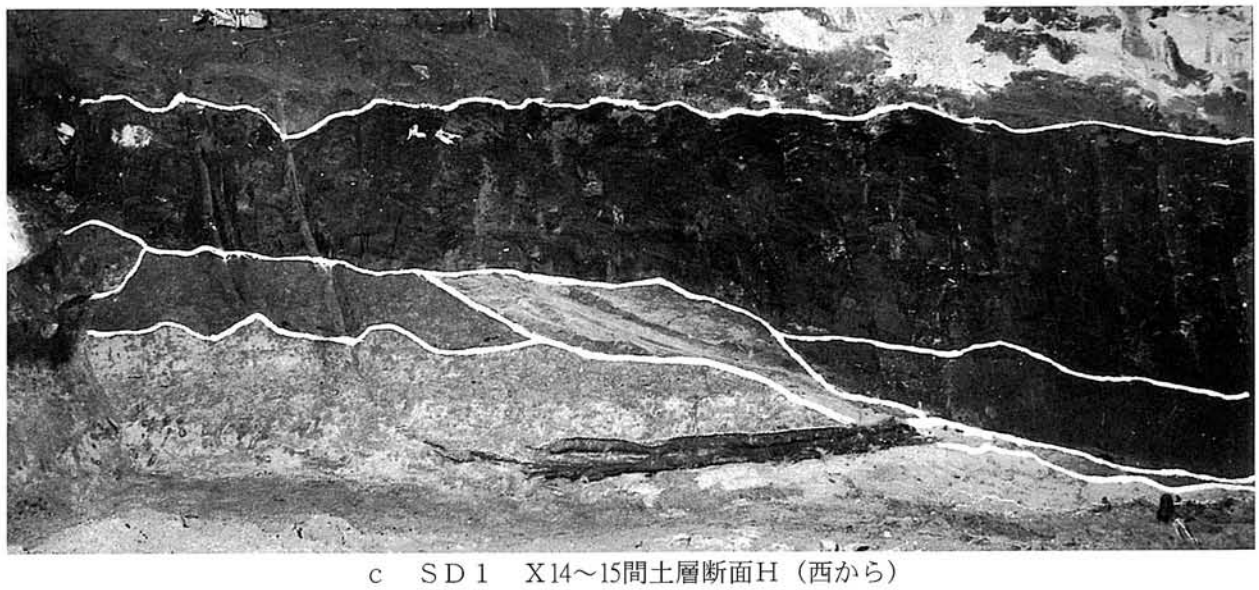
図版28



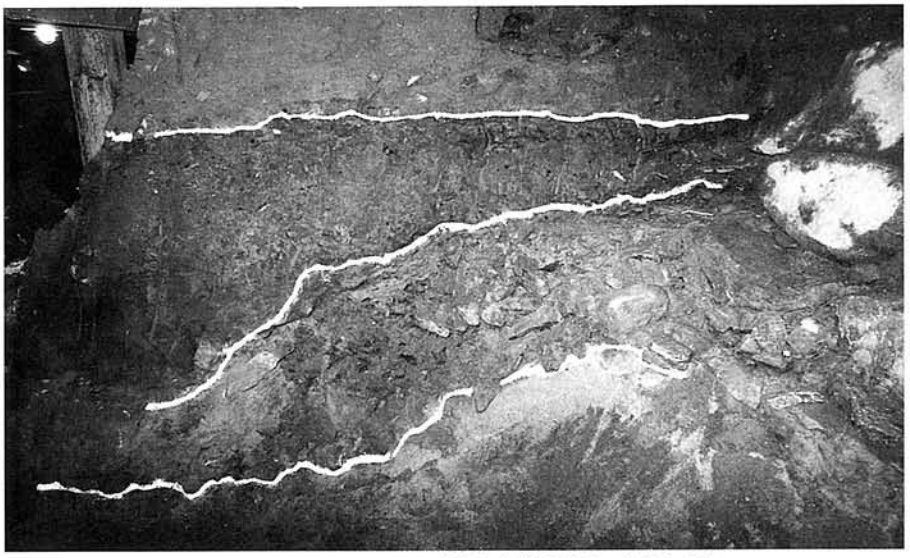
a　ＳＤ１　Ｘ９～10間土層断面Ｇ（西から）



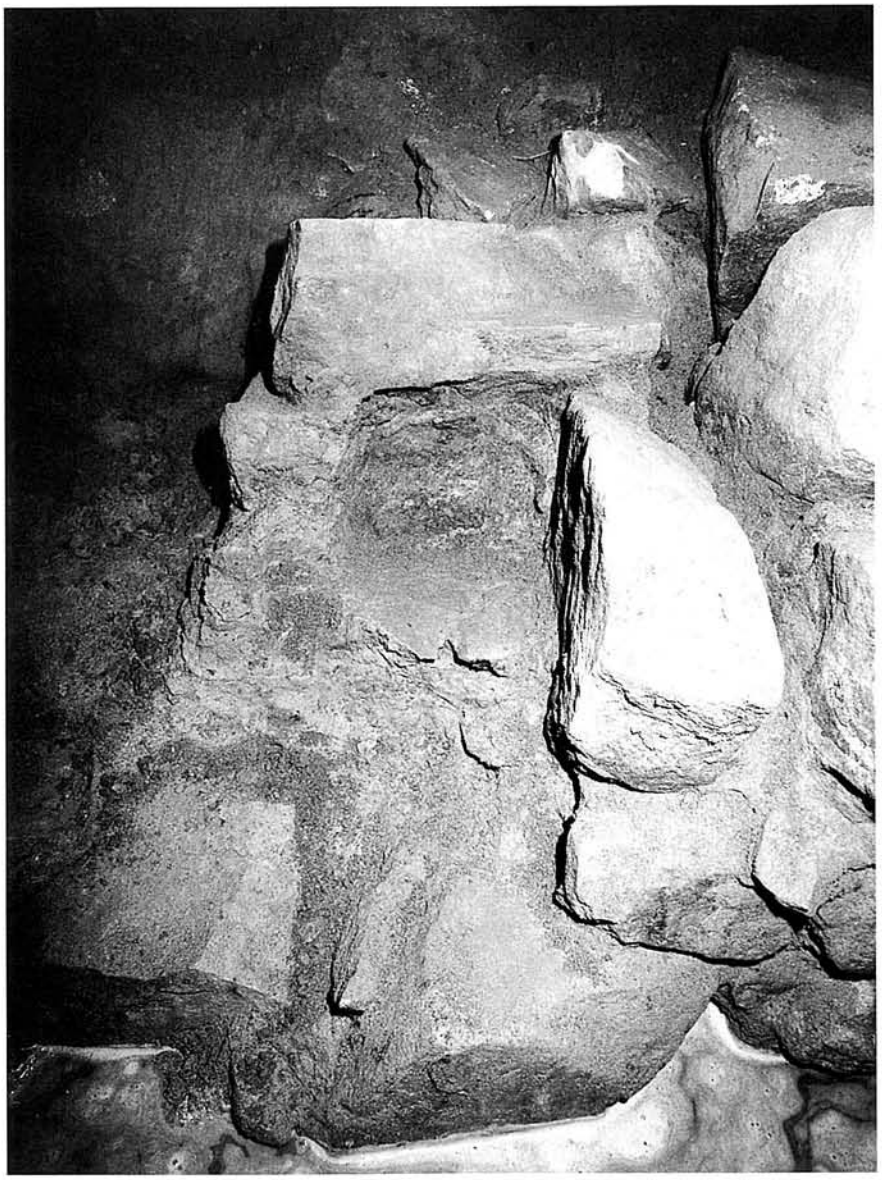
b　ＳＤ１　Ｘ９～10間土層断面Ｇ（東から）



c　ＳＤ１　Ｘ14～15間土層断面Ｈ（西から）



a　ＳＤ２　X17～18間土層断面Ｉ（東から）

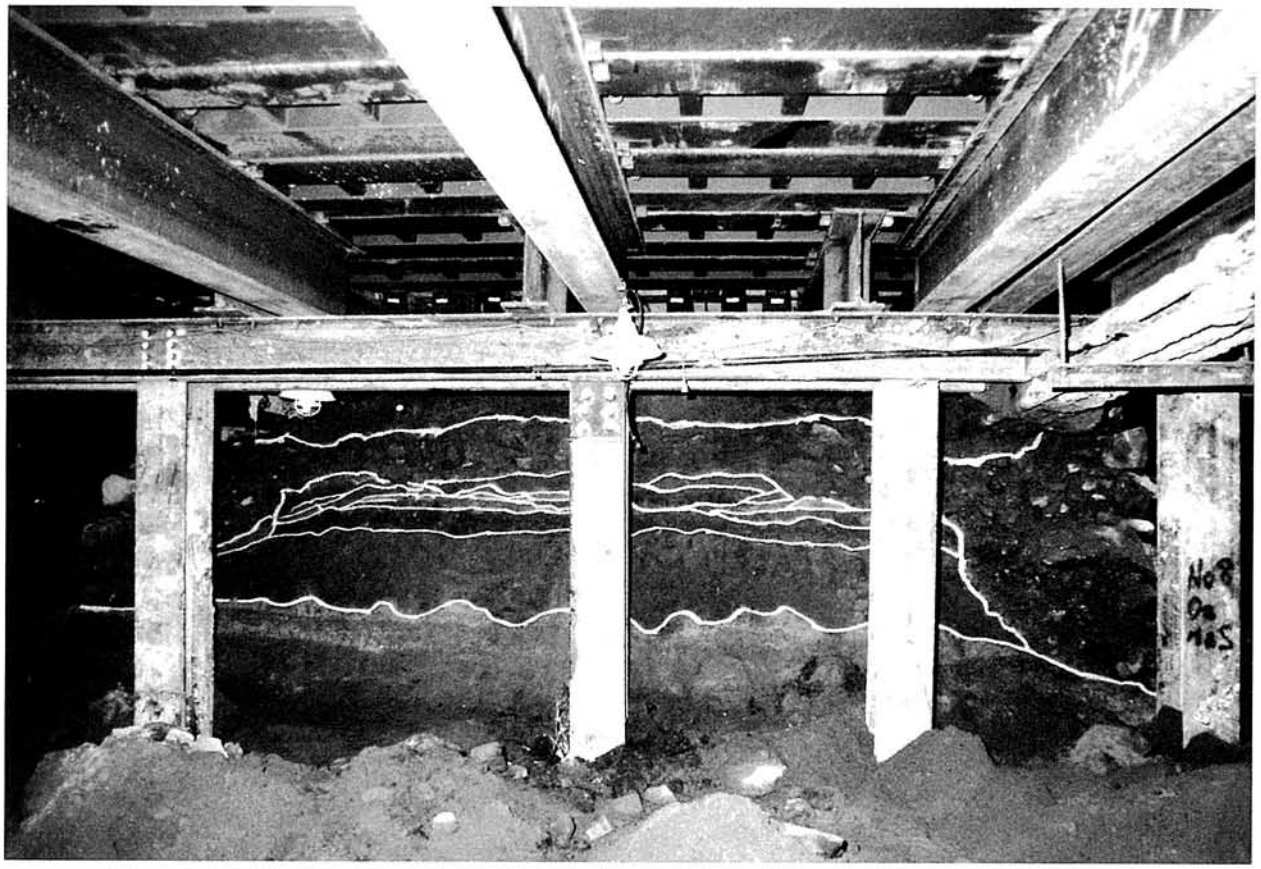


b　ＳＤ３検出状況（北から）

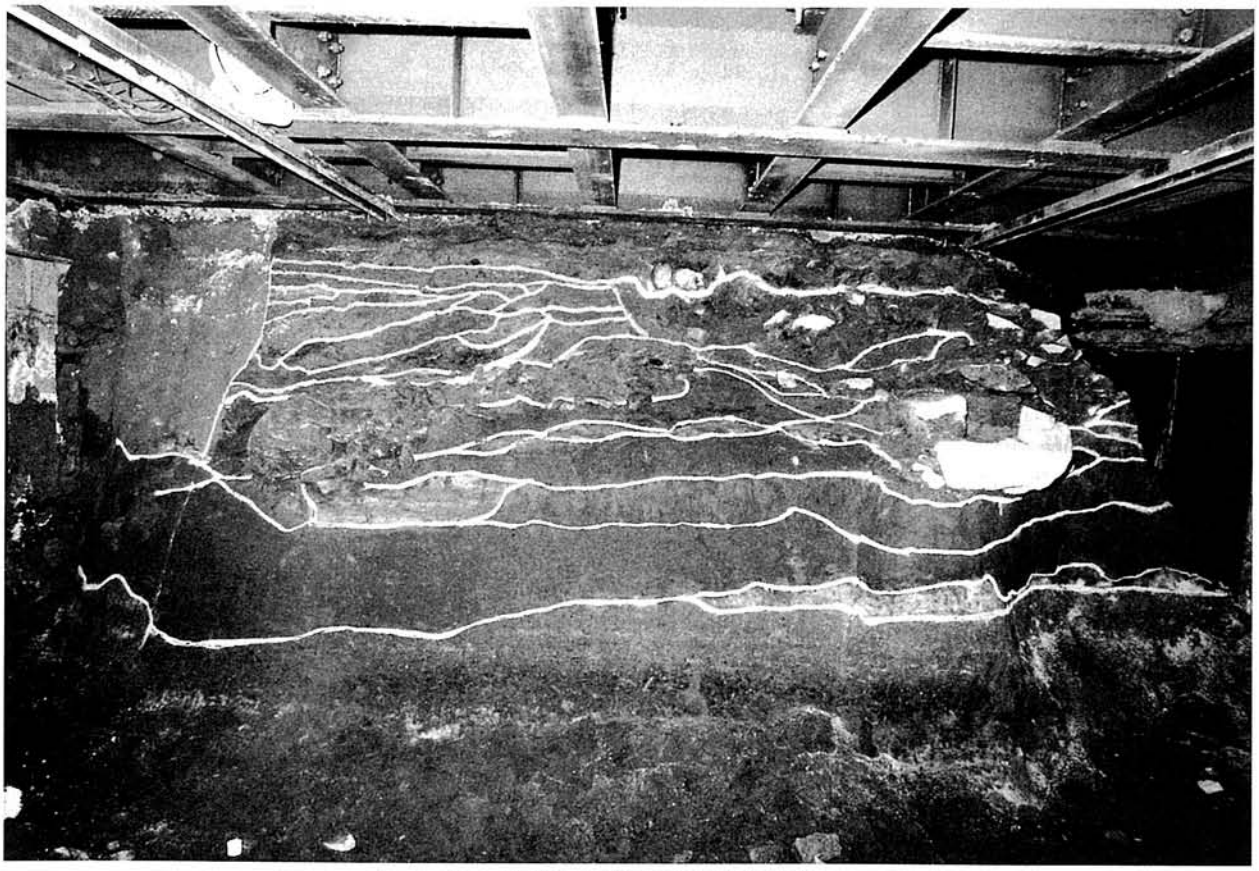
図版30

a　ＳＤ４西部検出状況（西から）

b　ＳＤ４西部蓋石撤去後（西から）



a　ＳＸ１東西断面（南から）

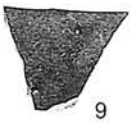


b　ＳＸ１南北断面（西から）

図版32

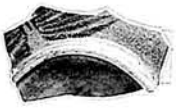
3

5


9

16

20


1

6

15

18

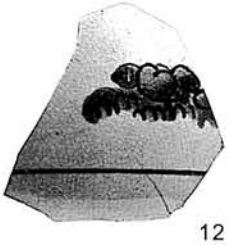
4

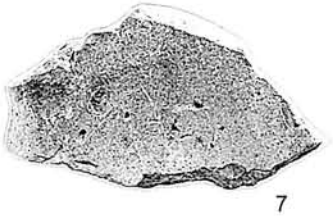
13

2

17

10

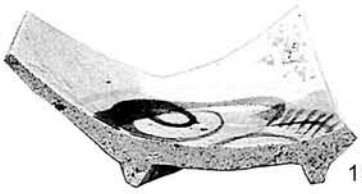

12


7

14

11

21


19

8

22

西調査区出土遺物（1）

24

28

32

34

48

27

29

39

41

37

23

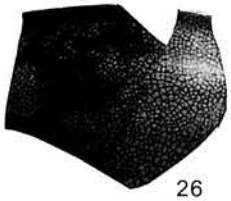
25

42

30

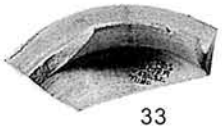
36

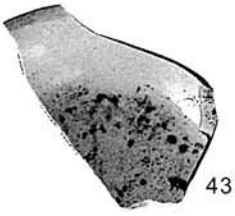
47


26

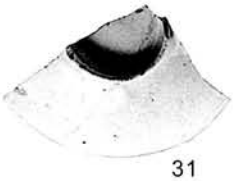
40

45


33


43

49


31

44

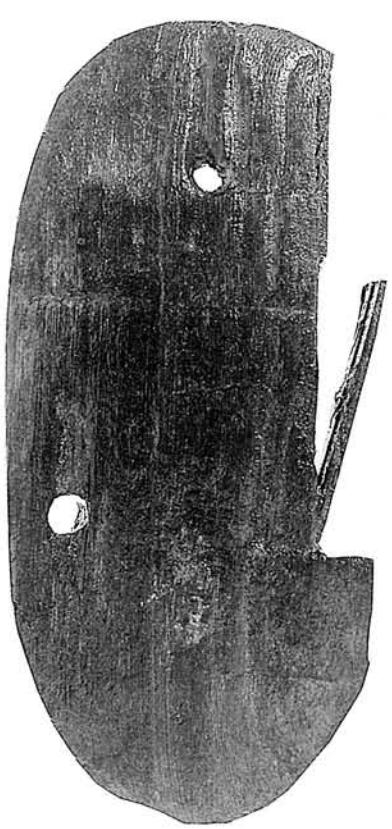
35

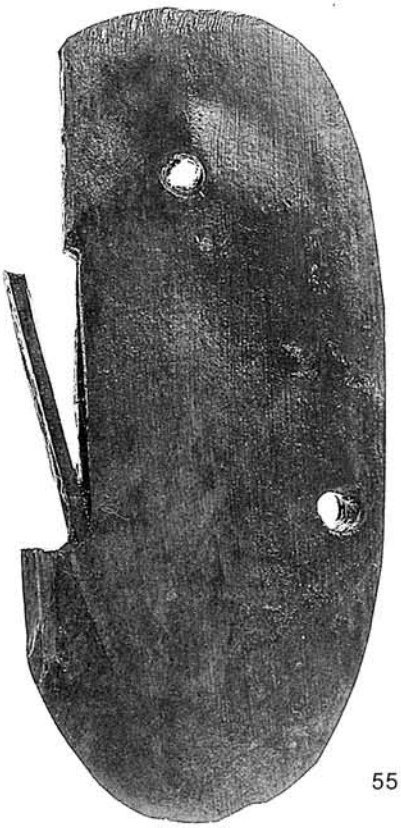
38

46

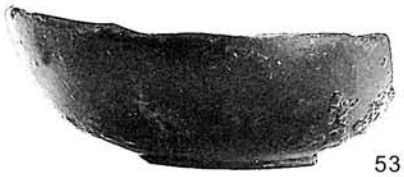
西調査区出土遺物（2）

図版34





55



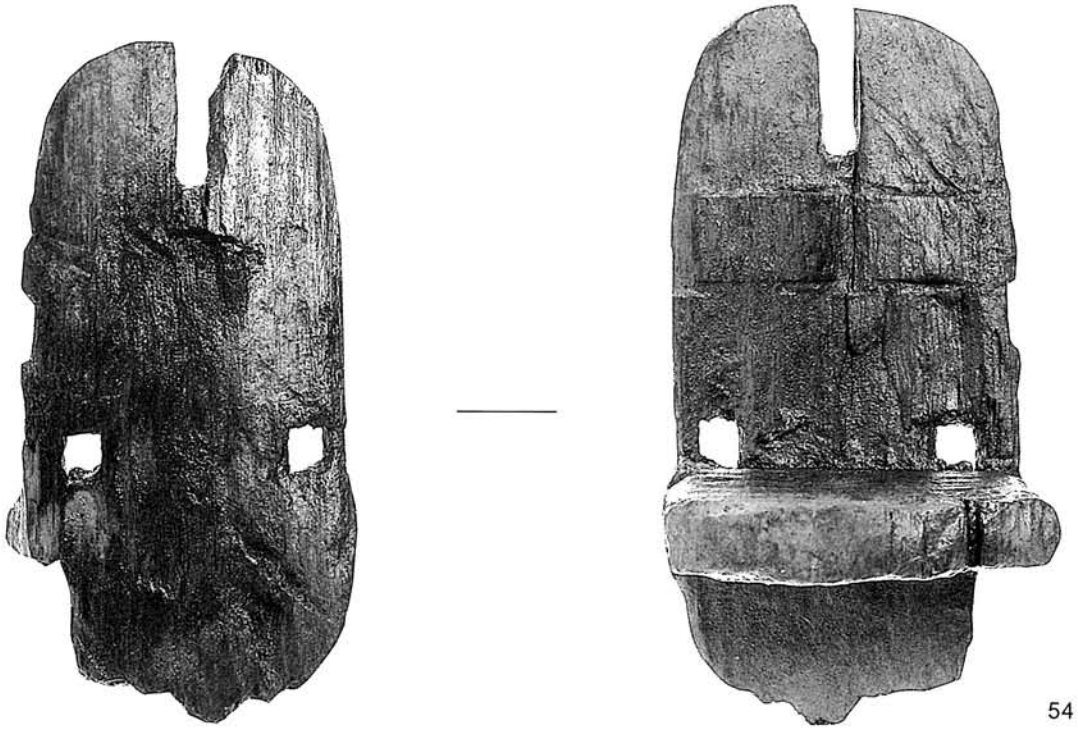
53

50

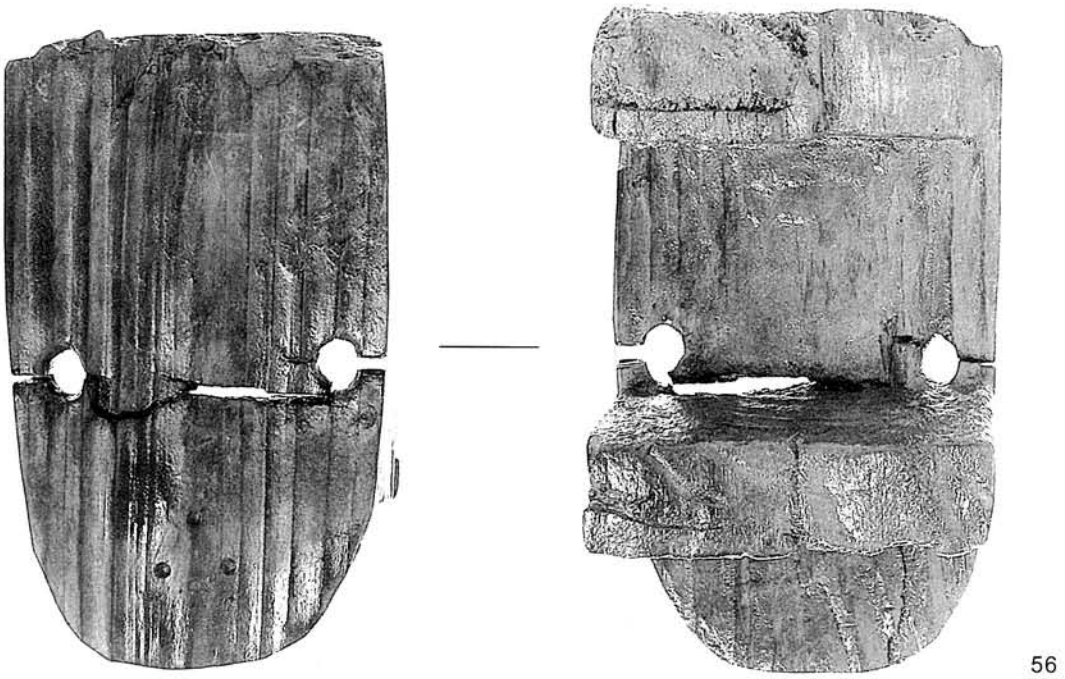
51

52

西調査区出土遺物（3）



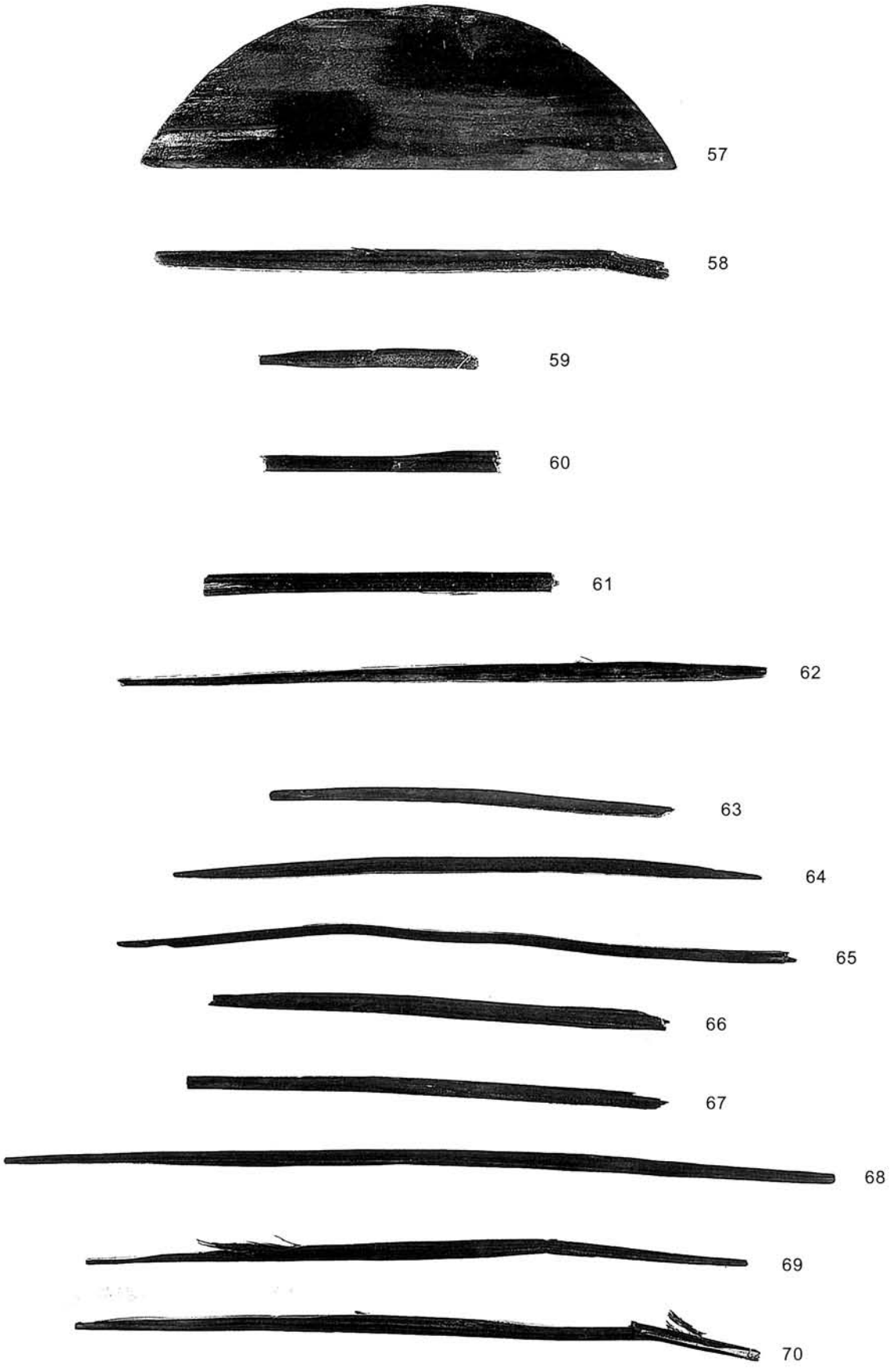
54



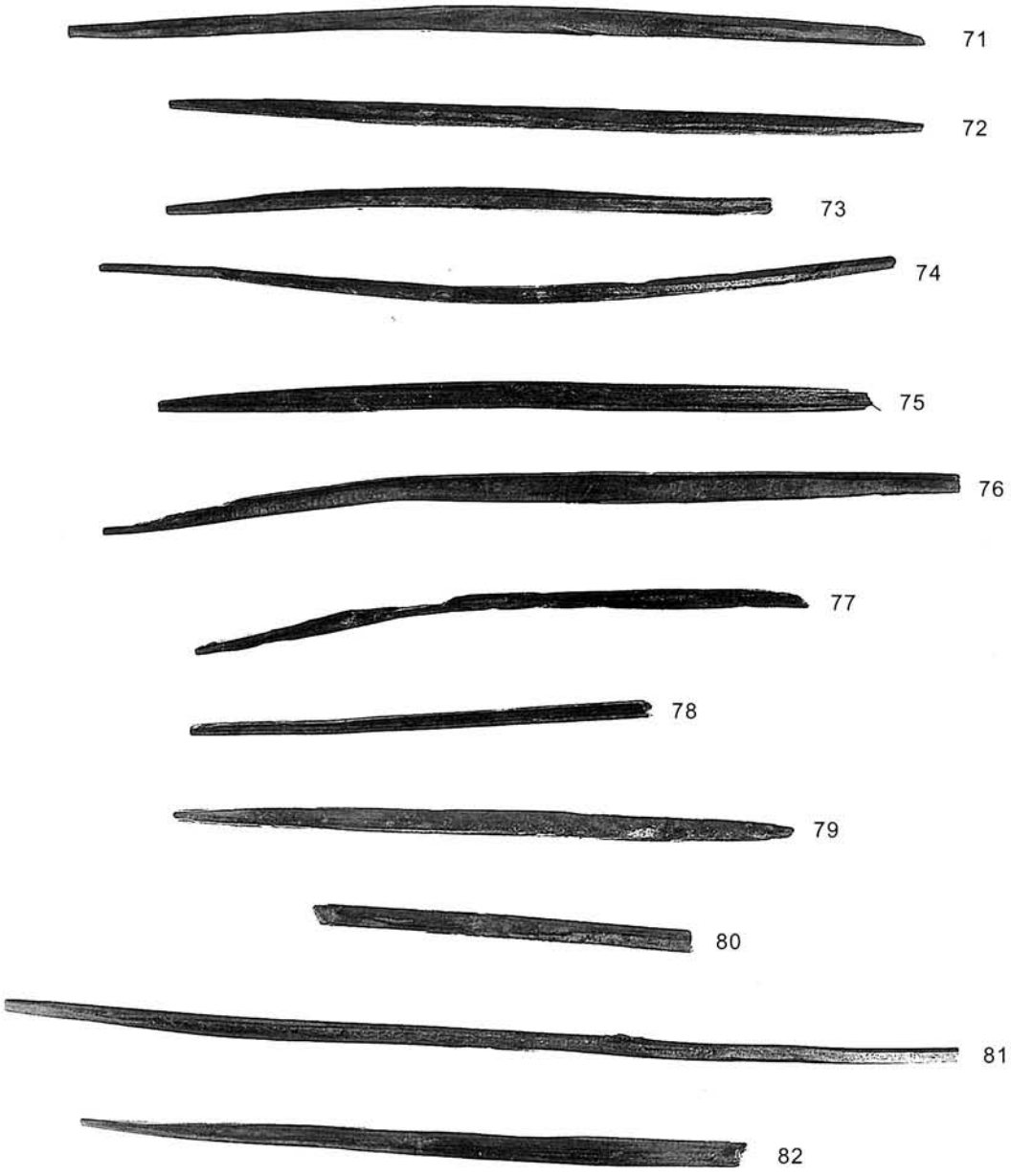
56

西調査区出土遺物（4）

図版36



西調査区出土遺物（5）



西調査区出土遺物（6）

図版38

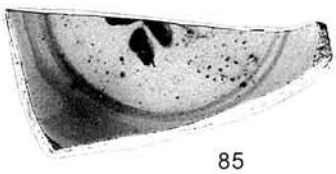
96

93

90

100

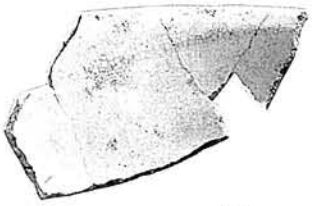
89

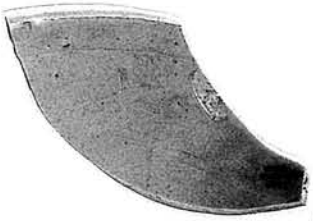

85

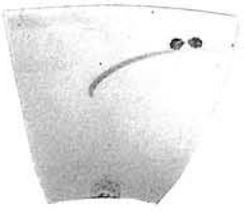
92

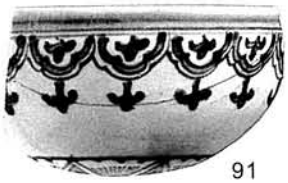
95

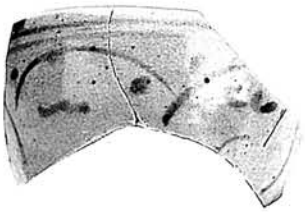
83


86


84

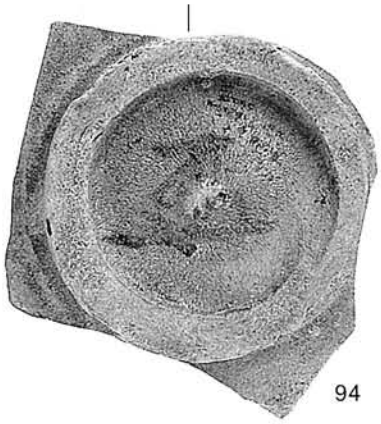

97

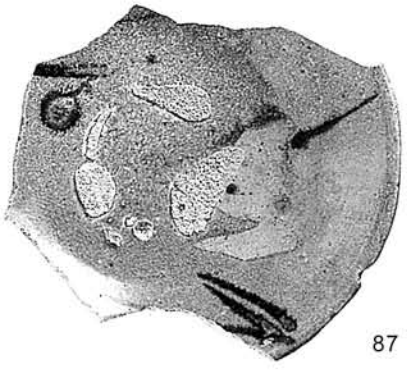

91


98

99

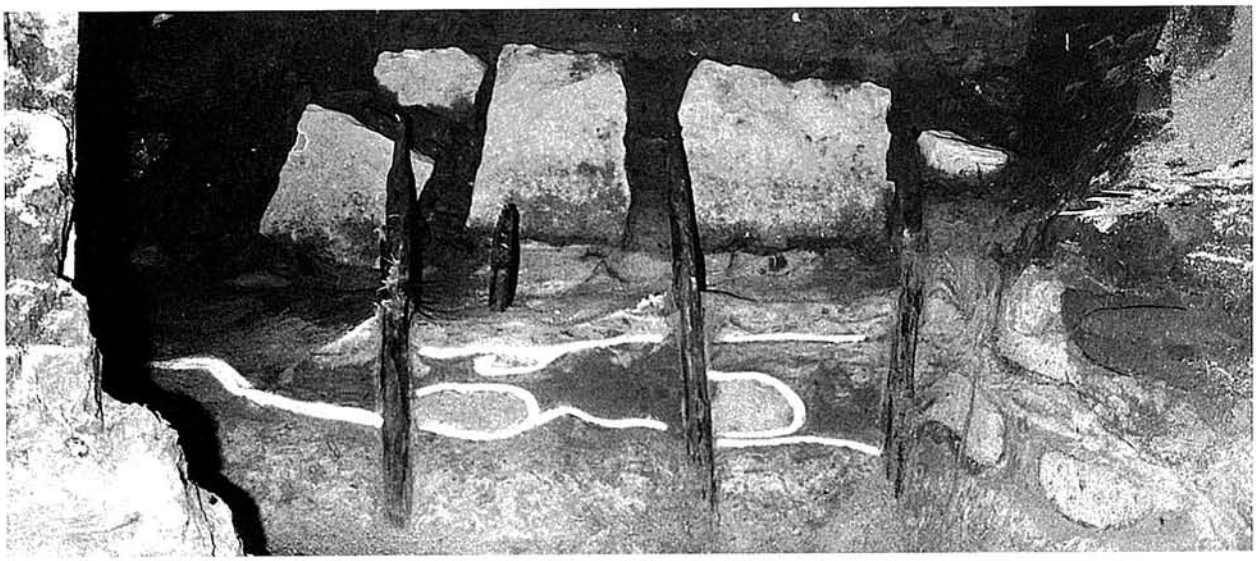
88


94

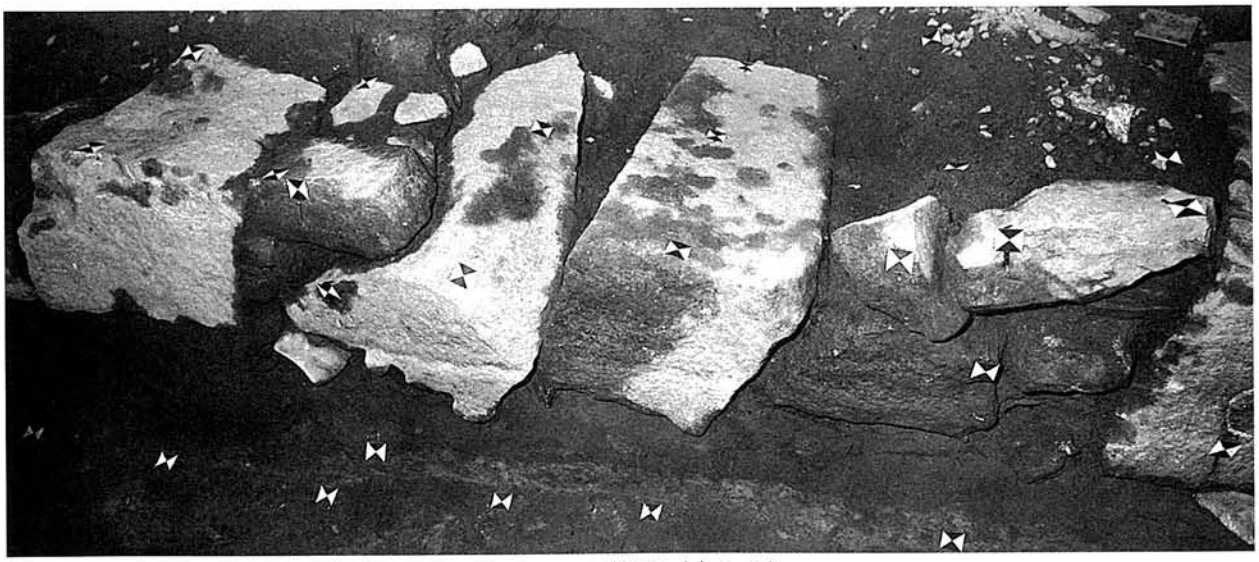

87

西調査区出土遺物（7）

a　ＳＶ11基底部（南から）

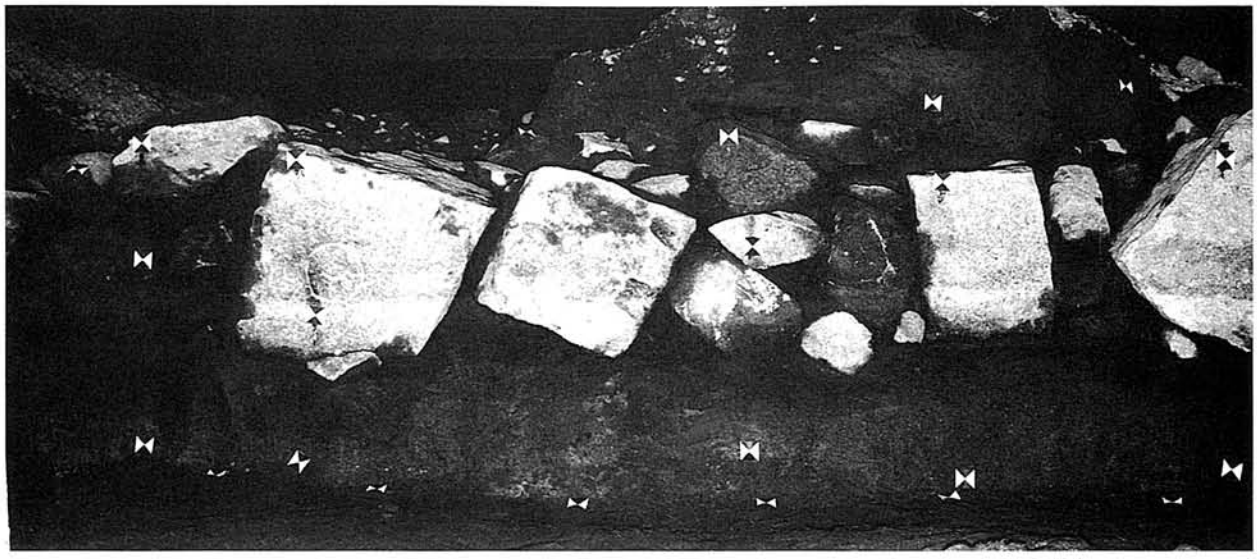


b　ＳＶ11基底部土嚢痕（南から）



c　ＳＶ11築石（南から）

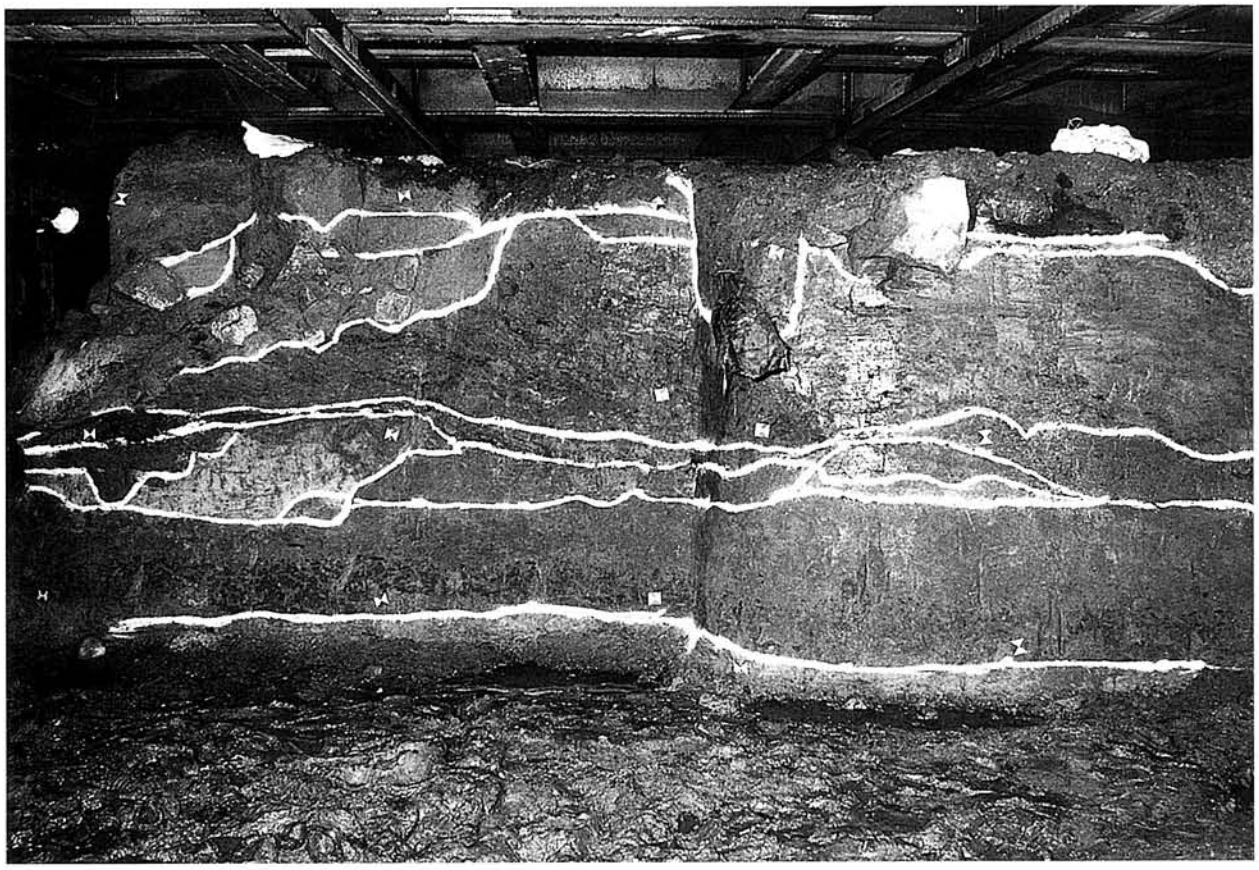
図版40



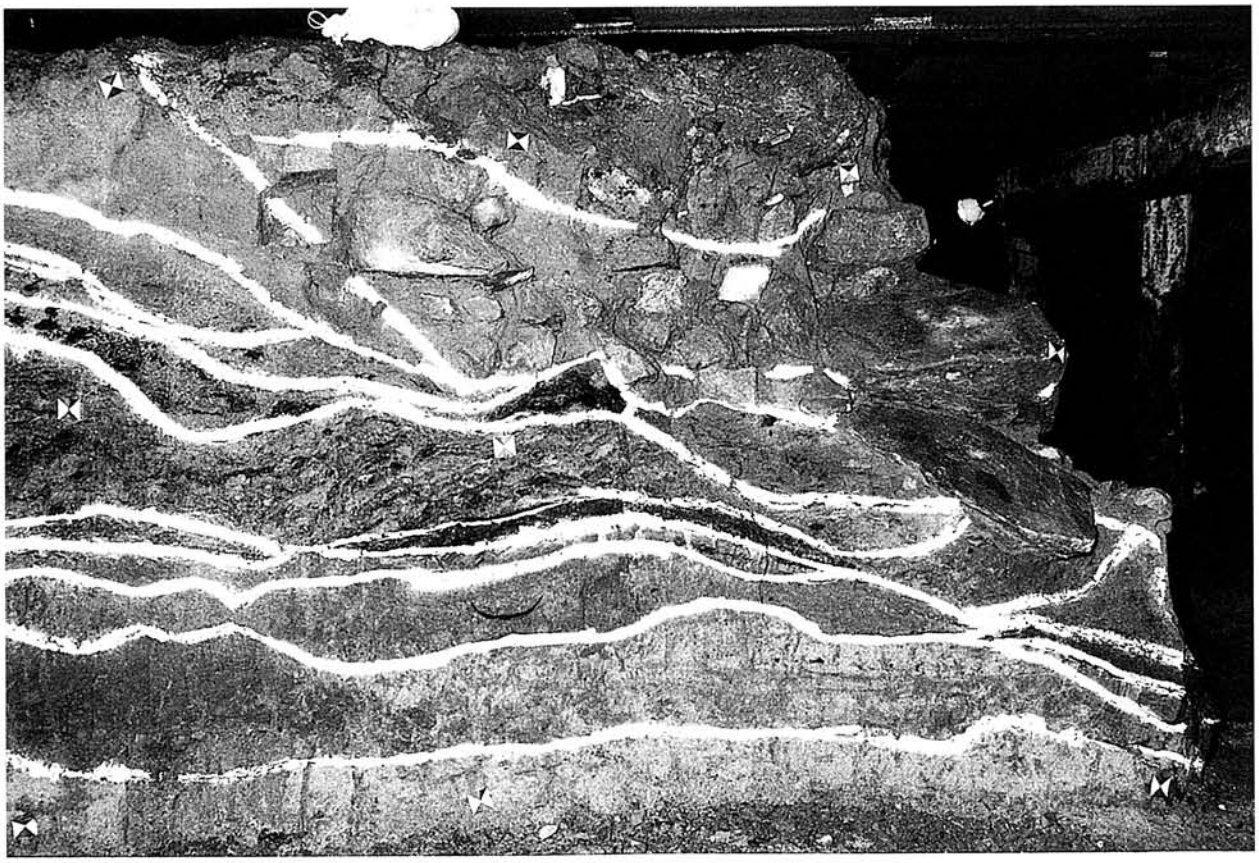
a　ＳＶ11　刻印石「⊖」「∘」（南から）

b　ＳＶ11・ＳＢ４接合部（南から）

c　ＳＶ11築石刻印「大」



a　ＳＶ11断面Ｋ（東から）

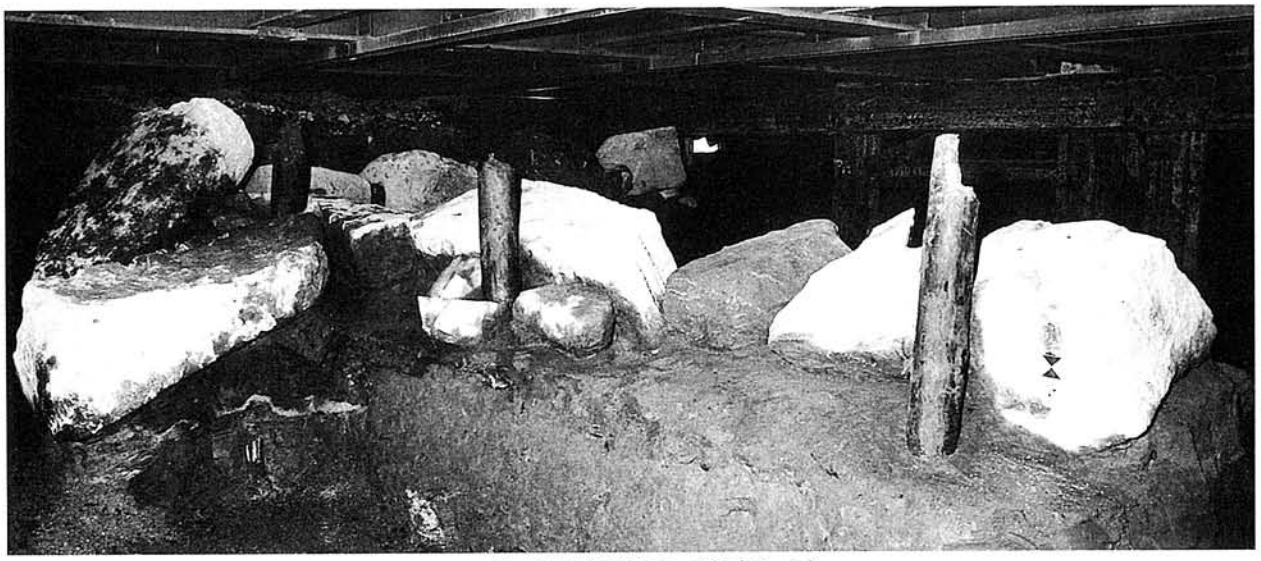


b　ＳＶ11断面Ｌ（西から）

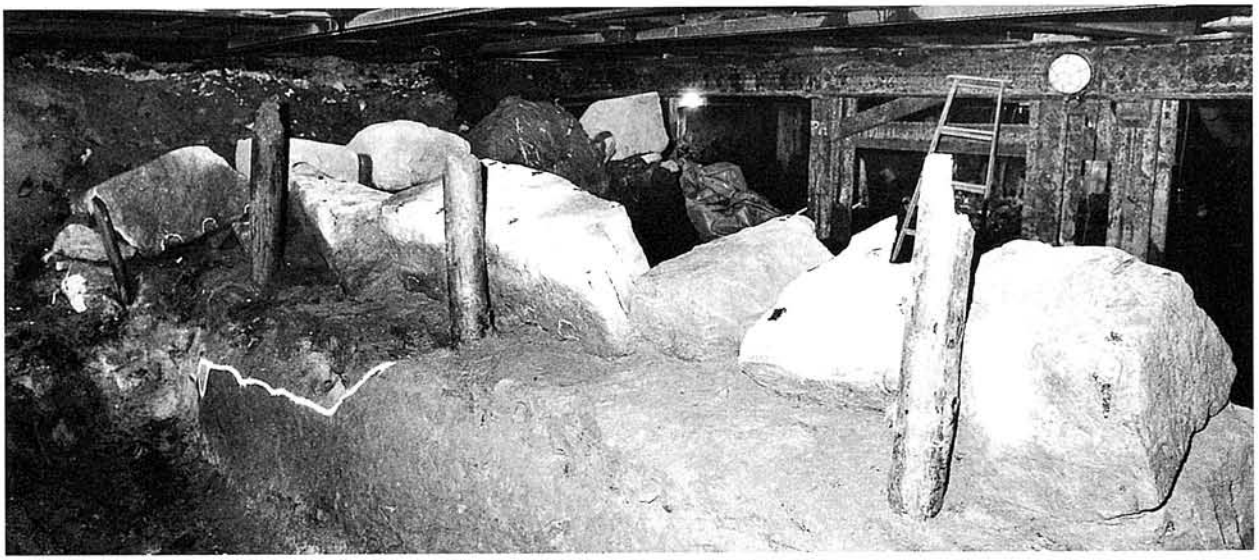
図版42

a　ＳＶ11断面Ｍ（西から）

b　ＳＶ11断面Ｎ（西から）



a　ＳＶ12検出状況（南東から）



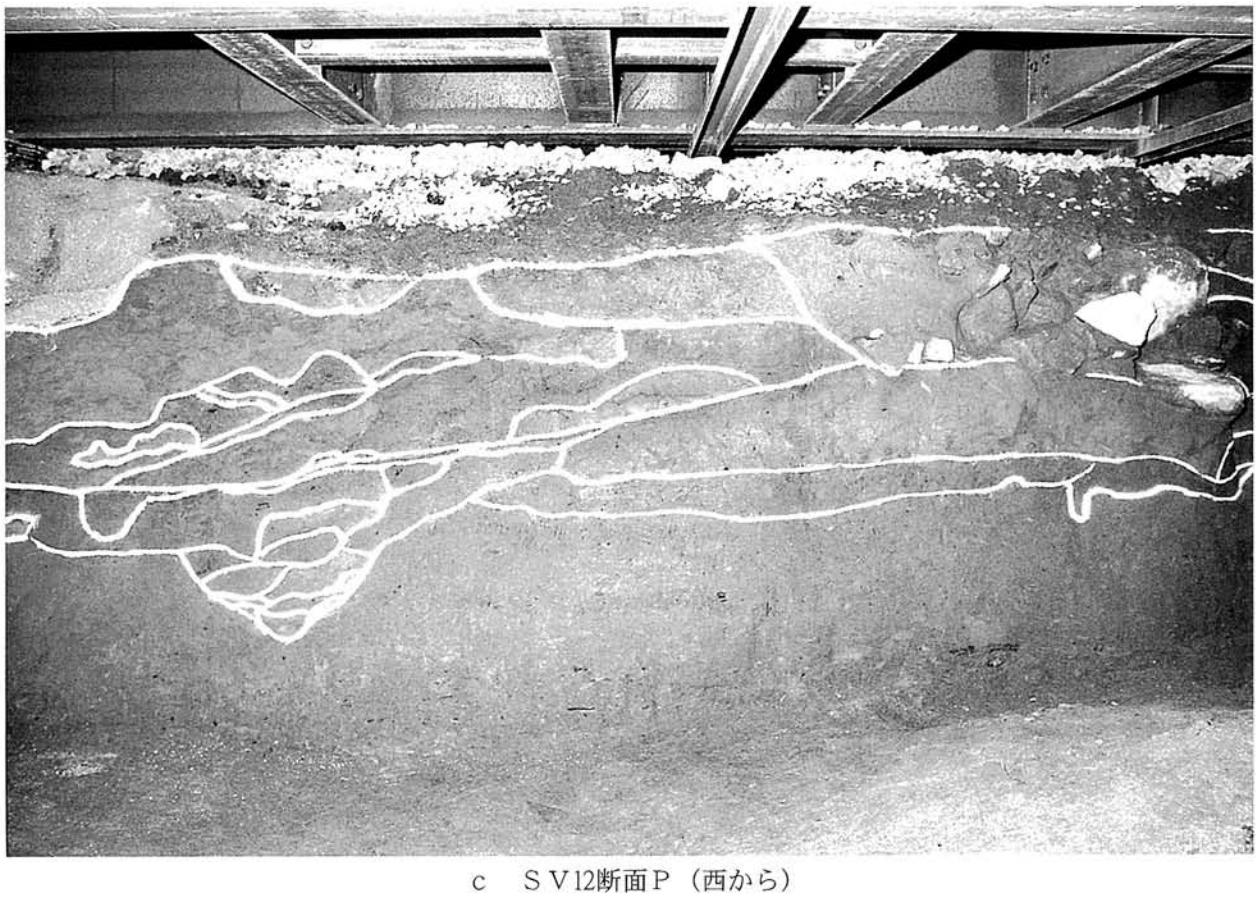
b　ＳＶ12石材撤去後（南東から）

c　ＳＶ12掘り方（南東から）

図版44

a　ＳＶ12石材Ａ刻印

b　ＳＶ12石材Ｂ刻印



c　ＳＶ12断面Ｐ（西から）

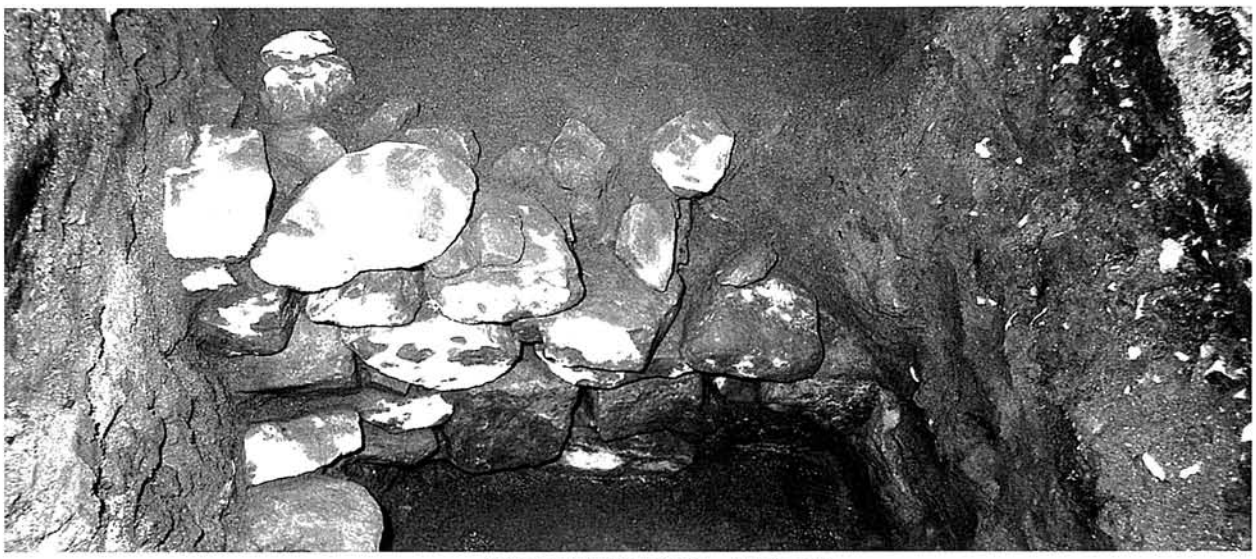
a　ＳＶ13検出状況（北西から）

b　ＳＶ14検出状況（北から）

図版46

a　ＳＶ15西部検出状況（北東から）

b　ＳＶ15東部検出状況（北から）



a　ＳＶ16北部検出状況（西から）

b　ＳＶ16中央部検出状況（西から）

c　ＳＶ16南部検出状況（西から）

図版48

a　ＳＶ17北部検出状況（東から）

b　ＳＶ17南部検出状況（東から）

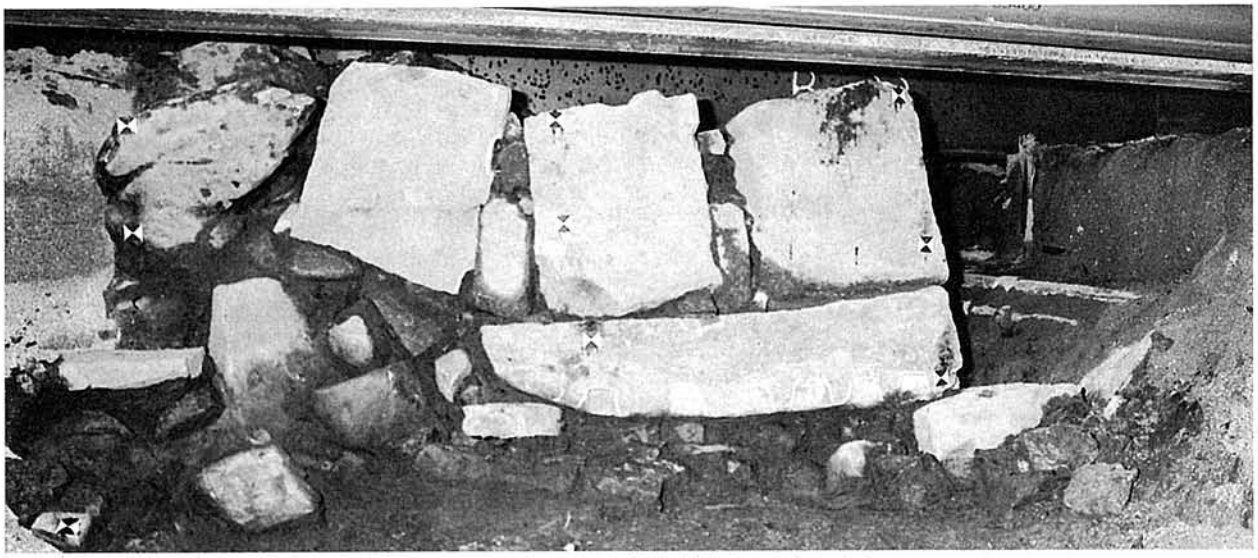
a　ＳＢ４南西角部

b　ＳＢ４・ＳＤ６掘り方検出状況（南東から）

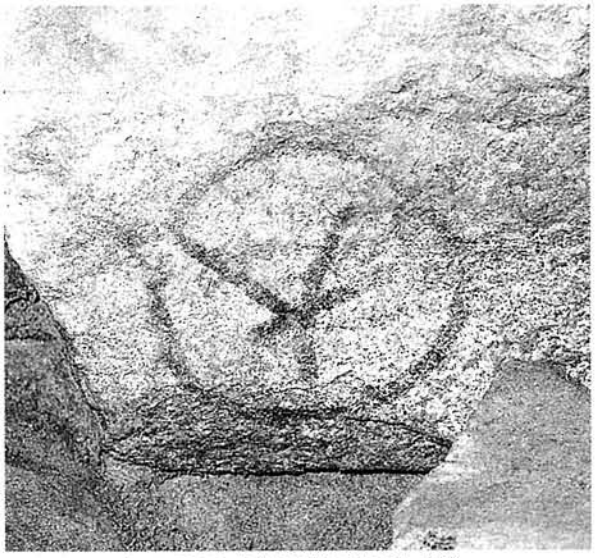
図版50

a　ＳＢ４北東角部検出状況（北から）

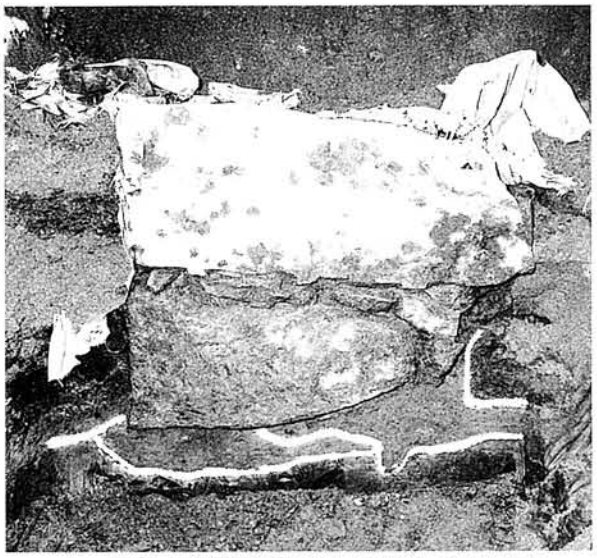
b　ＳＢ４東面南半部検出状況（東から）



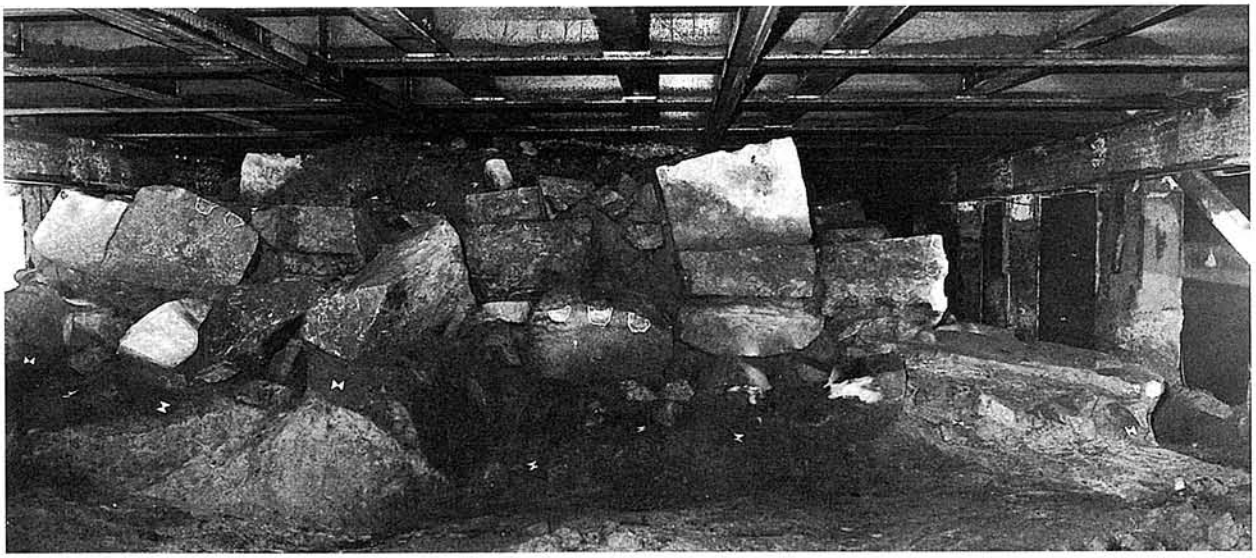
a　ＳＢ４東面北半部検出状況（東から）



b　ＳＢ４東面築石墨書「㊦」



c　ＳＢ４北西角築石検出状況（西から）



c　ＳＢ４西面検出状況（西から）

図版52

a　ＳＢ４南面西部検出状況（南から）

b　ＳＢ４南面中央部検出状況（南から）

c　ＳＢ４南面東部検出状況（南から）

a　ＳＢ４東面・ＳＤ６断面Ｓ（北から）

b　ＳＢ４断面（西より）

図版54

a　ＳＢ４西側掘り方（北西から）

b　ＳＢ４南側掘り方（西から）

a　ＳＢ５南面検出状況（南東から）

b　ＳＢ５北面検出状況（北西から）

図版56

a　ＳＢ５西面検出状況（西から）

b　ＳＢ５東面検出状況（東から）

c　ＳＢ５東面検出状況（東から）

a　ＳＢ５断面（西から）

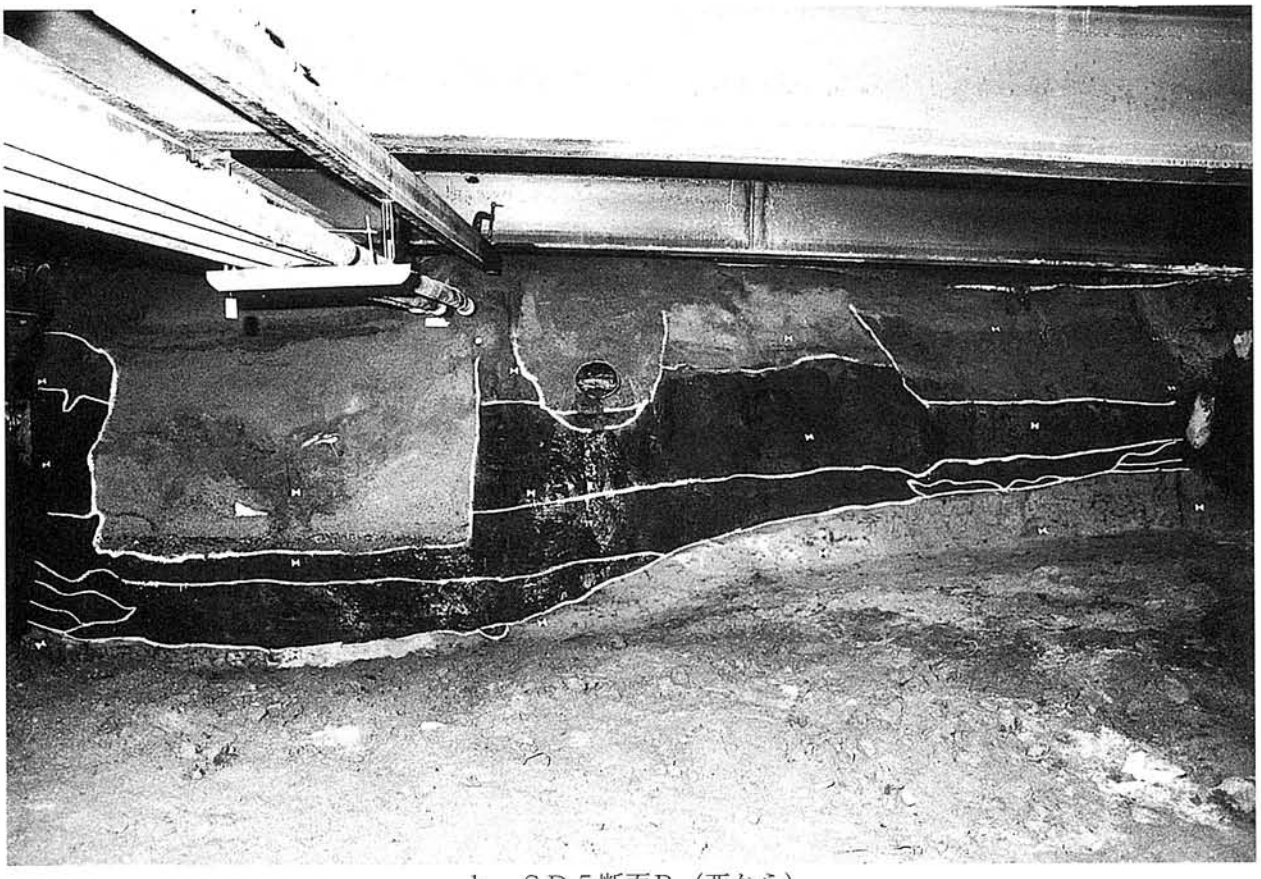
b　ＳＢ５西面・ＳＤ７断面Ｔ（北から）

図版58

a　ＳＢ５基底部粗朶層検出状況（北東から）

b　ＳＢ５東側掘り方検出状況（北東から）

a　ＳＤ２断面Ｑ（西から）



b　ＳＤ５断面Ｒ（西から）

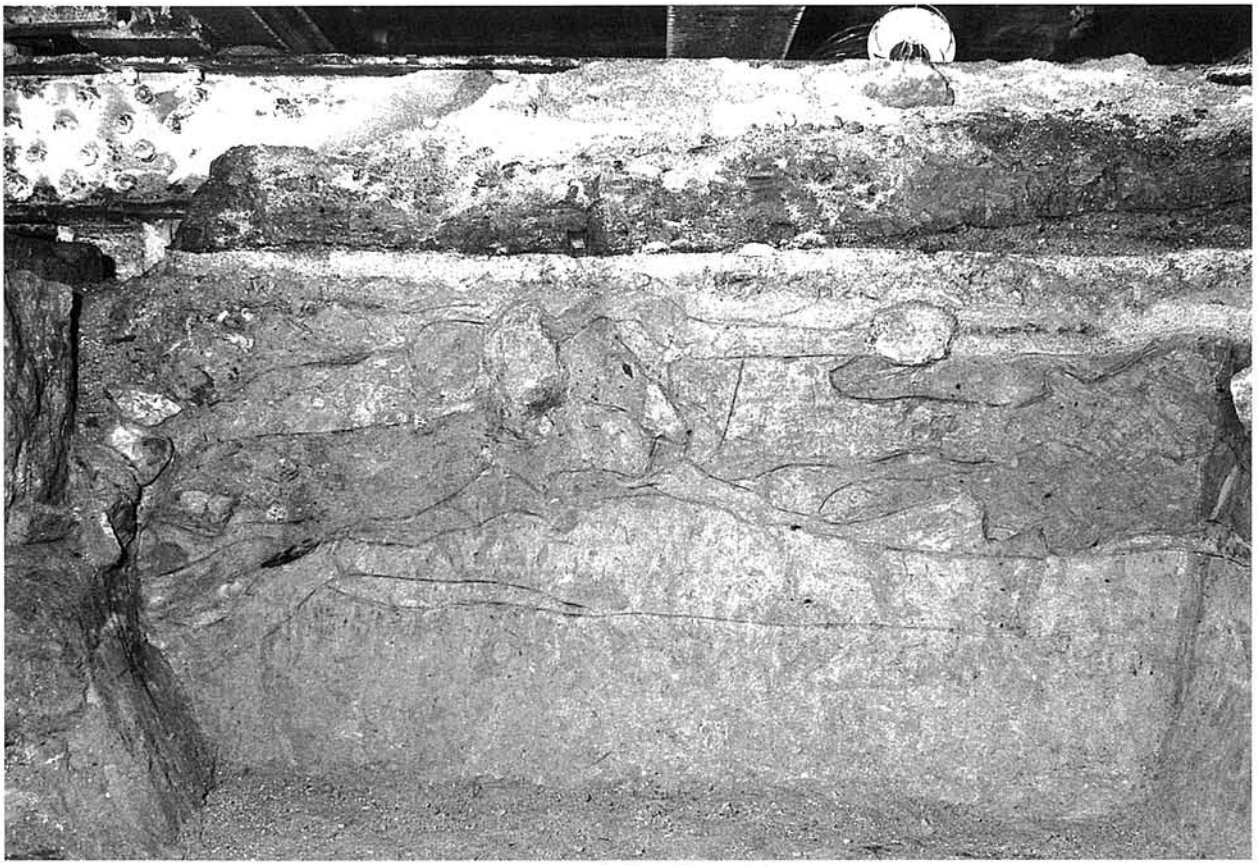
図版60

a　ＳＤ６北部検出状況（南から）

c　ＳＤ８検出状況（西から）

b　ＳＢ６中央部検出状況（南から）

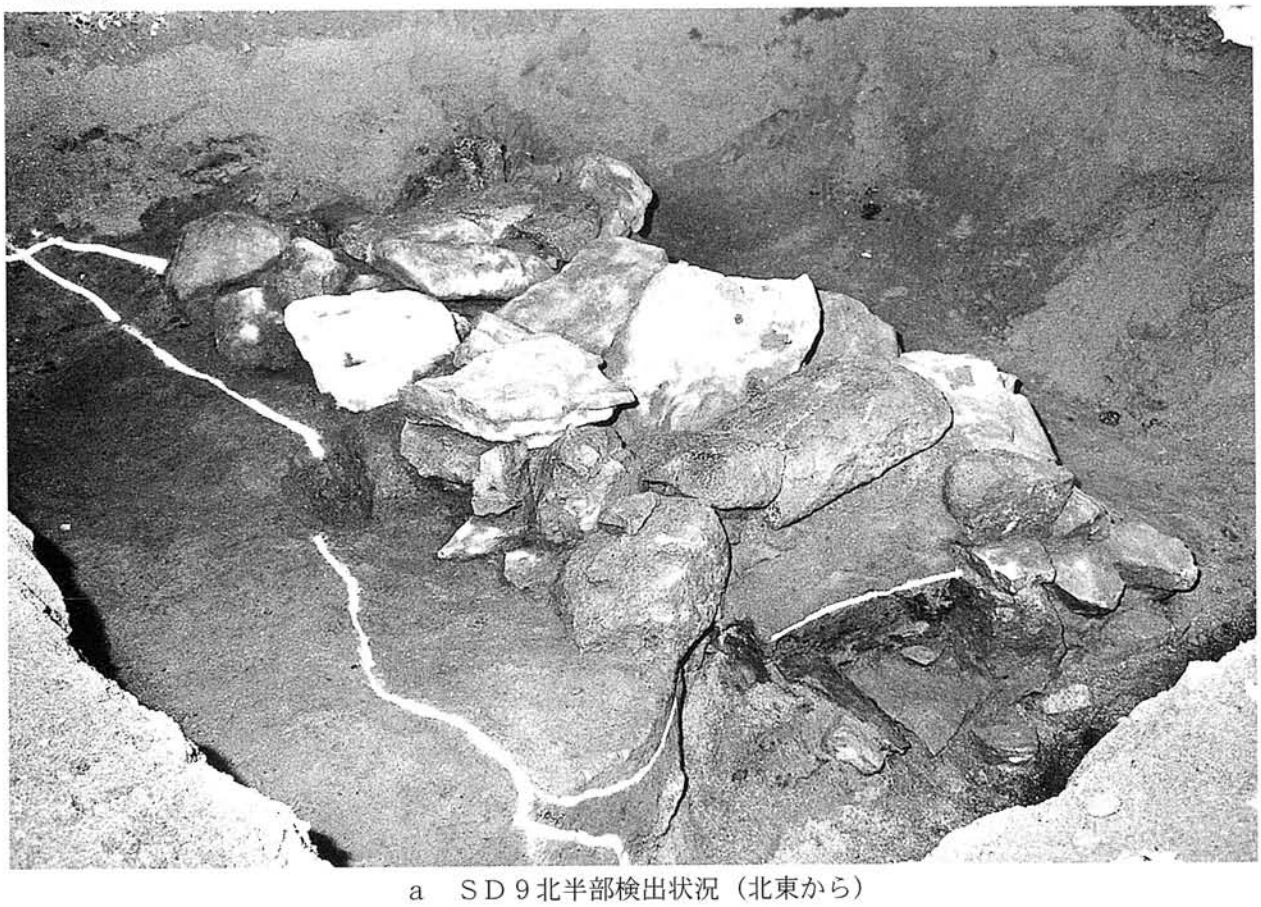
d　ＳＤ７北半部検出状況（南から）



a　ＳＤ６掘り方検出状況（南から）

b　ＳＤ７・ＳＤ10検出状況（南東から）

図版62



a　ＳＤ９北半部検出状況（北東から）

b　ＳＤ９北半部蓋石撤去後（北から）

a　ＳＤ９開口部（南から）

b　ＳＤ９断面（北から）

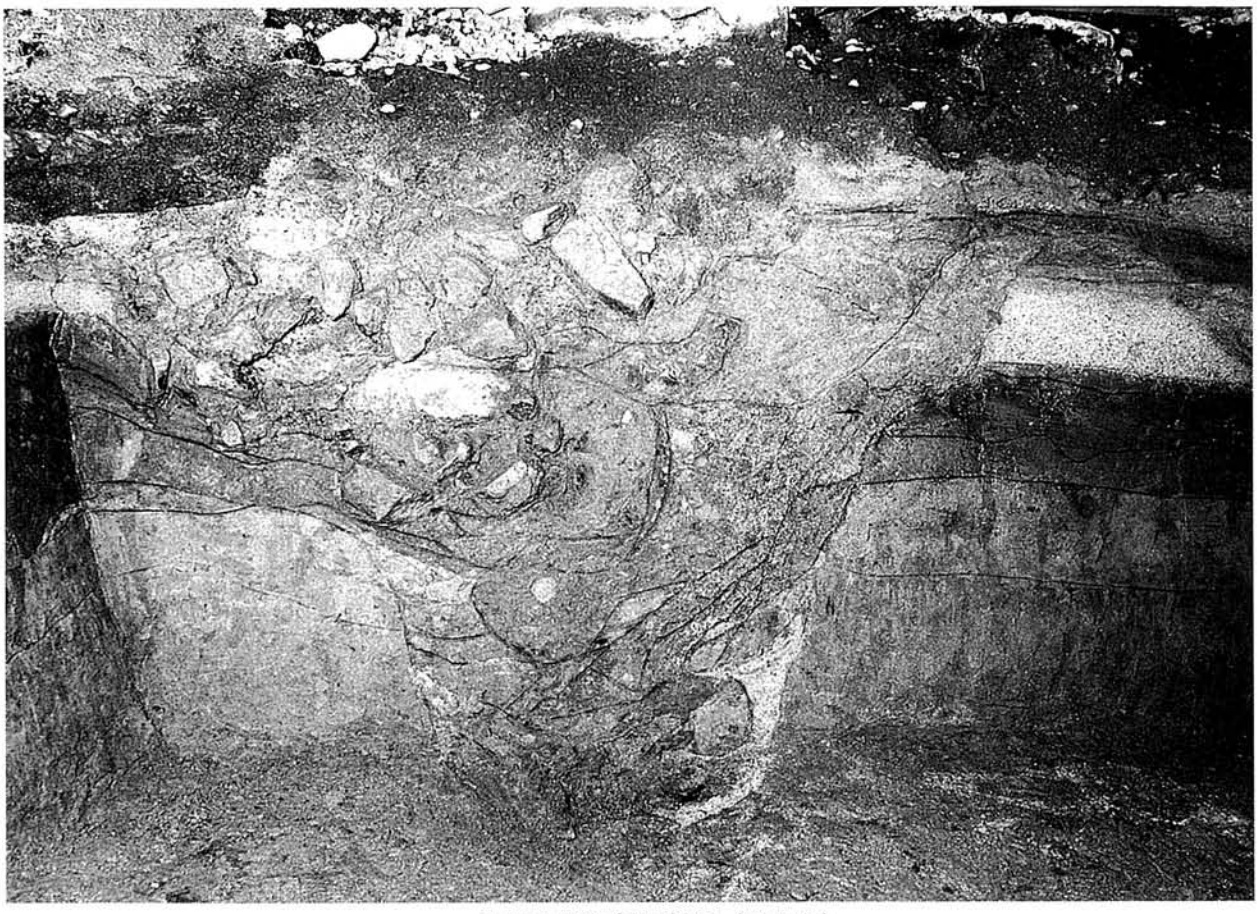
図版64

a　ＳＤ11検出状況（南東から）

b　ＳＤ12検出状況（南から）

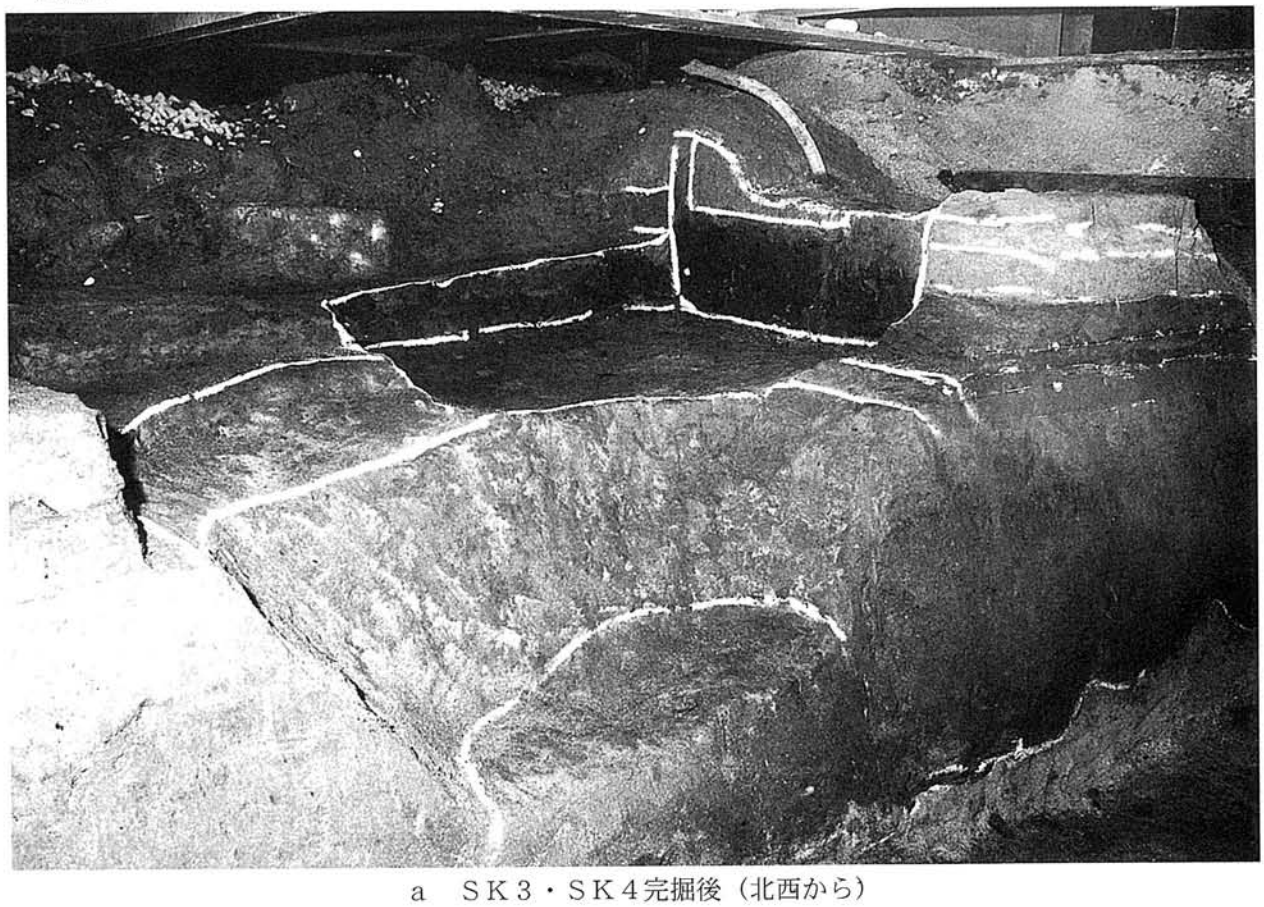
a　ＳＫ１完掘後（南から）

b　ＳＫ２礫集積状況（北から）

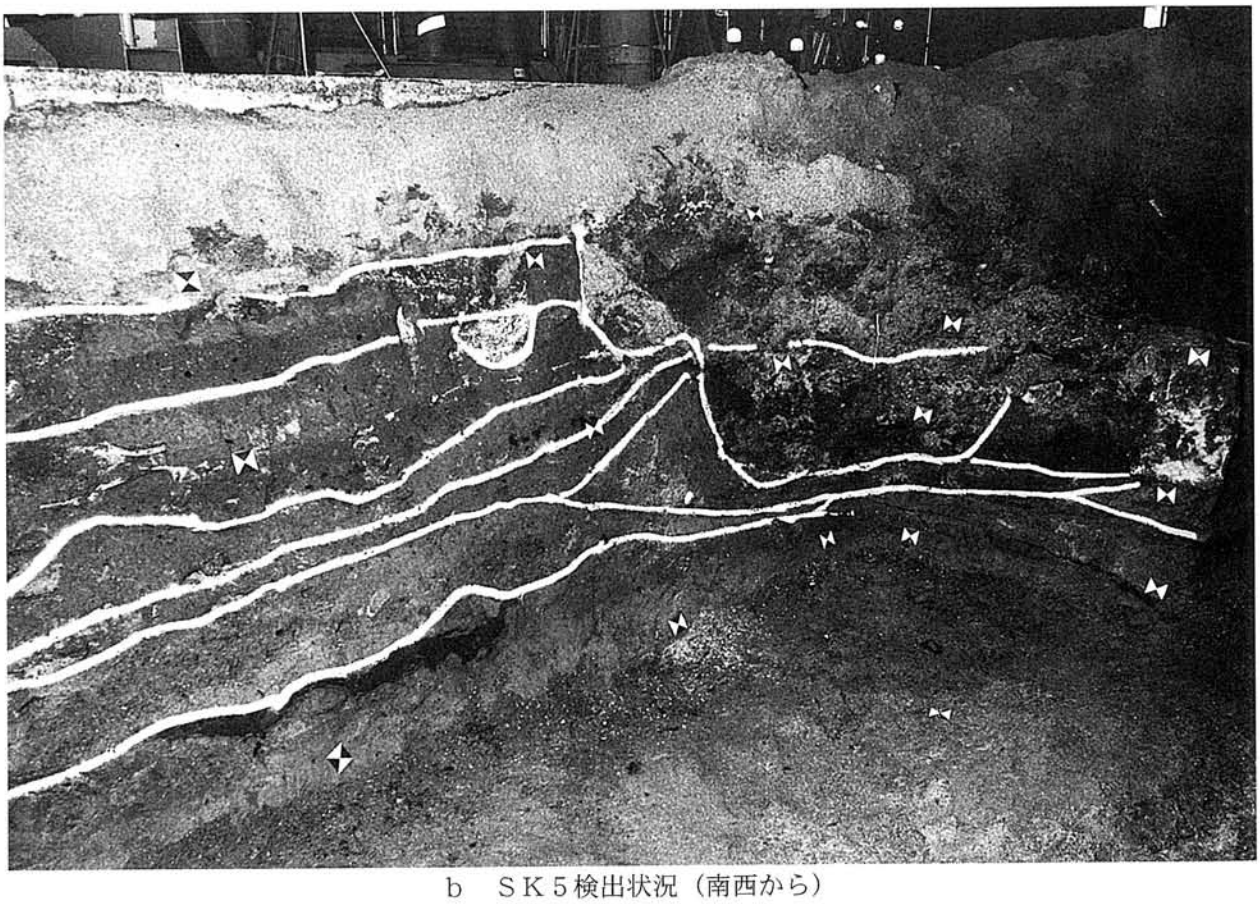


c　ＳＫ２断ち割り断面（西から）

図版66



a　ＳＫ３・ＳＫ４完掘後（北西から）



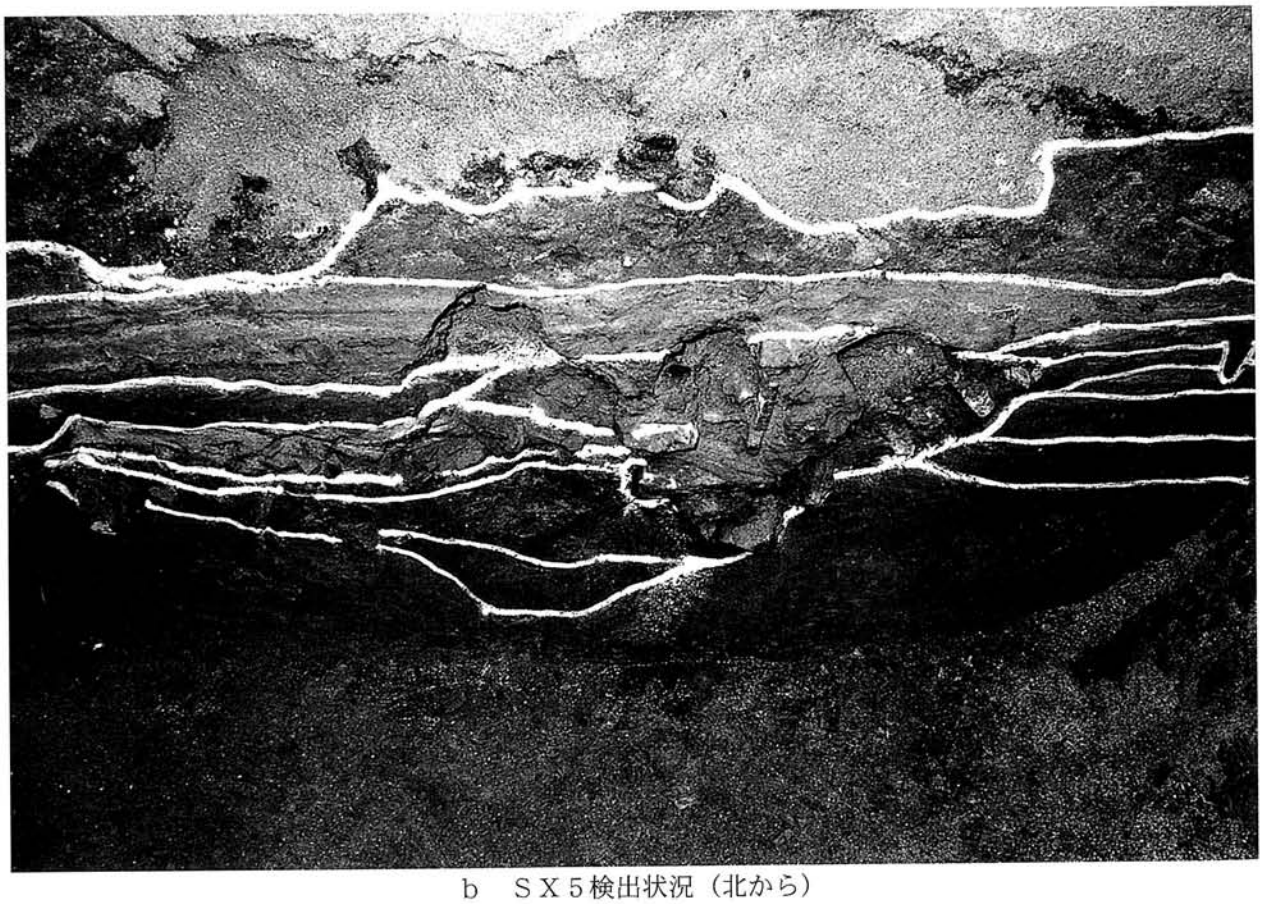
b　ＳＫ５検出状況（南西から）

a　ＳＥ２検出状況（東から）

b　ＳＸ３検出状況（南東から）

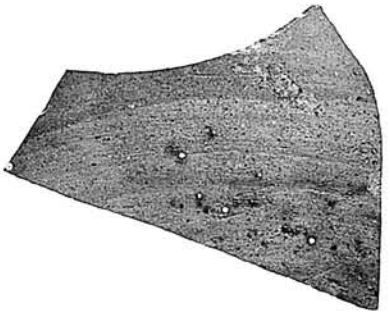
図版68

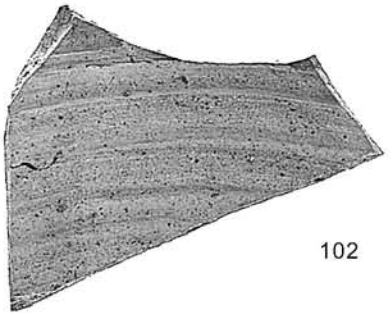
a　ＳＸ４検出状況（西から）



b　ＳＸ５検出状況（北から）

101




102

103

104

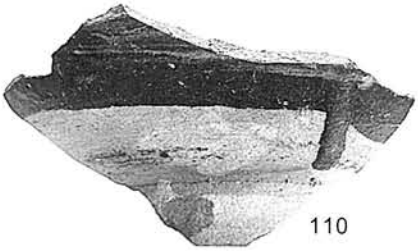
105

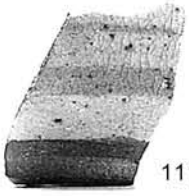
108

107

109

106


110

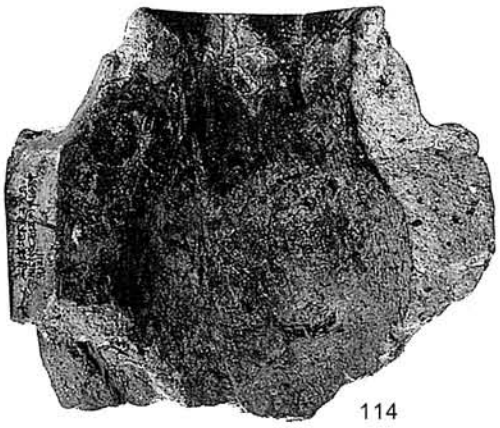

111

112

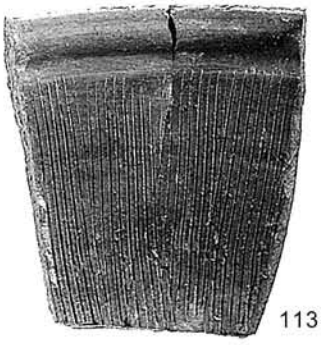
115

東調査区出土遺物（1）

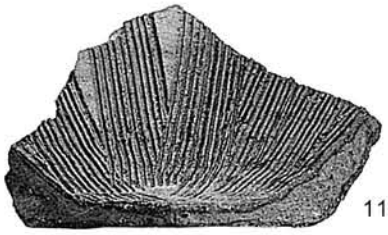
図版70



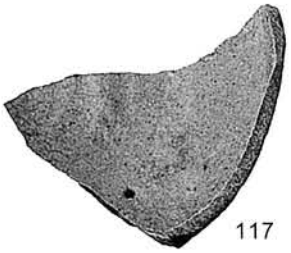
114



113



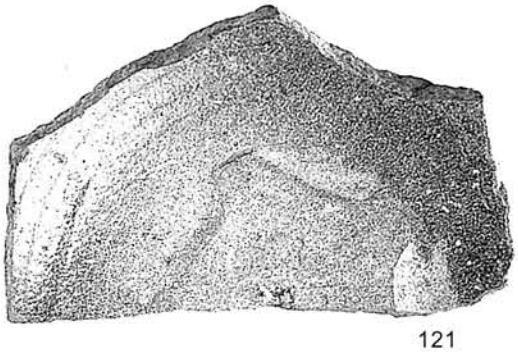
116



117

119

118



121

127

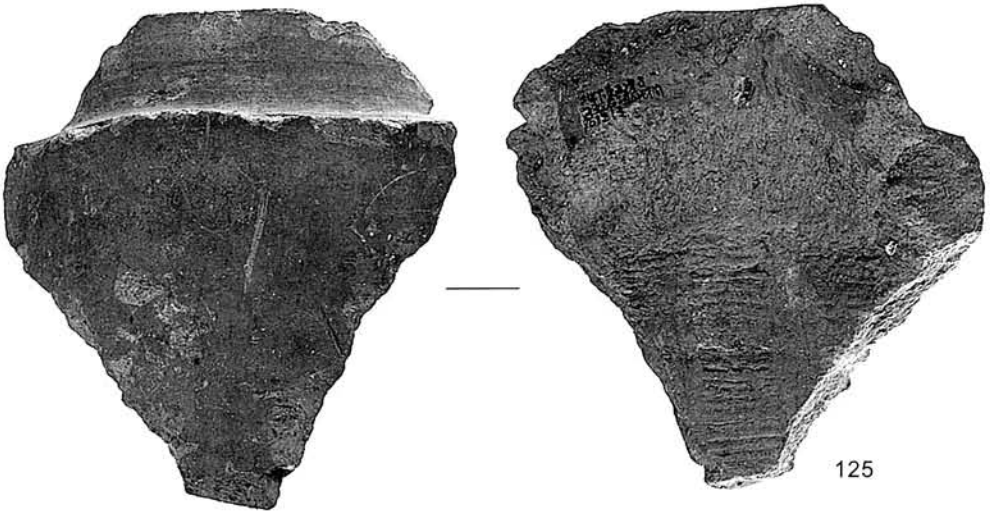
120

123

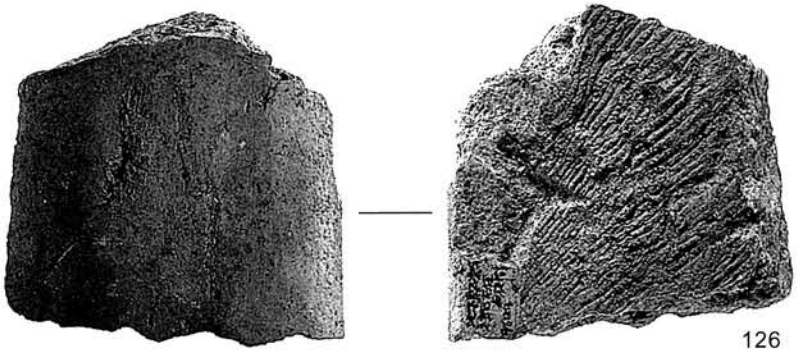
124

122

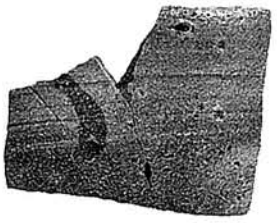
東調査区出土遺物（2）



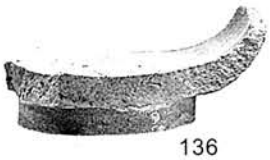
125



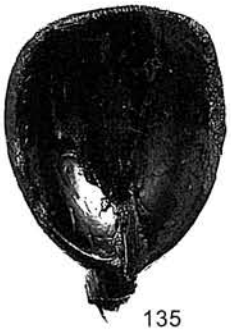
126



129



136

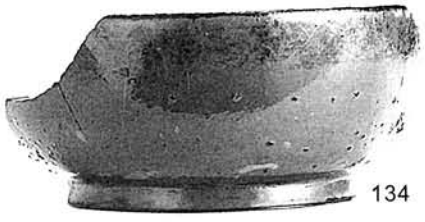


135

130

128

133



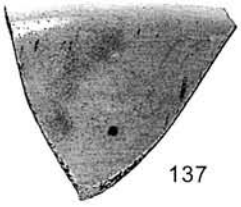
134

東調査区出土遺物（3）

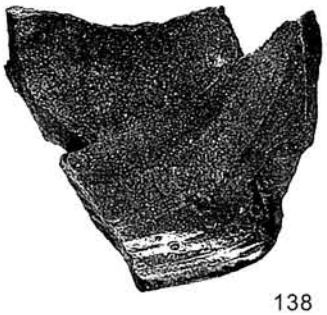
図版72

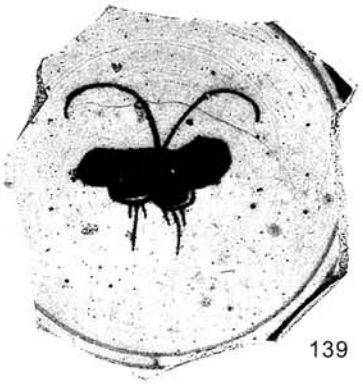
131

132


137

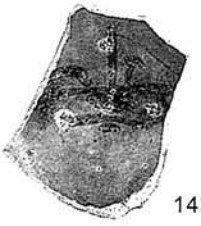
140


138


139

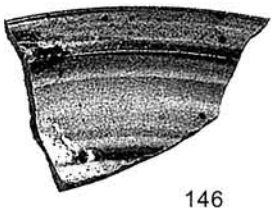
141

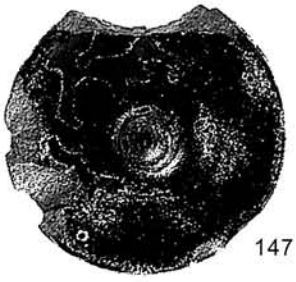
142

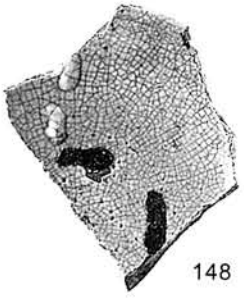

143

144

145

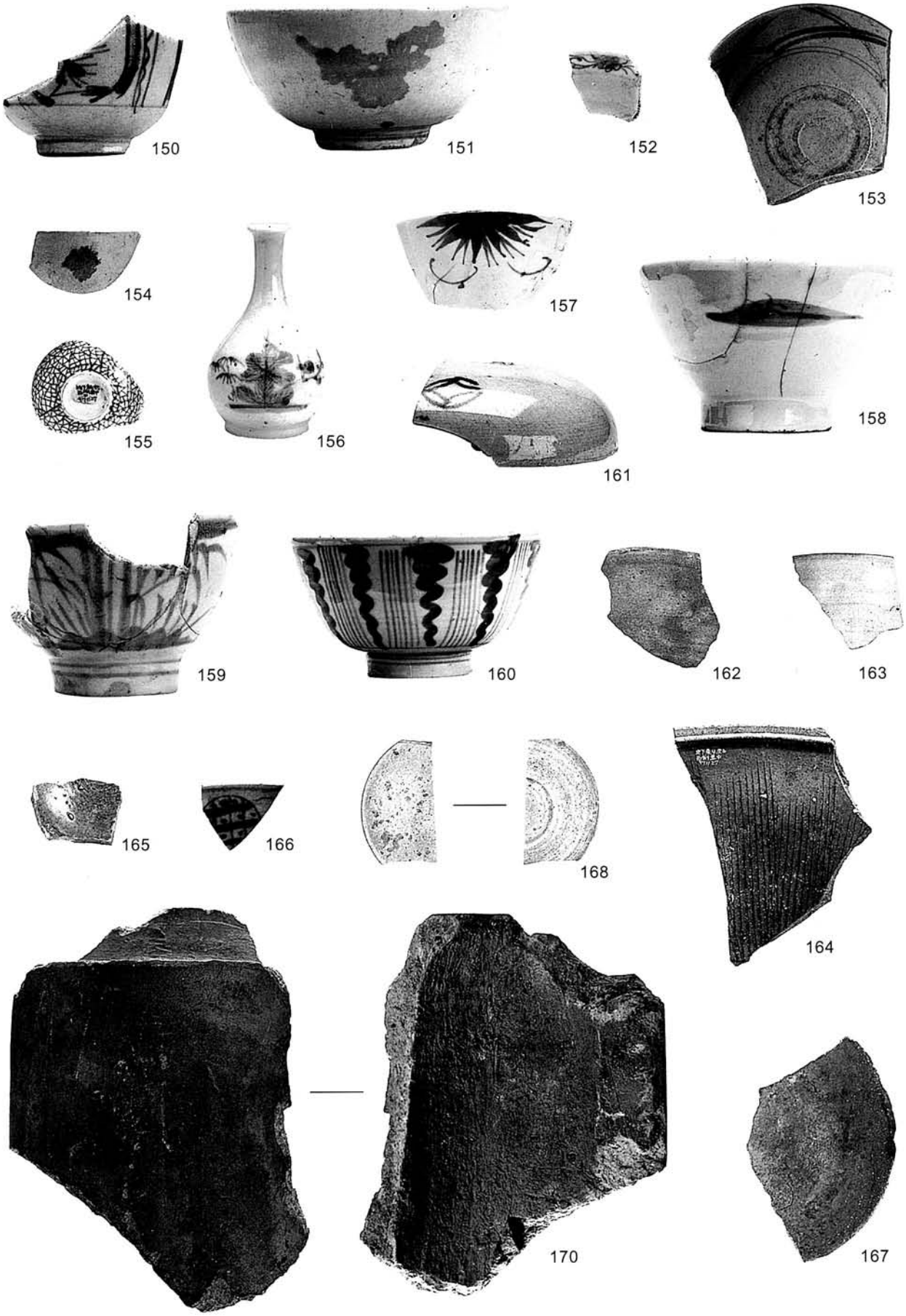

146


147


148

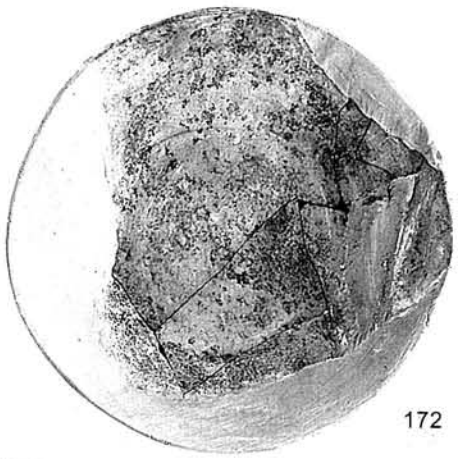
149

東調査区出土遺物（4）


150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
170

東調査区出土遺物（5）

図版74


172

173

174

175

176

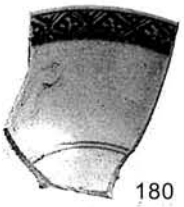
171

169

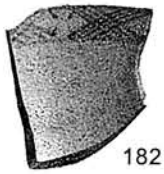
177

178

179


180

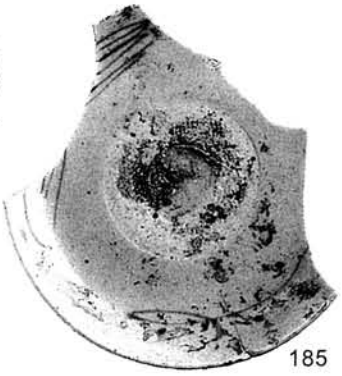
181


182

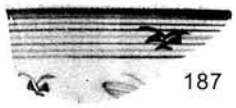
184

183

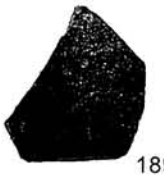
186

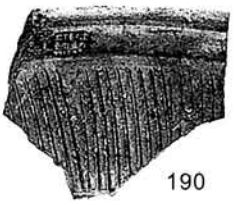

185

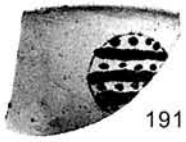
東調査区出土遺物（6）

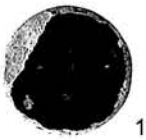

187

188


189


190


191

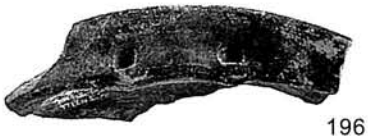

192

193

194

195

197


196

201

198

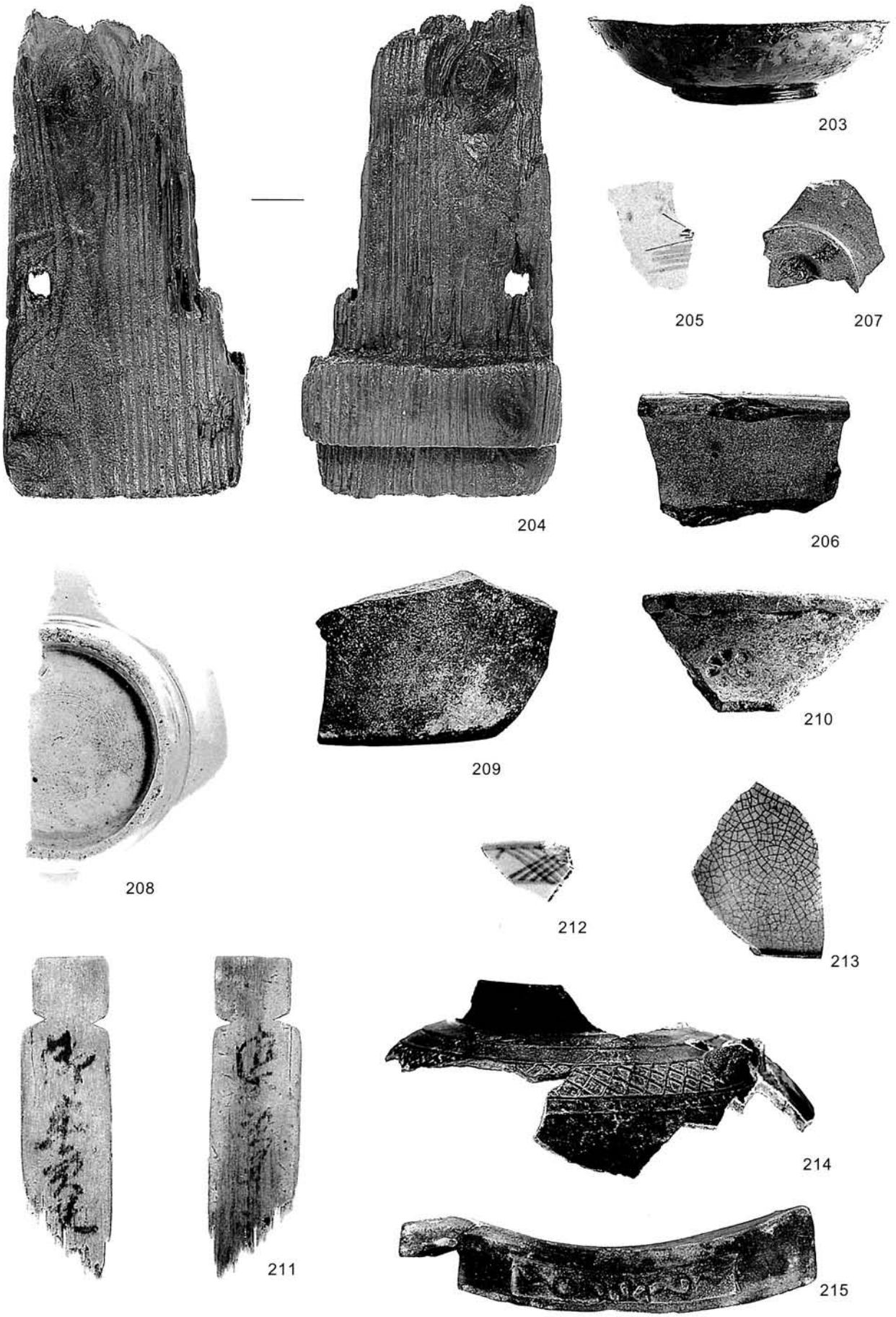
199

200

202

東調査区出土遺物（7）

図版76

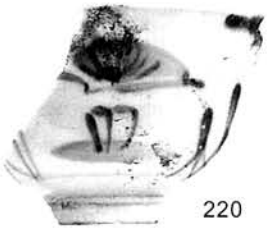


東調査区出土遺物（8）

216

217

218


220

221

219

222

223

東調査区出土遺物（9）

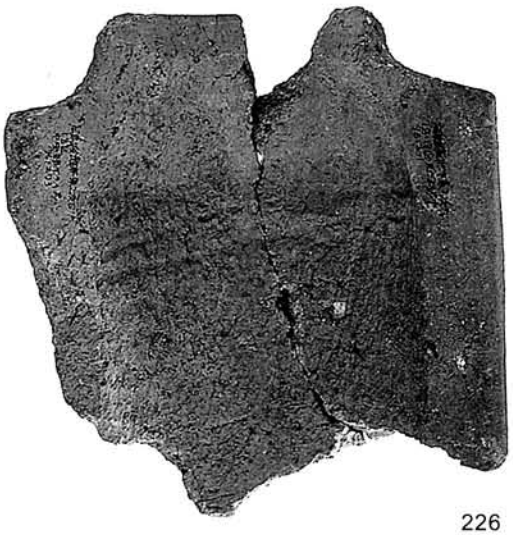
図版78

224

225

227

228



226

東調査区出土遺物（10）

報告書抄録

ふりがな	ひろしまじょうそとぼりあとかみやちょう・おおてまちちてん　－ひろしましなかくかみやちょう・おおてまちしょざいー
書名	広島城外堀紙屋町・大手町地点　　－広島市中区紙屋町・大手町所在－
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書
シリーズ番号	第１集
編著者名	篠原達也・玉置和弘・大室謙二
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
所在地	〒730-0812 広島県広島市中区加古町４番17号　アステールプラザ内
発行年月日	西暦1999年３月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ひろしまじょうそとぼりかみやちょ 広島城外堀紙屋町・ おおてまちちてん 大手町地点 にしちょうさく （西調査区）	ひろしまけんひろしましなかくかみやちょうにちょう 広島県広島市中区紙屋町二丁目 おおてまちいっちょうめ ・大手町一丁目	34101	―	34° 23’ 33”	132° 27’ 30”	19961111 ～ 19971218	8,875m²	一般国道５４号紙屋町地下駐車場工事と広島紙屋町地下街建設工事との合併工事に係る埋蔵文化財発掘調査
ひろしまじょうそとぼりかみやちょ 広島城外堀紙屋町・ おおてまちちてん 大手町地点 ひがししちょうさく （東調査区）	ひろしまけんひろしましなかくかみやちょういっちょうめ 広島県広島市中区紙屋町一丁目	34101	―	34° 23’ 30”	132° 27’ 41”	19960819 ～ 19971215	4,429m²	紙屋町地下東工事に係る埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広島城外堀紙屋町・ 大手町地点 （西調査区）	城郭	江戸時代	櫓台・外堀 石垣	陶磁器 鉄製品 木製品	「安芸国城所絵図」に見られる縄張り以前の石垣を確認。
広島城外堀紙屋町・ 大手町地点 （東調査区）	城郭	江戸時代	櫓台・外堀 石垣	陶磁器 鉄製品	土嚢跡，粗朶層を確認

(財)広島市文化財団発掘調査報告書　第1集

広島城外堀跡
紙屋町・大手町地点

— 広島市中区紙屋町・大手町所在 —

1999年3月

編集発行　財団法人広島市文化財団
広島市中区加古町4－17　　TEL (082) 248－0427

印　　刷　大村印刷株式会社
広島市南区的場町一丁目3－7